

松原遺跡・陣馬川原遺跡・槻ノ木遺跡

県営芋久保・馬門地区

－ 一般農道整備予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 －

昭和 57 年 度

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書第77集
 松原遺跡・陳馬川原遺跡・槻ノ木遺跡

正 誤 表

頁	行	誤	正
挿図目次	図1	……………10	……………11
〃	図2～12	堅 穴	堅 穴
〃	図2	……………11	……………12
表目次	表3	堅 穴	堅 穴
写真目次	PL2～4、9～10	堅 穴	堅 穴
136		図14-18の断面	左右が逆

松原遺跡・陣馬川原遺跡・槻ノ木遺跡

県営芋久保・馬門地区

－ 一般農道整備予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 －

昭和 57 年 度

青森県教育委員会

序

野辺地湾に沿った丘陵地及び川去川流域の河岸段丘上には、数多くの遺跡が所在しています。

このたび、これらの地区に県営芋久保地区一般農道及び馬門地区一般農道が敷設されるのに伴い、当該事業区内に所在する松原遺跡及び陣馬川原、槻ノ木遺跡の一部について、記録保存を目的として発掘調査を実施しました。

今回の調査によって、両地区において、縄文時代から歴史時代にかけての遺物が出土し、当地方の歴史を知る極めて貴重な資料を得ました。

本書は、この調査結果をまとめたものでありますが、今後の埋蔵文化財保護と研究にいささかでも役立てば幸いです。

最後に、この調査に参加された調査員をはじめ、御指導、御協力をいただいた関係各位に厚くお礼申し上げます。

昭和58年3月

青森県教育委員会

教育長　　二ツ森　重　志

例 言

- 1 本報告書は、昭和57年に実施した上北町に所在する松原遺跡及び野辺地町に所在する陣馬川原、槻ノ木遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 執筆者の氏名は、依頼原稿について、文頭、他は文末に記した。
- 3 資料の鑑定並びに同定等については、下記のとおり依頼した。

石質鑑定	青森県立八戸高等学校教諭	松山 力氏
火山灰分析	奈良教育大学教授	三辻 利一氏
樹種同定	元奈良教育大学教授	島倉 巳三郎氏
¹⁴ C年代測定	学習院大学教授	木越 邦彦氏
- 4 文中、用語の主たるものは、統一するように努めたが、数次にわたり使用されるものは、簡略されている場合もある。(例 円筒土器下層 b 式土器 - 下層 b 式)
- 5 図版のスケールについては、各々示している。写真図版は任意の縮尺とした。住居跡、竪穴遺構の面積は、プランメーターを用いて計測した。
- 6 実測図版に記されている計測値は、調査の際最も妥当と思われる部位を計測した。
() 付数値は推定値である。
- 7 本報告書の作成について、次の諸氏から御協力、御教示を得た。(敬称略順不同)
高橋信雄、熊谷常正、小田野哲憲(岩手県立博物館)、高橋与右衛門(岩手県埋蔵文化財センター)、相原康二(岩手県教育委員会文化課)、瀬川 滋(青森県考古学会会員・野辺地町)、岡村道雄(東北歴史資料館)、小笠原幸範(青森市社会教育課)、砂田佳弘(神奈川県埋蔵文化財センター)、新戸部隆(青森県立八戸高等学校教諭)、高松文男、盛田正作(上北町文化財審議委員)
- 8 文中の引用及び参考文献については、巻末に記載し、注の場合は、文中の末尾に記載した。

目 次

序

例言

調査に至る経過と調査要項	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査要項	1
調査の概要	3
1. 調査方法	3
2. 調査の経過	3
松原遺跡	7
1. 遺跡の概要および周辺の遺跡	8
2. 遺跡周辺の自然的環境	13
(1) 位置と周辺の地形の概要	13
(2) 周辺の地質の概要	13
3. 基本層序	18
4. 検出遺構	20
(1) 竪穴住居跡	21
(2) 竪穴遺構	27
(3) 土壌	29
(4) 溝状ピット	33
5. 出土遺物	37
(1) 縄文時代の出土遺物	37
(2) 歴史時代の出土遺物	38
・土師器（甕、坏）	38
・手づくね	41
・紡錘車	41
・砥石	41
・羽口	41
まとめ - 「坏」について	44

6 . 分析	48
(1) 火山灰と土壤の蛍光 X 線分析	48
(2) 樹種同定	53
(3) 放射性炭素年代測定結果報告書	54
陣馬川原遺跡、槻ノ木遺跡	75
1 . 遺跡の概要及び周辺の遺跡	76
2 . 遺跡周辺の自然的環境	80
(1) 地形	80
(2) 地質	82
- 1 陣馬川原遺跡	86
1 . 基本層序	86
2 . 出土遺物	89
縄文時代の出土土器	89
3 . まとめ	101
4 . 分析	102
火山灰の蛍光 X 線分析	102
- 2 槻ノ木遺跡	115
1 . 基本層序	117
2 . 検出遺構	119
(1) 土壤	119
(2) 土壤小結	131
(3) 石器集積跡	133
3 . 出土遺物	133
(1) 縄文時代の出土遺物	133
・ 土器	133
・ 石器	148
・ 文化遺物	179
(2) 江戸時代以降の出土遺物	179
(3) 自然遺物	179
4 . まとめ	182
5 . 分析	183
火山灰と土壤の蛍光 X 線分析	183

挿 図 目 次

松原遺跡

図1 遺跡分布図(松原遺跡周辺).....10	図18 第1・2・3号溝状ピット実測図34
図2 遺跡周辺の地形図・堅穴住居跡分布図.....11	図19 第4号溝状ピット実測図.....36
図3 地形区分図.....15	図20 遺構外出土土器凹石・スリ石.....37
図4 基本層序.....18	図21 遺構外出土土器土師器底辺部・縄文式土器 39
図5 グリッド・遺構配置図.....20	図22 遺構外出土土器.....40
図6 堅穴住居跡実測図.....22	図23 遺構外出土遺物紡錘車・羽口.....41
図7 堅穴住居跡カマド実測図.....23	図24 紡錘車模式図.....41
図8 堅穴住居跡火山灰分布状態・工具痕実測図 24	図25 第1・2・3号土壌・遺構外出土土器断面形 状図.....42
図9 堅穴住居跡遺物出土状況.....25	図26 遺構外出土土器断面形状図.....43
図10 堅穴住居跡出土遺物.....26	図27 坏参考資料.....47
図11 堅穴遺構実測図.....28	図28 青森県下遺跡出土火山灰のRb-Sr分布とFe量49
図12 堅穴遺構出土土器.....29	図29 松原遺跡出土火山灰のRb-Sr分布とFe量50
図13 第1号土壌実測図.....30	図30 青森県下遺跡土壌のRb-Sr分布と K-Rb相関51
図14 第2号土壌出土土器.....31	図31 青森県下遺跡土壌のCa-Sr相関52
図15 第2号土壌実測図.....31	
図16 第3号土壌実測図.....32	
図17 第3号土壌出土土器.....33	

陣馬川原遺跡・槻ノ木遺跡

図1 遺跡の位置.....76	拓影図(5~10).....97
図2 遺跡分布図.....79	図12 4類(2)土器拓影 図(1~2) 5類土器拓影図(3~10)...98
図3 地形区分図.....81	図13 5類土器拓影図 (1~5) 6類土器拓影図(6~14).....99
図4 地質図.....83	図14 6類(1)(2)2、3、5 7類 土器拓影図(1)(2)2 3 5 7類土器拓影図 (6~8).....100
陣馬川原遺跡	図15 青森県下遺跡出土火山灰のRb-Sr分布とFe 量104
図5 基本層序.....87	図16 陣馬川原遺跡出土火山灰のRb-Sr分布とFe 量105
図6 グリッド配置、出土土器類別分布図.....90	
図7 出土土器.....93	
図8 出土土器.....94	
図9 出土土器.....95	
図10 1類土器拓影図 (1~8) 2類土器拓影図(9~11).....96	
図11 3類土器拓影図(1~4) 4類(1)(2)土器	

槻ノ木遺跡

図1 遺跡地形図、グリッド・遺構配置図116	図11 第8号土壌出土土器130
図2 基本層序118	図12 土壌の規模と主軸方位132
図3 土壌実測図(1).....121	図13 遺構外出土土器拓影図(1).....135
図4 土壌実測図(2).....122	図14 遺構外出土土器拓影図(2).....136
図5 土壌実測図(3).....123	図15 遺構外出土土器拓影図(3).....137
図6 土壌実測図(4).....125	図16 遺構外出土土器拓影図(4).....140
図7 土壌実測図(5).....126	図17 遺構外出土土器拓影図(5).....141
図8 土壌内出土土器(1).....127	図18 遺構外出土土器拓影図(6).....142
図9 土壌内出土土器(2).....128	図19 遺構外出土土器拓影図(7).....143
図10 土壌内出土土器(3).....129	図20 遺構外出土土器実測図(1).....144

図21	遺構外出土石器実測図(2)	145	図39	遺構外出土石器実測図(3)	170
図22	遺構外出土石器実測図(3)	146	図40	遺構外出土石器実測図(4)	171
図23	遺構外出土石器実測図(4)	147	図41	遺構外出土石器実測図(5)	172
図24	石鏃計測グラフ	149	図42	遺構外出土石器実測図(6)	173
図25	刃部角の分布	151	図43	遺構外出土石器実測図(7)	174
図26	石器集積跡出土石器計測グラフ	152	図44	遺構外出土石器実測図(8)	175
図27	筥状石器と打製石斧の長幅相関図	153	図45	遺構外出土石器実測図(9)	176
図28	磨石類計測グラフ	156	図46	遺構外出土石器実測図(10)	177
図29	石器組成・磨石類石材傾向	157	図47	遺構外出土石器実測図(11)	178
図30	石器集積跡検出状況	161	図48	文化遺物	180
図31	石器集積跡出土石器実測図(1)	162	図49	古銭	181
図32	石器集積跡出土石器実測図(2)	163	図50	青森県下遺跡出土火山灰のRb-Sr分布とFe量	184
図33	石器集積跡出土石器実測図(3)	164	図51	槻ノ木遺跡出土火山灰のRb-Sr分布とFe量	185
図34	石器集積跡出土石器実測図(4)	165	図52	山崎遺跡土壌と槻ノ木遺跡土壌のRb-Sr分布	186
図35	石器集積跡出土石器実測図(5)	166			
図36	石器集積跡出土石器剥離状況図	167			
図37	遺構外出土石器実測図(1)	168			
図38	遺構外出土石器実測図(2)	169			

表 目 次

松原遺跡

表 1	周辺遺跡地名表	10
表 2	上北地区火山砕屑物・段丘層序表	14
表 3	堅穴住居跡ピット一覧表	27
陣馬川原		
表 1	周辺遺跡地名表	77

槻ノ木遺跡

表 1	出土石器一覧表	148
表 2	凹孔のあり方	157
表 3	石器観察表	158

写真 (P L) 目次

松原遺跡

P L 1	調査風景	55
P L 2	堅穴住居跡確認面と完掘	56
P L 3	堅穴住居跡付属施設	57
P L 4	堅穴遺構	58
P L 5	第 1 号土壌	59
P L 6	第 2 号土壌	60
P L 7	第 3 号土壌	61
P L 8	溝状ピット	62
P L 9	堅穴住居跡出土遺物	63
P L 10	堅穴遺構出土遺物と第 1 号土壌出土遺物	64
P L 11	第 2 号土壌出土遺物	65
P L 12	第 3 号土壌出土遺物	66
P L 13	遺構外出土遺物縄文土器と石器	67
P L 14	遺構外出土遺物土師器環形土器	68

P L 15	遺構外出土遺物土師器甕形土器	69
P L 16	遺構外出土遺物土師器甕形土器	70
P L 17	遺構外出土遺物土師器甕形土器と紡錘車	71
P L 18	遺構外出土遺物羽口、陶磁器	72
P L 19	松原遺跡の炭化木	73
陣馬川原遺跡		
P L 1	遺跡近景と調査風景	106
P L 2	遺物出土状況	107
P L 3	出土土器 1・2 類	108
P L 4	出土土器 3・4 類	109
P L 5	出土土器 5 類	110
P L 6	出土土器 5・6 類	111
P L 7	出土土器 6 類	112
P L 8	出土土器 6・7 類	113

槻ノ木遺跡

P L 1	基本層序、遺物の出土状況、土壌	187	P L 12	石器集積跡出土石器	198
P L 2	土壌	188	P L 13	石器集積跡出土石器	199
P L 3	土壌、石器集積跡	189	P L 14	石器集積跡出土石器	200
P L 4	土壌内出土土器	190	P L 15	石器集積跡出土石器、石錐の錐部拡大	201
P L 5	土壌内出土土器・石器、遺構外出土土器	191	P L 16	遺構外出土石器	202
P L 6	遺構外出土土器	192	P L 17	遺構外出土石器	203
P L 7	遺構外出土土器	193	P L 18	遺構外出土石器	204
P L 8	遺構外出土土器	194	P L 19	遺構外出土石器	205
P L 9	遺構外出土土器	195	P L 20	遺構外出土石器	206
P L 10	遺構外出土土器	196	P L 21	文化遺物、古銭、自然遺物	207
P L 11	遺構外出土土器	197			

調査に至る経過と調査要項

1 調査に至る経過

野辺地湾に沿った丘陵地帯及び川去川流域には数多くの遺跡が所在しています。

このたび、これらの区域に県営芋久保地区一般農道及び馬門地区一般農道が敷設されることになり、このため計画路線内に所在する遺跡の有無について、県農林部より県教育委員会に調査の依頼があった。

県教育委員会では、この依頼により計画路線内を踏査したところ、芋久保地区に一カ所、馬門地区に二カ所の遺跡が確認された。

これを踏まえ、これらの遺跡の保護について、両者で協議を重ねたところ、計画された路線の変更は不可能であるとのことから、これらの遺跡については、農道工事に先立って、発掘調査を実施し、記録保存することで協議が整い、昭和56年5月28日から、発掘調査に入った次第である。

(新谷 武)

2 調査要項

(1) 調査目的

県営芋久保地区、馬門地区一般農道整備事業の実施に伴い、消滅するおそれのある松原遺跡を同事業に先立ち、発掘調査を実施して記録保存をはかるものである。

(2) 遺跡の所在地

松原遺跡	青森県上北郡上北町新館字松原104他
陣馬川原遺跡	青森県上北郡野辺地字上河渡頭42 - 3 他
槻ノ木遺跡	青森県上北郡野辺地字槻ノ木31他

(3) 調査期間 昭和56年5月28日から10月3日まで

(4) 発掘対象面積 5,700m²

(5) 調査依頼者 県農林部

(6) 調査受託者 青森県教育委員会

(7) 調査担当機関 青森県埋蔵文化財調査センター

(8) 調査関係協内機関 上北土地改良事務所、上北教育事務所
上北町・上北町教育委員会
野辺地町・野辺地町教育委員会

(9) 調査参加者 村越 潔 弘前大学教授 青森県文化財保護審議会委員
調査指導員 姥名 敏彦 上北町教育委員会教育長
沼口金四郎 上北町教育委員会社会教育課長

新山 桂 上北町教育委員会社会教育主事
若山 好美 野辺地町教育委員会教育長
荒川 福己 野辺地町教育委員会社会教育課長
立花 孝二 野辺地町教育委員会社会教育課係長
調 査 員 三辻 利一 奈良教育大学教授

松山 力 青森県立八戸高等学校教諭

調査補助員 誉田 実 青森市在住

高杉 和仁 ”

渡辺 仁 ”

横浜 現 ”

鹿内久美子 ”

渋谷 君代 ”

青森県埋蔵文化財調査センター

所 長 工藤 泰典

前 所 長 北山峰一郎（現県立郷土館副館長へ）

次 長 古井 睦夫

総務課長 森内 四郎

調査第一課長 新谷 武

主任主査 一町田 工（調査担当）

主 査 成田 静男（庶務担当）

主 事 島山 昇（調査担当）

調査の概要

1 調査方法

今回の調査は、上北町松原遺跡、野辺地町陣馬川原遺跡、槻ノ木遺跡の一般農道整備事業に伴う事業である。それぞれの遺跡は、立地条件を異にしている。

調査は、グリッド法により実施し、グリッドは4 × 4 mを一単位とした。主軸は原則として磁北とし、地形の状況、路線の方向に応じて設定した。グリッドの呼称はアルファベットと算用数字を付した。

土層観察はテストピットにより層序を把握し、自然堆積土はローマ数字、遺構内堆積土は算用数字、間層はアルファベットとした。

発掘の方法は、分層発掘を主とした。遺物取り上げの方法は層別、一点ごとを原則としたが、一括取り上げをしたところもある。包含層からの出土遺物については、出土状況の撮影及び実測の後、取り上げた。

遺構については、それぞれの遺構の規模、性格によって2分法、4分法で覆土の堆積状況を把握できるようにし、覆土中の遺物は柱状に残し、その状態を写真撮影し、実測の後、取り上げた。遺構及び遺物出土状況の実測は、原則として簡易遣り方で行い、縮尺は1/20を原則とし、細部にわたる場合は1/10を用い、実測図を作成した。また、遺構内の出土遺物は、遺構台帳に記録し、遺物出土状態は、遺物台帳と写真撮影によって、記録作成を行った。

また、当時の自然環境を復原するための一助として、自然科学分野の樹種同定、火山灰分析等を行った。

2 調査の経過

松原遺跡

昭和56年5月25日から7月2日までの39日間の予定で調査に入った。5月26日からは、伐採後の環境整備、グリッド設定等の発掘調査の準備をし、5月30日より粗掘を開始した。本遺跡では、堆積状態を明らかにするため、Gグリッドの東西にセクションラインを設定し、さらに、遺物の包含状態を確認することとした。

つぎに、遺物の出土状況については、地形上の相違点から3地点に分けて述べることとする。

第1地点は、ほぼ、平坦な地形のA～B-33～40グリッドである。この地点からは、6月4日にBラインの精査中A-35、B-34、37、C-37、38グリッドにかけて火山灰に覆われた方形の住居跡が検出した。6月5日から、この住居跡の、実測を行った。検出作業中に竪穴住居跡を構築する際に切られた溝状ピット3基が確認された。住居跡内からは、国分寺下層式に比定される坏が出土したほかに、炭化材等も出土した。また、住居跡周辺からは、土製の紡錘車

等も出土した。

第2地点は、若干、東側に傾斜した地形のC～E - 14～32グリッドである。この地点では、6月10日から24日にかけて精査を進め、2基の土壌を精査した。2基の土壌とともに、上層に土師器片を伴い、下層からは焼土、炭化物等が出土した。サンプリングの上、分析することとした。

第3地点は、西側から東側へかなり傾斜し、西側と東側の比高差が約6.8mのH～M - 1～12グリッドである。この地点では、竪穴遺構と土壌が確認されている。6月24日より、これらの遺構の精査を開始した。竪穴遺構の床面精査中に、さらに、溝状ピット1基が検出されたことから竪穴遺構は構築の際、上部が損傷されていることも考えられる。

出土遺物は、奈良時代後期に比定される土師器を主体として、縄文時代の土器も若干出土した。調査は7月2日に予定通り終了した。

陣馬川原遺跡

昭和56年7月3日から8月1日まで30日間の予定で進めた。7月3日から調査のための環境整備、グリッド設定等の発掘調査の準備を進め、7月5日より粗掘を開始した。本遺跡の基本層序を明らかにするため、Dグリッドに沿ってセクションラインを設定した。その結果、基本層序の第1層からオリーブ灰色の火山灰層が確認された。火山灰の分析を通して、出土遺物との層位的な関連性をも検討することとした。

遺物の出土は包含層からのものではなく、若干集中する地点からのもののみである。遺物は、主として縄文時代後期に比定される。B～D - 36～41グリッドの範囲では、縄文時代前期、中期、晩期の土器が若干出土し、B - 25～29では、縄文時代後期十腰内群に比定する土器が出土した。さらに、B～D - 13～18グリッドでは、十腰内群に比定する土器が出土している。いずれの地点でも、層位的な時期区分はできない出土状況である。調査は8月1日に終了した。

槻ノ木遺跡

本遺跡の調査は、昭和56年8月2日～10月3日までの63日間の予定で進めた。地形は、C～G - 4～13グリッドでは北に傾斜し、C～G - 13～19グリッドでは平坦で、B～G - 19～16地区は東に傾斜している。調査は排土する場所を配慮して、B～H - 36～27にかけての区域では逆の方向より粗掘を開始した。調査は本来の発掘作業よりも、抜根による遺構の破壊を配慮しながら作業を進めたため粗掘には予想以上の日数を要した。

本格的な遺構確認作業は8月17日からで、東斜面ではB - 34グリッドで大型土壌が確認され

たのをはじめ、ほぼ、円形の4基の土壌を確認した。この地点では縄文時代前期、中期、晩期等の土器片が確認されている。

8月24日からは、C～F-19～26グリッド周辺の調査に入り、1基の土壌、1基の石器集積跡と溝状遺構1基を確認した。この地点では、縄文時代中期前葉から中葉にかけて出土し、これらは、第1層から第2層にかけて遺物の量が多く、層位的に時期区分ができない出土状況を示している。調査はこのあとB～C-13～18グリッド周辺の地点に入った。この地点の東側に所在する地区は、昭和55年度に野辺地町が発掘調査を実施した地域で、その際、縄文時代前期から晩期、弥生時代の土器片等が同じレベルから出土し、小竪穴遺構5基も同時に検出されている。(「馬門槻ノ木遺跡」1980年野辺地町教育委員会)

今回の調査では、弥生時代の遺物は確認できなかったが、他の遺物は昭和55年度の調査と同一の遺物が出土している。また、遺構は、長楕円形状の小竪穴遺構を5基検出した。これに類似している遺構は昭和55年度の調査の際にも1基検出されている。

9月1日からは、北側に若干傾斜するC～F-4～13グリッド地点に入ったが、ここからは、29点もの篋状石器が、まとまって1ヵ所から出土したものが注目される。また、大型の石錐が出土し、両端にかなり使用された痕跡を有し、その部分は円錐状である。また、球状土製品(直径約1.4cm)で、3列の刺突列が互いに交叉するように施文されているものも出土した。出土遺物全体としては、他の地点より大木9、10式系に比定される土器が若干多く出土している。調査は10月3日をもって終了した。

(一町田 工)

松原遺跡



遺跡遠景

松原遺跡

1 遺跡の概要および周辺の遺跡

上北町駅から南西約7.5kmの七戸町と十和田市に隣接する地域に所在し、地形的には、八戸市高館付近を標式地とする起伏の小さい平坦な高館段丘上の標高約35mに位置する。

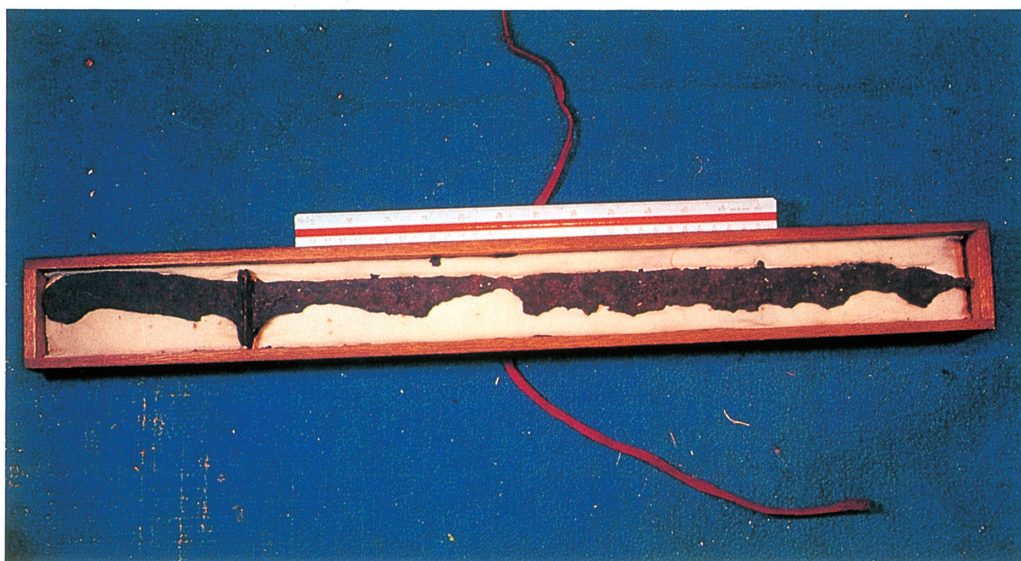
上北町では、現在29ヵ所の遺跡が確認されているが、そのほとんどが、高館段丘上に分布している。遺跡の時期は大別すると、縄文時代各期のものと、奈良、平安時代以後の歴史時代に分けられる。上北町の遺跡では、縄文時代の遺跡数よりも、歴史時代の遺跡数が多い。

縄文時代の遺跡は、高館段丘周縁と、小川原湖岸に多く分布している。さきごろ上北町の発掘調査により、人骨を伴った遺構を検出した古屋敷貝塚（1982年）は、小川原湖南側の貝塚としては唯一のもので、榎林、野口、ニッ森貝塚と並ぶ重要な遺跡であることが明らかとなった。

奈良、平安時代の遺物を出土する遺跡が多いことは先にふれたが、特に、川去川以西の大浦地区から新館地区にかけての松原遺跡周辺には、13ヵ所のうち、11ヵ所が密集している。

本遺跡発掘区の周辺には、35軒の住居跡と思われる落ちこみが確認されているのをはじめ、1.5km離れた所に所在する八幡遺跡（旧十三社遺跡）では、現在、小円形墳状のものが7基確認されている。このうちの1基からは「蕨手刀」が出土したといわれている。いずれも中央部が窪み攪乱をうけているので、どこから出土したものであるかは不明である。

蕨手刀は、「大柄頭が早蕨状をした全長63㎝の古代の鉄刀で奈良朝末期から平安時代頃のものと言われる。」（1964年、「七戸の文化財」盛田稔）といわれるもので、このような遺物の存在は、



七戸町 成田慶治氏 私蔵

参考資料

奈良時代の蝦夷関係年表

時代区分	西 暦	年 号	記 事
奈	710	和 銅 3	平城京遷都
	712	和 銅 5	出羽国を置く
	719	養 老 3	按察使を設ける
	724	神 亀 1	多賀城を築く
	733	天 平 5	出羽柵を秋田に移す
良	758	天平宝字 2	桃生城、小勝柵を造る
	759	天平宝字 3	出羽国に雄勝、平鹿郡を置く
	760	天平宝字 4	雄勝城を造る
	767	神護景雲 1	伊治城を築く
	774	宝 亀 5	遠山村の蝦夷を討つ
時	776	宝 亀 7	出羽国志理波村の賊反乱を起す
	777	宝 亀 8	出羽国蝦賊反乱を起す
	780	宝 亀 11	覚繁城を造る、上治郡大領伊治公些麻呂、按察使を殺し、多賀城失陥す、出羽国に反乱起る
	782	延 暦 1	大伴家持、陸奥按察使・鎮守、將軍になる
	789	延 暦 8	征東軍、阿弓流為と戦い大敗す
代	790	延 暦 9	征夷のため革甲 2,000領を造らせ、軍糧の糶14万斛を備えさせる

平安時代の蝦夷関係年表

時代区分	西 暦	年 号	記 事	
平	794	延 暦 13	平安京遷都	
	797	延 暦 16	坂上田村麻呂、征夷大將軍となる	
	801	延 暦 20	田村麻呂、蝦夷を討つ	
	802	延 暦 21	田村麻呂、胆沢城を造る	
	803	延 暦 22	田村麻呂、志波城を造る	
安	804	延 暦 23	秋田城、城を停めて郡となす	
	807	大 同 2	夷俘にみだりに位階を授けることを禁ず	
	811	弘 仁 2	和我、稗縫、斯波郡を置く、陸奥出羽按察使文室綿麻呂、關薩	
	時	815	弘 仁 6	陸奥国から馬を出すことを禁ず
		854	斉 衡 1	陸奥国百姓困窮し、兵士逃亡する
861		貞 観 3	陸奥国馬を国外に出すを禁ず	
875		貞 観 17	渡嶋の荒狄反乱を起す	
878		元 慶 2	出羽秋田城下の夷俘反乱を起す(元慶の乱)	
代	905	延 喜 5	俘囚に叙位を禁ずる	
	939	天 慶 2	出羽国俘囚反乱を起す	
	1051	永 承 6	前九年の役始まる	
	1083	永 保 3	後三年の役始まる	
	1092	寛 治 6	藤原清衡の乱	
1124	天 治 1	中尊寺金堂落慶		
1170	嘉 応 2	藤原秀衡、鎮守府將軍となる		
1189	文 治 5	源頼朝、平泉藤原氏を滅ぼす		

律令政府による支配体下にこの地域が既に組み込まれていたものか、それとも、在地豪族の勢力の強さを象徴しているのかは定ではない。いずれにしても松原遺跡周辺は、奈良・平安時代への継続的に歴史が生まれ隆盛をきわめた地域であったのかも知れない。今後、この地域で考古学的調査が進められることによって、さらに、東北半の奈良・平安時代の歴史的な解明に役立つ大きな手掛りを与えるといえよう。(一町田 工)

表1 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	時代	出土品	備考
1	立野遺跡	歴史時代	土師器、須恵器	
2	東道ノ上遺跡1)	縄文時代(後期)	注口土器、磨製石斧	竪穴群、墳墓群がみられる。
3	東道ノ上遺跡2)	縄文時代(前期、後期)	縄文土器	
4	大沢遺跡(1)	縄文時代	縄文土器	旧古屋敷遺跡
5	大沢遺跡(2)	縄文時代(前期～後期)	縄文土器	旧古屋敷四号遺跡
6	大沢遺跡(3)	縄文時代(前期)	縄文土器	台地に広く遺物が散在。
7	大沢遺跡(4)	鎌倉時代	土師器	
8	大沢遺跡(5)	歴史時代		農道を作ったとき遺物が出土した。
9	中津遺跡	縄文時代	石槍、石鏃	旧古屋敷二号遺跡
10	古屋敷貝塚遺跡	縄文時代(前期～後期)	縄文土器、石器、石鏃、 獣骨、貝類、石槍	小川原湖南方貝塚としては唯一。
11	外久根遺跡			旧新山遺跡・墳墓
12	白旗遺跡	歴史時代		旧館遺跡
13	二津屋遺跡	歴史時代		人工堀(一部二重堀)をめぐるした小規模館
14	八幡遺跡	平安時代	蕨手刀	直径6～8間、高さ1間の円形墳が存在する。
15	屋敷添遺跡	歴史時代		二つの廓からなっている。
16	道の下遺跡	縄文時代、平安時代	土師器	旧ドウシ社遺跡
17	松原遺跡	縄文時代(早期)	尖底土器	旧新館遺跡
18	助十郎崎遺跡1)	縄文時代	土師器、須恵器	旧姉沼神社遺跡1)
19	助十郎崎遺跡2)			旧姉沼神社遺跡2)
20	唐虫沢遺跡	縄文時代(後期)	縄文土器	
21	南平遺跡	縄文時代(前期、後期)	縄文土器	
22	山添遺跡	縄文時代	縄文土器	
23	松原平遺跡	鎌倉時代	土師器	
24	大坊頭遺跡	縄文時代、奈良時代、 平安時代	土師器、瓦器、 不定形石器	
25	赤平遺跡(1)	縄文時代、奈良時代、 平安時代	縄文土器、土師器	
26	赤平遺跡(2)	奈良時代、平安時代	土師器	
27	赤平遺跡(3)	奈良時代、平安時代	土師器	
28	籠遺跡	奈良時代、平安時代、 鎌倉時代	土師器、須恵器	
29	有野部遺跡	縄文時代(後期、晩期)	縄文土器	



図1 遺跡分布図(松原遺跡周辺)

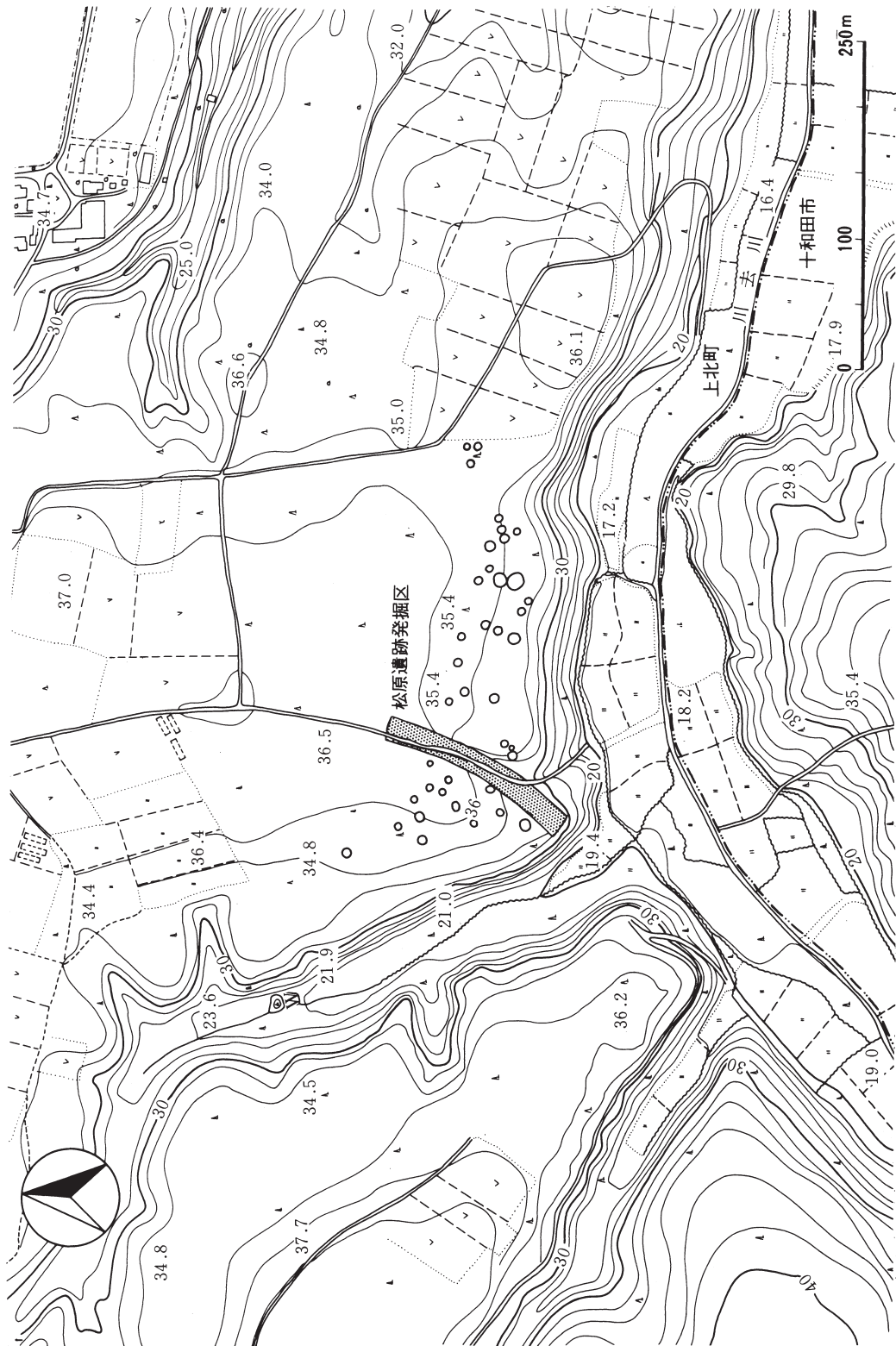


図2 遺跡周辺の地形図・竪穴住居跡分布図

(1) 位置と周辺の地形の概要

松原遺跡は、上北郡七戸町の中心街から、ほぼ東方に約3.5km、上北町南西縁に近い地点にある。

七戸町中心部を通り小川原湖へ注ぐ七戸川と、七戸町中心部と十和田市中心部との中間を通り同様に小川原湖へ注ぐ砂土路川とにはさまれた地域は、広大な上北台地の一部にあたり、幅約3.5～4.5kmでほぼ北東方へのびる洪積台地で、おもに上位から天狗岱・高館・柴山・大和の4段丘に区分できる(図3)。

天狗岱段丘(標式地:八戸市天狗岱)は、天狗岱火山灰層及びその上位の高館・八戸両火山灰層等をのせる段丘である。高館段丘(標式地:八戸市高館付近)は、上北北部の七鞍平段丘に相当し、高館・八戸両火山灰層等をのせている。また、柴山段丘(標式地:六戸町柴山付近)は、高館火山灰層の中部以上をのせる段丘で、八戸付近の根城段丘に相当する。そして、大和段丘、(標式地:十和田市大和付近)は、八戸浮石流凝灰岩の再堆積層を含め、八戸浮石流凝灰岩をのせる点の特徴で、八戸付近の名久井段丘に相当する。

これらの段丘のうち、天狗岱段丘と高館段丘の一部とは、比較的の開析されて、ゆるやかなところによってはやや急な丘陵状の起状をもっているが、柴山・大和の両段丘には平坦面がよく残され、高館段丘にも平坦面がよく残されているところがある。

ところどころに小規模に存在する折茂段丘(標式地:天間林村坪橋南側)は、八戸浮石流凝灰岩を最上部層とする段丘である。

以上の段丘群を裂くように、七戸町中心街の南々東にあたる川去付近を通り、東北東へ向かい、七戸町中心街の東方約5kmあたりから北方へ折れて、七戸川に合する川去川が流れる。

遺跡は、川去川の北岸、高館段丘の南縁に位置している。この付近の高館段丘面は、標高30～40m余りで、平坦面がよく残っているので、広々とした平地となっている。遺跡の西縁には、北西から下って川去川に合する小谷がある。川去川や小谷の谷底と、段丘面との標高差は10～20mあり、段丘崖の下方は数m以上の急崖、上方は段丘面に向けて次第に緩くなる急斜面となっている。遺跡の遺構や遺物は、この急斜面部から平坦な段丘面にかけての土層中に含まれている。

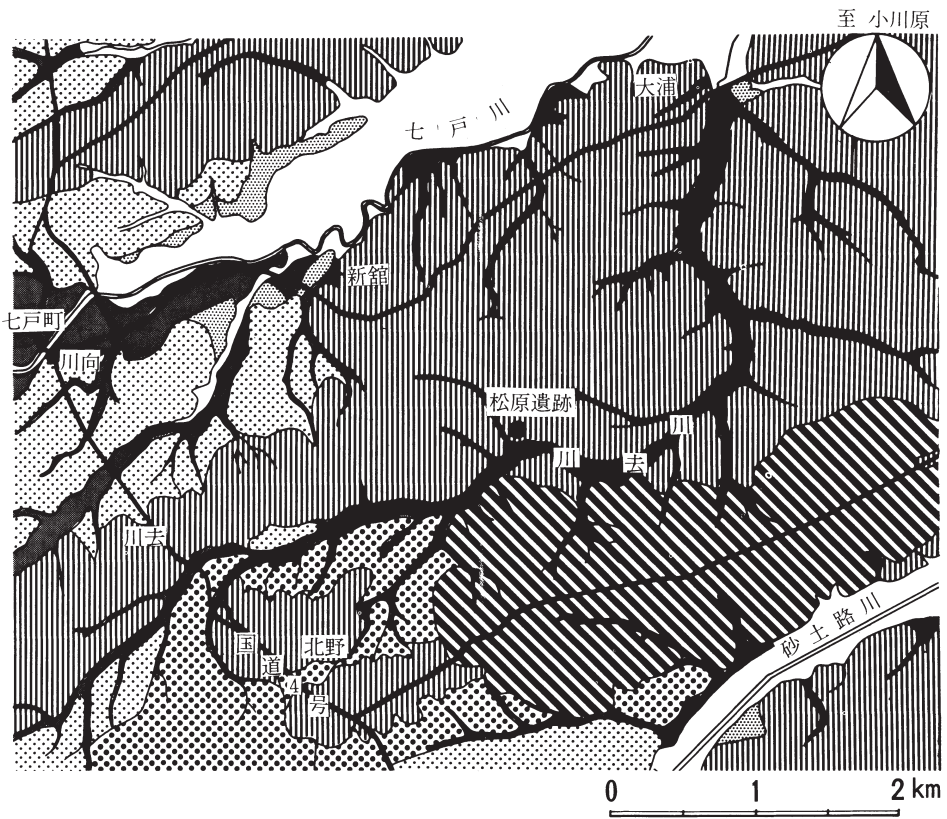
(2) 周辺の地質の概要

遺跡周辺の段丘群の基盤は、野辺地層(岩井淳一、1951)あるいは才市田層(東北地方第四紀研究グループ、1969)と呼ばれる、第3紀末もしくは洪積世の、砂層や泥層を主とする海成層で、一部に火山碎屑物の地層を含んでいる。従来、野辺地層と呼ばれてきた一連の地層は、








表2 上北地区 火山碎屑物・段丘層序表

地質時代	火山碎屑物 (南部)	段丘	火山碎屑物 (北部)
沖積世	海岸・河岸 平野		
	六戸段丘		
	中瀬浮石? 南部浮石	六戸段丘構成層	
洪積期	八戸火山灰 大和段丘 八戸浮石	(大和段丘構成層)	八戸浮石
	折茂段丘		
	大不動浮石流凝灰岩	(折茂段丘構成層)	大不動浮石流凝灰岩
	B P G P	柴山段丘	R P
	高館火山灰 高館段丘	高館段丘構成層	Y P O r P
? 中間	天狗岱火山灰 天狗岱段丘		

註：① 八戸浮石は八戸火山灰層の下部の降下型浮石と八戸浮石流凝灰岩を一括したもの。
 ② 南部中央地区地質調査報告書（東北農政局計画部1968）のものを一部修正。



(凡 例)

- | | | | |
|-------|-------------------------------------------------------------------------------------|-------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| 天狗袋段丘 |  | 折茂段丘 |  |
| 高館段丘 |  | 六戸段丘 |  |
| 柴山段丘 |  | 低位平野面 |  |
| 大和段丘 |  | | |

註：南部中央地区地質調査報告書（東北農政局計画部 1968）のものを一部修正。

図3 地形区分図

実際には、第三紀鮮新世と洪積世のある時期の、少なくとも2つの異なる時期に堆積した地層に分けられる可能性が大きい、それについての詳細な研究はまだすすんでいない。

こうした基盤の地層に不整合に、表2のような諸段丘の構成層がのっている。大別すれば水成の段丘推積物(礫、砂、泥など)、褐色火山灰(いわゆるローム)などの降下火山砕屑物及び浮石流凝灰岩(シラス)の3群になる。

水成の段丘推積物についてみれば、柴山段丘のそれは柴山礫層と呼ばれる砂礫層が主体で、上部に著しく凝灰質の部分がみられるところがあり、厚いところでは10mをこす。折茂段丘の構成層は凝灰質砂礫層を主とする最大10m以上の厚さの地層で、坪礫層と呼ばれ、一般に下部は礫、上部は変化に富む礫、砂、凝灰岩などの組み合わせで、中位に大不動浮石流凝灰岩(後述)がはさまれる。なお、坪礫層の下部の礫層の上部には、七戸町中心街周辺などで、ミツガシワの種子などの化石を含む泥炭層がはさまれている。大和段丘構成層は大和砂礫層と呼ばれており、浮石粒を豊富に含む粗粒砂を主体とし、ところによっては、あるいは部分的に礫質となり、またところによっては八戸浮石流凝灰岩(後述)がはさまれている。六戸段丘(標式地:六戸町奥入瀬川北岸)は、沖積世の段丘のうち上位の段丘で、構成層全体が観察できるところがないので、その全体像は不明であるが、地表で観察できる最上部に限ってみれば、砂、砂質泥、泥炭質粘土などが主体である。

洪積世の風成(降下)火山灰層は、下位より天狗岱・高館・八戸火山灰層の3層に区分される。このうち、天狗岱火山灰層は暗茶褐色のよくしまった粘土質火山灰(ローム)を主体とし、天狗岱段丘以上の高位段丘・丘陵地に分布する。天狗岱火山灰層の厚さは4~6mで、三本木西方では、下部に白色の粘土化した浮石層(WP)、上部にぬかみその様に粘土化した淡黄色の浮石層(NP)がはさまれる。また、小川原湖周辺では、中部に上2/3がオレンジ色、下1/3が白色の粘土質浮石層(KP=甲地浮石層)、上部にはラピリまじりの黄色浮石層が断続的にはさまれる。これらの浮石層の厚さは、10~30cm程度である。

高館火山灰層は、一般に茶褐色の粘土質火山灰(ローム)を主とし、黄、オレンジ、青灰色などの、多数の、それぞれに特徴ある粘土質浮石層をはさんでいる。高館火山灰層の厚さは、最大で8m以上、中にはさまれる浮石層は数~20cm程度のもが多いが、上半部には、20~60cmの浮石層(GP-奥入瀬川沿岸から八戸市付近、RP-奥入瀬川南岸以北)がはさまれている。高館火山灰層は、高館段丘以上の高位の段丘・丘陵地に分布するが、その中・上部は柴山段丘にも存在する。

八戸火山灰層は、八戸浮石流凝灰岩部を除き、下部が未風化部分では灰白色、風化部分では淡黄褐色~淡褐色の、粗粒浮石と粘土質~砂質の細粒浮石の互層(上北南部以南で6層にわかる)あるいは黄褐色浮石層(上北北部)、上部が褐色火山灰層で構成される。その厚さは八戸

町付近で 3 m 以上、八戸付近で 2 m 程度であるが、南と北に薄くなり、七戸町～上北町付近では、最大でも 1 m 以内で、通常数十 cm 以内である。八戸火山灰層の下部上限に、場所によって八戸浮石流凝灰岩が存在する。八戸火山灰層は、沖積地以外のすべての地形面を覆って分布する。なお、八戸火山灰層の下部と浮石流凝灰岩部を一括して、八戸浮石層とすることがある。

上北地域に広く分布する浮石流凝灰岩は、大不動浮石流凝灰岩と八戸浮石流凝灰岩の 2 層である。いずれも、砂質火山灰（浮石粒）と、ところによっては人頭大以上のものを含む礫大の浮石の混合する無層理で塊状の凝灰岩で、ところによって密に、ところによってはまばらに、最大 10 cm 以上、ふつう数 mm～数 cm の火山岩片を含み、また、部分的に炭化樹幹などの天然木炭をともなっている。これらの浮石流凝灰岩は、大小の河谷底を埋めるように堆積したもので、段丘縁の谷壁部分に露出し、ところによってはシラス台地（段丘）をつくって分布している。十和田湖周辺では、噴出前の山地突出部を除くすべての地域を埋めて堆積し、迷ヶ平などの高原状の平坦な地形面の土台をつくっている。

2 つの浮石流凝灰岩は酷似していて、浮石流部分だけが露出しているところでは、肉眼的観察だけでは識別しにくい。大不動浮石流凝灰岩に含まれない角閃石が、八戸浮石流凝灰岩には少量ながら含まれることで区別できる。また、八戸浮石流凝灰岩には、下位に降下浮石層（八戸火山灰層下部）がともなわれている。

大不動浮石流凝灰岩は、高館火山灰層中の最上部の浮石層（B P）とほぼ同時に堆積したものと考えられ、その¹⁴C法による年代測定では、噴出の絶対年代が、浮石流中の炭化木片について 25,560 ± 1,340 年 B.P.、また下底に埋没している樹木片について 23,140 ± 1,020 年 B.P.（いずれも大池昭二、1978）となっている。八戸浮石流凝灰岩の噴出時期は、その中の炭化木片について 12,700 ± 260 年 B.P.（大池昭二、1964）、下位の降下浮石層直下の直立樹幹及び埋没土中の炭化木片について、それぞれ 13,900 ± 510 年 B.P.（大池昭二・庄司貞雄、1977）及び 13,770 ± 510 年 B.P.（大池昭二ら、1977）となっている。

沖積世火山灰については、上北台地では中撤浮石層及び歴史時代降下火山灰層が分布している。中撤浮石層は砂～細礫大の浮石粒の密集したしまりのないくずれやすい黄色浮石層で、十和田市域では厚さが数十 cm になるが、七戸・三沢付近では不明瞭で、黒色土中に黒色土と混合した部分が認められるところがあるにすぎない。歴史時代火山灰層は、上北台地では連続した地層として観察できる場所は少なく、遺跡の遺構や当時の小さい谷跡などの小規模な凹地の覆土中に、垂れ下がるように湾曲したレンズ状の薄層（ふつう数 cm 以内）として存在するにすぎない。多くは十和田 a 降下火山灰層（10 世紀頃）であるが、一部に町田氏ら（1981）のいう苦小牧火山灰層やその他の火山灰層（十和田 a 降下火山灰層以後）が存在するようである。

3 基本層序

松山 力

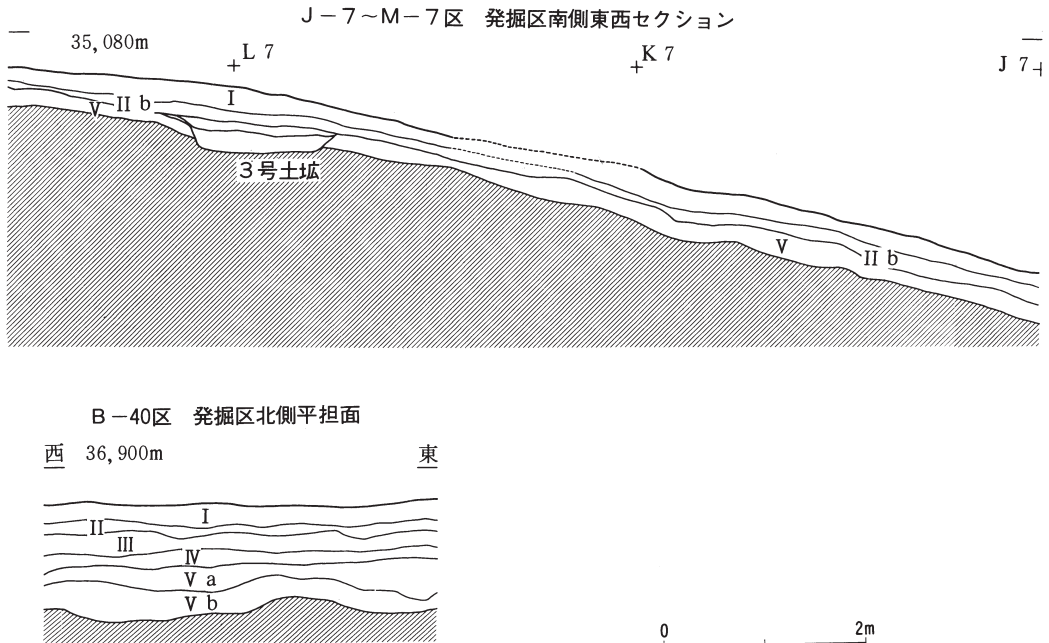


図4 基本層序

遺跡の南を東方に流れる川去川の谷壁には、大不動浮石流凝灰岩と八戸浮石流凝灰岩とが露出している。遺跡直近地域における八戸浮石層中の八戸浮石流凝灰部は、高館段丘以上の丘陵・段丘部では、それを削って流れる谷の谷壁にへばりつくように、また大不動浮石流凝灰岩あるいはそれより下位の基盤層が浸食されてできた凹地を埋めるように存在するが、大不動浮石流凝灰岩以下の基盤層が、丘陵・段丘の頂部（平坦面を含む）のすぐ下にまで存在している部分には見られず、わずかに八戸浮石層中の降下浮石部のみがあるだけである。

遺跡の発掘部分でも、基盤の大不動浮石流凝灰岩の上には、降下型の八戸浮石層がのりところが見られるだけである。

遺跡の層序の最上部を占める黒色土層類は、平坦面部では50~60cmの厚さで、4層に区分できる。最上位の表土は暗褐色土層（色調は標準土色表による。以下同様）で、畑地では耕作土に相当する（層）。その下位は黒褐色土層で、このような色調のものは、少なくとも青森県から岩手県にかけての東北地方北部では、縄文時代晩期から奈良・平安期頃までの遺物を包含したり、その頃の遺構の覆土となっていることが多い（層）。これに続く下位の地層は、暗黄褐色~暗褐色の土層で、粗砂大の黄色浮石を無数に含むため砂質である（層）。この黄色浮石は、十和田市付近に厚く、それより南方の地域に広く分布する中礫浮石層中の浮石であり、層は

それとの混合層であるが、層を中礫浮石降下期のものとすることはできない。しいて言えば、層は中礫浮石降下時期から層形成開始までの間に形成されたものである。黒色土層最下位は、上半が暗褐色で、下方にしだいに褐色の度合いを増す土層である（層）。この中にも浮石粒が散らばって含まれるが、粒径は粗砂大から1cm程度のものまであり、基盤層中の浮石が混ったものである。こうした黒色土層の下には、基盤層と黒色土との混合した漸移部があるが、その特徴は、下位の基盤層の構成によって若干の差異があり、下位に八戸浮石層が接する部分では浮石を多く含む黄褐色土であり、褐色火山灰層が接する部分ではローム質の褐色土である（Va層）。Va層の厚さは10～30cm程度である。

基盤層中最上位を占めるものは、八戸浮石層である（Vb層）。八戸浮石層は降下相部に相当し、厚さは30～40cm程度、粒径2～7cmの黄色～灰黄橙色の浮石を多く含む明黄褐色の細粒浮石層で、多少粘土質であり、下限部数cm程度が灰黄色のところもある。八戸浮石層は平坦面部に分布が広いが、斜面部では欠けている部分が多い。

八戸浮石層の下には灰白色～灰黄色の大不働浮石流凝灰岩があり、少なくとも数m以上の厚さであるが、その基底部までは観察できなかった。

大不働浮石流凝灰岩の頂部は、ところによって粘土化し、黄褐色ないしは、黄橙色の風化帯となっているほか、10～20cm程度の風成再堆積層あるいは1m程度の成層した水成堆積層をのせるところがあり、また一部に1m以内の粘土質黄褐色火山灰（ローム）層がのるところもある。

〔参考・引用文献〕

大池昭二（1964）八戸浮石層の絶対年代、日本の第四紀層の¹⁴C年代（62）- 地球化学、24 - 6

大池昭二・庄子貞雄（1977）八戸浮石層下の埋没土の¹⁴C年代 - 日本の第四紀層の¹⁴C年代（116）地球科学、31 - 2

大池昭二・松山力・竹内貞子（1977）八戸浮石層直下の埋没化石材の¹⁴C年代 - 日本の第四紀層の¹⁴C年代（118）、地球科学、31 - 3

大池昭二（1978）十和田市南方における大不働浮石流凝灰岩の¹⁴C年代 - 日本の第四紀層の¹⁴C年代（123）地球科学、32巻

中川久夫・東北農政局（1968）南部中央地区地質調査報告書

東北地方第四紀研究グループ（1969）東北地方における第四紀海水準変化、日本の第四系、地団研専報、15

町田洋・新井房夫・森脇広（1981）日本海を渡ってきたテフラ、科学、9月号

4 検出遺構

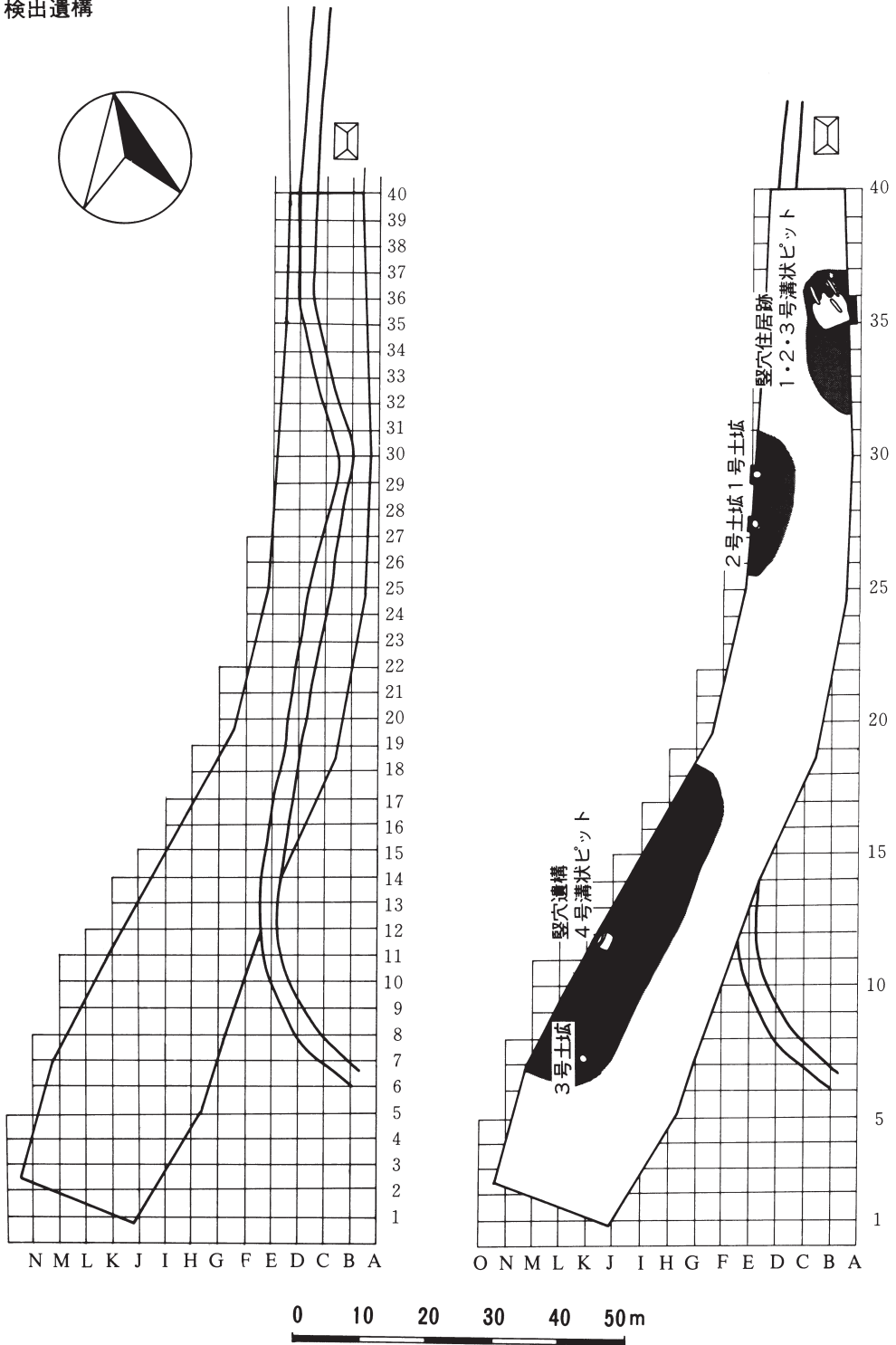


図5 グリッド・遺構配置図

(1) 竪穴住居跡 (図6～10)

位置と確認 A - 34、35、36、B - 34、35、36グリッドに位置し、住居跡は、第1号から第3号溝状ピットを切っている。

規模と形態

法		東 壁	西 壁	南 壁	北 壁
	壁 長	440cm	430cm	440cm	460cm
量		38.4cm	22.3cm	20.0cm	27.1cm
	壁 高				
形 態	隅丸方形	面 積	$\frac{20.64\text{m}^2}{(17.15\text{m}^2)}$	主軸方位	N-10°-E

面積欄の () 内数字は、柱穴、壁溝、ピットを除いた値である。

堆積土 基本層序 層まで下げた時点で、上面全体が火山灰で覆われていた。遺構内堆積土は5層に区分した。(図6)

第1層 オリーブ褐色 火山灰(十和田a)

第2層 黒色土 粘性が強く、粒子が細かい黒色土で、炭化物を多く含む。

第3層 黒褐色土 粒子が若干粗く粘性の強い黒褐色土で、2～3mm大のパミスを含む。床面付近では焼土も多く、遺物の大半はこの層から出土し、炭化物も多く含まれている。

第4層 黒色土 粒子が粗く、粘性はあまりない黒色土である。若干炭化物も含まれている。

第5層 暗褐色土 粒子が粗く、パミスを含む層である。

以上、自然堆積の状態であるが、焼土を含む層も一部にみられた。

壁 壁の立ち上がりは、ほぼ垂直で、西南コーナー付近の壁高が低い。壁は、全般的に柔らかである。

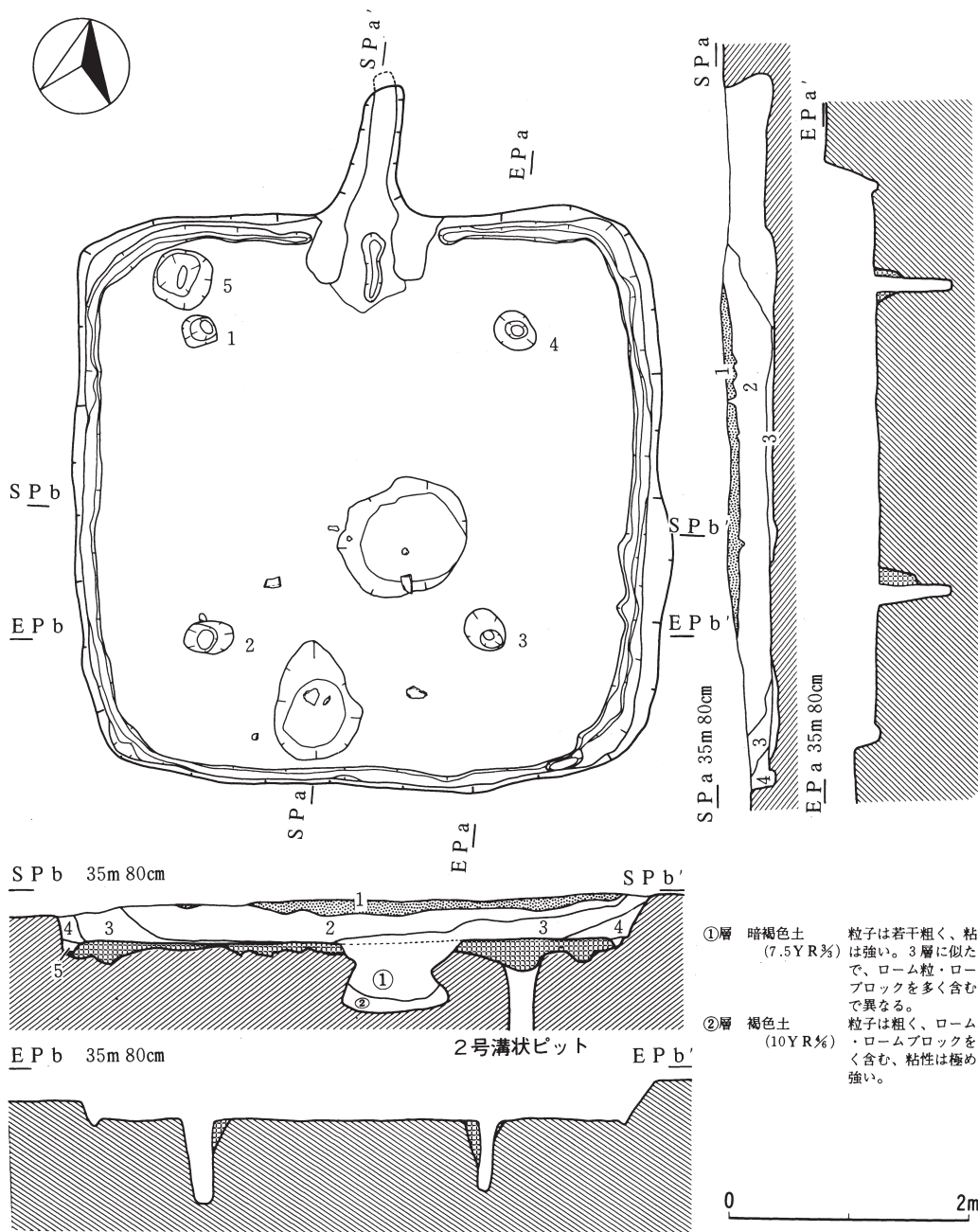
床 床面は、ほぼ平坦で貼床され、カマド周辺が非常に固くしまっている。

周溝 幅約10～25cm、深さ約5～15cmで全周し、西北コーナーに浅いピットが確認された。

柱穴 柱痕は、いずれも口径約10cm前後である。1、2は、その掘り方を検出した結果、ほぼ四角形に掘られ、その工具痕も確認できた。1～4は、いずれも深65cm前後である。

カマド (図7) 粘土による構築で、袖部は両際に若干崩れているが、良好な状態で残っている。袖の構築は、地山を若干両側に残し、その上に粘土を貼り付けている。

天井部に関しては、天井が若干下に落ちたような状態である。煙道部は、住居の壁から張り出して構築している。燃烧部の焚口に関しては、かなり使用したと思われる。赤く焼けた火焼がみられ、火焼中央部は、約7cm程焼けており、かなり使用されたと思われる。底面中央に灰

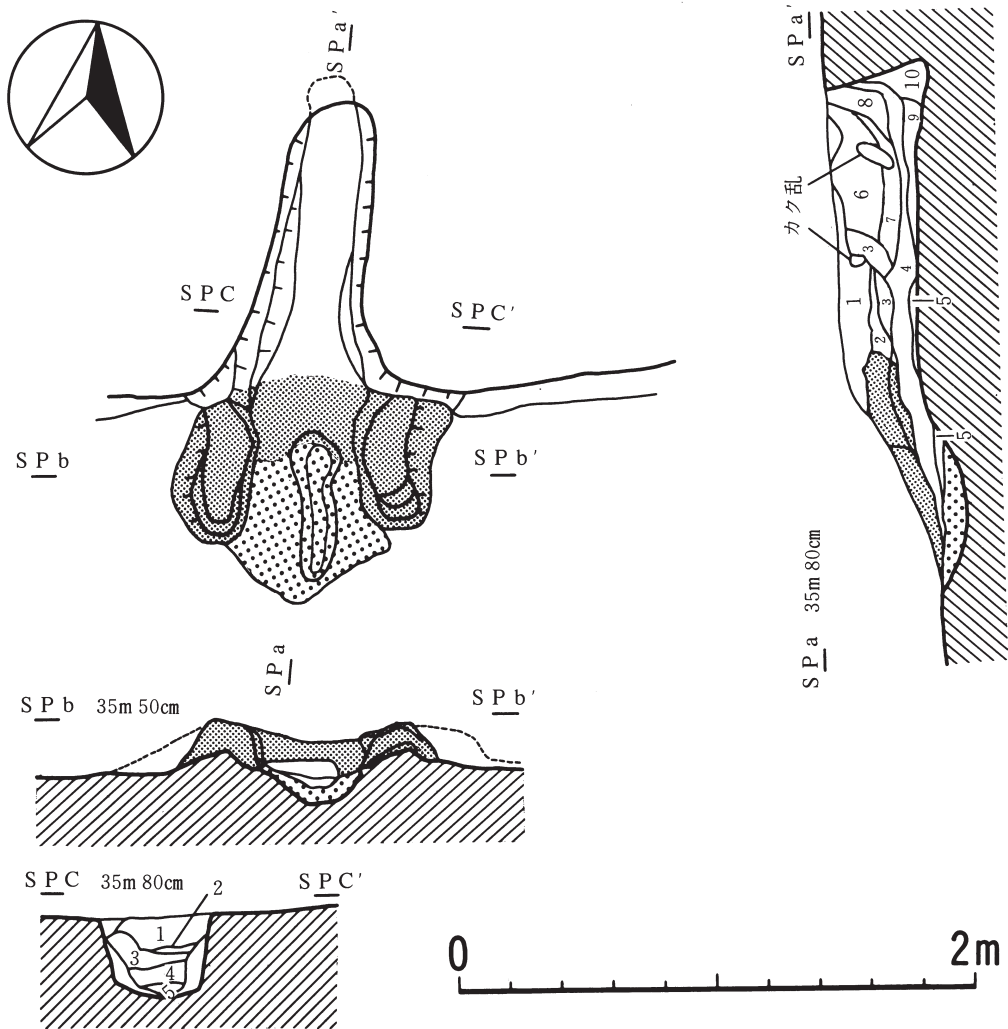


- ①層 暗褐色土 (7.5YR 3/3) 粒子は若干粗く、粘性は強い。3層に似た土で、ローム粒・ロームブロックを多く含む点で異なる。
- ②層 褐色土 (10YR 3/3) 粒子は粗く、ローム粒・ロームブロックを多く含む、粘性は極めて強い。

土層注記

- 第1層 オリーブ褐色土(2.5YR 4/4) 火山灰
- 第2層 黒色土 (7.5YR 1.7/1) 粒子が細かく、粘性強い。炭化物を多く含む。
- 第3層 黒褐色土 (10YR 3/3) 粒子は若干粗く、粘性は強い。パミスも多く含む。(パミス径2.0~3.0cm大) 床面付近では、焼土粒も多く、遺物の大半は、この層から出土し、炭化物粒を多く含む。
- 第4層 黒色土 (7.5YR 1.7/1) 粒子細かく粘性は余りなく、若干の炭化物を含む。
- 第5層 暗褐色土 (7.5YR 3/3) 粒子は粗で、パミス、ローム粒を含み、粘性は強くねっとりした感じである。

図 6 竪穴住居跡実測図



- | | | |
|------|-------------------|---------------------------------------------------|
| 第1層 | 黒色土 (7.5YR 1.7/1) | 粒子細かく、細砂・炭化物を含む。粘性は余りない。 |
| 第2層 | 暗褐色土 (10YR 3/2) | 粒子細かく、1層の黒土色に若干の灰が混入した層である。 |
| 第3層 | 暗褐色土 (5YR 3/2) | 粒子細かく、粘性あり、焼土粒を多く含む。 |
| 第4層 | 黒褐色土 (7.5YR 3/2) | 粒子は細かいが、径1~4mm前後の焼土粒を含み、灰を含む。
梵口部付近は、特に灰焼土を含む。 |
| 第5層 | 暗赤褐色土 (7.5YR 3/4) | 非常に焼けた(火焼面)使用面である。 |
| 第6層 | 黄褐色土 (2.5YR 3/4) | 砂質粘土と灰を多量に含み、粘性は強くねっとりしている。炭化物粒も含む。 |
| 第7層 | 暗褐色土 (7.5YR 3/4) | 4層に似ているが、4層より灰が多い。又、焼土粒は、少い様である。 |
| 第8層 | 褐灰色土 (7.5YR 1/4) | 灰が極めて多く、焼土も多い。 |
| 第9層 | 暗褐色土 (7.5YR 3/4) | ブロック状の焼土を主体とする層で、5層と酷似する。同一層としても良い。 |
| 第10層 | 極暗褐色土 (7.5YR 3/5) | 灰、ブロック状の、焼土を含み、又、砂を含んでいる。 |

図7 竪穴住居跡カマド実測図

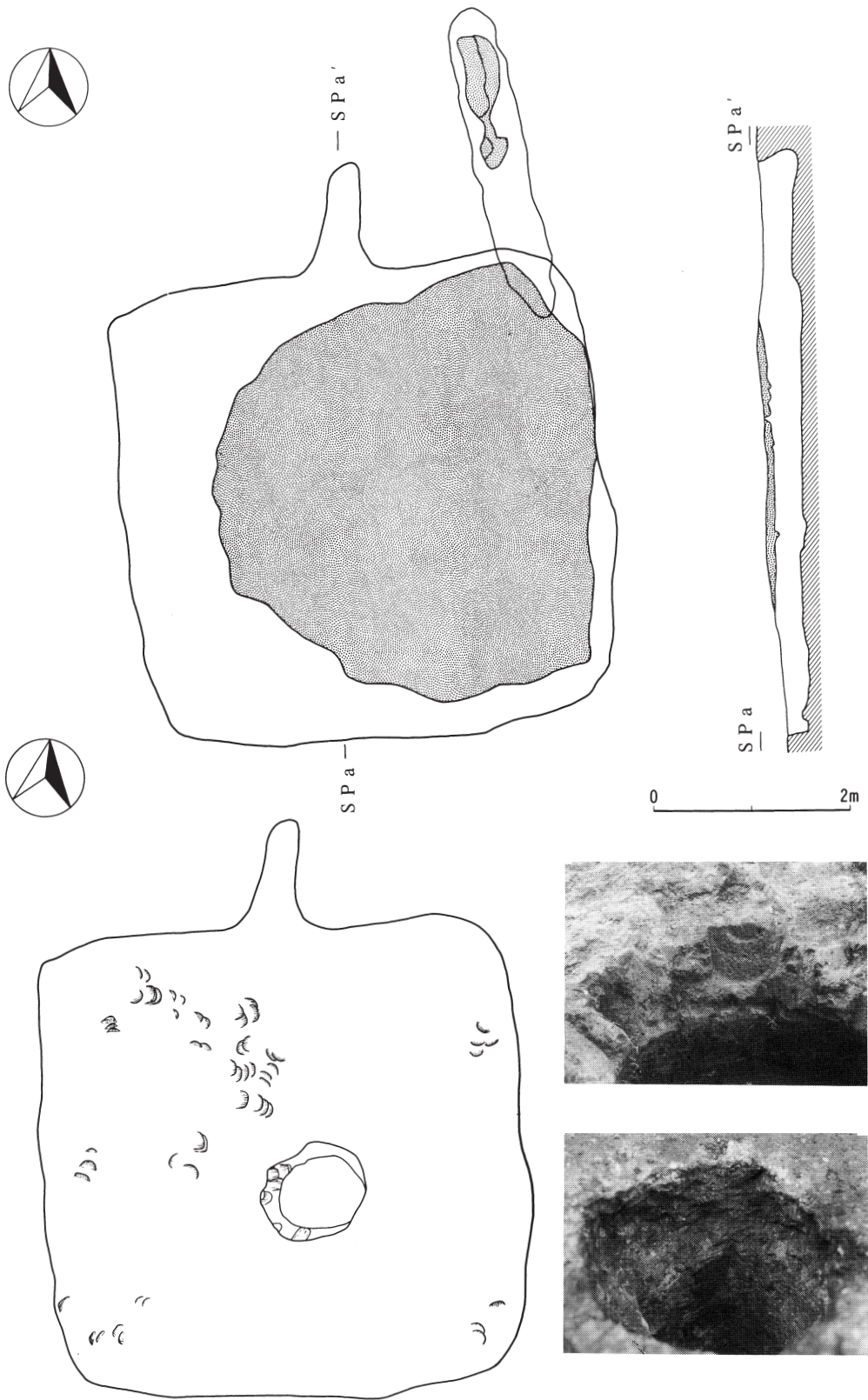


图 8 竖穴住居跡火山灰分布状态・工具痕実測图

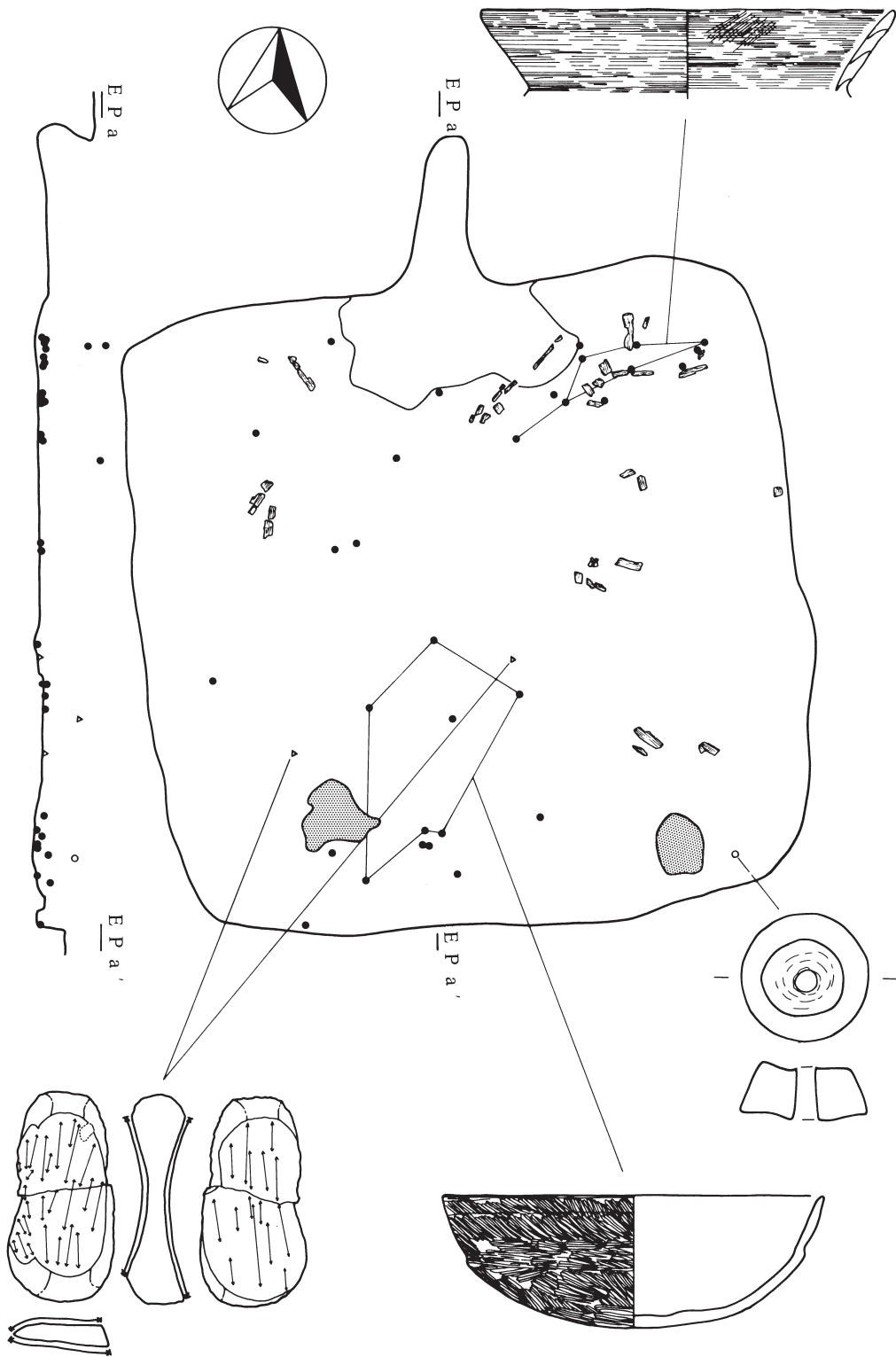


图9 竖穴住居跡遺物出土状況

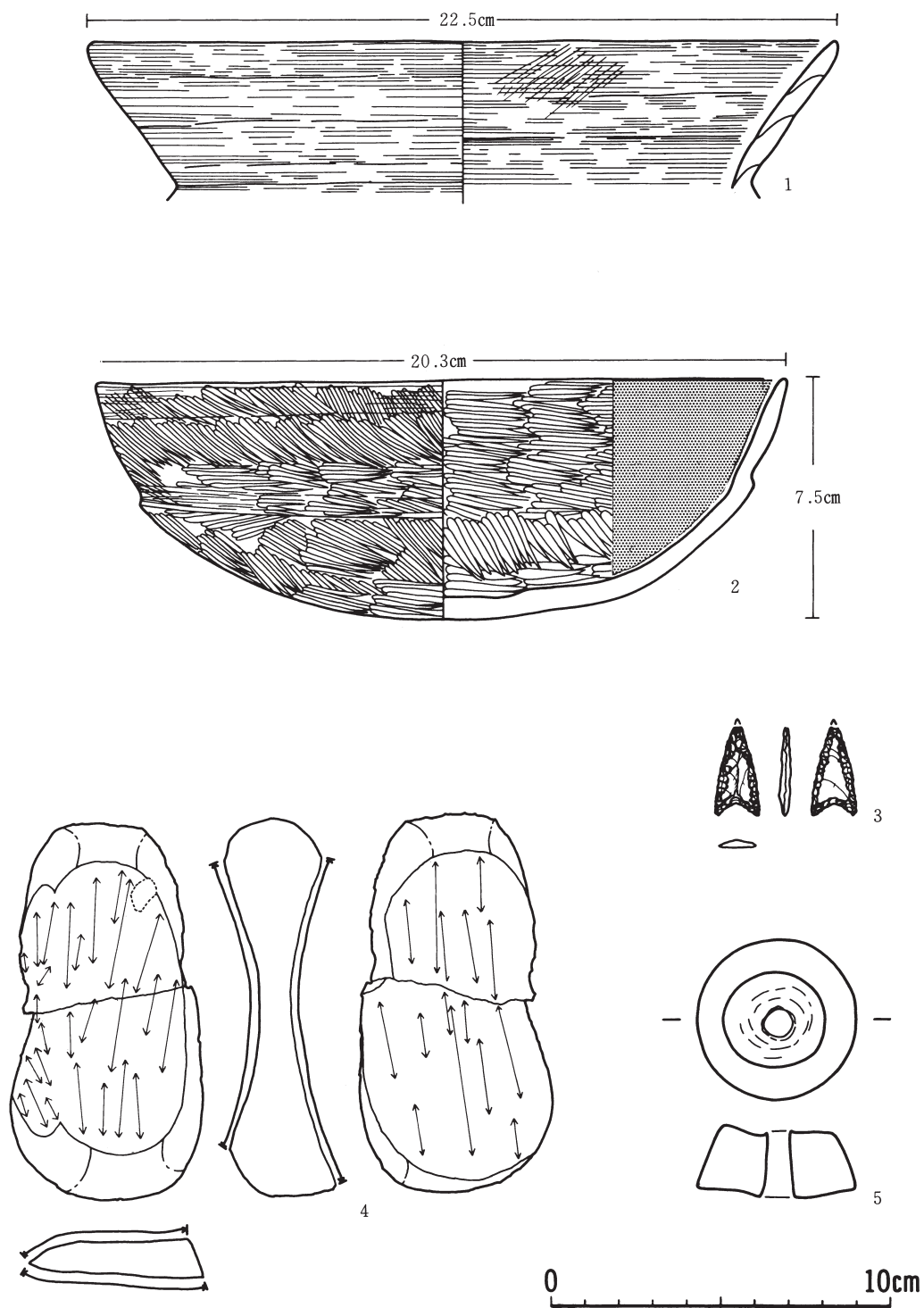


图10 竖穴住居跡出土遺物

だしをつくったためか若干の凹みを確認した。

炭化物と灰層 カマド袖部から北東コーナー付近の床面に層をなして、厚い所で15.6cm程の灰層がある。また、南東コーナー、南東ピット、及び南西コーナー付近では厚さ2～5cm程度の灰層が確認された。これらの灰は、カマドから掻出した物ようであるが、灰層や床面直上から炭化物も出土している。炭化物は木の小枝などが多く、住居の構築の材料としたものでなく、カマドで燃やされたものの様にも考えられるが詳細は不明である。なお、炭化物については樹種同定を行った。

付属施設 口径86×70cm、底径96×86cm、深さ62cmの不整円形のフラスコ状の土壌である。土壌は、中央部より若干南東よりで検出した。覆土は、2層に区分され、1層は住居跡の貼床に使用されたものに近似するローム・ブロックを多く含む層である。2層は、大粒のローム・ブロックが主体を占める層である。住居跡の掘り方を精査した際、住居を構築した時に使用したと思われる工具痕が柱穴同様に確認された。南壁の西寄りの部分にも口径100×76cm、深さ4～6cmの不整形の浅い窪みを確認している。この窪みからは坏の破片6点を出土しているが、これは付属施設であるかどうかは不明である。(図8)

出土遺物 (図10)ほとんど床面直上より出土し、カマド付近の、灰層から出土した土師器は若干浮いた状態で出土した。カマド周辺からは甕形土器片が多く、中央付近から南壁にかけては、坏形土器が散在している。図10-2の坏形土器は、内面黒色処理された土師器で若干大きめのものである。頸部と胴部に稜を有する土器である。住居跡内からは、このほか砥石1点、紡錘車1点を出土している。(一町田 工)

表3 竪穴住居跡ピット一覧表

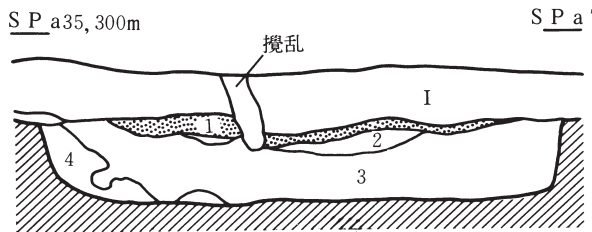
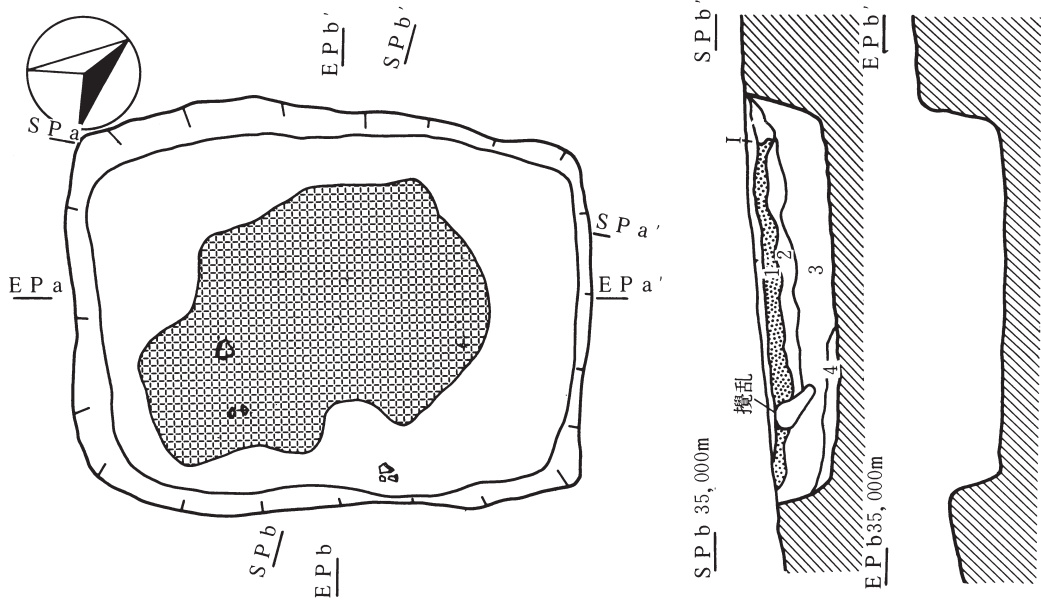
番号	形状	大きさ(cm)	床面からの深さ(cm)	番号	形状	大きさ(cm)	床面からの深さ(cm)
1	円形	18 × 18	62.5	4	不整円形	16 × 18	67
2	円形	23 × 25	71.1	5	不整円形	34 × 36	30
3	不整円形	18 × 16	60.3				

(2) 竪穴遺構(図11)

位置と確認 J-11、12グリッドに位置し、第4号溝状ピットと重複関係にある。

規模と形態

法			北東壁	北西壁	南東壁	南西壁
	量	壁長		260cm	190cm	180cm
壁高			20cm	37.3cm	34.7cm	
形態	長方形	面積	4.43㎡		主軸方位	N-40°-W



竪穴遺構南北セクション

- 第1層 暗オリーブ褐色土 (2.5Y R $\frac{3}{4}$) 火山灰層で、しまりあり。
- 第2層 黒褐色土 (10Y R $\frac{3}{4}$) 火山灰少量混入、硬くしまっている。
- 第3層 暗褐色土 (10Y R $\frac{3}{4}$) しまりなく、軟かでローム粒を微量含む。ローム粒混入。
- 第4層 暗褐色土 (10Y R $\frac{3}{4}$) しまりなく、炭化物微量混入。ロームブロックを含む、ローム粒。

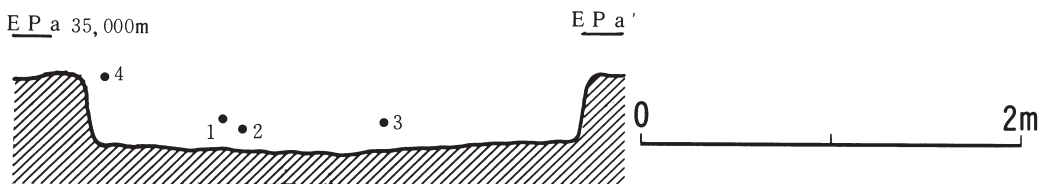
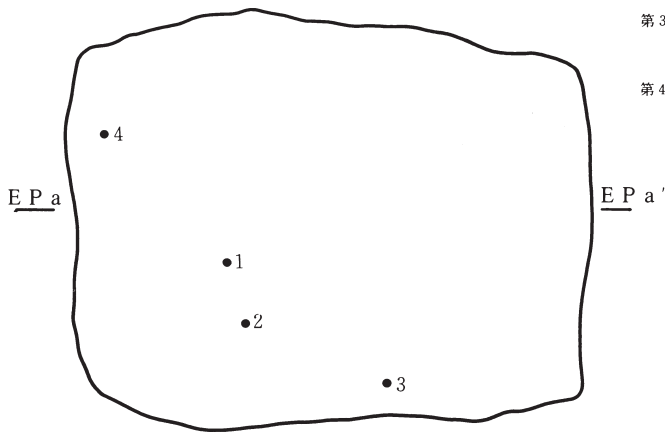


図11 竪穴遺構実測図

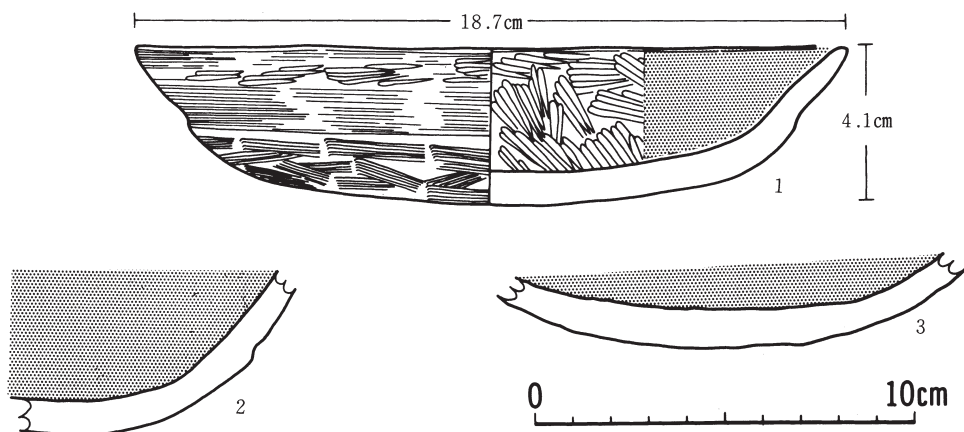


図12 竪穴遺構出土土器

堆積土 4層に区分した。

第1層 暗オリーブ褐色土の火山灰層で、しまりがある。

第2層 黒褐色土で、火山灰が少量混入して、硬くしまっている。

第3層 暗褐色土で、しまりなくやわらかな層のローム粒を微量含む。

第4層 暗褐色土で、しまりなくロームブロックとローム粒を含み、炭化物を微量に混入している。

以上、一部攪乱を受けているが、自然堆積の状態である。

壁 全般的にほぼ垂直な立ち上がりを示し、壁のしまりは若干弱く脆い。

床 床面は2～5cmの薄い貼り床がほぼ中央に円形状に広がっている。貼床としてはしまりが弱いものである。

出土遺物 (図12) 覆土から土師器4点を出土した。

(3) 土 壌

第1号土壌(図13)

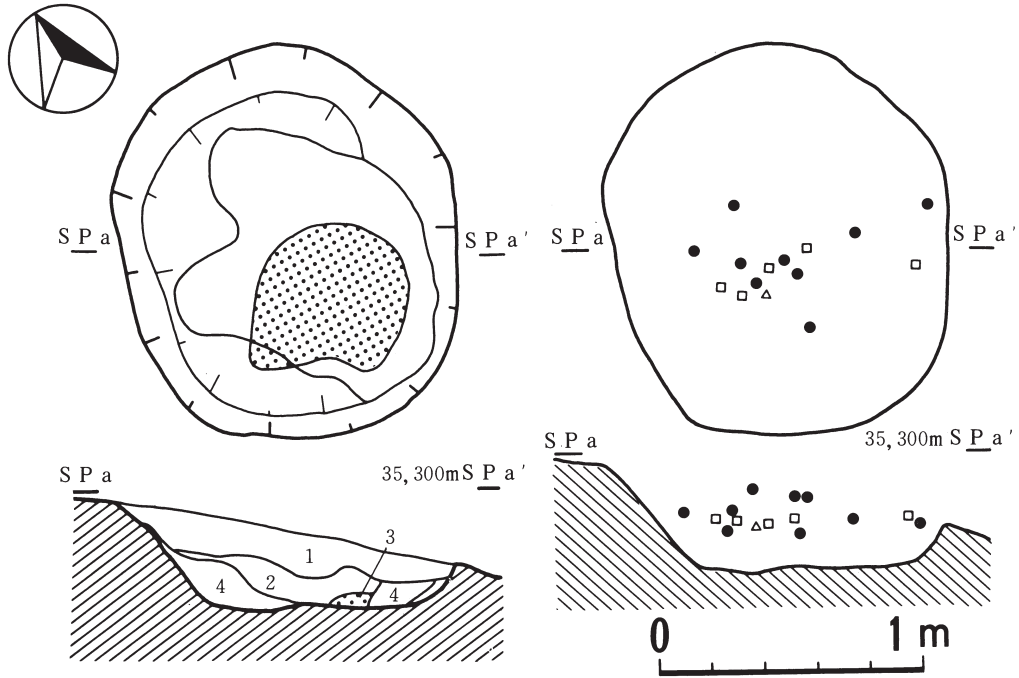
位置と確認 D-29グリッドで、黒色土の広がりを確認した。

規模・形態 上面東西直径約153cm、下面直径約131cmで、平面形は不整円形である。深さは、北西壁寄り約36cm、東壁寄り約17cmで、傾斜地にある。

壁・底 壁は、ゆるやかな立ち上がりであり、底面は、ほぼ平坦である。

覆土 4層に区分した。1層から4層にかけて炭化物を含み、2 a層には、焼土が層的な広がりをみせ混入していた。4層には、炭化物の量も多く含まれていた。炭化物を含む層が焼土を含む層を挟み互層をなしている。これらのことからみて人為的な堆積と思われる。

出土遺物 2 a層の焼土面から炭化したクルミ4点を出土している。遺物は甕、坏等の土師器が1層下面から2 a層中央部分に多く出土している。



土層注記

- | | | |
|-------|-------------------|---------------------------------------------------|
| 第1層 | 黒色土 (7.5YR 1.7/1) | 炭化物 (0.5~3.0cm大) と、微量のローム粒混入。 |
| 第2 a層 | 褐色土 (7.5YR 3/4) | 焼土で上面に炭化物 (0.1~0.5cm大) 及びローム粒多量に混入。 |
| 第2 b層 | 黄橙色土 (7.5YR 3/6) | 第2 a層と同じ焼土だが、非常に硬くしまっている。土が焼けて、ブロック状に硬化したものと思われる。 |
| 第3層 | 鈍い褐色土 (7.5YR 5/6) | 粘性強く、湿性有り。しまりなし。粘土の様である。 |
| 第4層 | 黒色土 (7.5YR 3/2) | 粘性あり。しまりなし。炭化物を多量に含み、ロームブロックの混入が多い (5.0~10cm大)。 |

図13 第1号土坑実測図

第2号土坑 (図15)

位置と確認 D - 27グリッドで、黒色土の広がりを確認した。

規模・形態 上面東西直径約120cm、南北約123cmでほぼ円形で、深さは最大約45cmである。

壁・底 壁は、ほぼ垂直な立ち上がりで、底面は、平坦で硬くしまっているが、壁面は柔らかくはっきりしない。

覆土 7層に区分した。黒色土と黒褐色土が互層をなし、各層にパミス、ロームブロック等を含み、最下層の7層では、炭化物が、特に、多量に混入している。第1号土坑同様に、焼

土、炭化物を含む層が互層をなしており、人為的な堆積と思われる。

出土遺物 1層から5層にわたって出土し、2層、3層に多く出土した。底面より焼土、炭化したクルミ等を確認した。(図14)

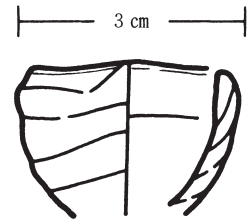
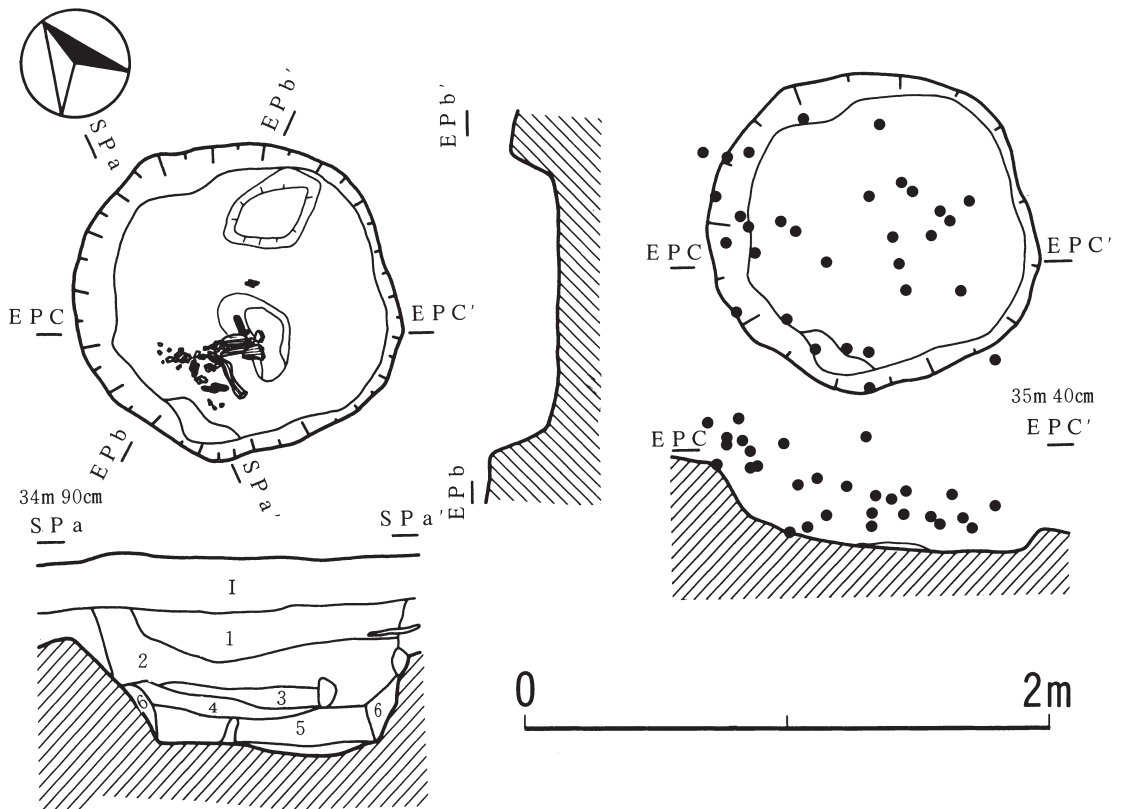


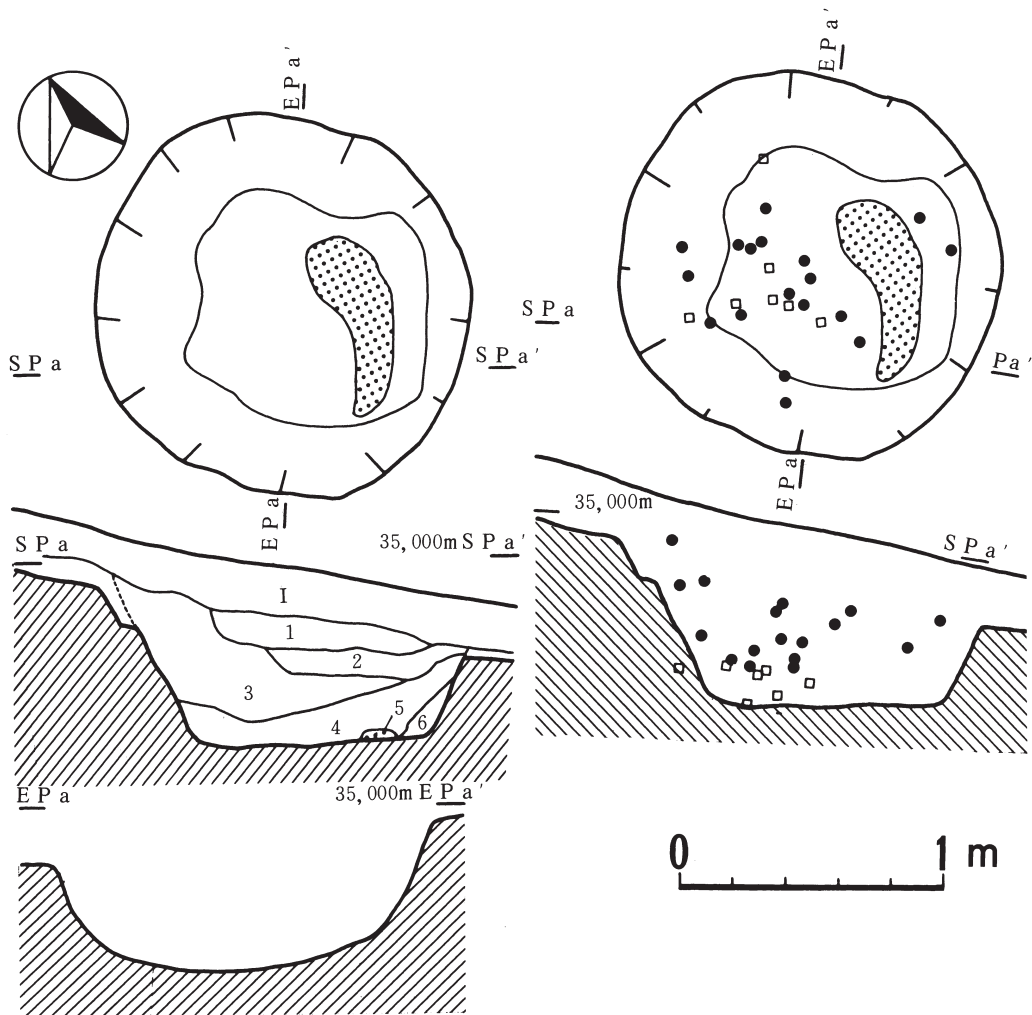
図14 2号土塚出土土器



土層注記

- | | | |
|-----|-------------------|----------------------------------------------------------|
| 第1層 | 黒色土 (7.5YR 1.7/1) | しまりなし。粘性なし、バミス粒若干含む、草木根多し。 |
| 第2層 | 黒色土 (7.5YR 1.7/1) | 1層よりしまりなし。0.1-0.5cm大のロームブロック少量、1層より若干明るい。 |
| 第3層 | 黒色土 (7.5YR 1.7/1) | 硬くしまり、やや有り、粘性なし。ローム粒子若干含む。バミスブロック2-3cm大、やや多量含む。 |
| 第4層 | 黒褐色土 (10YR 5) | しまりなし、ローム粒多量に含み、バミス粒ごく少量含む。 |
| 第5層 | 黒色土 (7.5YR 5) | 粘性なし、ローム粒子少量含み、4層よりややしまりあり、2層より若干明るい。0.5cm大のバミスブロック少量含む。 |
| 第6層 | 黄褐色土 (10YR 5) | しまりなくバサバサしている。もろい。 |
| 第7層 | 黒褐色土 (7.5YR 5) | 黒色土とロームの混合層。 |
| | | しまり、湿性やや有り、ローム粒多量に含む。カーボン・ブロック多量に混入。 |

図15 第2号土塚実測図



土層注記

- | | | |
|-----|----------------|------------------------------------------------------------------|
| 第1層 | 暗褐色土 (10YR 3%) | 軟らかく、炭化物、焼土粒、微量含有する。 |
| 第2層 | 暗褐色土 (10YR 3%) | 軟らかく、しまりなく、炭化物、焼土粒、微量含有する。 |
| 第3層 | 褐色土 (10YR 5%) | 軟らかく、しまりなく、炭化物、焼土粒、微量含有する。 |
| 第4層 | 褐色土 (10YR 5%) | 軟らかく、しまりなく、炭化物を多量に含有する。炭化物は、小枝状の物が多い。焼土も多く含み、2層に近い色調の粘土質土を多量に含む。 |
| 第5層 | 褐色土 (10YR 5%) | 焼土 (明赤褐色)
4層とほぼ同質で軟らかく、しまりない。
焼土がまとまって、分布している。 |
| 第6層 | 黄褐色土 (10YR 7%) | 軟らかく、しまりなく、粘土質の土を多量に含み、炭化物を微量に含む。 |

図16 第3号土坑実測図

第3号土壇(図16)

位置と確認 J・K-7グリッドで、暗褐色土の広がりを確認した。

規模・形態 上面東西・南北直径約140cmの円形で深さは最大で65cmである。

壁・底 壁は若干ゆるい立ち上がりで、底はほぼ平坦である。

覆土 5層に区分した。1層から5層まで炭化物及び焼土を含み、暗褐色土が互層をなしている。下層では、粘質土が多く、2~3cmの焼土塊をまばらに含む。底面近くの焼土は若干浮いた状態で約4cm位の厚さである。上部は濃く、下部は次第に薄くなって底面に至る。

出土遺物 1層から3層にかけて甕、坏等の土師器片が非常に多く、4層から炭化したクルミなどが出土している。(図17)

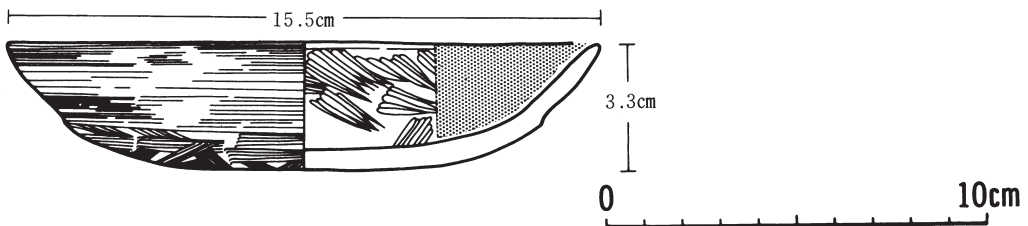


図17 第3号土壇出土土器

(4) 溝状ピット

第1号溝状ピット(図18)

位置と確認 A-35・36、B-36グリッドで、一部火山灰に覆われていたが、黄褐色土の広がりを確認した。竪穴住居跡と切り合い関係にある。

規模・形態 口径約32.4×46cm、底径約320×28cmで、上部平面形は長楕円形である。短軸断面はY字状である。長軸方向は、ほぼ南北を示している。

壁・底 壁高は約220cmで、南端は中段まで、開口部と同様に広い。下部はオーバーハングしながら溝状を呈する。底面はほぼ平坦である。

覆土 7層に区分した。1層は竪穴住居跡と同様に火山灰に覆われ、上層は黄褐色土で、下層は黒褐色土である。

出土遺物 遺物は出土しない。

第2号溝状ピット(図18)

位置と確認 A-35、B-35グリッドで、竪穴住居跡の貼床を排除した際に、暗褐色の広がりを確認した。

規模・形態 口径約268×38cm、底径約258×16cmで、上部平面形は長楕円形である。短軸断面はU字状である。長軸方向は西へ約30°の傾きを示している。

壁・底 壁高は約70cmで、底部からほぼ垂直に立ち上がっている。長軸両端が幾分オー

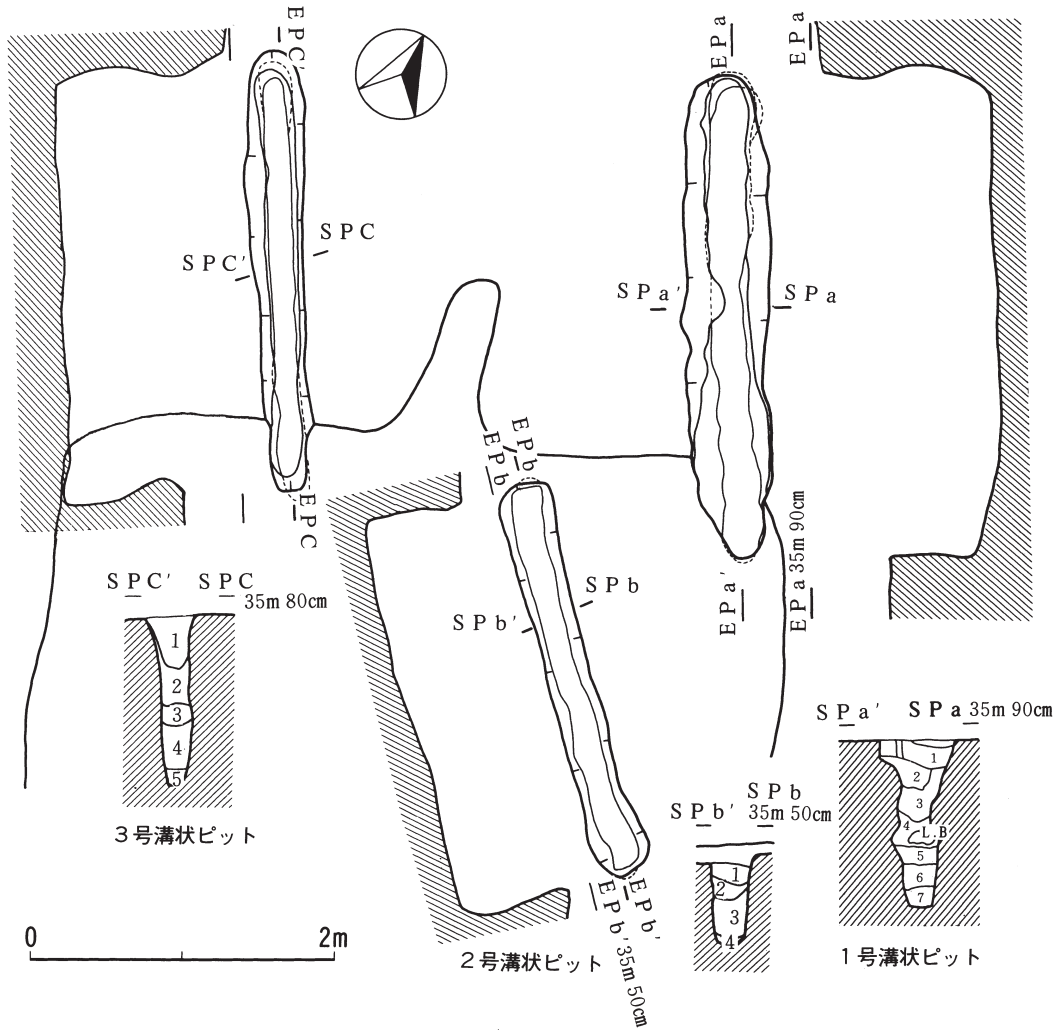


図18 第1・2・3号溝状ピット実測図

第3号 溝状ピット		第2号 溝状ピット		第1号 溝状ピット	
第1層	黒色土 (10YR 1.7/1) あり、ボンボンしてくずれやすい。	第1層	暗褐色土 (7.5YR 3/4) 粒子細かく、粘性あり、ローム粒・炭化物を含む。	第1層	火山灰層
第2層	黒褐色土 (10YR 2/2) 湿性強く、ねっとりしている。	第2層	オリーブ褐色土 (2.5YR 3/4) 粘土質で、ロームブロック、ローム粒を混入。	第2層	黒褐色土 (10YR 2/2) 粒子細かく、粘性あり、若干の炭化物を含む。
第3層	暗褐色土 (10YR 3/4) 湿性強く、粘性も強い、ローム粒を多量に含む、またロームブロックも含む。	第3層	暗褐色土 (10YR 3/4) 粘質極めて強く、若干のロームブロックを含む。	第3層	暗褐色土 (10YR 3/4) ローム粒、ロームブロックを多量に含む、粘性強く粒子は粗い。
第4層	灰白色土 (7.5YR 7/4) ローム粒、ロームブロックを含む粘土質の土である。	第4層	暗褐色土 (10YR 3/4) 粘性強く、しまり良い。	第4層	明褐色土 (7.5YR 5/4) 若干のローム粒を含む。
第5層	黒褐色土 (10YR 2/2) 粘性極めて強く、しまり良く、粒子細かい。			第5層	黒褐色土 (10YR 2/2) 粘土質の土とローム粒を含む。極めて粘性が強い。
				第6層	灰白色土 (7.5YR 7/4) 砂粒、ローム粒を若干含む。
				第7層	黒褐色土 (10YR 2/2)

バーハングしている。底面は、ほぼ平坦である。

覆 土 4層に区分した。暗褐色土は、上層と下層にオリーブ褐色土をはさんでみられる。上層の暗褐色土はローム粒を多く含み、若干の炭化物も確認した。下層の暗褐色土は粘質が極めて強く、粒子が細かい。

出土遺物 遺物は出土しない。

第3号溝状ピット(図18)

位置と確認 B-35、36グリッドで、一部火山灰に覆われた黒色土の広がりを確認した。竪穴住居跡と切り合い関係にある。

規模・形態 口径約290×34cm、底径約264×20cmで、上部平面形は長楕円形である。短軸断面はU字状である。長軸はほぼ南北を示している。

壁・底 壁高は、約104cmで、長軸両端の中段で幾分オーバーハングして掘り込まれている。底面では、若干の凹凸が見られたがほぼ平坦である。

覆 土 5層に区分した。上層が黒色土で、砂粒の粒子を混存し、各層には炭化物の粒子が混っている。2、3層は同色で黒褐色土で、2層には粘性がある。

出土遺物 遺物は出土しない。

第4号溝状ピット(図19)

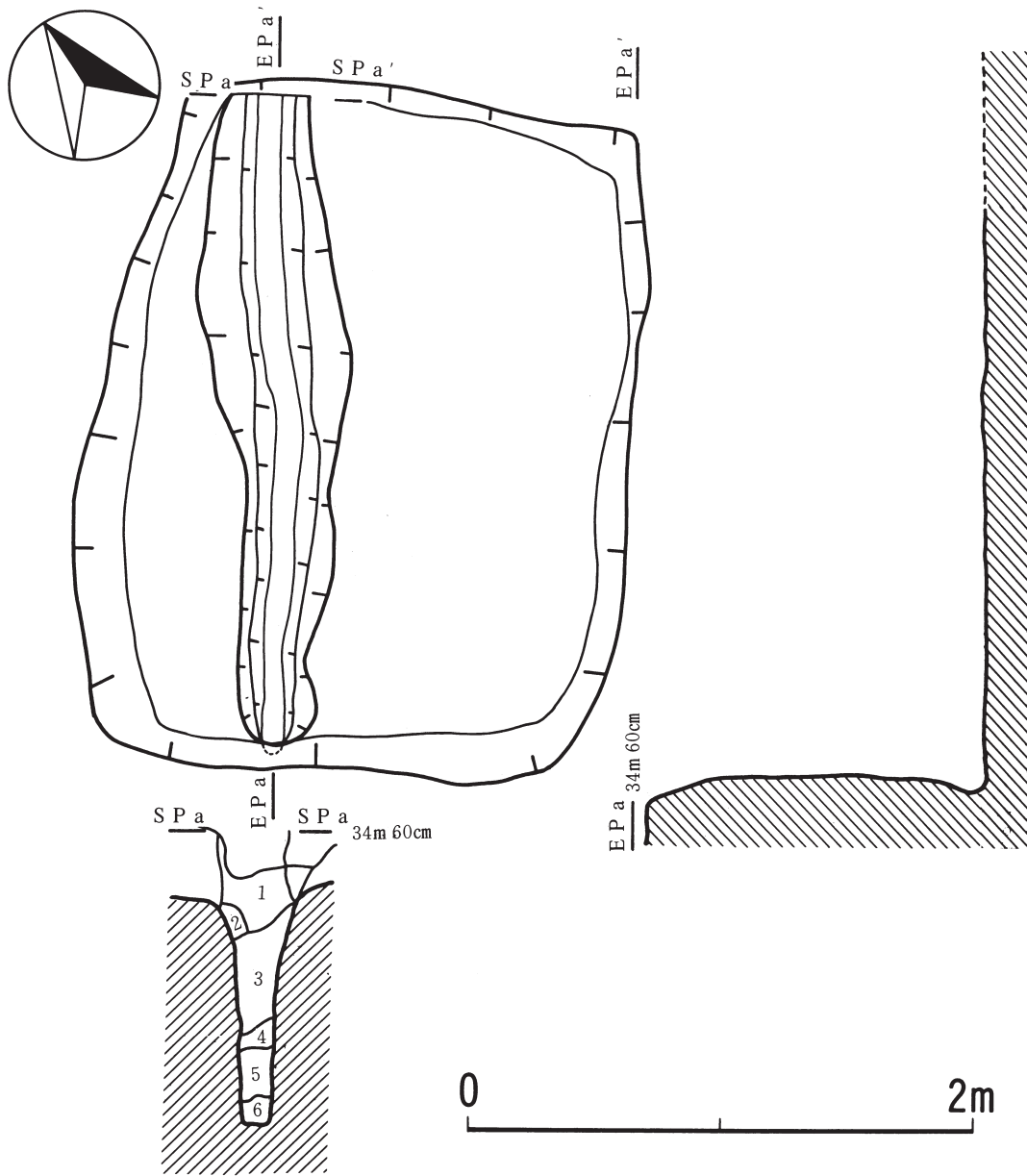
位置と確認 J-12、13グリッドで、黒褐色土の広がりがみられ、竪穴遺構の床面精査の際に確認した。

規模・形態 口径約258×56cm、底径約262×12cmで、上部平面形は長楕円形である。短軸断面はY字状である。長軸方向は西へ約30°の傾きを示している。

壁 底 壁高約120cmで、長軸南端は幾分オーバーハングしている。北端は発掘区域外のため不明である。底部から中段まで垂直に立ち上がり、中段から開口部にかけてやや緩やかに外反する。底面はほぼ平坦である。

覆 土 6層に区分した。黒褐色土と褐色土との互層をなし、下層ほど粘性があり、第6層は硬くしまった灰白色の粘性のある層である。

出土遺物 遺物は出土しない。



第4号 溝状ピット

土層注記	
第1層	黒褐色土 (7.5 YR 5/2) ローム粒混入
第2層	褐色土 (7.5 YR 5/4) ローム粒を多量に含む
第3層	暗褐色土 (7.5 YR 3/2) ローム・ブロック (0.5~5.0cm大) を混入。
第4層	褐色土 (7.5 YR 5/4) ローム質層
第5層	黒褐色土 (7.5 YR 3/2) ローム粒混入
第6層	灰白色土 (7.5 YR 8/2) 粘性あり

図19 第4号溝状ピット実測図

5 出土遺物

(1) 縄文時代の出土遺物

土器は、三つに類別した。

1 類 (円筒下層式土器に比定する土器)

図21 - 7 ~ 8 は、明確に型式を決定する文様構成はみられないが、胎土に多量の繊維を含む土器で、円筒下層式に比定されるものである。

2 類 (円筒下層b式土器に比定する土器)

図21 - 9 は、口縁部に隆線を伴ったもので、隆線上に撚糸圧痕を施し、隆線区画した部分には撚糸圧痕を平行に2条施し、その下部に、さらに連続刺突が施文されている。円筒上層b式土器に比定される土器である。

3 類 (縄文時代晩期に比定する土器)

口縁部に平行沈線と単節 R $\left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right\}$ の縄文を施文している土器である。(図21 - 10 ~ 11)

石器 (図20)

凹石1点、すり石2点出土した。

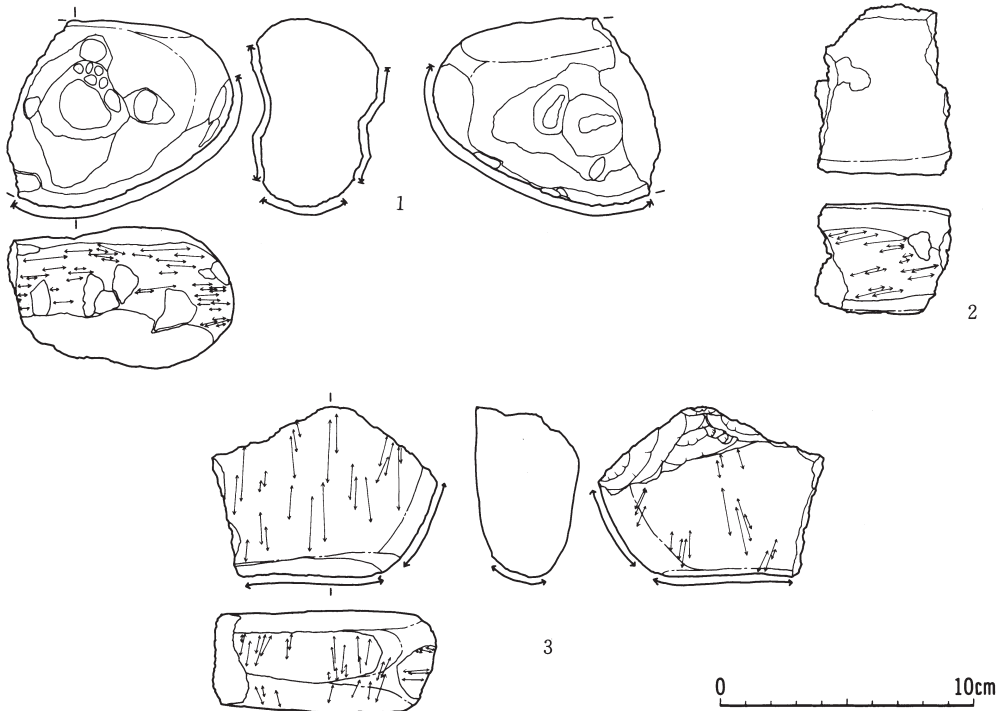


図20 遺構外出土石器 凹石・すり石

(2) 歴史時代の出土遺物

土師器

最も多量に出土した遺物である。器種は、甕形土師器（以下「甕」）が最も多く、出土した土師器の大部分を占めている。そのほかには、坏、手づくね土器、壺などが出土した。製作上では、すべての器種にわたってロクロ使用のものはみられない。

次に、遺構内、遺構外から出土した土師器の各器種の特徴及び製作過程を記述する。

甕（完形品なし）

口縁部 全体の器形をとらえることは困難で、残存する口縁部破片についてみると、成形は、内外面に輪積み痕があり、すべて、粘土紐巻き上げ手法によるもので、ロクロ使用の痕跡は認められない。図10 - 1 は、竪穴住居跡より出土し、口縁部が1/2残存しているものである。調整は内外とも横ナデである。胎土には石粒、細砂粒を含み、それらが器表面に突出しているものもある。図25 - 46は、口縁部に沈線風の段が数条認められるもので、若干古手のものと伴出した破片である。図26 - 7 は、頸部に沈線を施しているものもみられる。調整は内外面とも横ナデである。

口縁部断面形状

1. 図25 - 21 ~ 24のように、口縁の幅も広く、直線的に外反するもの。
2. 図25 - 25 ~ 26のように、口縁の幅がやや狭く、直線的に外反するもの。
3. 図25 - 28は口縁部に稜がみられ、口唇部は一条溝状に巡っているもの。
4. 図25 - 29 ~ 30は、口縁全体としては内傾しながら、口唇部に外反するもの。
5. 図25 - 31 ~ 38 口縁が外反し、口唇部で直立するものと口唇部が次第に薄く直立するもの、丸味のあるもの。
6. 図25 - 39 頸部が大きく内湾し、口唇部で直立するもの。
7. 図25 - 42 ~ 45 口径が外反しているのは、1と同様であるが、口唇部が平縁である。
8. 図25 - 46 口唇部に沈線風の段を、数条認められるもの。
9. 図25 - 48 口縁部が内傾するもの
10. 図25 - 49 口縁部がゆるく外傾しながら、直立するもの。

胴部 成形は、内外面に輪積み痕があり、作りは若干雑である。調整には、刷毛調整及びナデ、ヘラミガキなどが施されている。調整のしかたは、刷毛調整のあとヘラミガキをするなど、複数の方法をとっている。調整の方向は、外面では上方から下方へやや斜行し、内面では横位、斜位方向のものが多くみられる。

底部 底部外面は一般に、中央部が若干凹むものが多い。底部と胴部の接合時の粘土は、底部から胴部に巻きあげられたままで、十分調整されないものや、木葉痕のみられるもの

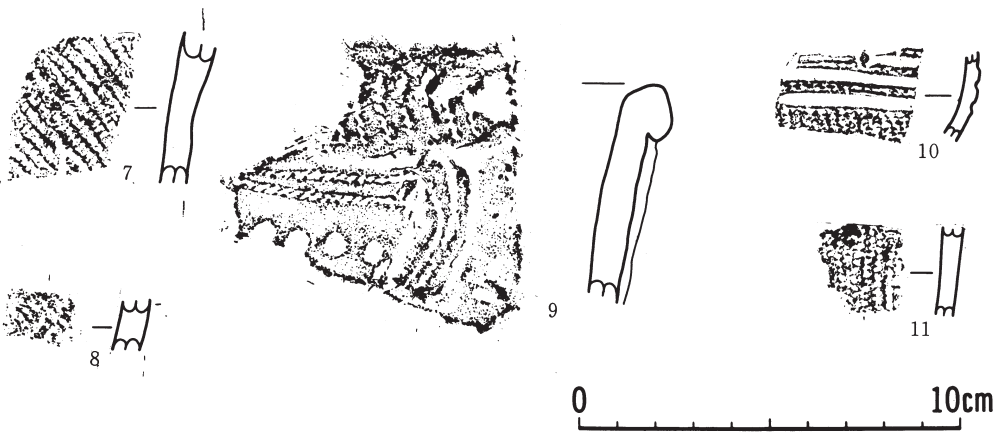
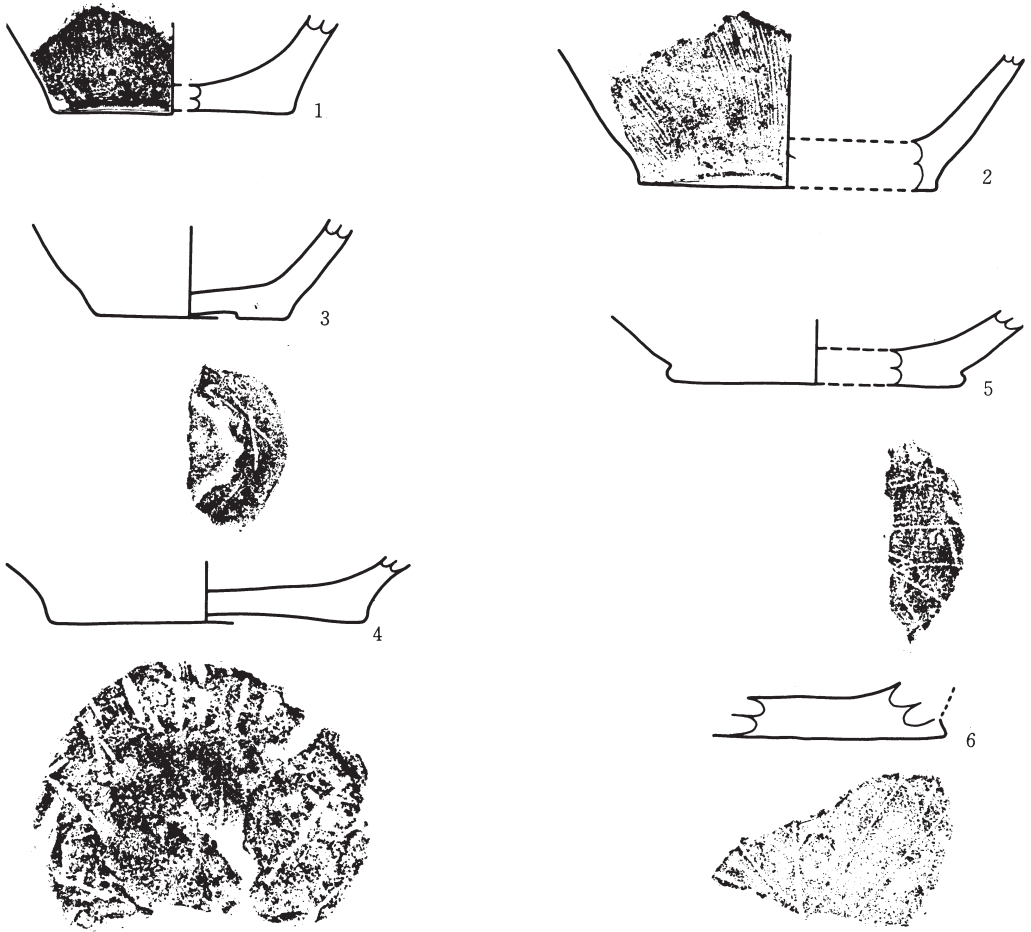


图21 遺構外出土土器 土師器底辺部(1~6) 縄文式土器(7~11)

もある。胎土は、砂粒、細石を含み、器表面に突出している所もある。

坏

器形は総体的にみて、底部が若干平底に近い丸底状のものと、丸底のものが、2種類みられる。小型の浅い坏については、前者の器形のものが多い。

図10 - 2 は、竪穴住居跡床直から出土したもので、器形は丸底である。体部と底部の境は段を有し、内面にもゆるい稜をもっている。調整は内外ともヘラミガキを行っている。外面は、ヘラミガキ後に、口縁部の調整が見られる。内面は、黒色処理を施している。

図12 - 1 は竪穴遺構から出土し、器形は、底部が平底に近い丸底状である。体部と底部のほぼ中央に稜をなしている。調整は、外面の口縁部付近が横ヘラミガキ、稜以下の部分は底部まで刷毛による調整が施されている。

図17は、3号土壌から出土し、器形は、底部が平底に近い丸底状である。体部中央より底部に近い部分に稜が見られる。口縁部付近が横ナデ、稜以下の部分は底部まで刷毛調整である。内面はミガキ調整を施している。

図22 - 1 は、遺構外から出土し、器形は底部が丸底である。体部の稜から一度外傾し、口縁部中程で内湾するものである。口縁部と底部のほぼ中央に稜を有する。調整は外面底部でヘラケズリの後にミガキを行い、内面はヘラミガキを行っている。口縁部は、ヘラミガキの後にナデ調整をしている。

図22 - 3 は、遺構外から出土し、器形は平底に近い丸底状である。稜も底部に近い部分にみられる。内面にも若干稜的な膨みがみられる。調整は外面口縁部付近が、横、斜位のヘラミガキを施し、体部から底部にかけて刷毛による調整がみられる。内面は口縁部付近が横、斜位口辺部から底部は縦のヘラミガキである。内面は、黒色処理を施している。

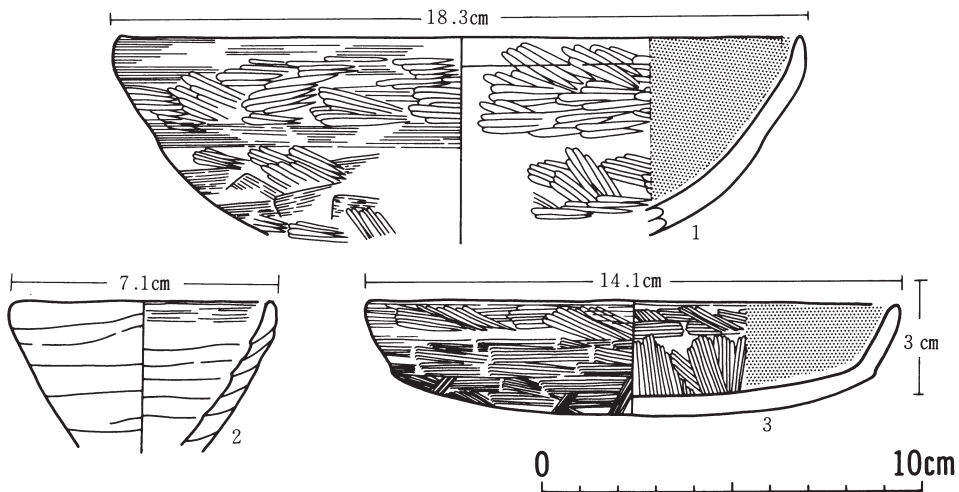


図22 遺構外出土土器

手づくね (図22 - 2)

口径約7cmと約2.8cmの胴部破片2点を出土した。非常に小型のもので、粘土の巻き上げ痕が内外面にみられる。

紡錘車 (図23 - 1 ~ 4)

5点出土し、うち1点は完形品で竪穴住居跡より出土した。他は遺構外より出土している。形状は、断面形が台形で、いずれも中央部に孔を有するものである。上面は若干凹みがみられる。残る2点は計測不能である。

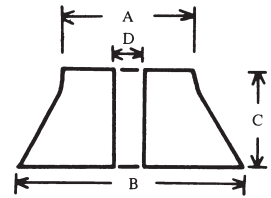


図24 紡錘車模式図

項目 図一番号	A(上面直径・cm)	B(下面直径・cm)	C(厚さ・cm)	D(中央部の直径・cm)	重さ(g)
図10-5	3.2×3.3	4.6×4.7	1.8	0.70	34.75
図23-1	4×(4)	6×(6)	2.7	0.78	
図23-2	4×(4)	5.65×(5.65)	1.8	0.95×0.90	

砥石 (図10 - 4)

竪穴住居跡より1点出土した。岩の自然石の長軸両端が凹み状で、砥石としてかなり使用したものである。(長さ約10.1cm、幅約5.6cm、厚さ2.8cm、重さ140g)

羽口 (図23 - 5) 破片1点出土した。

青磁・陶磁器 各1点出土。(PL18)

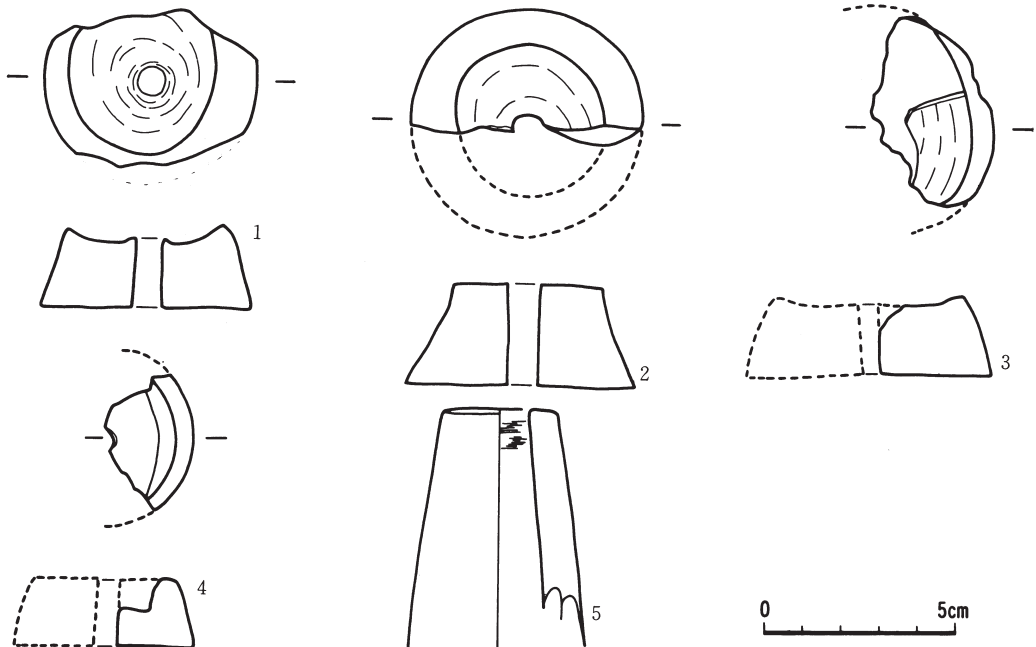


図23 遺構外出土遺物紡錘車・羽口

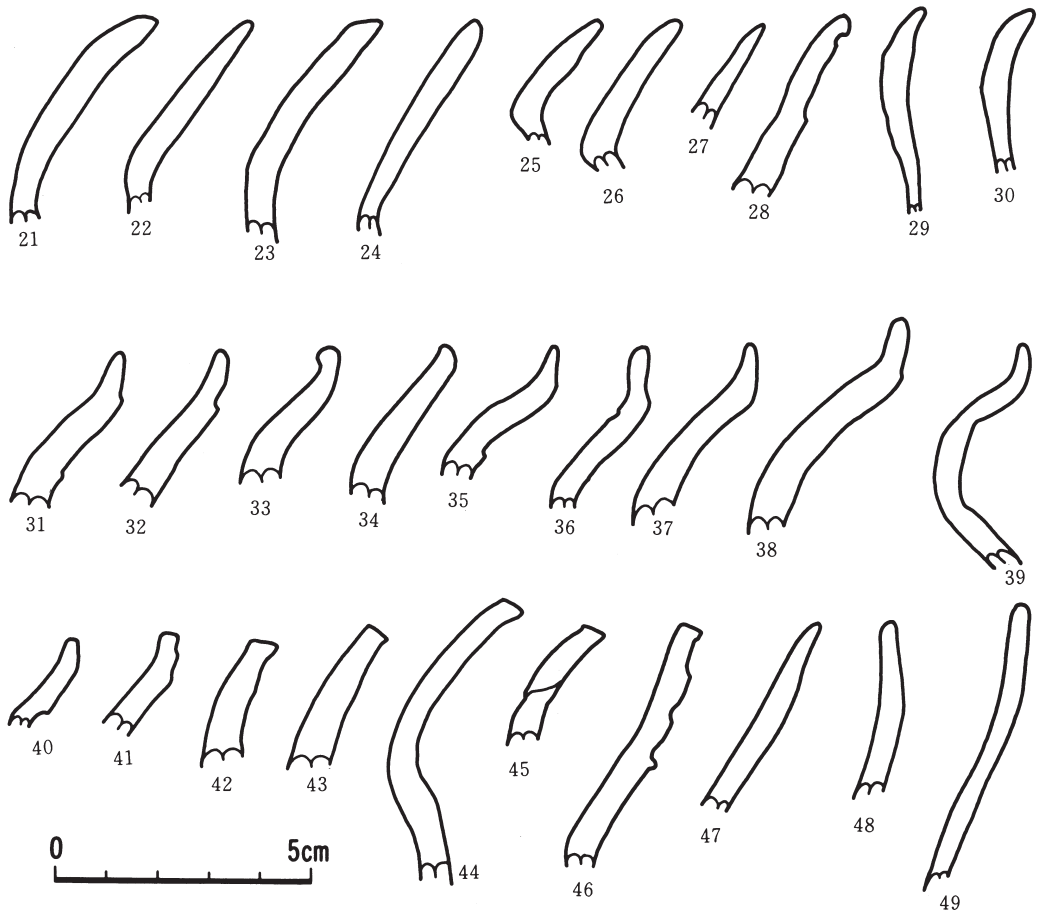
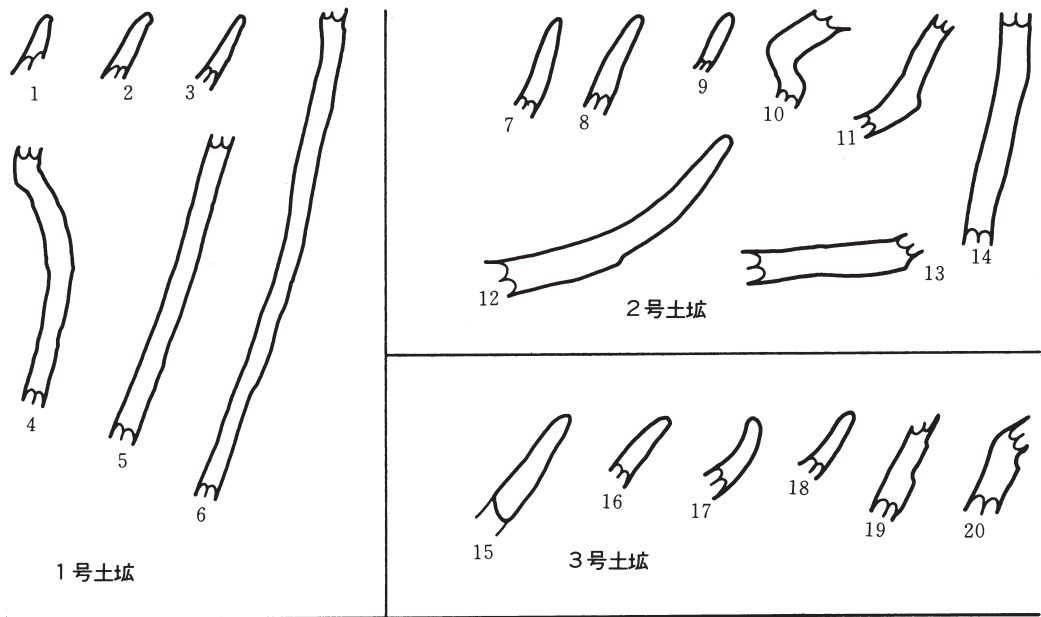


图25 第1·2·3号土坑、遺構外出土土器断面形状图

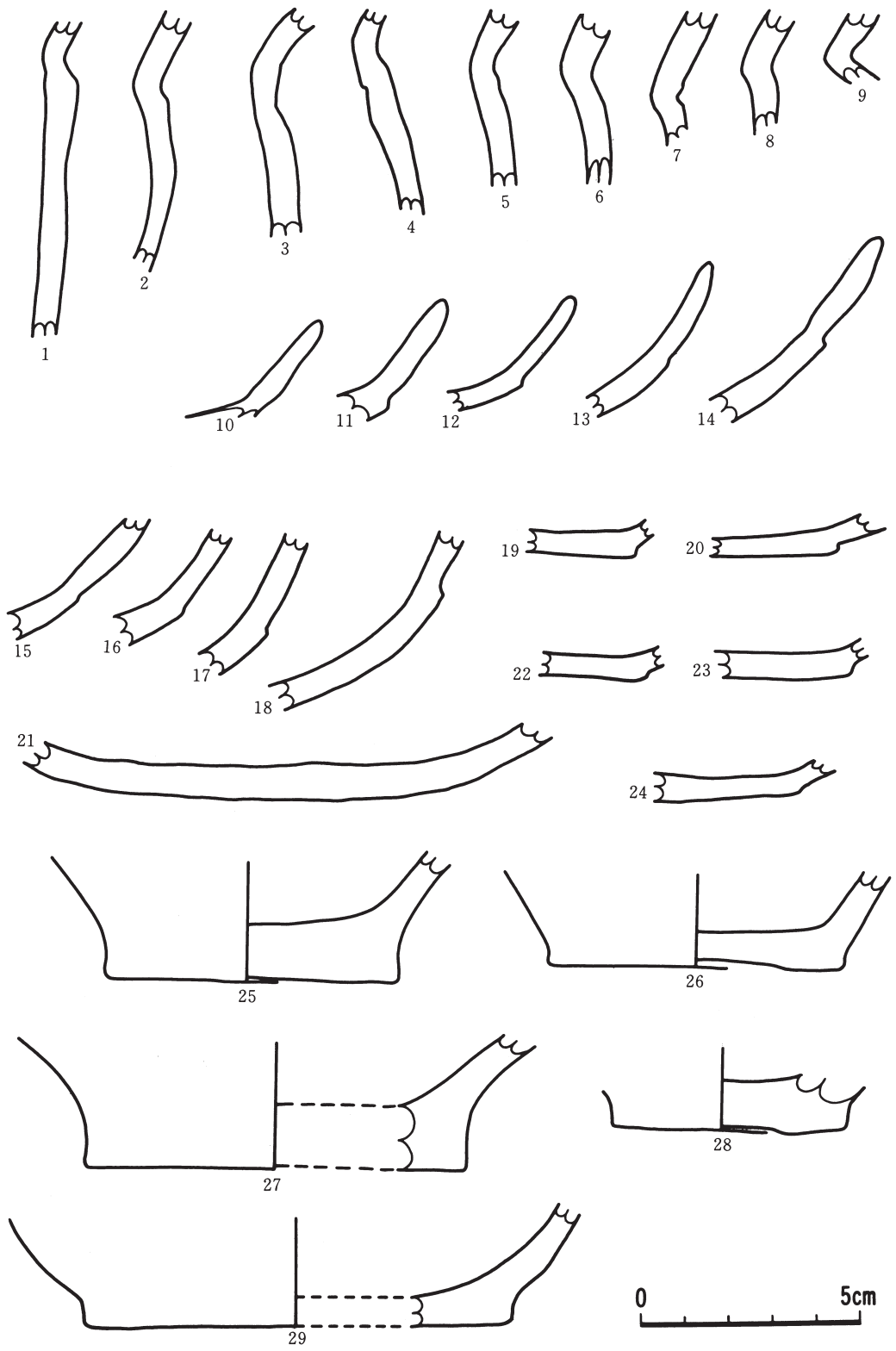


图26 遺構外出土土器断面形状图

まとめ - 「坏」について

はじめに

本遺跡出土遺物の編年上の位置づけについて、若干の考察をし、編年上の問題を考える場合に、出土している全ての器種を検討の対象資料とすることは基礎的な作業の一つである。

従って、一つの器種からだけで結論を出すことには無理を伴うが、本遺跡では、土器の出土量が少なく、復原された器種も限られている。そのため、器形の把握できる「坏」によって、およその編年上の位置づけをすることとする。

1 本遺跡出土「坏」の特徴

本遺跡出土「坏」の製作、器形、調整技法上から見た特徴をまとめると、次のとおりである。

- 製作
1. 成形の輪積み痕があり、すべて粘土紐を巻き上げたものである。
 2. ロク口使用の痕跡は全く認められない。
 3. 稜もしくは稜らしい痕跡がみられること。
- 器形
1. 口縁部はわずかに外傾し、底部は丸底のもの、稜は体部ほぼ中央にみられる。
 2. 口縁部は内湾するもので底部は丸底のもの、稜は体部ほぼ中央にみられる。
 3. 口縁部は外傾し、体部から底部にかけて若干丸味のあるもので、底部は平底に近い丸底状のもの。稜は体部中央より底部に近い位置にみられる。
 4. 口縁部は外傾し、体部から底部にかけて直線的である。底部は3よりもさらに平底に近い丸底状のもの。稜は体部よりも底部に近い位置にみられる。
- 調整技法
1. 内外ともヘラミガキを行い、内面は黒色処理を施している。
 2. 内面はヘラミガキを行い、外面は、稜より上部にヘラミガキ、稜より下部に刷毛目調整が認められ、内面は、黒色処理を施している。

2 編年上の位置づけ

以上のような特徴を有する土器は、編年上、桜井氏の唱える第 Ⅰ 型式に相当する。すなわち、製作上では、ロク口使用痕がみられないこと、器外面に稜を有し、内面にもその痕跡のあるものとないものがあること、底部は完全な平底ではなく丸底状のものと、丸底のものがみられること、内面黒色処理が施されていることなど以上4点があげられる。さらに、この時期の土器について、桑原氏は第 Ⅰ 型式に併行する型式として、氏家氏が栗田式に続く型式として設定した東北地方南半の国分寺下層式と併行関係にあるとしている。桑原氏はそのために、東北各地のこの時期の共通する特徴をまとめて、次のような点を挙げている。

「ほとんどすべてが内面は篋ミガキし、多くは黒色処理をしている。

外面は横ナデやケズリでととのえた後篋ミガキで仕上げるものが多い。

体部と底部を区画するかの様に一条の沈線をめぐらせるものが多い。それらは段本来の

意義が失われ、単にその名残りとして沈線で段を表現したものであろう。段にみあう内面のふくらみや段は、もたぬものが多い。こういった段の表現や、かすかな段をもたず、底部から体部へとただらかにつながるものや、平底の坏もみられる。」

このような特徴は、上記した本遺跡の「坏」の特徴4点と比較するならば、本遺跡出土の「坏」は器形、調整技法上で若干の相違もあるが、基本的には桑原氏の述べている「国分寺下層式と第 型式は併行関係にある。」とする見方で扱えられるものと思われる。

3 「坏」にみられる多様化（図27坏参考資料参照）

基本的には第 型式と国分寺下層式併行という範ちゅうで扱えられるが、その中でも遺跡によって同じ「坏」であっても、器形の組合せや調整技法上で若干の相違と共通性が挙げられる。

次に、本遺跡の出土品及び他遺跡からの出土品と比較してみることにする。

本遺跡の場合、器形にみられる底部形上と稜の位置は、1、2（数字は参考図参照）は丸底で、稜の位置は体部中央にみられる。3、4（数字は参考図参照）は平底に近い丸底状で、稜が体部中央よりも底部に近い位置である。

調整技法では、1～4いずれも内面は黒色処理されているが、1、2は内外面ともヘラミガキを行っているのに対して、3、4は内面ヘラミガキ調整し、外面は体部の稜より上半はヘラミガキ調整で、下半は刷毛目調整が施されている。底部はヘラケズリ後ヘラミガキを行っている。

さらに、本県における国分寺下層式に相当する土器を出土する浅瀬石、高木、虚空蔵、高館の各遺跡のほか^{注1}に、宮城県の陸奥国分寺出土の「坏」をつけ加えて調べてみると次のとおりである。

- 器 形
1. 丸底だけ出土する例
 2. 丸底のものと丸底状の両者が出土する例
 3. 平底だけ出土する例
 4. 平底と平底に近い丸底状の両者が出土する例

段・稜（沈線）

1. 体部中央にみられるもののみ出土する例
2. 底部により近い位置にみられるものを出土する例
3. 体部中央と底部に近い位置にみられるものを出土する例

調整技法

1. 内外面ともヘラミガキ
2. 内面はヘラミガキで外面調整技法が異なるもの
器外面を同一技法で調整しているもの
・ヘラナデ調整か、ヘラケズリ後ヘラミガキ調整しているもの

器外面が稜を境に上下で技法上異なるもの

ア．上半ヘラナデ調整し、下半刷毛目調整のもの

イ．上半ヘラミガキ調整し、下半ヘラナデ

ウ．上半ヘラミガキ調整し、下半ヘラケズリ

3．底部調整

ア．ヘラケズリ調整のもの

イ．ヘラケズリ後ヘラミガキ調整のもの

以上の結果から、体部にみられる稜の位置については、器形と関係なく同一遺跡では、ほぼ一定である。底部形状は、高木遺跡では平底だけで、他の遺跡では、一般的に、丸底もしくは丸底状のものと平底のものとか、複数の形状のものがセットで出土している。

調整技法では、さらに、器形が丸底のものは両面ヘラミガキの傾向がみられるが、それ以外のものでは器形と調整技法とはかならずしも一定でない。平底状のものは刷毛目調整が多くみられる。

このように、本遺跡をはじめ県内各遺跡によって様相に若干の相違がみられ、特に、調整技法で多様化の傾向がみられる。このことは、近年の発掘調査で土師器の編年上の好資料を出土している岩手県（「岩手の土器」1982年、高橋信雄）では器形、調整技法で 群 - 1（栗圀式）としたものよりも、 群 - 2（国分寺下層相当の土器）で地域色が強まり、多様化する傾向にあると指摘していることに付合する。

4 むすび

以上のような多様化は、本遺跡出土の第 型式・国分寺下層式併行に相当する土器の要件を覆すものではなく、丸底から平底化へ、有段から無段への変化の過程で、地域性、時間差などで表現上にバリエーションが与えられているものと思われる。

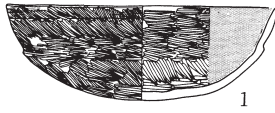
今回は「坏」だけを取り上げたが、他の器種も含めて、土器組成の変化と製作、器形調整技法の相関関係の中で、基本的な型式要件に付加できるものか、基本条件を変えるものであるかどうか見極めることが必要である。

年代については、さまざまな角度から検討されているが、国分寺下層式と第 型式を併行する桑原氏は8世紀後半から9世紀半ばに位置づけ、高橋氏は 群 - 2（国分寺下層式相当）を8世紀中～後半に位置づけている。

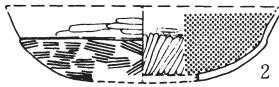
注1 昭和57年青森県考古学会で三浦圭介氏が挙げた遺跡である。

（一町田 工）

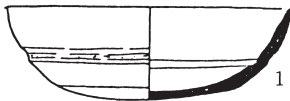
松原遺跡



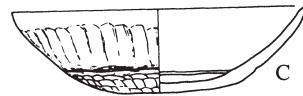
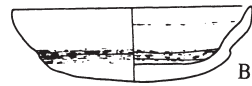
「虚空蔵遺跡」第8図



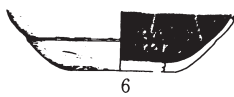
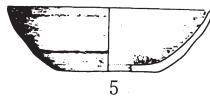
「浅瀬石遺跡」第59図



「中ノ沢西張遺跡」
参考図一高館遺跡

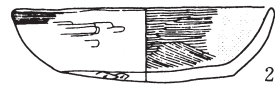
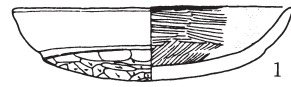


「高木遺跡」第9図



陸奥国分寺跡

「宮城県対馬遺跡出土土器」第7図



0 10cm

第7図 陸奥国分寺跡出土土器
(工藤哲司氏原図)

図27 坏 参考資料

6 分析

(1) 火山灰と土壌の蛍光×線分析

三辻 利一

青森県下の遺跡に堆積した降下火山灰はR b - S r 分布図とF e量より3グループに分類できる。図28 - 1にはR b - S r 分布図を示す。R b量が多くS r量の少ないA群、逆にR b量が少なくS r量が多いC群、その中間に分布するB群に分類される。そして、全体としてみると、R bとS rの間には逆相関の関係があることがわかる。これらの試料のうち、松山 力氏が陣馬川原遺跡で採集し、十和田a上部と同定した火山灰はA群に所属し、十和田a下部と同定した火山灰はC群に分布した。したがって、層序的には、C群がA群より古いことになる。一方、南郷村馬場瀬で採集した上位火山灰はB群に、下位火山灰はC群に所属したところから、C群はB群よりも古いことになる。B群も十和田a火山灰と思われるが目下のところ確認されていない。また、A群とB群との層序的關係についても明らかではない。十和田aの下位に堆積する十和田b火山灰はR b - S r 分布図ではC群に所属し、十和田a下部とは識別されない。図28 - 2にはF e量を比較してある。F e量でも、A群、B群、C群の相互識別ができることが分かる。さらに、十和田b火山灰は十和田a下部よりF e量が多く識別されることが分かる。これらの図から、十和田aの上部と下部、さらには、十和田aと十和田bの相互識別ができることが分かる。これらの分布の違いは降下火山灰のもつ特性の違いであり、風化によるものではないと思われる。噴火の時期によって火山灰の特性に違いがあるものと思われる。この特性の相違を利用すると、青森県下の遺跡に堆積する火山灰を蛍光X線分析によって同定することができ、さらには、遺跡の年代を知る手掛りが得られることになる。図29 - 1には、松原遺跡で採集された火山灰のR b - S r 分布図を示す。C群に所属することが分かる。図29 - 2にはF e量を示してある。この図でもC群に所属する。したがって、松原遺跡の火山灰は十和田a下部に対応する火山灰と同定され、遺跡の年代は十和田a下部に対応することが明らかとなった。

次に、松原遺跡の土壌の分析結果について述べる。蛍光X線分析法ではP(リン)の存在は認められなかった。蛍光X線分析法はPに対して感度は良くないが、それよりも、Pは地下水によって洗い流された可能性の方が高い。松原遺跡の土壌のR b - S r 分布図を図30 - 1に示す。松原遺跡の土壌としてまとめて分布することが分かる。そして、山崎遺跡、槻ノ木遺跡の土壌とは少し分布が異なることが分かる。このように土壌にも地域差があるのである。図30 - 2にはK - R b相関、図31にはC a - S r 相関を示す。これらの図でも、3遺跡の土壌には特性の違いがあることが分かる。そして、土壌にもKとR b、またC aとS rの間に相関関係がおおむね成り立つことが明らかになった。花こう岩、ビーチサンド、須恵器、火山岩のみ

図28-1 青森県下遺跡出土火山灰のRb-Sr分布

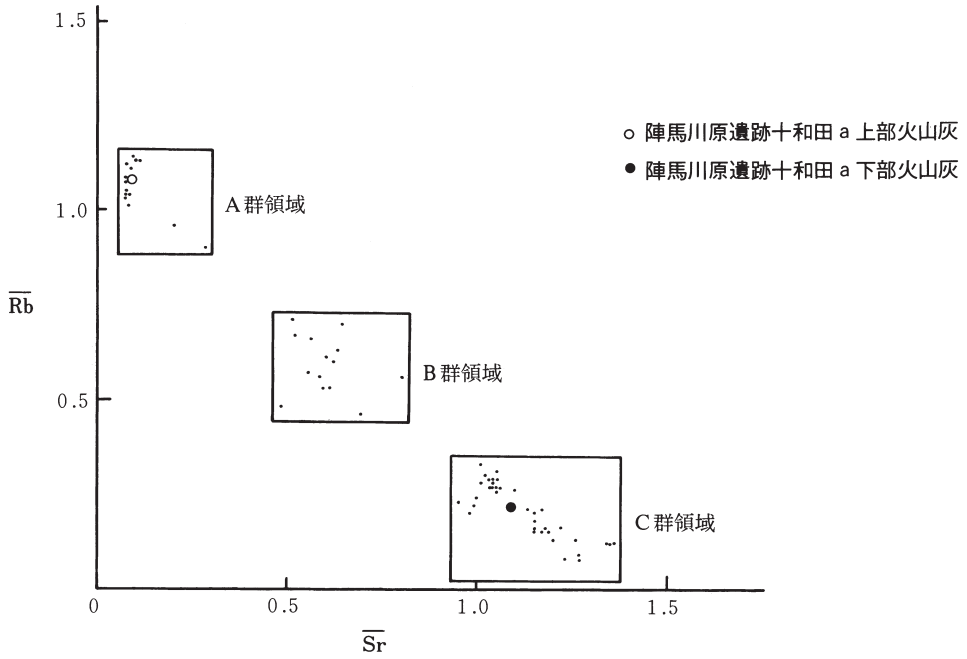


図28-2 青森県下遺跡出土火山灰のFe量

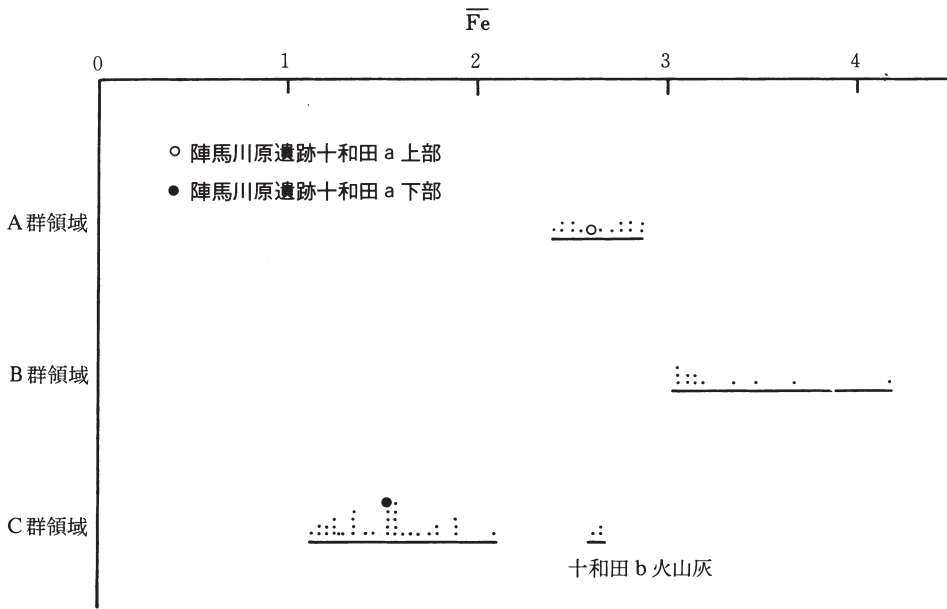


図28 青森県下遺跡出土火山灰のRb-Sr分布とFe量

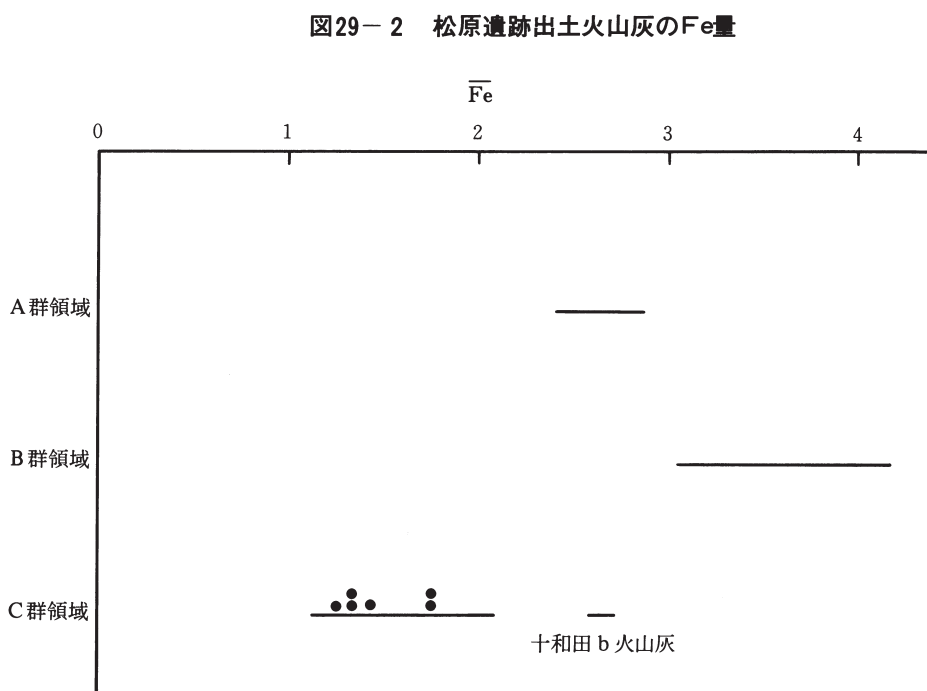
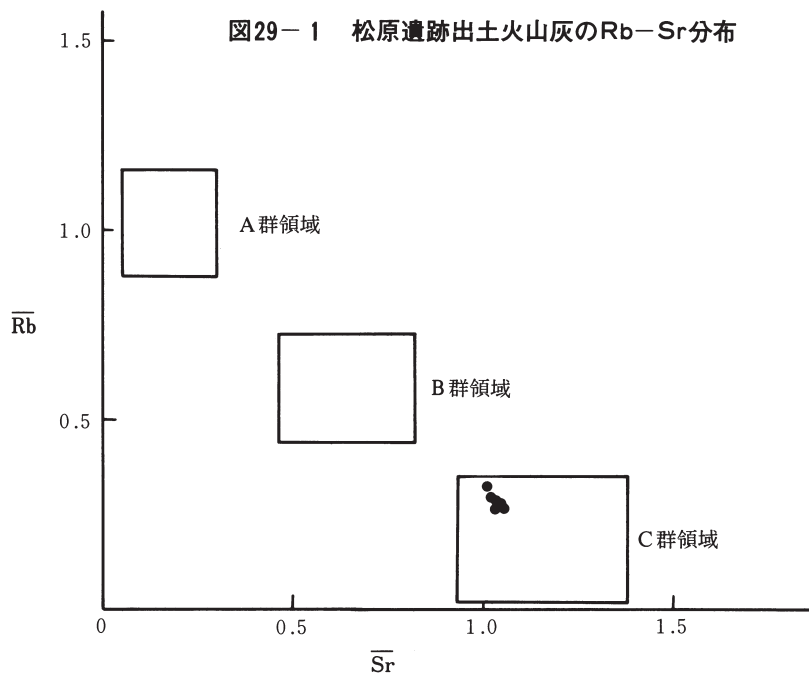


図29 松原遺跡出土火山灰のRb-Sr分布とFe量

図30-1 青森県下遺跡土壌のRb-Sr分布

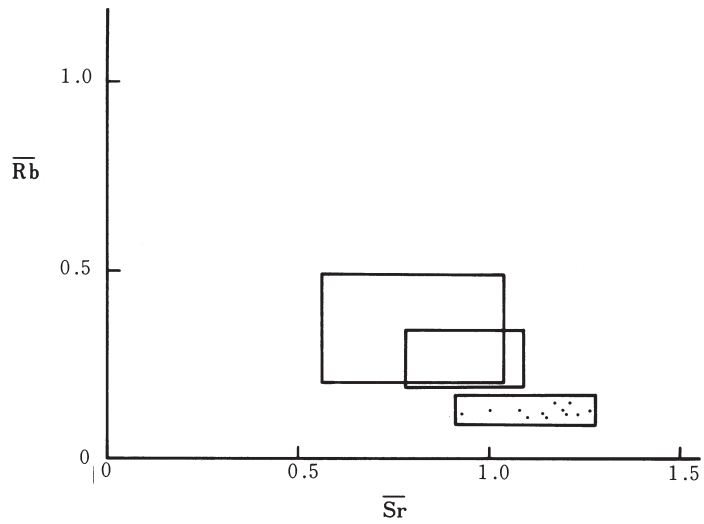


図30-2 青森県下遺跡土壌のK-Rb相関

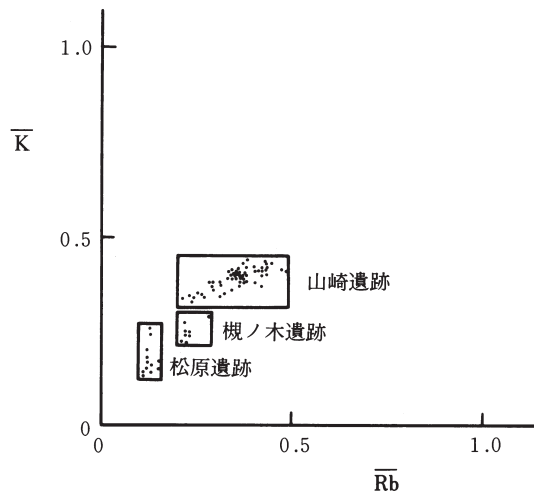


図30 青森県下遺跡土壌のRb-Sr分布とK-Rb相関

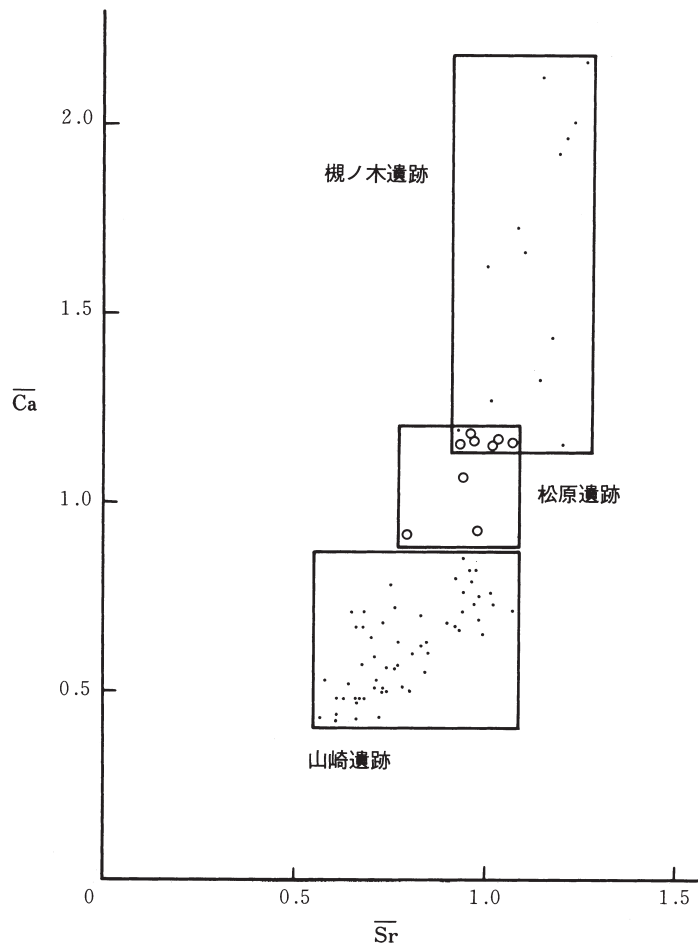


図31 青森県下遺跡土壌のCa-Sr相関

ならず、土壌にもこれらの元素の間には正相関があることは地球化学的に興味深いことである。

(2) 樹種同定

松原遺跡の炭化木

嶋倉 巳三郎

出土地 青森県上北郡上北町松原

時 代

試 料

1 (竪穴住居跡、床面直上)

樹種 ヤチダモ *Fraxinus mandshurica* Rupr.var.japonica Maxim .

2 (竪穴住居跡、2片あり)

樹種 (1) コナラ *Quercus serrata* Murray

(2) キハダ *Phellodendron amurense* Ruprecht

3 (2号土壌3層)

樹種 クルミ *Juglans* sp.の種皮

4 (2号土壌7層)

樹種 コナラ *Quercus serrata* Murray.

(3) 放射性炭素年代測定結果報告書

1982年10月30日

青森県埋蔵文化財
調査センター殿

学習院大学 木越 邦彦

1982年1月14日受領致しました試料についての¹⁴C年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

なお、年代値の算出には¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5570年を使用しています。また、付記した誤差は線計数値の標準偏差にもとづいて算出した年数で、標準偏差 (one sigma) に相当する年代です。試料の線計数率と自然計数率の差が2以下のときは、3に相当する年代を下限とする年代値 (B.P.) のみを表示してあります。また、試料の線計数値と現在の標準炭素についての計数率との差が2以下のときには、Modernと表示し、¹⁴C%を付記してあります。

記

Code	試料	B.P.年代 (1950年よりの年数)
Gak - 10160	Charred walnuts from Matsubara	1970 ± 320
	Site . L - 3 . - 70cm	20B.C.
Gak - 10161	Charcoal from Matsubara Site .	1050 ± 100
	House No.1 - 60cm .	A.D.900



PL. 1 調査風景



PL. 2 豎穴住居跡確認面と完掘



住居跡カマド

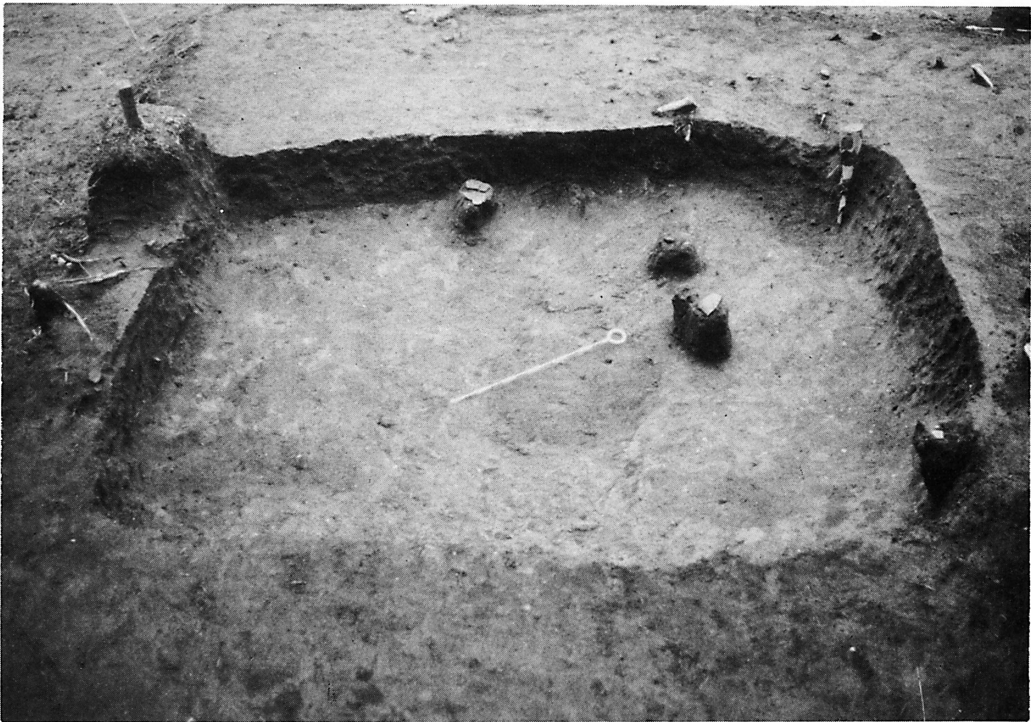


住居跡内ビット

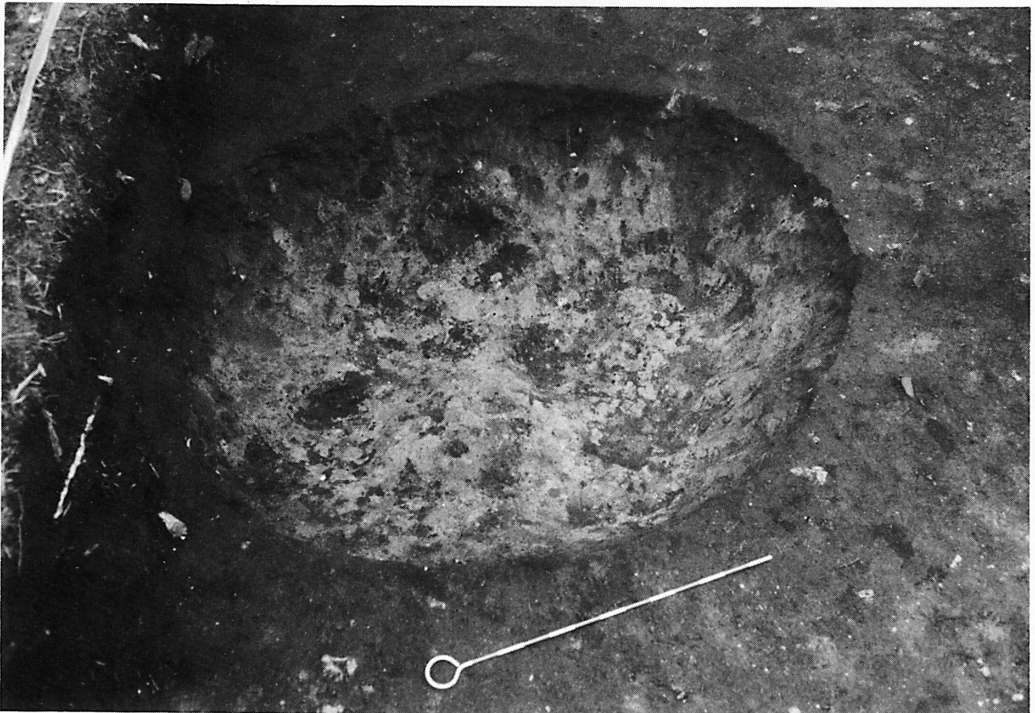


▲
住居跡周溝

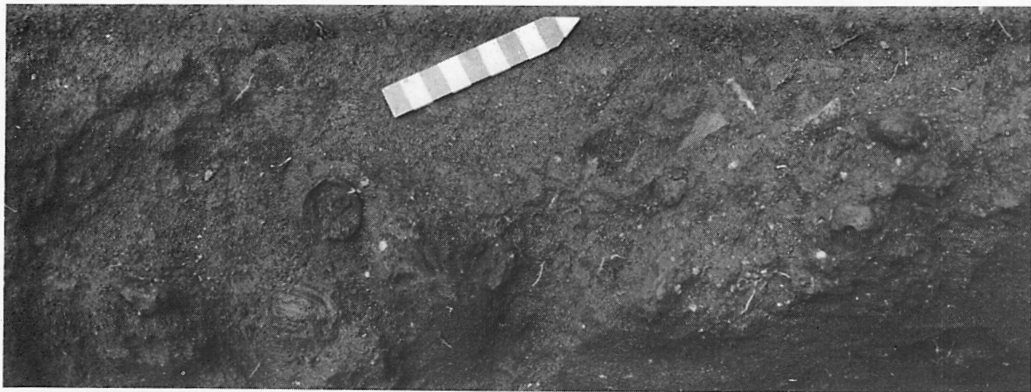
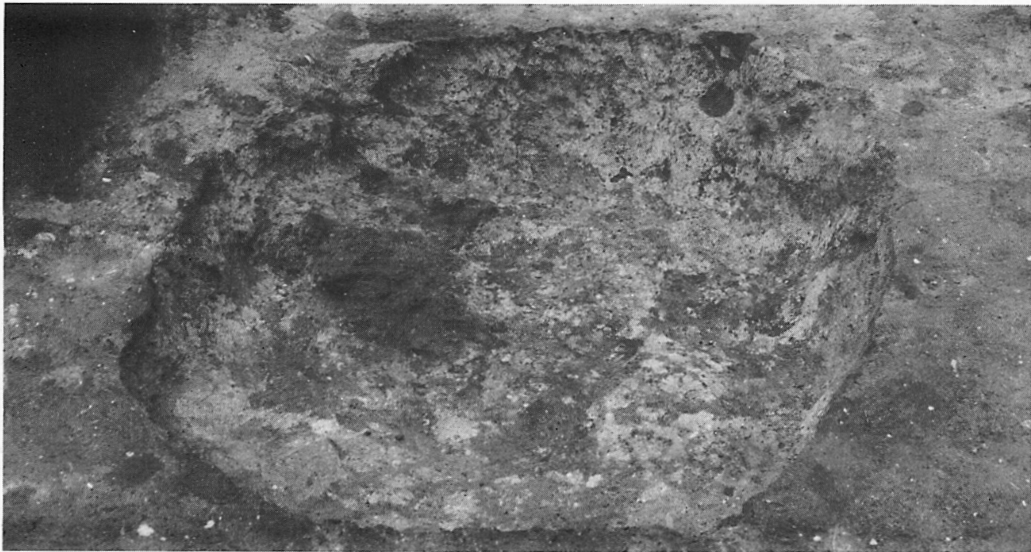
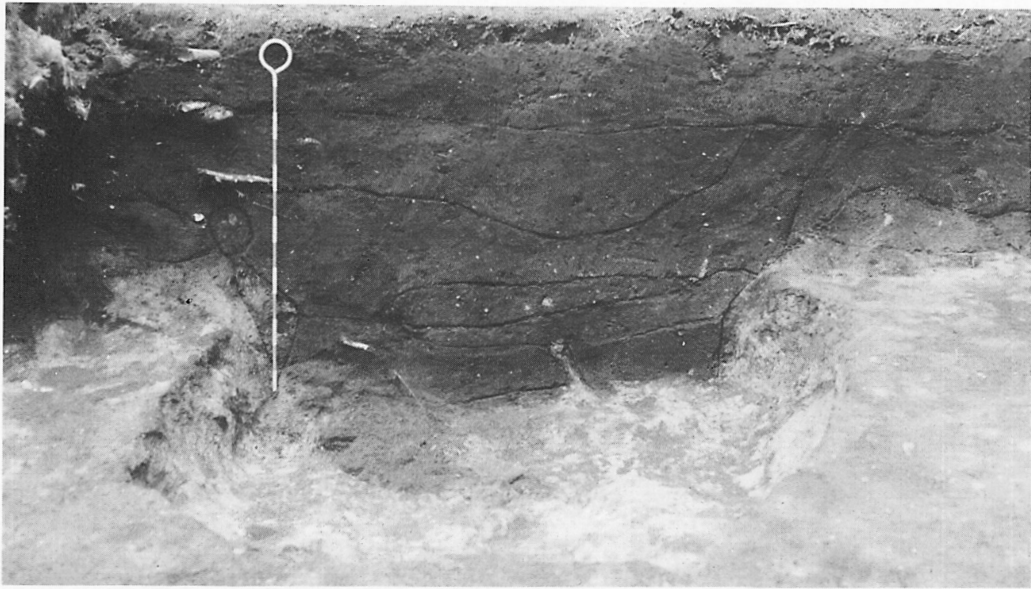
PL. 3 竪穴住居跡付属施設



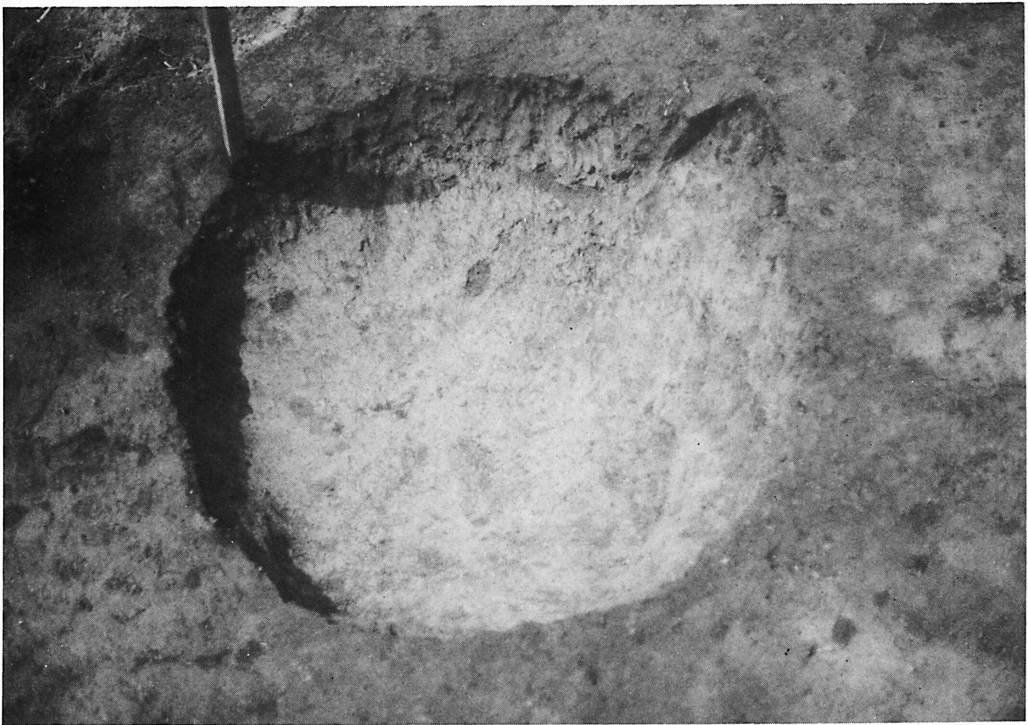
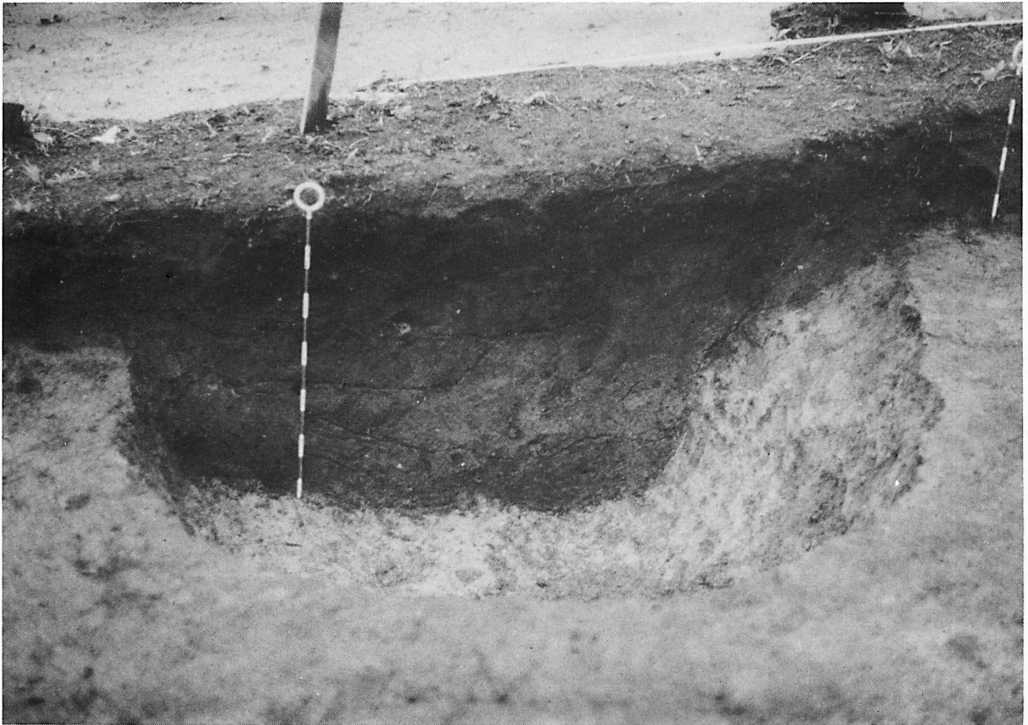
PL. 4 豎 穴 遺 構



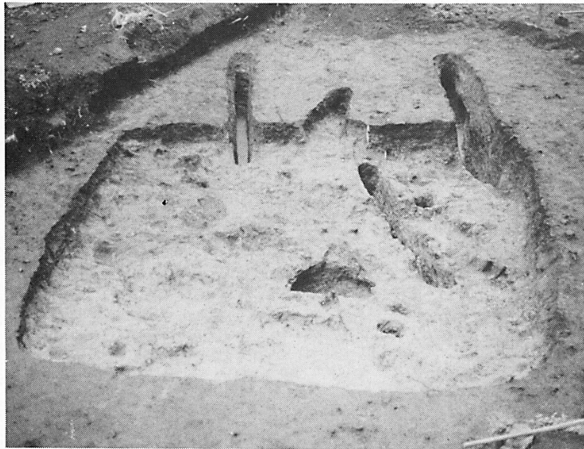
PL. 5 第1号土坑



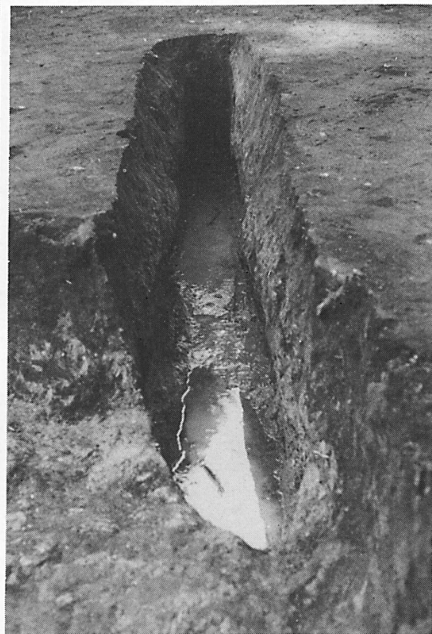
PL. 6 第2号土坑（上セクション、中完掘、下炭化物出土状況）



PL. 7 第3号土坑 (セクション、完掘)



◀第1・2・3号溝状ピットと住居址掘り方



▲第1号溝状ピット

◀第2号溝状ピット

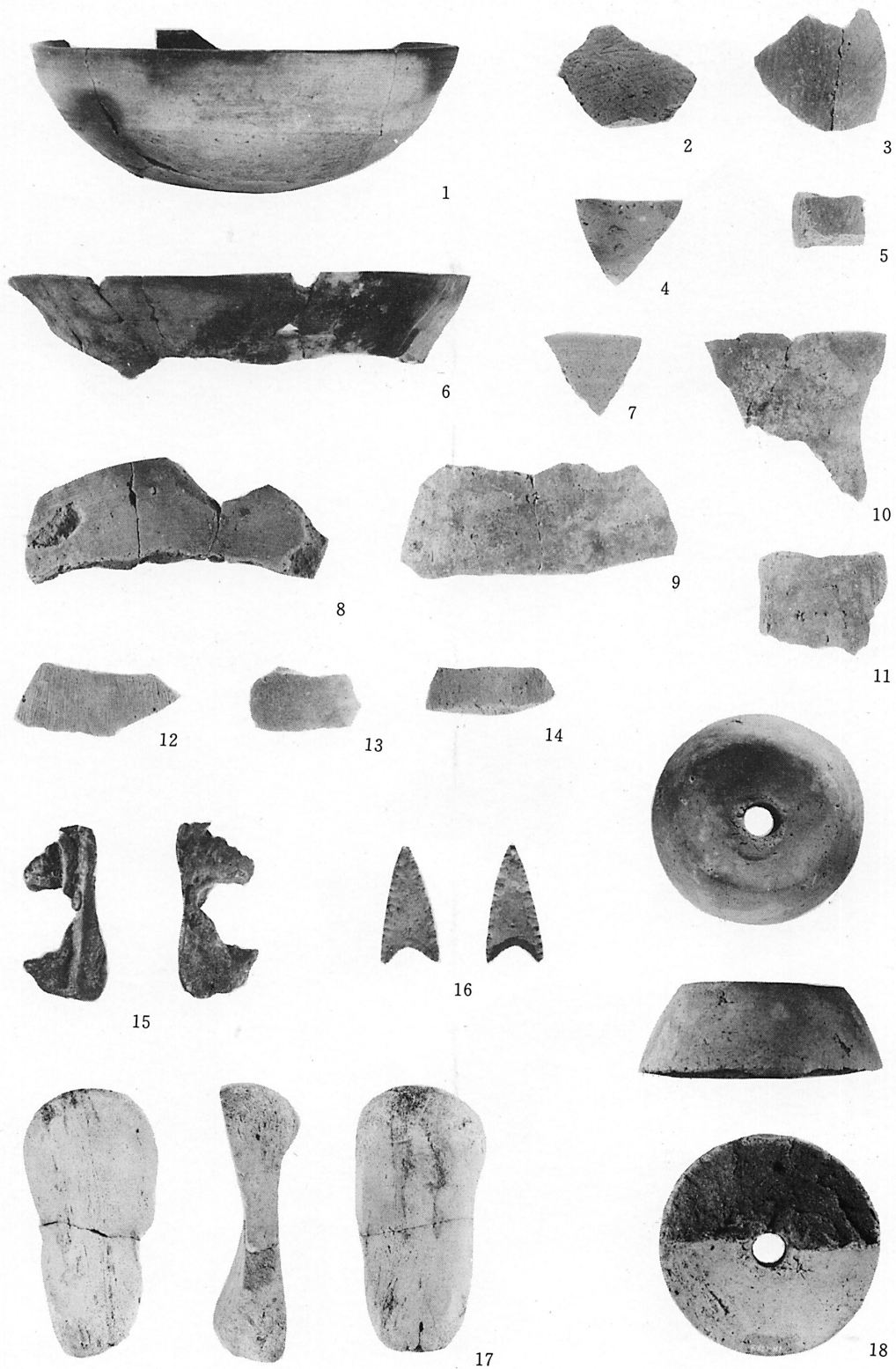


▲第3号溝状ピット

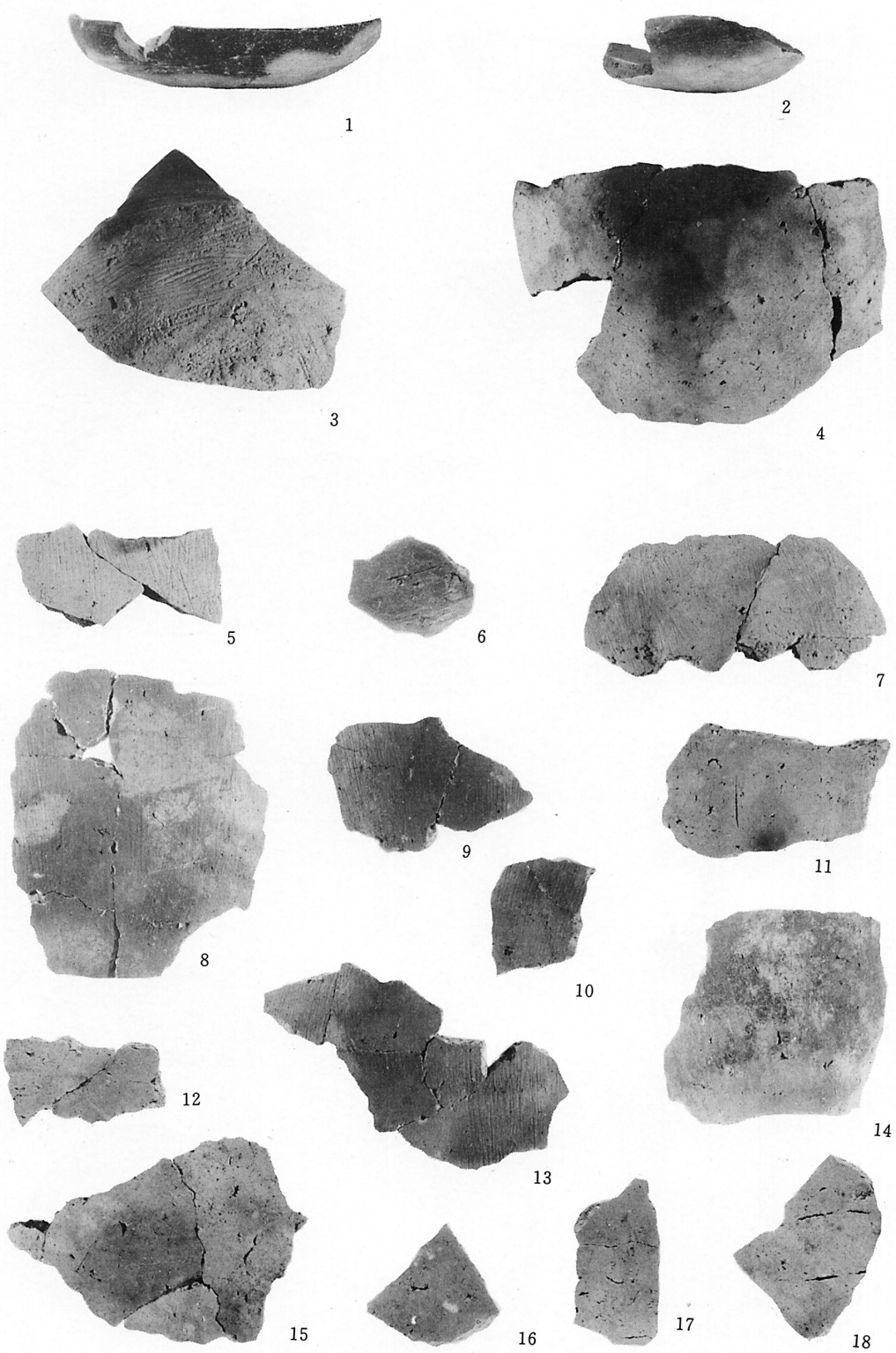


▲第4号溝状ピット

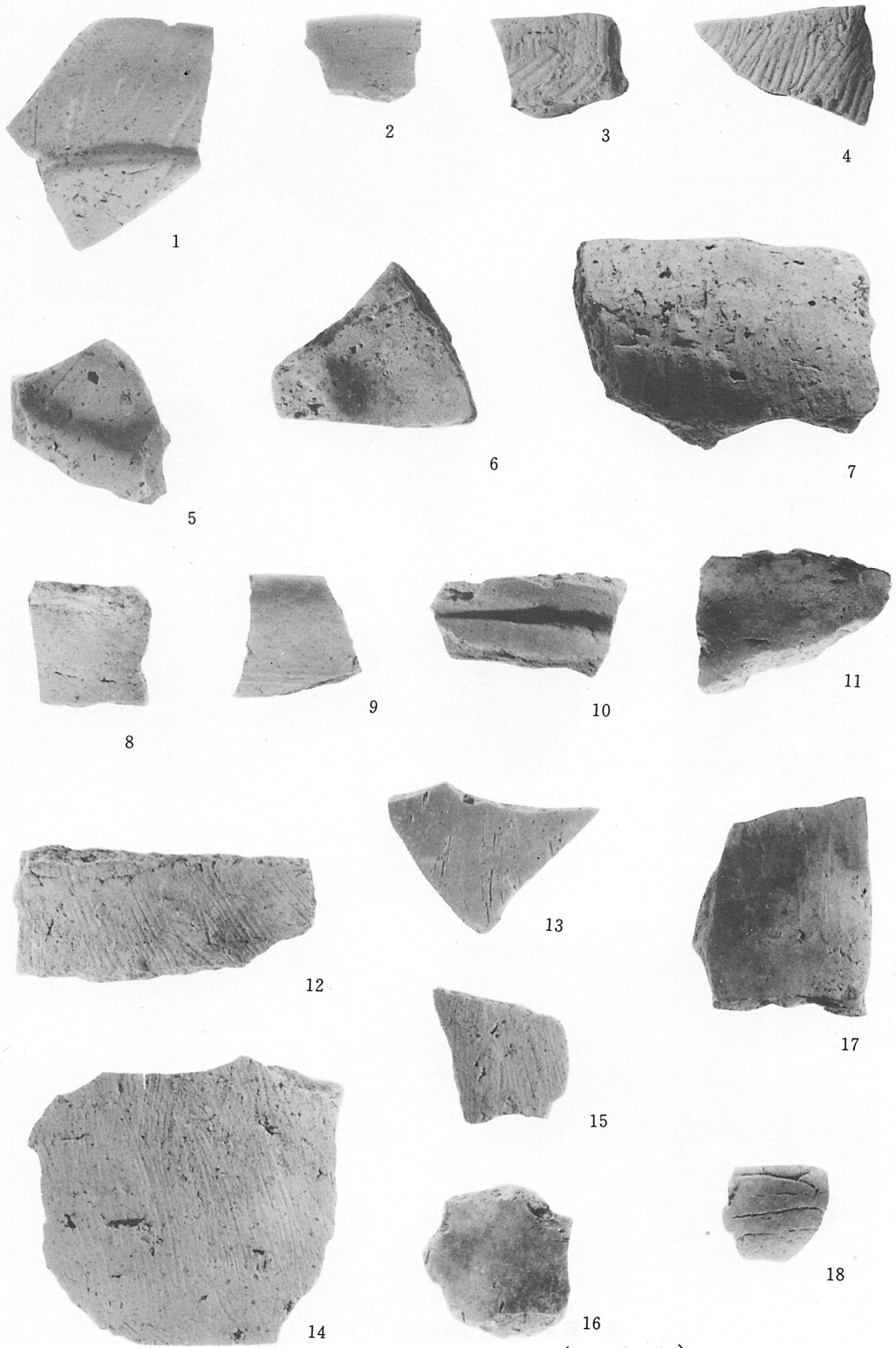
PL. 8 溝状ピット



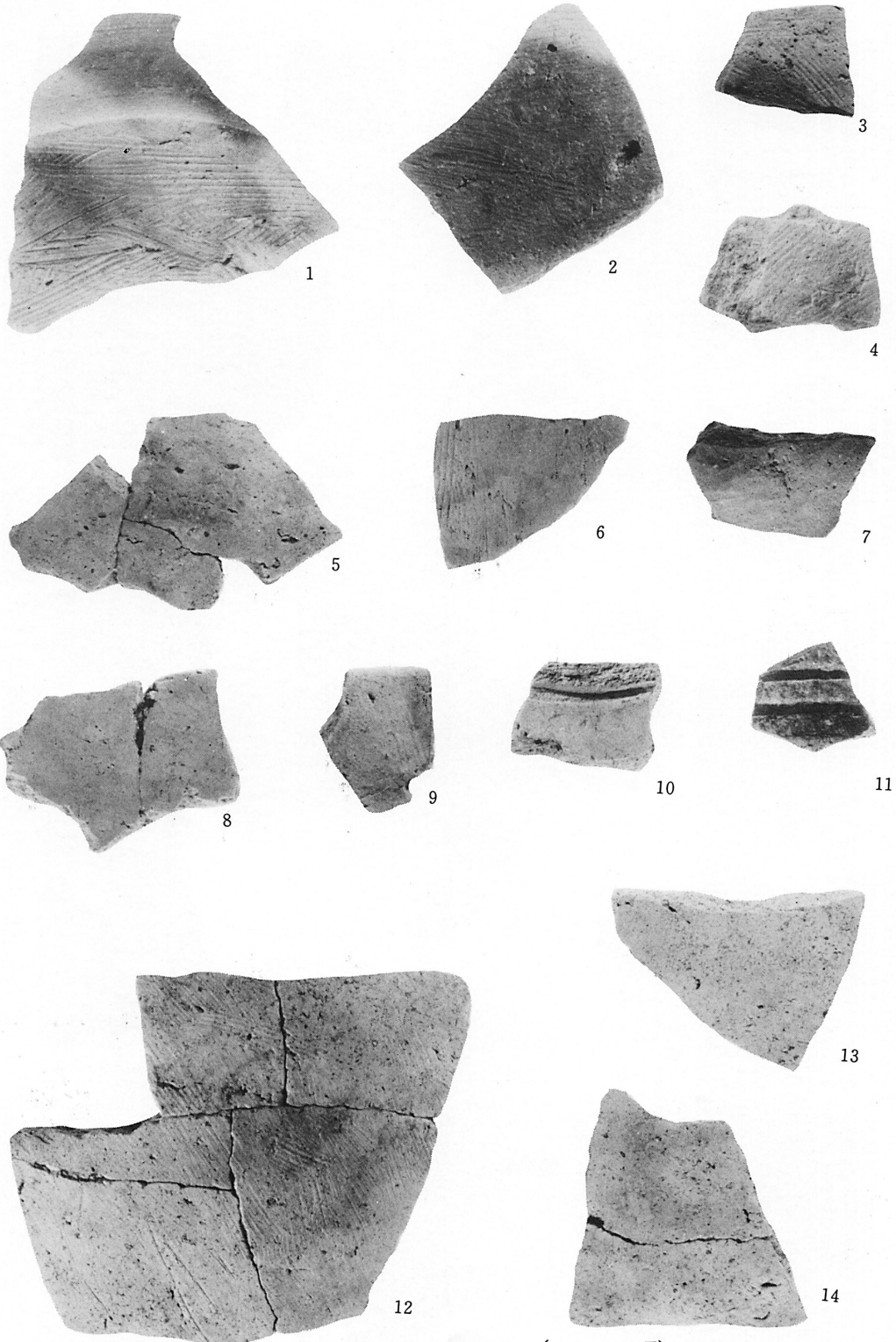
PL. 9 豎穴住居跡出土遺物 (1~5 坏 6~14 甕
16 石鏃 17 砥石 18 紡錘車)



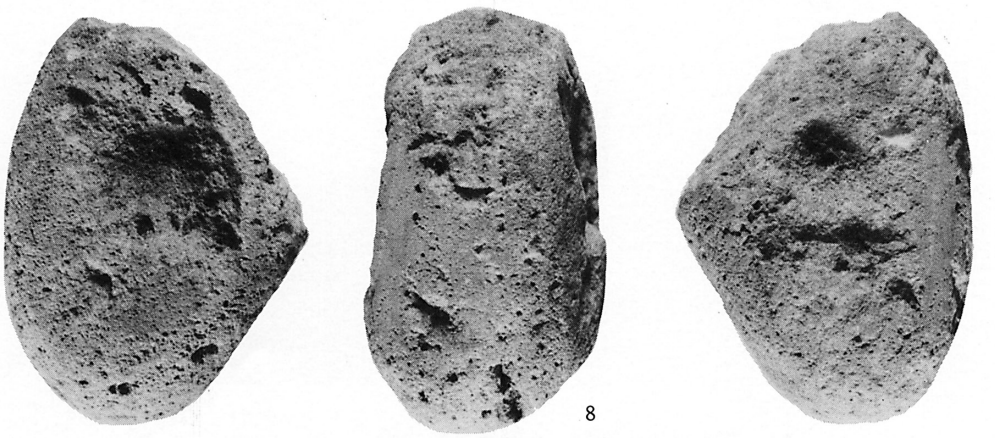
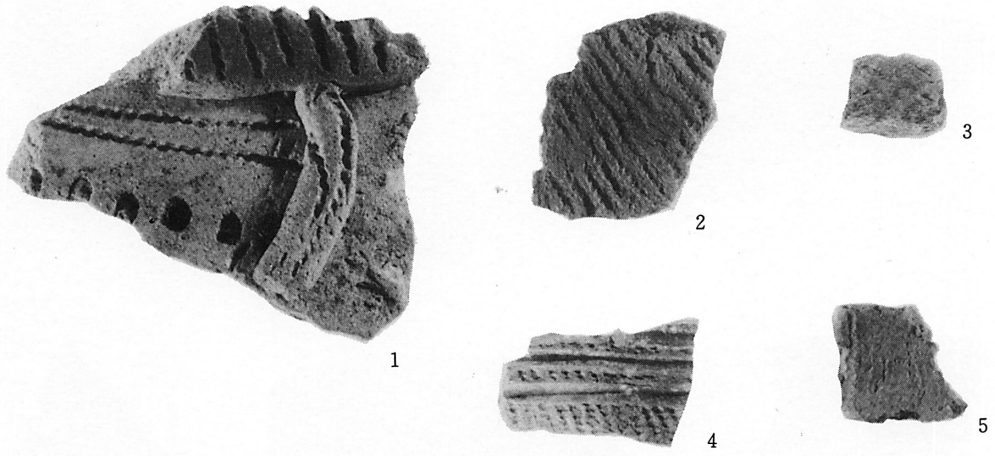
PL. 10 豎穴遺構出土遺物 (1~3坏 4甕)
 第1号土坑出土遺物 (5~6坏 7~18甕)



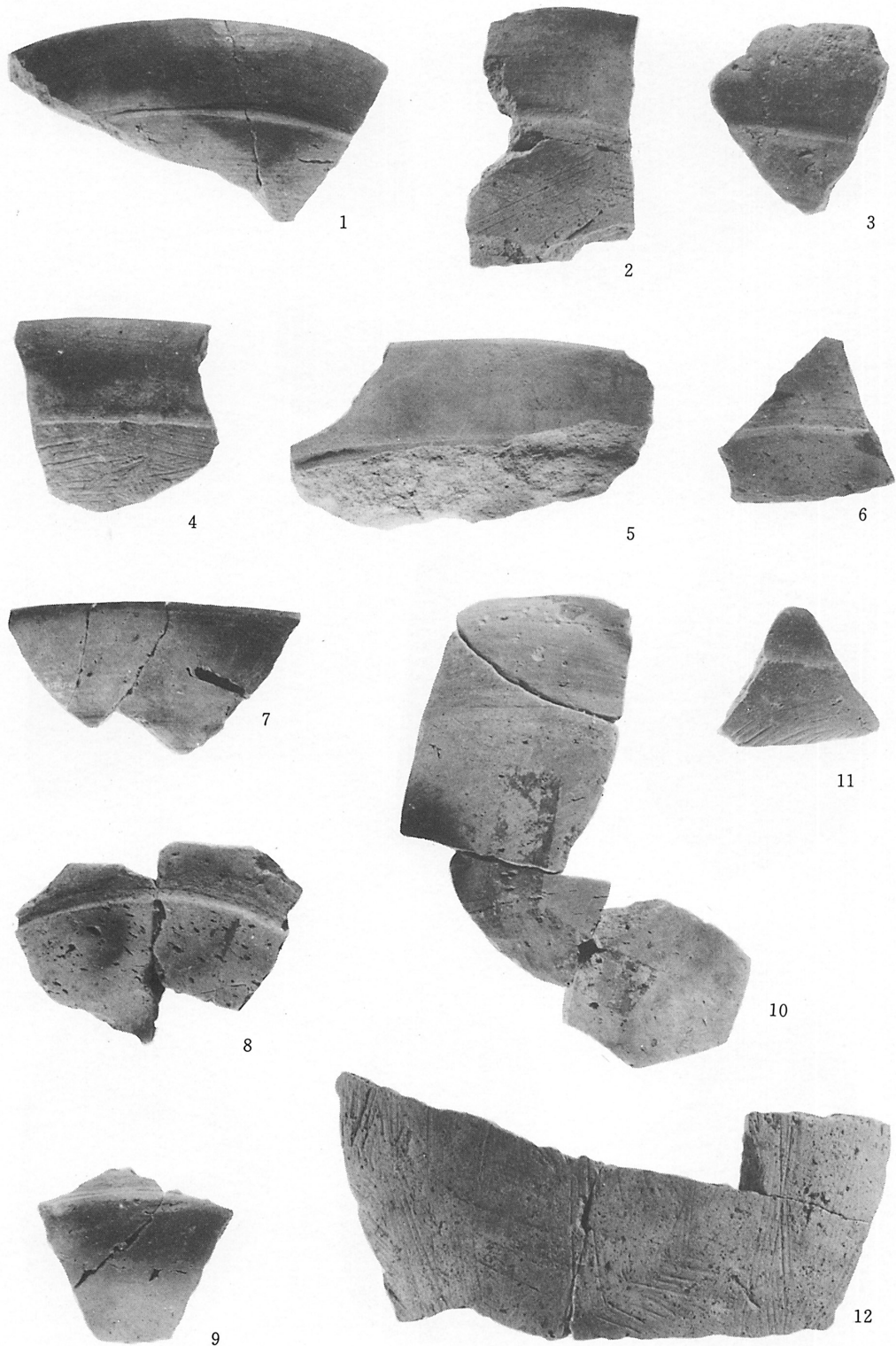
PL. 11 第2号土坑出土遗物 (1~6 坏 7~18 甗)



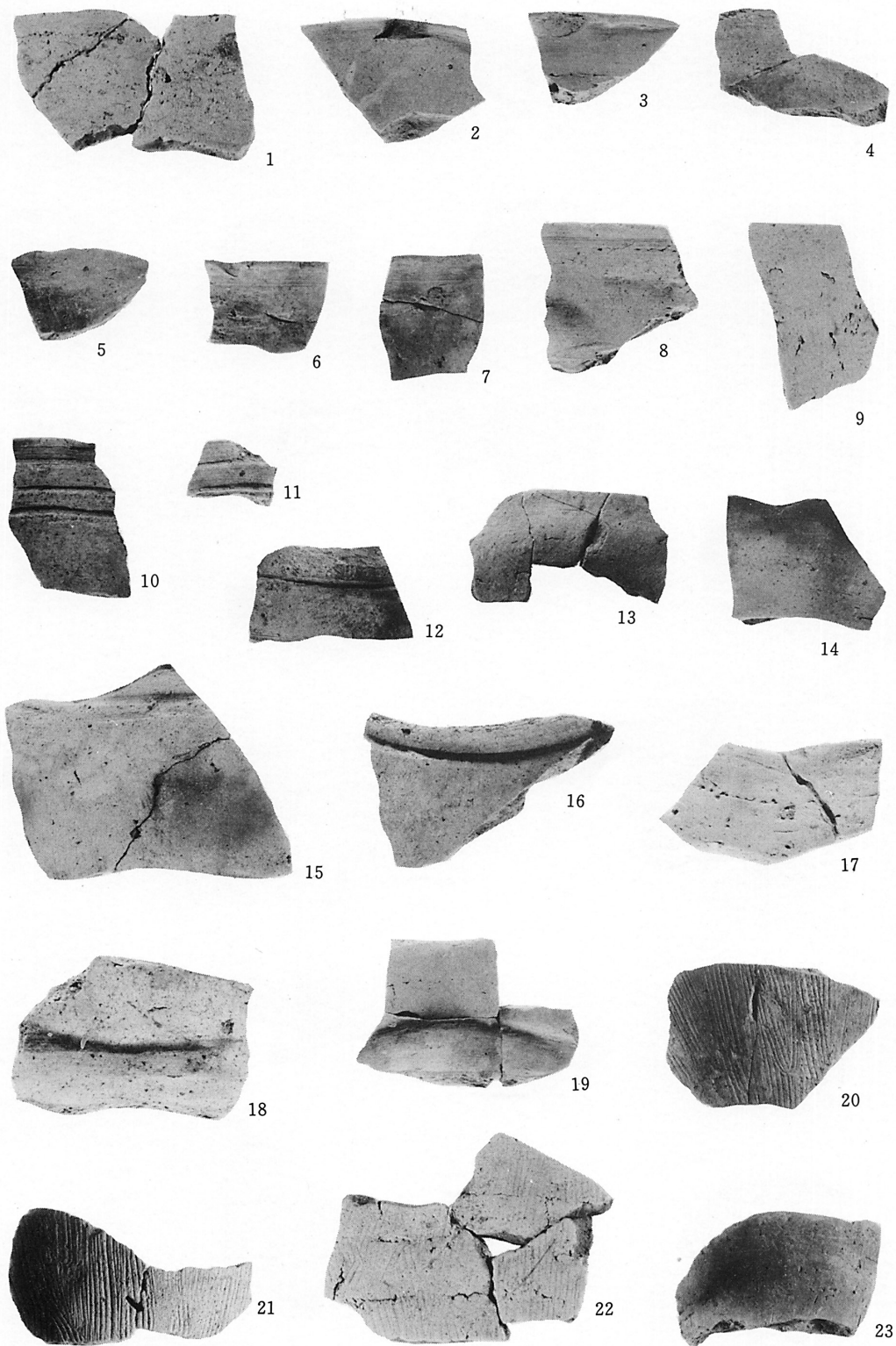
PL. 12 第3号土坑出土遺物 (1~7 坏)
 (8~14 甗)



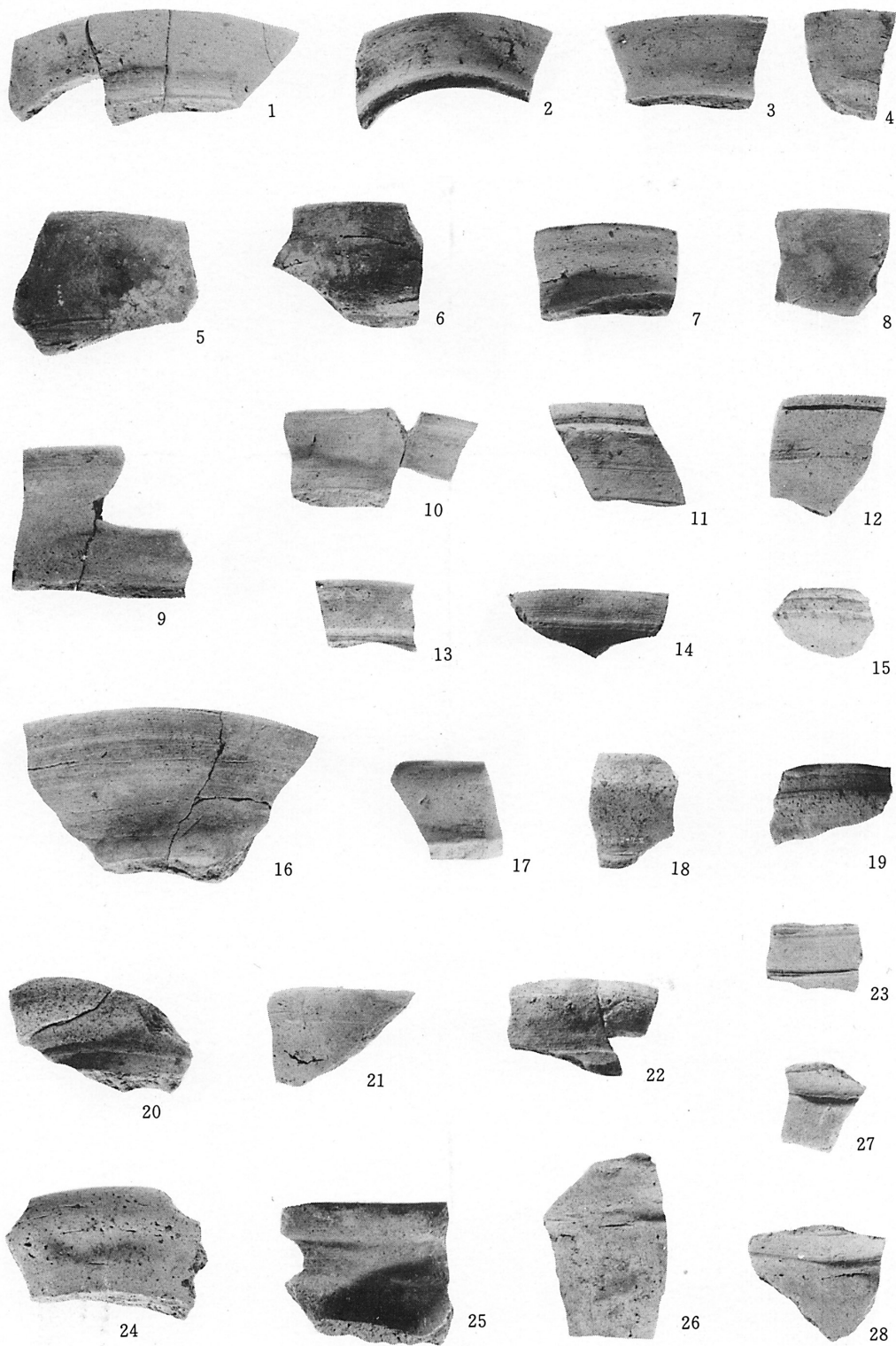
PL. 13 遺構外出土遺物 縄文土器と石器



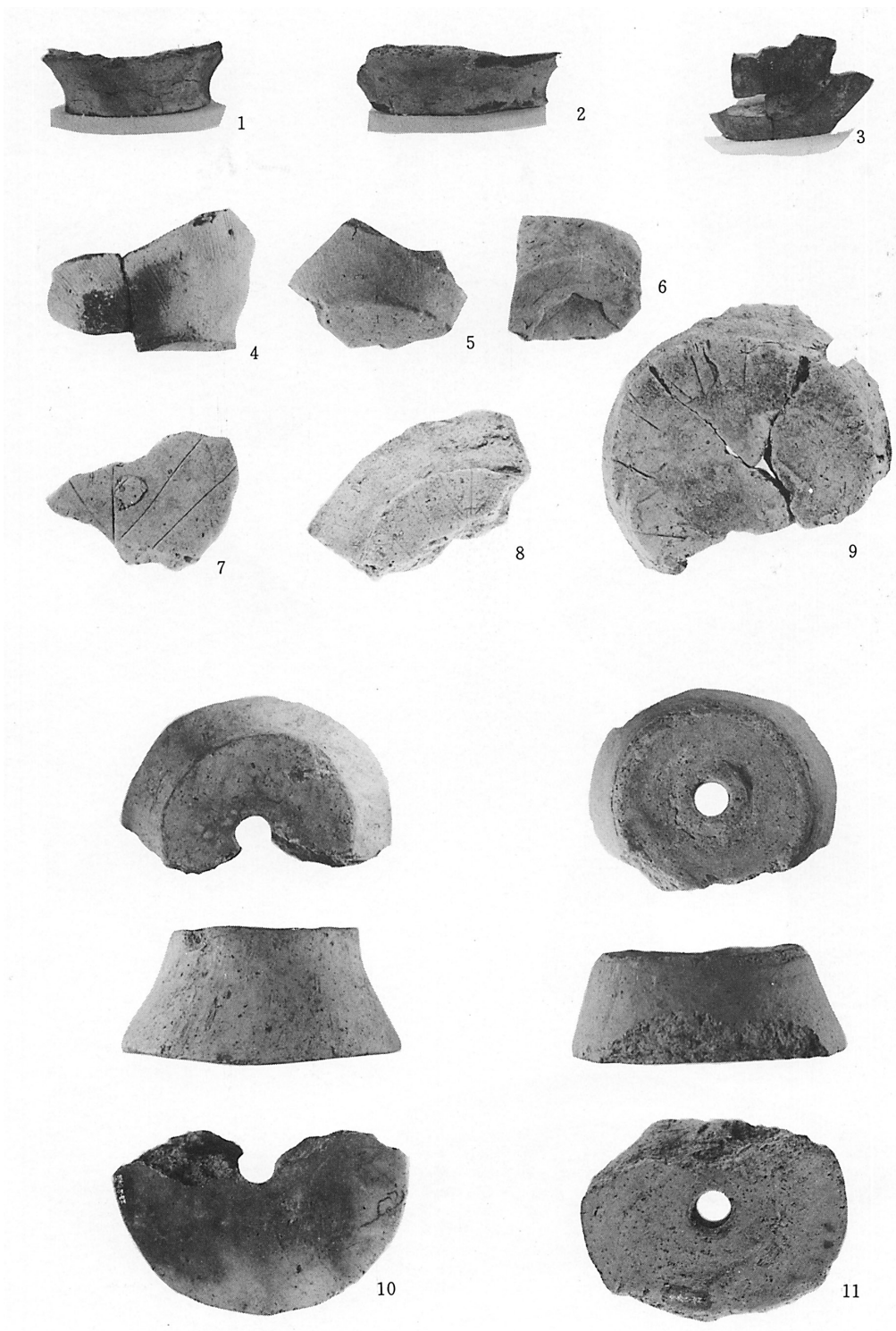
PL. 14 遺構外出土遺物 土師器 环形土器 (1~7、11 口縁・体部)
 (8~10、12 体・底部)



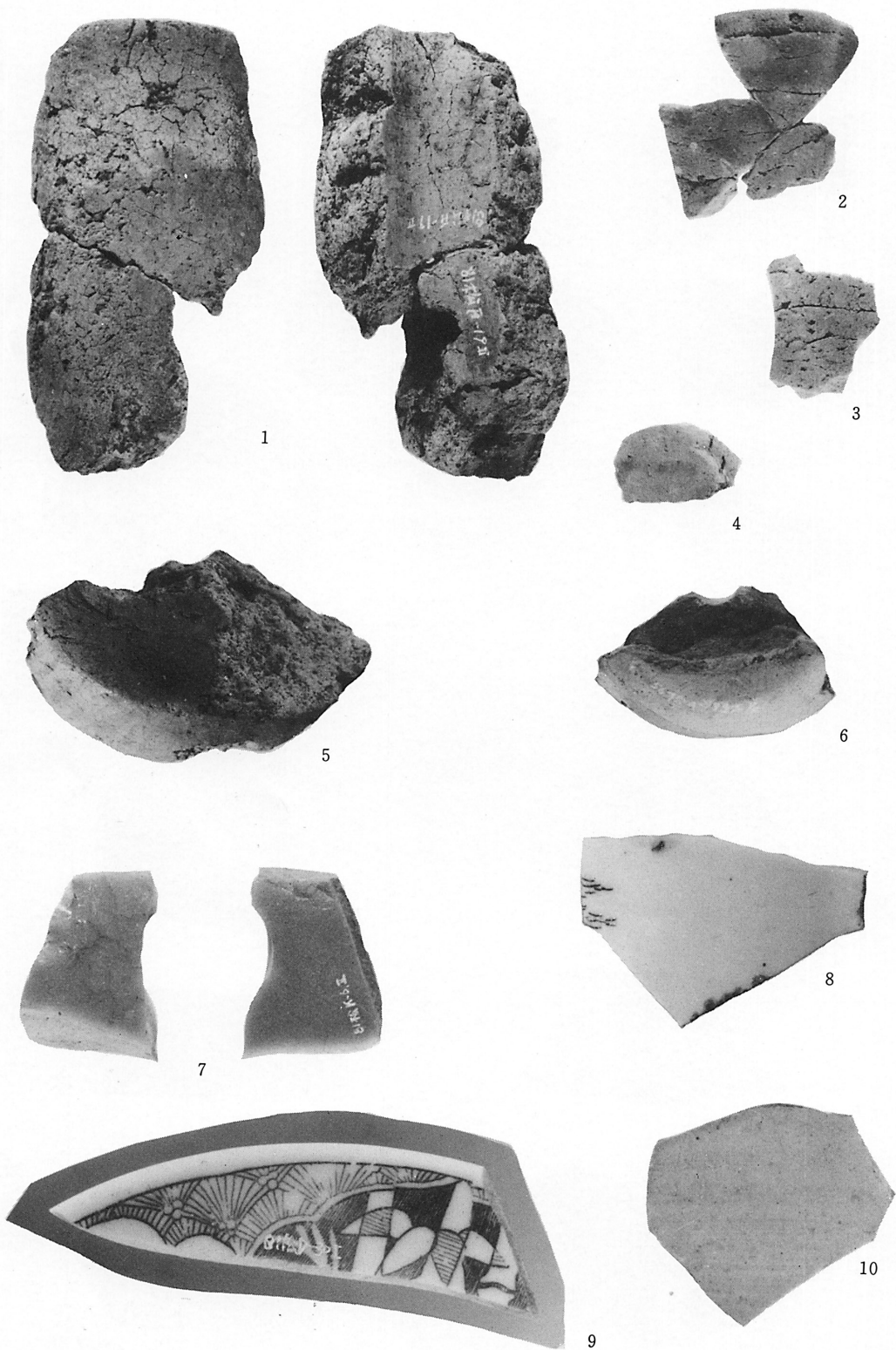
PL. 15 遺構外出土遺物 土師器甕形土器



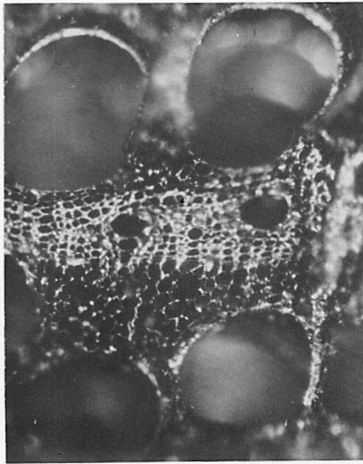
PL. 16 遺構外出土遺物 土師器甕形土器



PL. 17 遺構外出土遺物 土師器甕形土器と紡錘車



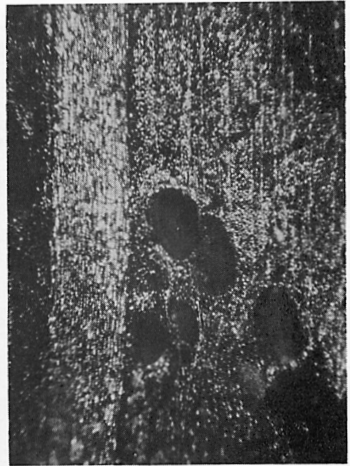
PL. 18 遺構外出土遺物 羽口、陶磁器 (1羽口 2~4ミニチュア土器
5、6紡錘車 7青磁 8~10陶磁器)



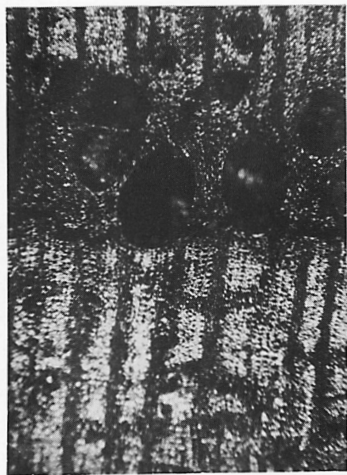
1. ヤチダモ (試料1) 木口×50



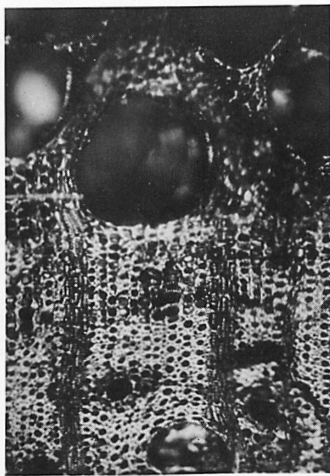
2. ヤチダモ (試料1) 板目×50



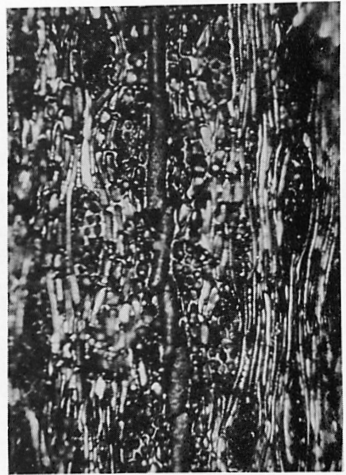
3. コナラ (試料2) 木口×25



4. キハダ (試料2) 木口×25



5. キハダ (試料2) 木口×50



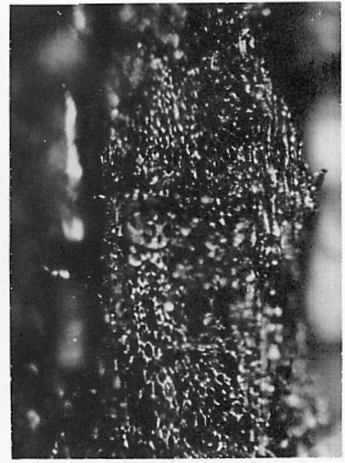
6. キハダ (試料2) 板目×50



7. クルミ種皮 (試料3) ×50



8. コナラ (試料4) 木口×25



9. コナラ (試料4) 板目×50

PL. 19 松原遺跡の炭化木

陣馬川原遺跡・槻ノ木遺跡



陣馬川原遺跡近景

陣馬川原遺跡、槻ノ木遺跡

1 遺跡の概要及び周辺の遺跡

遺跡の概要及び周辺の遺跡

陣馬川原、槻ノ木遺跡は野辺地町馬門地区に所在し、東北本線野辺地駅の北西約2.5kmと、3.5km内地点に位置している。



図1 遺跡の位置

遺跡の後背には烏帽子岳（719m）西には鳴山（約316m）があり、近くを土場川、二本松川が流れ、烏帽子岳の裾野が海岸線に向かって伸びている。陣馬川原遺跡は標高約33m、槻ノ木遺跡は約43mで舌状の台地上にある。両遺跡は直線にして約1km離れた地点にある。

両遺跡の周辺は、西側に縄文時代前期、中期の遺跡が分布し、東側の横浜町へかけては縄文時代後期、晩期の遺跡が比較的多く分布している。これらの遺跡は地形的には海岸線の標高10～15mほどの海岸段丘上に位置するものと、後背から伸びる段丘上に位置するものがある。これらの遺跡のうち、寺ノ沢遺跡（「蒐集考古学資料」1980、角鹿扇三、渡辺兼庸）は円筒下層式土器の型式を考える上での貴重な資料である。また、平安時代の土師器を伴う遺跡も9遺跡確認している。昭和55年に青森県教育委員会文化課で「明前遺跡」を発掘した際、土師器を伴った住居跡を検出している。住居跡については「形態上からも従来県内で検出されている平安時代の住居跡と同様である。しかし、土師器の様相からすれば、古代後半のものと考えられる」としている。同調査時に、さらに館の空堀も3本検出しているが、出土遺物もなく築城年代は明らかにされていない。

このように野辺地町には、縄文時代の遺跡をはじめ、館跡、野辺地城、野辺地港など近世に至るまでの貴重な遺跡、史蹟等がなお多く存在している。

（一町田 工）

表1 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	時代	出土品	備考
1	目ノ越遺跡	先土器時代	石刃	砂丘のため位置不明
2	目ノ越I号遺跡	平安時代	土師器	
3	有戸浜遺跡	平安時代	土師器	竪穴住居跡群を有する。
4	蟹田遺跡	縄文時代(前期) 縄平安時代	縄文土器、土師器、石器	
5	向田遺跡	縄文時代(後期)	縄文土器(壺形)、石器	一部消滅
6	明前館遺跡	平安時代	土師器、須恵器	館跡、竪穴住居跡群を有する。
7	明前I号遺跡	縄文時代(晩期) 縄平安時代	縄文土器、土師器、砥石	
8	太田新田遺跡	縄文時代(後期)	縄文土器	
9	鳥井平遺跡	縄文時代(晩期)	土偶、石器	開田のため消滅
10	千草橋遺跡	縄文時代(後期) 縄平安時代	縄文土器、土師器	竪穴住居跡を有する。
11	大谷地東沢遺跡	縄文時代(後期)	縄文土器	遺跡の中心地が開田のため消滅
12	大月平遺跡	平安時代	土師器	竪穴住居跡を有する。
13	洞内遺跡	縄文時代(後期)	縄文土器、石器	
14	雑吉沢遺跡	縄文時代(後期)	鐙形土製品	
15	長者久保遺跡	先土器時代、縄文時代(早期)	石刃、丸のみ、縄文土器	

16	寺ノ沢遺跡	縄文時代(前期、中期)	縄文土器(円筒深鉢) 石器	遺物包含層を有する。
17	昼場遺跡	平安時代	土師器	
18	下町遺跡	縄文時代(晩期)	縄文土器	
19	浜掛遺跡	縄文時代(後期、晩期)	縄文土器	
20	笹館遺跡	縄文時代(後期、晩期) 平安時代	縄文土器、土師器	消滅
21	観音林遺跡	縄文時代(後期、晩期)	縄文土器、石器	
22	切明遺跡	縄文時代(中期)	縄文土器	
23	上与田川遺跡	縄文時代(後期)	高杯土器、鐸形土製品	
24	松の木遺跡	縄文時代(後期)	縄文土器、石器	
25	御手洗瀬遺跡	平安時代	土師器、須恵器	V字型竪穴、竪穴住居跡を有する。
26	二十平遺跡	平安時代	土師器、須恵器	
27	陣馬川原遺跡	縄文時代(晩期)	壺形土器、注口土器 石剣	
28	温泉通り遺跡	縄文時代(晩期) 平安時代	縄文土器、土師器	
29	馬門遍照寺遺跡	縄文時代(前期、中期)	縄文土器、長大石斧	
30	柴崎遺跡	縄文時代(前期、中期)	縄文土器、石器	宅地化のため消滅の可能性あり。
31	四ツ森遺跡	縄文時代(前期、中期)	小形深鉢土器、石器	宅地化のため消滅の可能性あり。
32	提沢遺跡	縄文時代(前期、中期)	縄文土器	
33	馬門榎ノ木遺跡	縄文時代(前期～晩期) 弥生時代	深鉢形土器、石器	縄文時代前期から中期末までの遺物包含層を有する。



図2 遺跡分布図

2 遺跡周辺の自然的環境

松山 力

(1) 地形

槻ノ木・陣馬川原両遺跡は、野辺地町中心街の西方にあり、背後に烏帽子岳山塊（山頂は両遺跡の南西方5.5km、その標高719.6m）を負い、前面に野辺地湾を望む中位段丘上に位置している。

八甲田連峰の北々東方、奥羽山脈北端部の一角を占める烏帽子岳山塊の山麓線は、一部を除き100～120mの等高線に沿って、野辺地町中心街の南西方5km付近からは北々西方へ向かってのび、馬門温泉付近で北西方に向きをかえて、平内町清水川の南方に達している。この区間の山麓線と、野辺地町中心部付近から向きをかえて北西にのびる野辺地湾の海岸線との間は、全体としては山麓線から海岸に向かってゆるく傾斜する丘陵性の段丘群で占められている。この段丘群は、烏帽子岳山塊や段丘群内に谷頭をもつ、多数の中小の河谷によって寸断され、そのために河谷ののびる方向と交錯する方向に、波打つように起伏する波状丘陵地となっている。

全体的にみれば海岸線に向かってゆるく傾斜する段丘群は、その途中に存在するいくつかのやや急な傾斜部によって、図3に示すような諸段丘に区分できる。

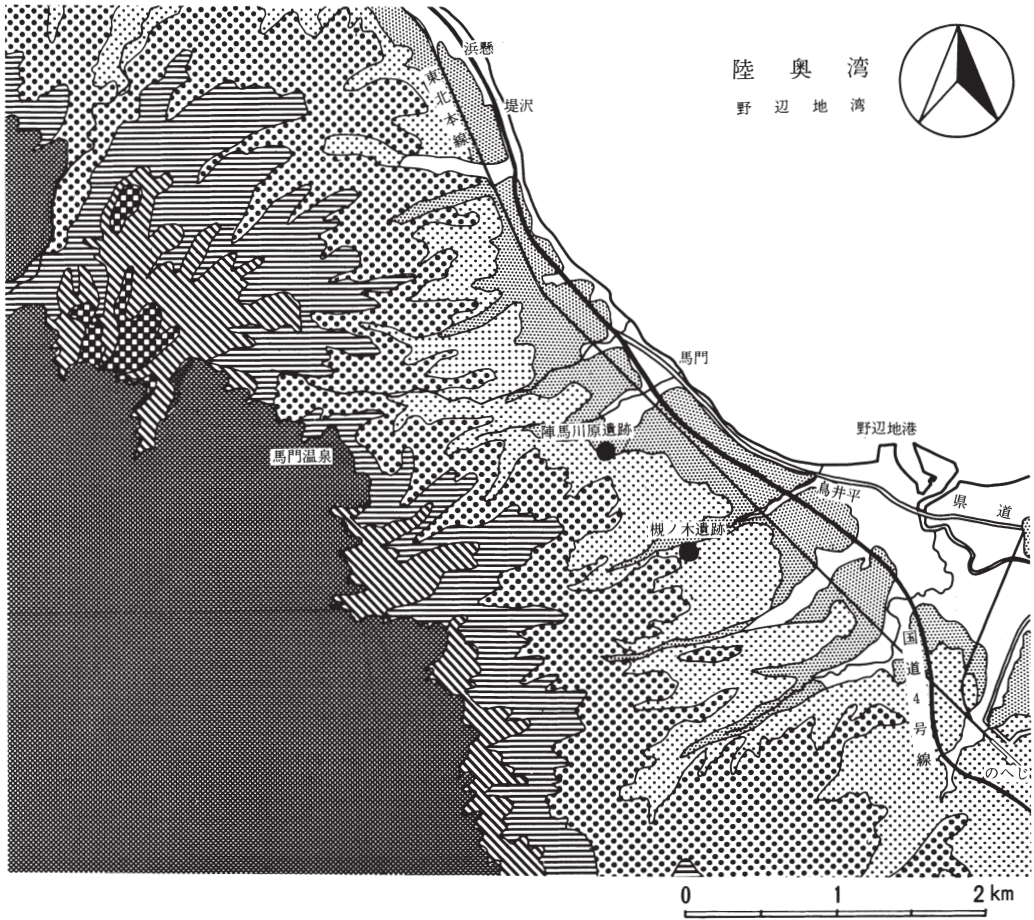
大別すれば、高い方から最高位段丘（吹越烏帽子段丘群 - 中川久夫、1968）高位段丘、中位段丘、低位段丘（沖積段丘）の4群である。

吹越烏帽子段丘群は、模式地の吹越烏帽子岳南麓では2段に分かれ、それぞれ210～240m、140～200mの高さをもつ（青森県、1972）が、これに含まれる本地域周辺の最高位段丘は130～160mと低い。本地域周辺では、最高位段丘は、平内町狩場沢の浜懸南西方に小規模に分布するにすぎない。

高位段丘は3つに区分できる。仮に上位から面、面、面と呼ぶことにする。そのうち面は、100～130mの高度をもち、頂部の高度は110～120m以上である。面は、最高位段丘と同様、他の段丘に比べて開析がすすんでいるので、他の下位の段丘に比べて平坦面に乏しく傾斜も相対的に大きい。比較的に傾斜が小さく平坦面に近い面が残されているのは、浜懸南西方の、最高位段丘に続く地域と、野辺地町鳥井平西方の限られた地域で、他は図3ではこれに含められていても、実際にはほとんど開析されてしまっている。

高位段丘の面は、70～100mの高度にあって、そのうちの一部に、かなり傾斜のゆるい平坦面が認められるものの、全体としては緩傾斜の波状丘陵地となっている。しかし、最高位段丘及び上位の面にくらべれば幅も広く、全域に連続して分布する。

高位段丘の面は、ほぼ高度40mから70mの間にあり、特に50m以上の部分に緩傾斜で波状ながら平坦面が残されている。特に、野辺地町中心街の南西方の、県畜産試験場周辺の平坦面



(凡 例)

最高位段丘	130~ 160m	
高位段丘	I面 100~ 130m	
	II面 70~ 100m	
	III面 40~ 70m	
中位段丘	I面 20~ 40m	
	II面 10~ 20m	
沖積面		
山地		
川		
鉄道		
主要道路		

図3 地形区分図

は広く、槻ノ木遺跡背後のそれも比較的に広い。なお、面は従来口広平段丘と呼ばれてきたもので、八戸周辺の天狗袋段丘下位面（野場段丘）に相当する。

中位段丘は2つに区分でき、上位を面、下位を面と呼ぶことにする。面は20～40mの高度に含まれ、特に馬門付近から野辺地町中心街南西方にかけて、比較的広い平坦面をもち、高位段丘面より一層傾斜がゆるくなる。槻ノ木遺跡と陣馬川原遺跡は、この面上にある。面は、10～20mの高さで、もっとも平坦な段丘面をもち、河谷壁を除いて起伏もそれほど目立たず、上位の段丘群にくらべて、原面がよく残されている。中位段丘は、従来野辺地段丘と呼ばれてきたものであるが、南方の相当する高館段丘よりは低い。

沖積地は、野辺地町中心街付近では広いが、鳥井平付近から北西方の海岸では、きわめて幅の狭い砂浜となり、中小河川の出口付近でやや広くなり、そこから河川に沿った狭長な低地帯として分岐する程度である。

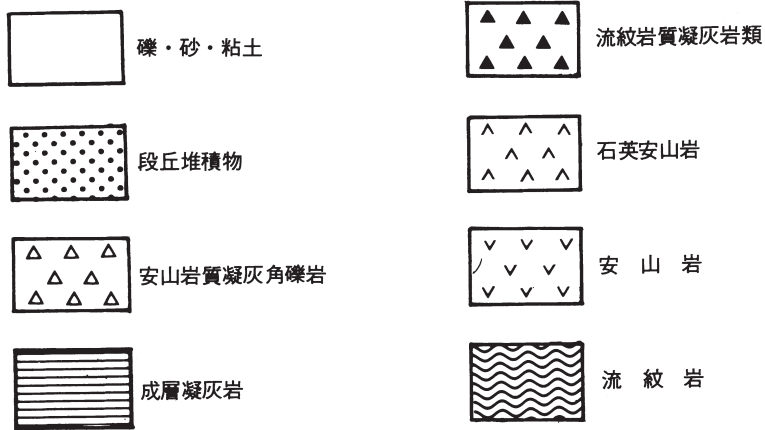
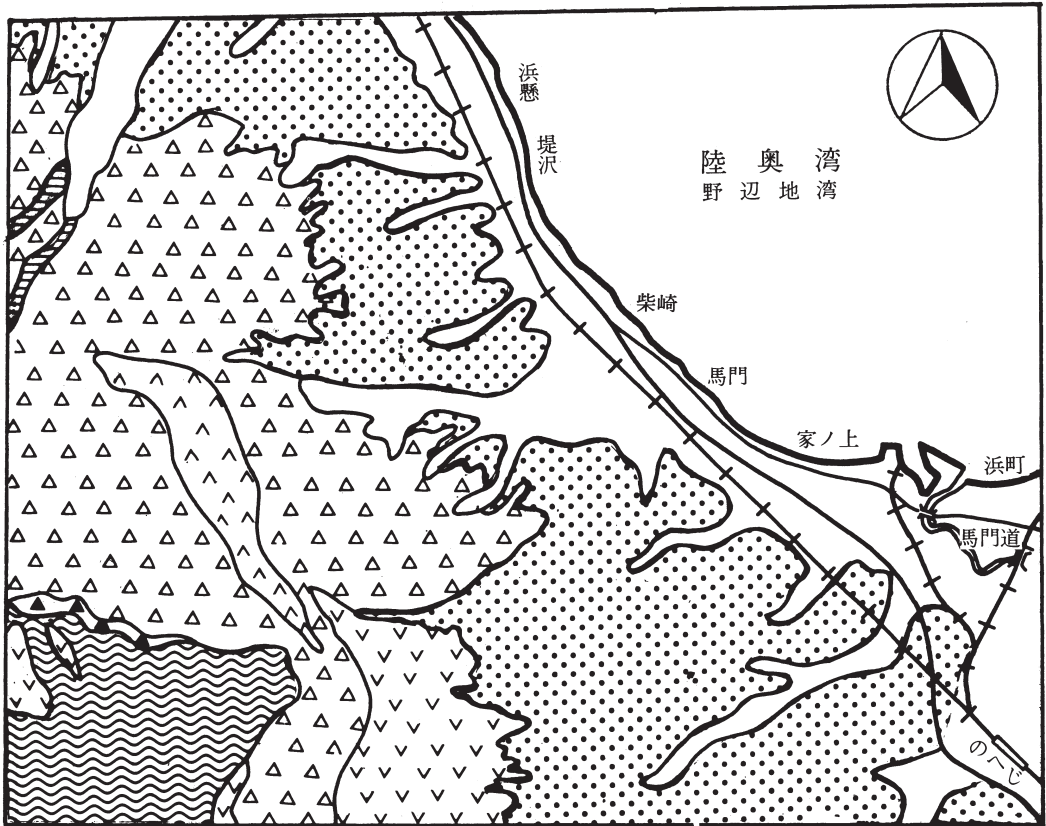
(2) 地質

遺跡周辺の地質層序とその分布を、下表及び図4に示した。この地域の地質を要約すれば、下位より第三紀中新世の四ツ沢凝灰岩類に一括される流紋岩類とその上位の小坪川安山岩類、鮮新世の砂子又層、第四紀の野辺地層とその上位の上北火山灰層及び段丘堆積物、及び沖積世の地層で構成されている。このうち、砂子又層と野辺地層は、上位の第四紀層に覆われて河谷壁以外には露頭がほとんどなく、谷壁部にのみ露出しているところが大部分であるので、図4にはその分布が示されていない。

最下部の四ツ沢凝灰岩に含まれている流紋岩及び同質の火山碎屑岩類は、遺跡背後の烏帽子岳山塊の中核をなしている。これを取り巻くように、山塊の中腹から山麓線にかけて、烏帽

遺跡周辺地域の地質層序

年 代	地 層 名	おもな岩相	
第 四 紀	沖積世	苫小牧火山灰層	{ 沖積世 礫・砂・泥など 丘陵・段丘 黒色土（腐植土）・降下火山灰
		十和田a降下火山灰層	
	洪 積 世	上北上部火山灰層	黄褐色粗粒火山灰・浮石など
		上北中部火山灰層	茶褐色粘土質火山灰・浮石
		段丘堆積物	主に砂・礫、その他シルト・亜炭など
		上北下部火山灰層	茶褐色粘土質火山灰
		段丘堆積物	主に礫（半角礫の場合を含む）、その他砂丘砂など
野辺地層	主に砂岩、その他シルト岩・凝灰岩など		
第 三 紀	鮮新世	砂子又層(甲地層)	凝灰質砂岩・礫岩・シルト岩・泥岩など
	中新世	小坪川安山岩類(和田川層)	安山岩・集塊岩・安山岩質火山礫凝灰岩、その他の凝灰岩・石英安山岩
		四ツ沢凝灰岩類	中性・酸性火山碎屑岩類（緑色凝灰岩を含む）、流紋岩など



『広域調査報告書（八甲田地域）』（通産省 1976）による。

図4 地質図

子岳の東から北へ、小坪川安山岩類（安山岩質凝灰角礫岩・成層凝灰岩）とこれに貫入する石英安山岩が分布している。

山麓線の外側には、段丘群の基盤に相当する砂子又層と野辺地層とが分布する。砂子又層は、野辺地町から東方の下北半島基部にかけては甲地層とも呼ばれるもので、おもに半固結状態の凝灰質砂岩で構成される。野辺地層も半固結状態でおもに砂岩よりなる地層である。これらの2つの地層については、野辺地町教委馬門槻ノ木遺跡報告書（1980）にやや詳しいので、その詳細を省略する。

以上の第三紀及び第四紀洪積世とみられる地層群を覆って、段丘群の上部には褐色火山灰類（ローム）と段丘堆積物とがのっている。このうち、褐色火山灰類は、上北下部火山灰層、上北中部火山灰層の3つに区分されている。

上北下部火山灰層は、高位段丘第 面以上の段丘を覆って分布している。おもに茶褐色の粘土質火山灰で、中部に濃橙色細粒浮石層（甲地浮石層）をはさみ、さらに下半部には白色浮石層を伴っている。いずれもかなり粘土質で、模式地の東北町甲地付近では前者が1m前後、後者が50cm前後の厚さであるが、本地域周辺では前者はさらに厚く後者は欠けているところが多い。この下位には、段丘堆積物とみられる半角礫層あるいはふつうの砂礫層を伴うところがあるが、それほど厚くない。この火山灰層は八戸付近の天狗岱火山灰層とほぼ同時期のものである。

上北中部火山灰層は、中位段丘以上の段丘を覆う茶褐色火山灰層を主とする地層で、遺跡周辺では、5m以内の厚さのところが多い。3～4枚の粘土質浮石層をはさむほか、暗茶褐色（チョコレート色）帯や、乾燥部にあらわれるクラック帯などを伴い、いずれもよく連続する。中位段丘 面以上ではその全部分が見られるが、 面では上半部2～3m、特に段丘縁の低いところでは最上部しか見られないところもあって、中位段丘 面の形成が上北中部火山灰層の上半の堆積中に行なわれたことを物語っている。この火山灰層は、八戸付近の高館火山灰層に対比されるので、 面については、八戸付近で高館火山灰層の下部を欠く根城段丘に相当する可能性が大きい。この火山灰層の下には、砂礫層や砂層などで構成される数mの段丘堆積物があって、ところによって亜炭の薄層やシルト層などを伴っている。火山灰層と段丘堆積物とは境界部で混合し漸移的であるので、整合と考えられる。

上北上部火山灰層は、沖積地以外の全地形面を、現地形に沿って覆う火山灰層で、遺跡付近では、上部が砂粒大浮石粒の集まる黄褐色の粗粒火山灰層、下部が中粒砂～粗粒砂大の火山灰を基質とする粒径0.5～2cm（最大7cm程度）の浮石層で構成され、厚さは30～50cm程度が普通である。下部の浮石層は、千曳浮石層と呼ばれ、遺跡周辺における厚さは10～20cm程度である。この浮石層は、八戸火山灰層の上部にのりところがあることから、その降下時期は八戸浮石層より後になるが、八戸浮石層の堆積とそれほど時間的なへだたりは大きくなく、洪積世末葉の

頃の降下堆積によるものである。

上北上部火山灰層の上限は、地表直下の黒色土層（腐植土）に漸移する。黒色土層については、遺跡層序の項でふれるのでここでは説明を省略する。この土層中には薄い火山灰層がみられることがある。現在、存在が確認されているのは、十和田 a 降下火山灰層と苦小牧火山灰層の 2 層であるが、三辻利一氏（奈良教育大）の青森県内各地に分布する火山灰の蛍光 X 線分析資料によると、2 層のいずれとも特徴を異にするもう一つの火山灰層が存在する。そのうち、十和田 a 降下火山灰層の十和田湖周辺域（特に東～南側30km以内）における分布を除けば、いずれも、平坦地で連続的に続く地層として存在するところはほとんどなく、降下当時の遺構や小谷などの小規模な凹地の覆土中に限って、凹地中央部に垂れ下がるように湾曲するレンズ状の薄層、あるいは断続的に並ぶ小塊として存在する程度である。

十和田 a 降下火山灰層は、十和田湖周辺域を除けば、普通数cm程度（最大20～30cm）の薄層で、粒度組成上は砂質シルト程度の灰黄色～にぶい黄褐色粘土質火山灰層である。降下時期については、今のところ10世紀頃と推定されていて、明らかに十和田火山起原である。

苦小牧火山灰層は、十和田 a 降下火山灰層の上位にあって、その産状と層厚は十和田の降下火山灰層とほとんど同じであるが、分布地点は少ない。また、粒度もこまかく、粒度組成上は粘土が主体の、乾燥すれば粉状になる粘土質火山灰で、色調は十和田 a 降下火山灰よりやや暗い感じの場合が多い。町田洋氏（東京都立大）らによれば（1981）、この火山灰は朝鮮半島基部の火山の白頭山起原とされている。なお、降下時期については判然としていないが、十和田 a 降下火山灰の降下後数十～200年の間の時期のものであることは、ほぼ確かである。もう 1 枚の火山灰層もほぼ同時期のものである。

3 つの火山灰層とも粘土質で、色調や産状も似ており、単独で存在しているときには区別に迷うことも多いが、十和田 a 降下火山灰層は、やや砂っぽくまた色調も灰白色に近いことが多い特徴がある。三辻利一氏（奈良教育大）の蛍光 X 線分析の結果をみると、Rb - Sr 関連の上で明瞭な差異があり、十和田 a 降下火山灰層では Sr が圧倒的に優勢であるに対し、苦小牧火山灰層は Rb が圧倒的に優勢である特徴をもっている。

〔参考・引用文献〕

東北地方第四紀研究グループ（1967）東北地方における第四期海水準変化、日本の第四系、地団研専報、 15

通商産業省資源エネルギー庁（1976）昭和50年度広域調査報告書、八甲田地域

野辺地町教育委員会（1980）馬門槻ノ木遺跡発掘調査報告書

青森県（1972）青森県の地質

町田洋・新井房夫・森脇広（1981）日本海を渡ってきたテフラ、科学、9月号

- 1 陣馬川原遺跡

1 基本層序

松山 力

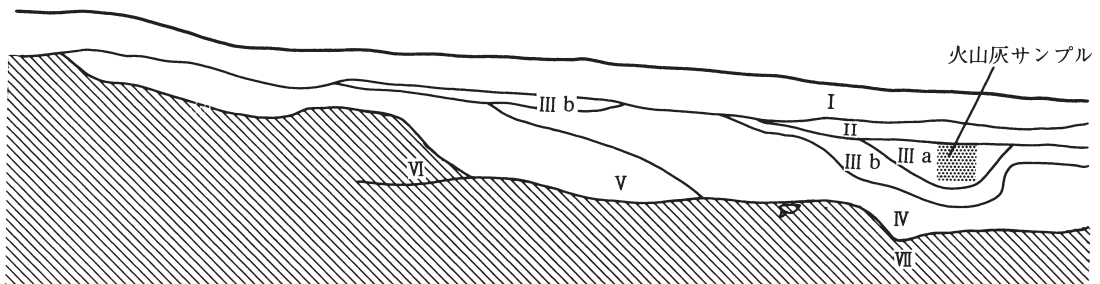
陣馬川原遺跡は、国道 4 号線から馬門温泉に向かう道路の分岐する地点の南南西方約500mの地点、中位段丘 面・ 面の遷移部に位置している。

発掘の及んだ限りでの最下位層は、黄褐色で粘土質の上北中部火山灰層（ローム層）の最上部で、これを基底として、千曳浮石層を伴う上北上部火山灰層、黒色土層が重なっていて、上から下へ順に 層から 層までに区分でき、そのうち上方の 層から 層までが腐植質の黒色土類に含まれる。

層は、発掘地の中央部付近で10～25cm、南東端に近い部分で20～40cm、北西端付近で30～60cm程度の厚さをもつ黒褐色（10Y R 3/2）～暗褐色（10Y R 3/4）の粘性に乏しい土層で、場所によって草木の根が密に入りこんでいる部分がある。厚い部分では上部のⅠ a 層と下部のⅠ b 層に分けることができ、そのうちⅠ a 層は現耕作土に相当し、ところどころに下位層（Ⅱ 層）の土塊（黄褐色土など）が入っている。Ⅰ b 層は 層の土塊が一部に入るほかに、北西端では褐色土（10Y R 4/4）が相当部位に厚さ20～40cmの土層として存在するところがある。この褐色土は粘性に乏しく、しまりがなくて柔いが、上位の 層とともに多量の土器の包含層となっている。

層は、発掘地の中央部から北西部にかけては、中央部にレンズ状の薄層（厚さ 3～10cm）が 2 m程度認められるほかは分布せず、南東端の数グリッドに限って存在する。そこでは、厚さ20～40cmの厚さをもっている。多少粘土質の細粒火山灰（浮石粒）が混入し、少量の炭化物を散在的に含む黒色土層（10Y R 2/1）である。

層も、 層よりはやや分布が広いが、中央部の北西側から北西方で欠如する。 層の上部には、かたくしまった黄褐色（10Y R 5/8）の粘土質火山灰がある（Ⅲ a 層）。この火山灰は、D - 35グリッドの厚い部分を除けば、6 cm内外の厚さを最大として、ところどころにレンズ状



参 考 図

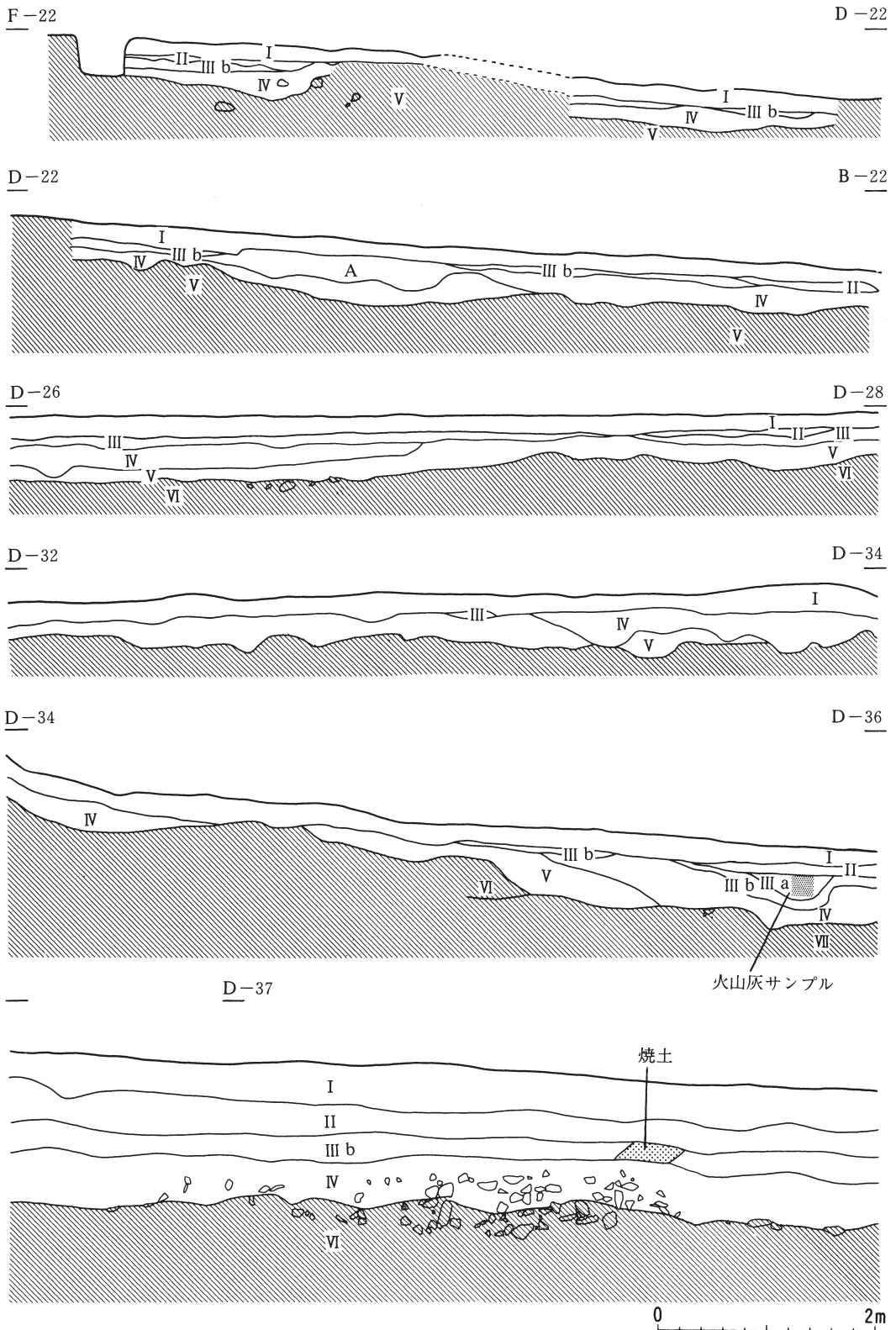


図5 基本層序

の薄層となって分布し、十和田 a 降下火山灰層とみられる。D - 35グリッドは、参考図に示したように土層の累積状況がやや特異である。下位の 層が、このグリッドの北西端で突如切れて、その厚さの分（35cm）だけ隣接グリッドから 層・ 層が順次に這い下り、このグリッドの南東端に近く、断面でみる限りでは幅 1 m程度で深さ30cm程度に 層が削りこまれて、その部分を満たすように 層が下方に厚くなり、 a 層も、下方にふくらむ凸レンズ状に凹地を埋めている。この部分の火山灰層は 1 層にまとまっているように見えるが、実は 2 つの火山灰層が重なったもので、蛍光 X 線分析の結果から、上部が苦小牧火山灰層、下部が十和田 a 降下火山灰層に相当することが明らかになった。

層の主体をなす b 層は、やや粘土質でしまった暗褐色土（10 Y R 3/4）で、多少の細粒粘土質火山灰（浮石粒）を含んでいる。D - 35グリッドより南東側に連続して分布し、そこでの厚さが10～25cmあるほか、中央部付近にも比較的広く連続するところがあって、そこでの厚さは 6～15cmである。

層は、柔くしまりのない黒褐色（10 Y R 2/2）で粘土質の土層で、1～20mmの浮石を多量に含むところが多い。厚さは10～25cm、ところによって30～50cmであるが、遺跡の北西側半分ほどの地域には欠如している。遺跡の南東端では下位の 層から 層にかけ（層欠如）粒径数 cm～20cm程度の半円礫がマウンド状に密集した部分があるが、これは人為的なものではなくて後背地から土石流状に流れ出したものと思われる。

層は暗褐色（10 Y R 3/4）～褐色（10 Y R 4/4）の腐植質の部分を含む褐色火山灰層（ローム）で、上北上部火山灰層及びそれが 層以上へ漸移する部分に当る。厚さは10～40cm程度で、場所により欠如する部分がある。

層は、千曳浮石層で、ラピリ混りの浮石を主とした明黄褐色（10 Y R 6/6）の地層であるが、ところどころでちぎれた塊状の産状を示しており、その間を 層同様の粘土質火山灰が埋めている。

層は、上北中部火山灰層の上限部に相当する粘土質の黄褐色（10 Y R 5/6）火山灰層である。

全体的には、遺跡の南東部では 層が欠如するところがあるが、 層以上の厚さはまとめて120～150cm、中央部では大部分のところでは 層が欠如し、 層を欠くところもあるが 層以上の厚さは40～70cm（最低30cm）、北西部では、～ 層を欠き、 層以上の厚さは40～50cmとなっている。

2 出土遺跡

縄文時代の出土土器

出土した土器は、時期、型式から次の七つに類別した。

1 類（円筒土器下層式土器に比定する土器）

図7-1は、器形では円筒形を基本とし、口縁部にかけて若干内傾する傾向がみられる。文様は、口縁部文様、区画文様、胴部文様等に区画している。口縁部文様はLRの圧痕による平行文である。口縁部と胴部区画は、LRの圧痕1条を挟み棒状工具により2列の刺突によって区画している。胴部文様はLRとRLの結束第1種を8段以上に横位に施文したものである。

図10-1は、RLの圧痕で口縁部と胴部を区画し、胴部文様はRの撚糸文で構成している。その他の胴部片も同様である(図10-2~8)。胎土には、いずれの土器片とも植物性繊維の混入がみられ、小砂粒の混入する割合の多い土器である。

2 類（円筒土器上層a式土器に比定する土器）

図10-9~11、口縁部に突起部を有し、隆線上に波状撚糸圧痕文が施文している。円筒下層a式土器に比定する土器である。

3 類（大木10式に比定する土器）

図11-1~4は、胴部上半にみられる極めて特徴的な土器片で、磨消縄文に鱗状の突起のみられるものである。この鱗状を有する土器は大木10式土器に比定するものである。また、この土器片から全面に赤色顔料が塗布されていた痕跡がみられる。

4 類（十腰内 群式土器に比定する土器）

に比定する土器

文様構成からみて、さらに二つに類別した。

(1) 図11-5~8は、沈線を主としたものと、磨消縄文と沈線によって文様構成するものなどである。

(2) 図11-9・10は、いわゆる網目文と呼ばれる文様構成をしている土器である。また、図12-1~2は、網目縄文を施文後、磨消を行って器面調整をしている。

5 類（十腰内 群式土器に比定する土器）

図8は、開口部が大きく、口縁部は五つの波状口縁をし、胴部中央で一度しばまり、胴部下半は丸く張った深鉢形である。口唇部は内側に肥厚している。文様は縄文、沈線、磨消して成形して文様構成している。

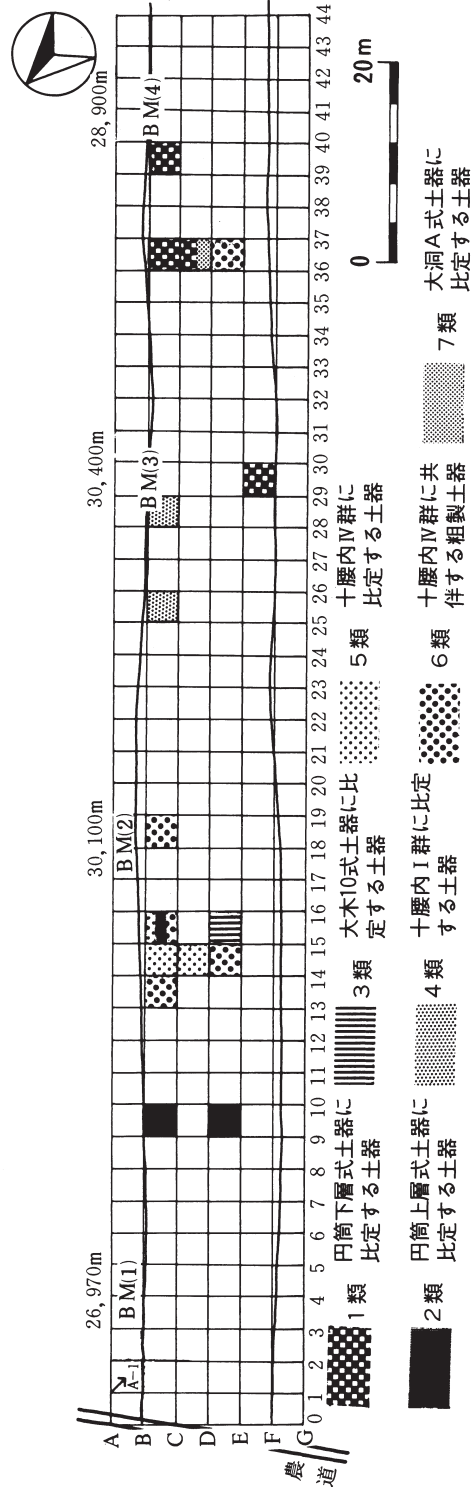


図6 グリッド配置 出土器類別分布図

胴部上半の文様は $R \begin{Bmatrix} L \\ L \end{Bmatrix} \begin{Bmatrix} r \\ r \\ r \\ r \\ r \end{Bmatrix}$ と $L \begin{Bmatrix} R \\ R \end{Bmatrix} \begin{Bmatrix} e \\ e \\ e \\ e \\ e \end{Bmatrix}$ を横位に回転施文しているが、一部縦位に回転している部分もある。胴部下半には幅の広い $R \begin{Bmatrix} L \\ L \end{Bmatrix} \begin{Bmatrix} r \\ r \\ r \\ r \\ r \end{Bmatrix}$ を施文している。

色調は暗褐色で、胴部以下は赤色に変化している部分が多く、ススが付着しているところもみられる。

胎土は細砂粒を多量に含み、焼成良く、二次加熱を受けたとみられ、器表面の剥落が著しいところがある。

製作上及び成形上で観察できることは、製作面では輪積み痕が著しく、粘土帯の幅は胴部上半では約 4 ~ 5 cm 前後であり、胴部下半では 5 ~ 6 cm の粘土帯がみられる。成形面では次のような手順で行われている。

- ・ 口縁部の成形 (貼り付け 縄文 沈線)
- ・ 胴部上半部の成形 (縄文 沈線 磨消し)
- ・ 胴部くびれ部の成形 (貼り付け 沈線 縄文)
- ・ 胴部下半部の成形 (縄文 沈線 磨消し)

図 9 - 1 は、口縁から胴部にかけての壺形の土器である。口縁部の作りは粗雑である。文様区画では、口縁部と胴部の境に沈線を入れ、隆帯上には細い棒状工具のようなもので刻目が施されている。沈線で区画された文様は、 $L \begin{Bmatrix} R \\ R \end{Bmatrix} \begin{Bmatrix} e \\ e \\ e \\ e \\ e \end{Bmatrix}$ と $R \begin{Bmatrix} L \\ L \end{Bmatrix} \begin{Bmatrix} r \\ r \\ r \\ r \\ r \end{Bmatrix}$ を羽状に施文している。

図 9 - 2 は、底部丸底の片口土器である。文様は上部に向きの異なる弧線を連続的に区画した中に $L \begin{Bmatrix} R \\ R \end{Bmatrix} \begin{Bmatrix} e \\ e \\ e \\ e \\ e \end{Bmatrix}$ と $R \begin{Bmatrix} L \\ L \end{Bmatrix} \begin{Bmatrix} r \\ r \\ r \\ r \\ r \end{Bmatrix}$ を羽状に施文している。下部は上部にみられるものと同様の羽状縄文が横位と縦位に全面に施文されている。

5 類は 6 類に次いで量的に多く、図 12 - 3 ~ 10 は、上記した土器に類似する文様構成を有するものである。

以上の他に図 13 - 1 ~ 5 のように口縁部に連続した刻目を有する土器も 5 類の中に含めた。

6 類 (十腰内 群土器に共伴する粗製土器)

器形は粗製深鉢形土器であるが、文様の相違から 2 種に細別した。

(1) 文様の斜行するもので $L \begin{Bmatrix} R \\ R \end{Bmatrix} \begin{Bmatrix} e \\ e \\ e \\ e \\ e \end{Bmatrix}$ や、 $R \begin{Bmatrix} L \\ L \end{Bmatrix} \begin{Bmatrix} r \\ r \\ r \\ r \\ r \end{Bmatrix}$ を施文しているもの。(図 13 - 6 ~ 16、14 - 1)

(2) 文様が羽状縄文の $R \begin{Bmatrix} L \\ \begin{Bmatrix} r \\ r \\ r \\ r \\ r \end{Bmatrix} \\ L \end{Bmatrix}$ と $L \begin{Bmatrix} R \\ \begin{Bmatrix} e \\ e \\ e \\ e \\ e \end{Bmatrix} \\ R \end{Bmatrix}$ を施文したもの。(図14 - 2、 3、 5)

(1)、(2) の残存する口縁部破片を観察すると、口縁部が直立するもの、内側に彎曲するものがある。内側に彎曲するものは口唇部が丸味をもつものと、他は平縁で若干厚味をもっているものがある。

7 類 (大洞 A 式土器に比定する土器)

図14 - 6 ~ 8 は、台付鉢形土器の土器片で、平行沈線による直線的工字文の文様構成で、沈線上の両側には軽く寄せた瘤状のものが見られる。大洞 A 式に比定する土器片である。

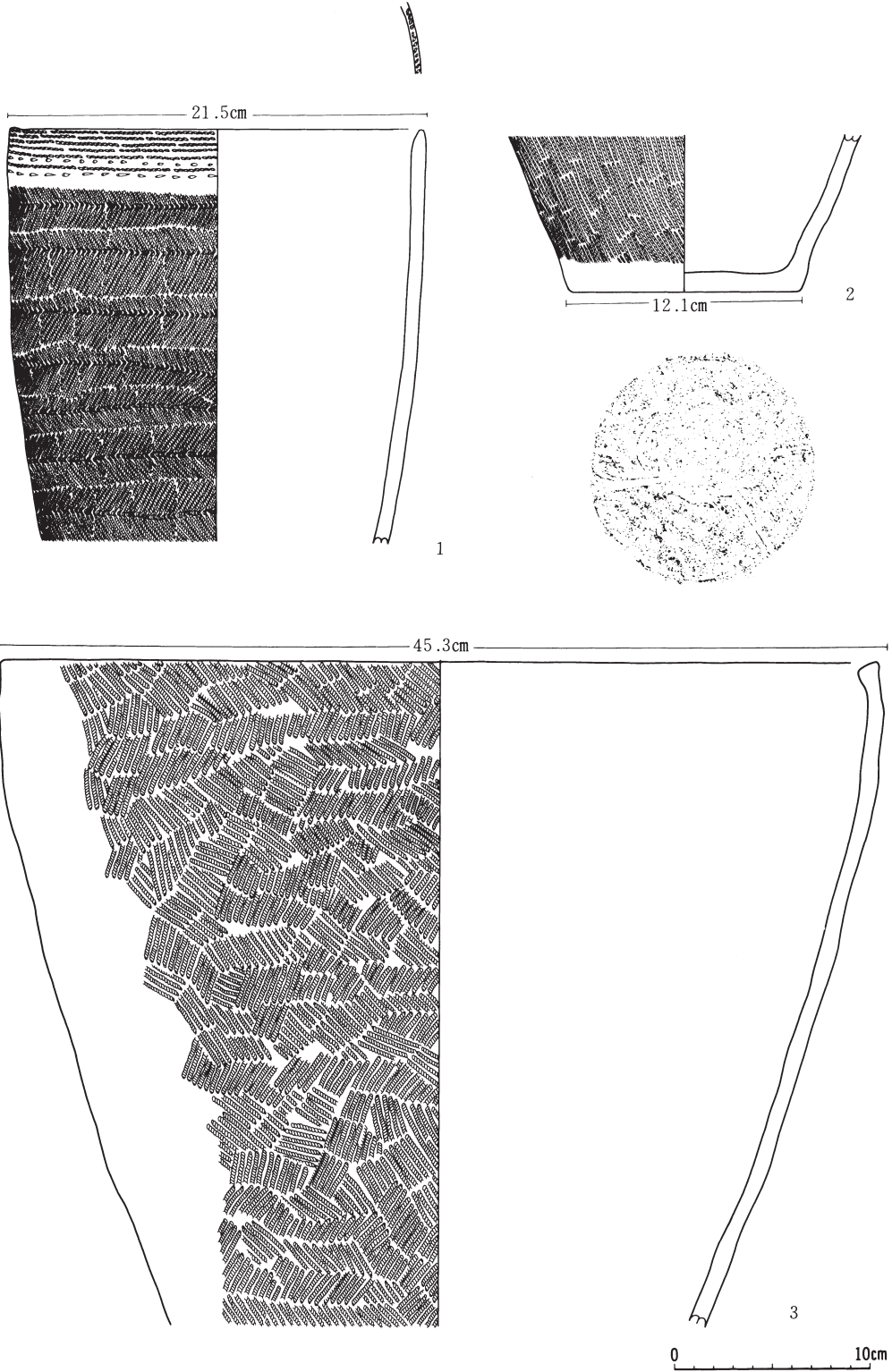


图7 出土土器

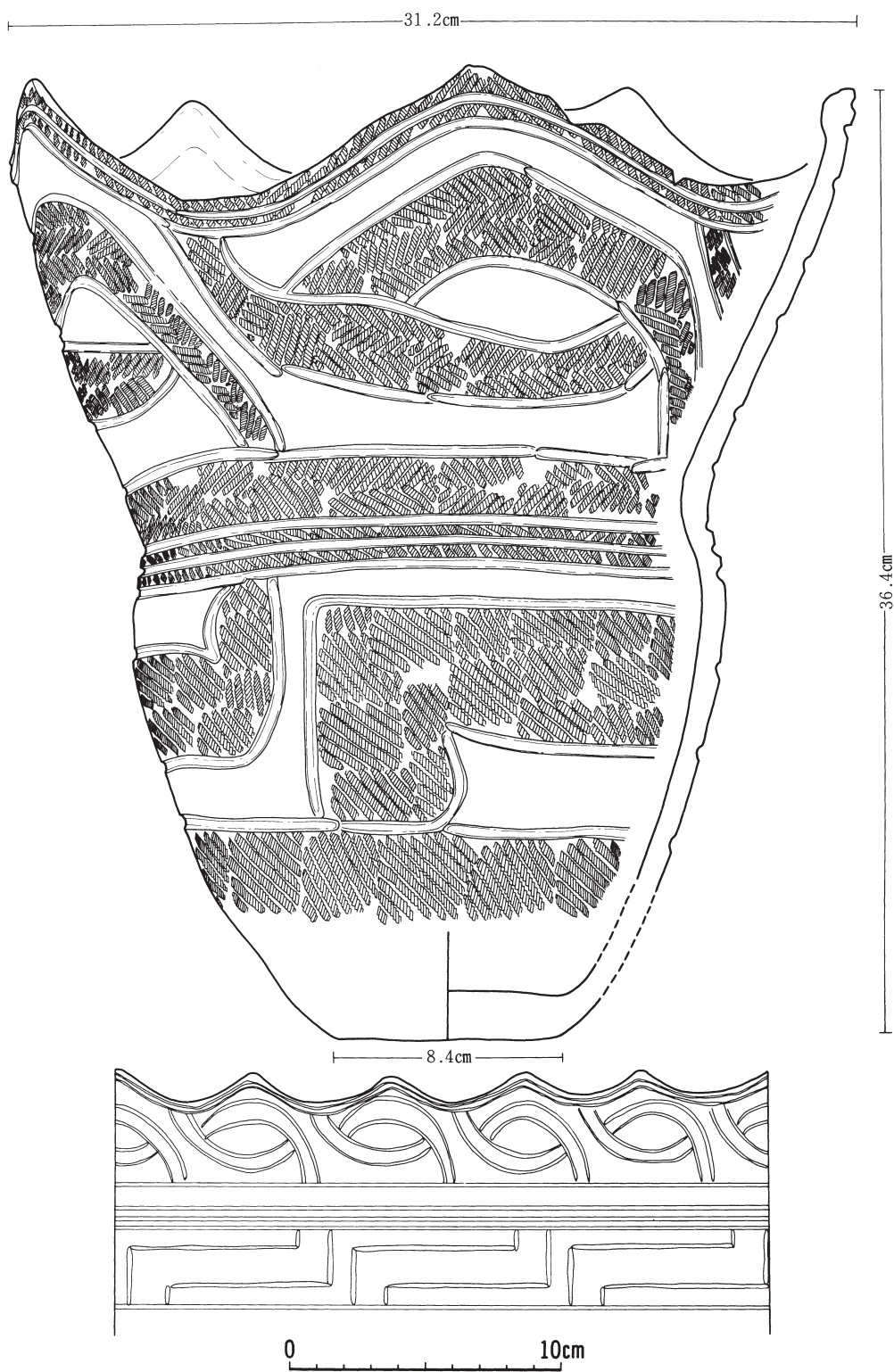


图8 出土土器

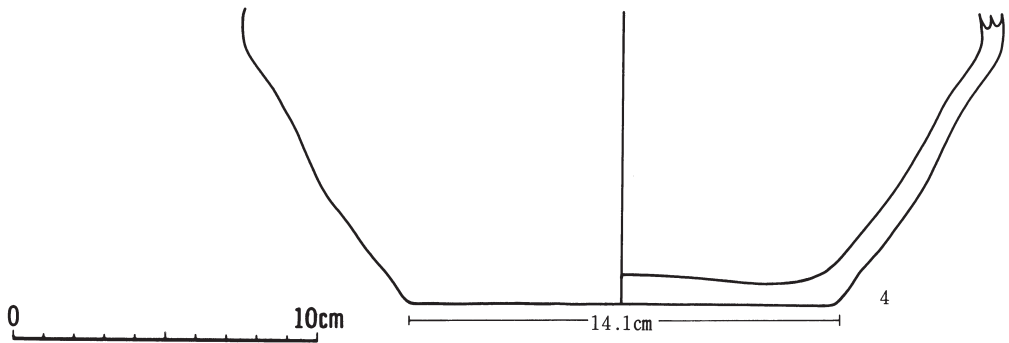
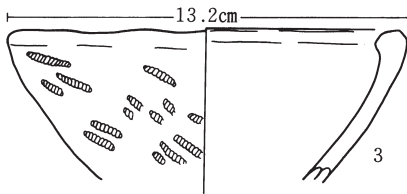
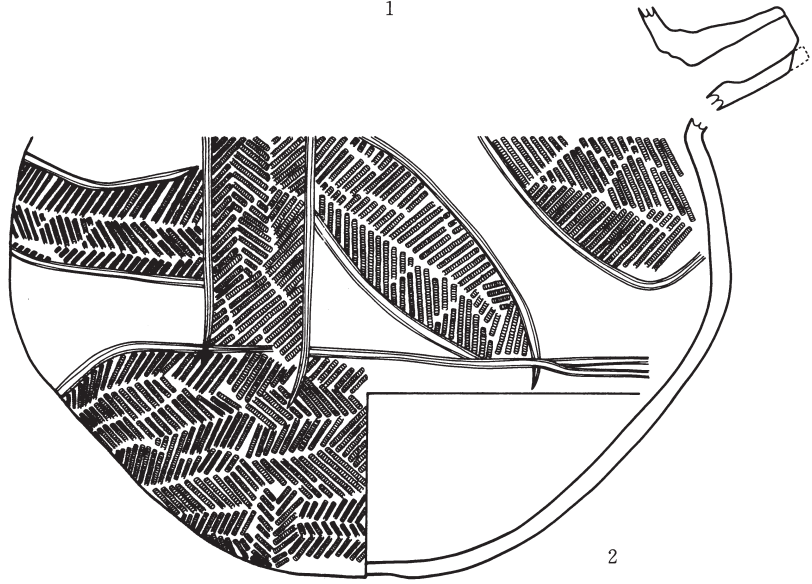
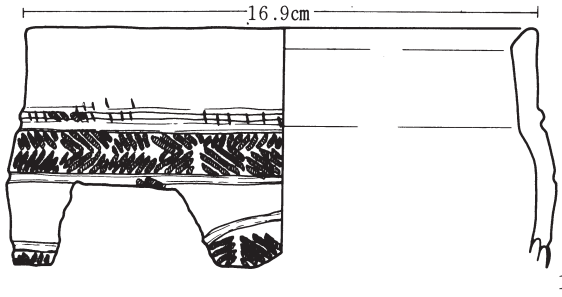


图9 出土土器

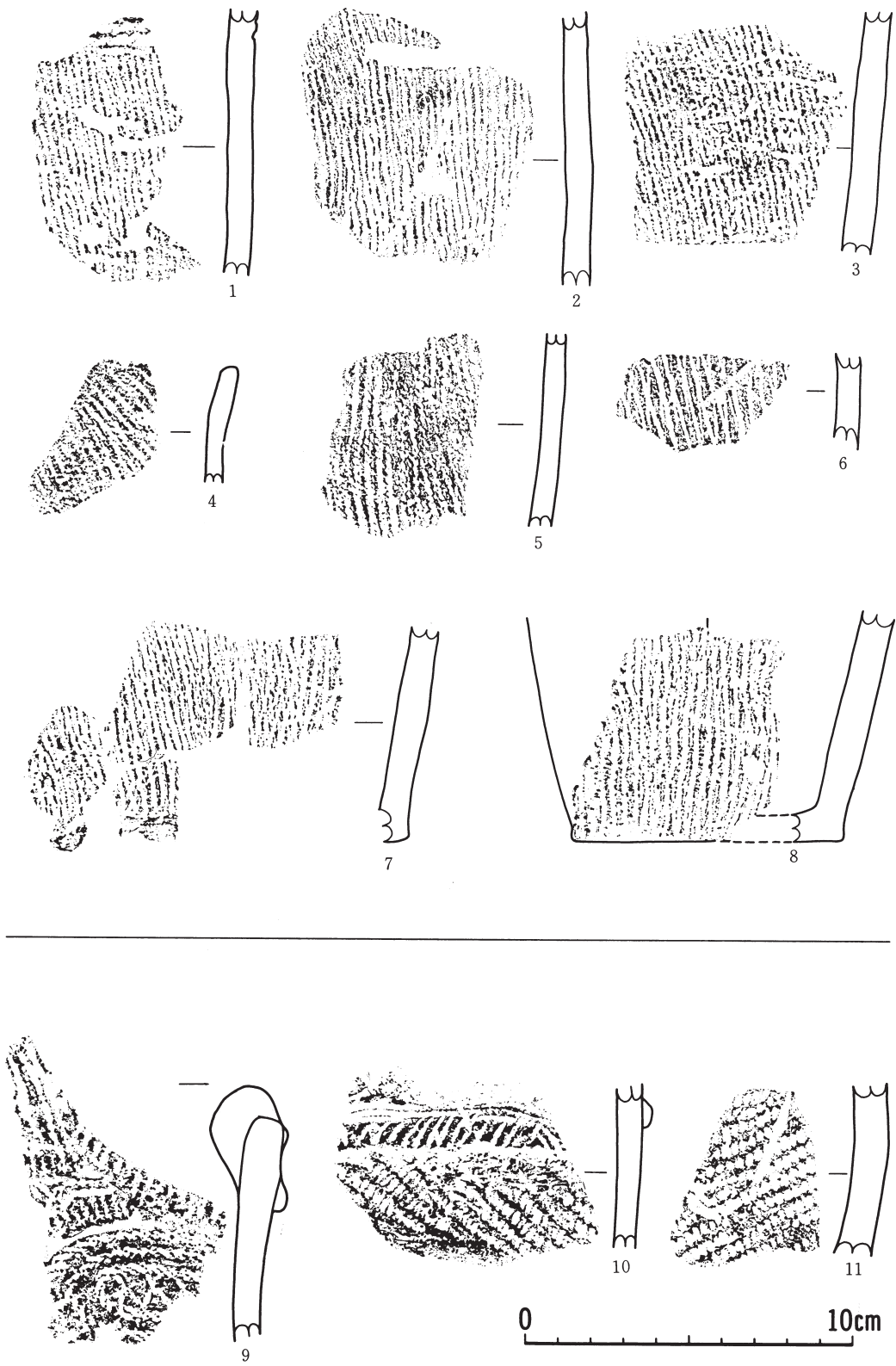


图10 1類 土器拓影図(1~8)下層式
2類 土器拓影図(9~11)上層式

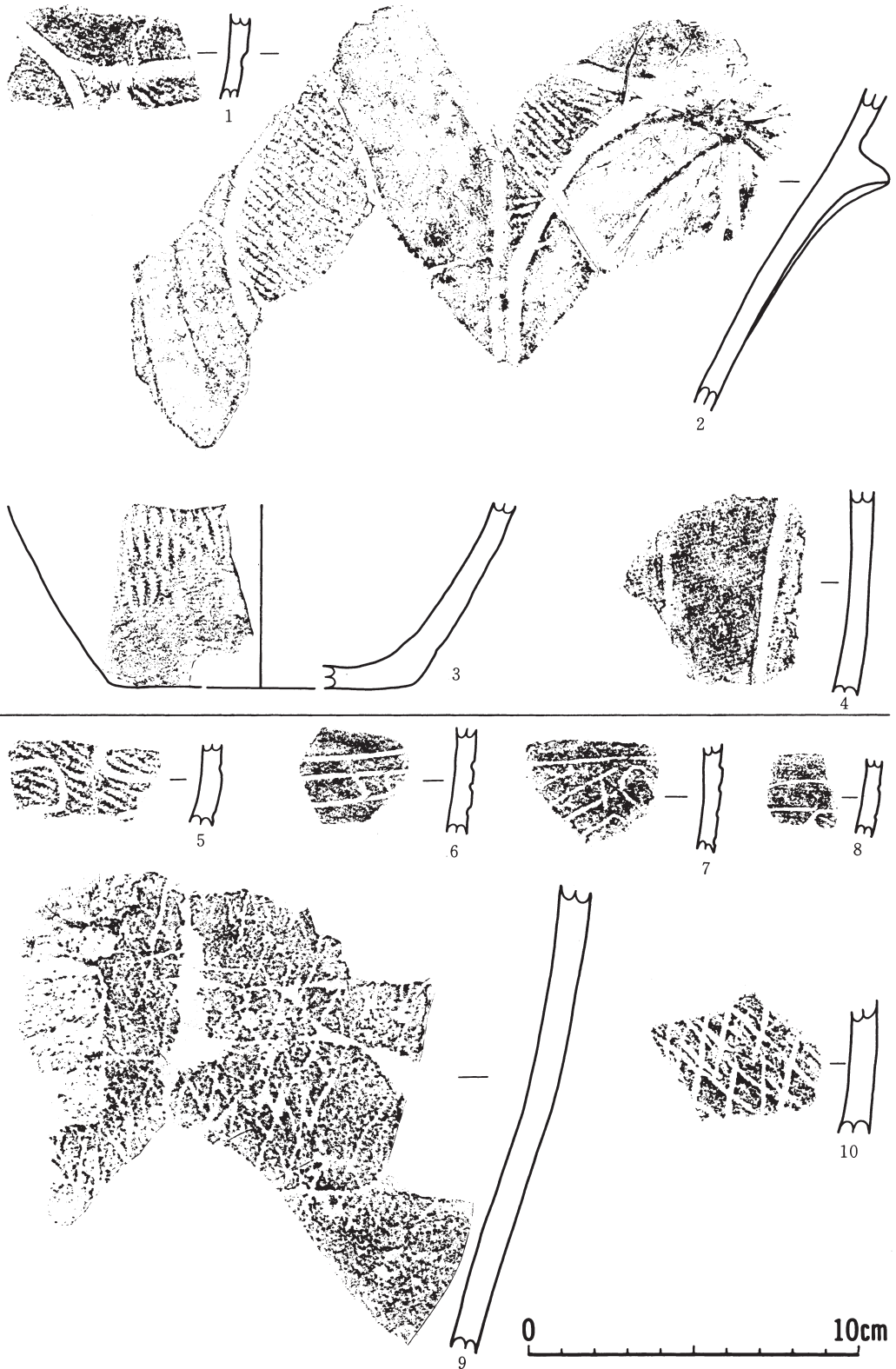


图11 3類 土器拓影図(1~4) 大木10式土器
 4類 (1)(2)土器拓影図(5~10) 十腰内I群式土器

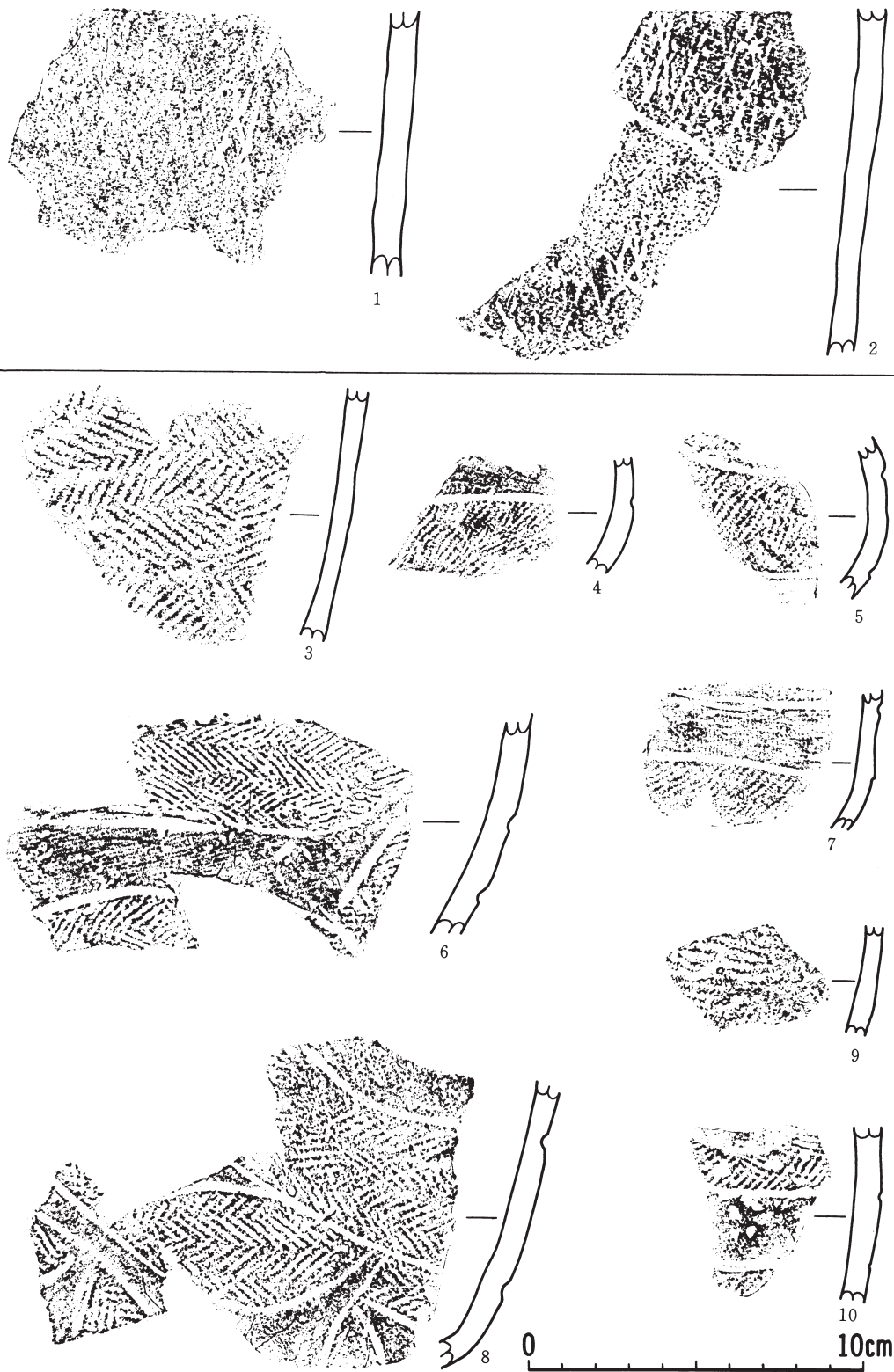
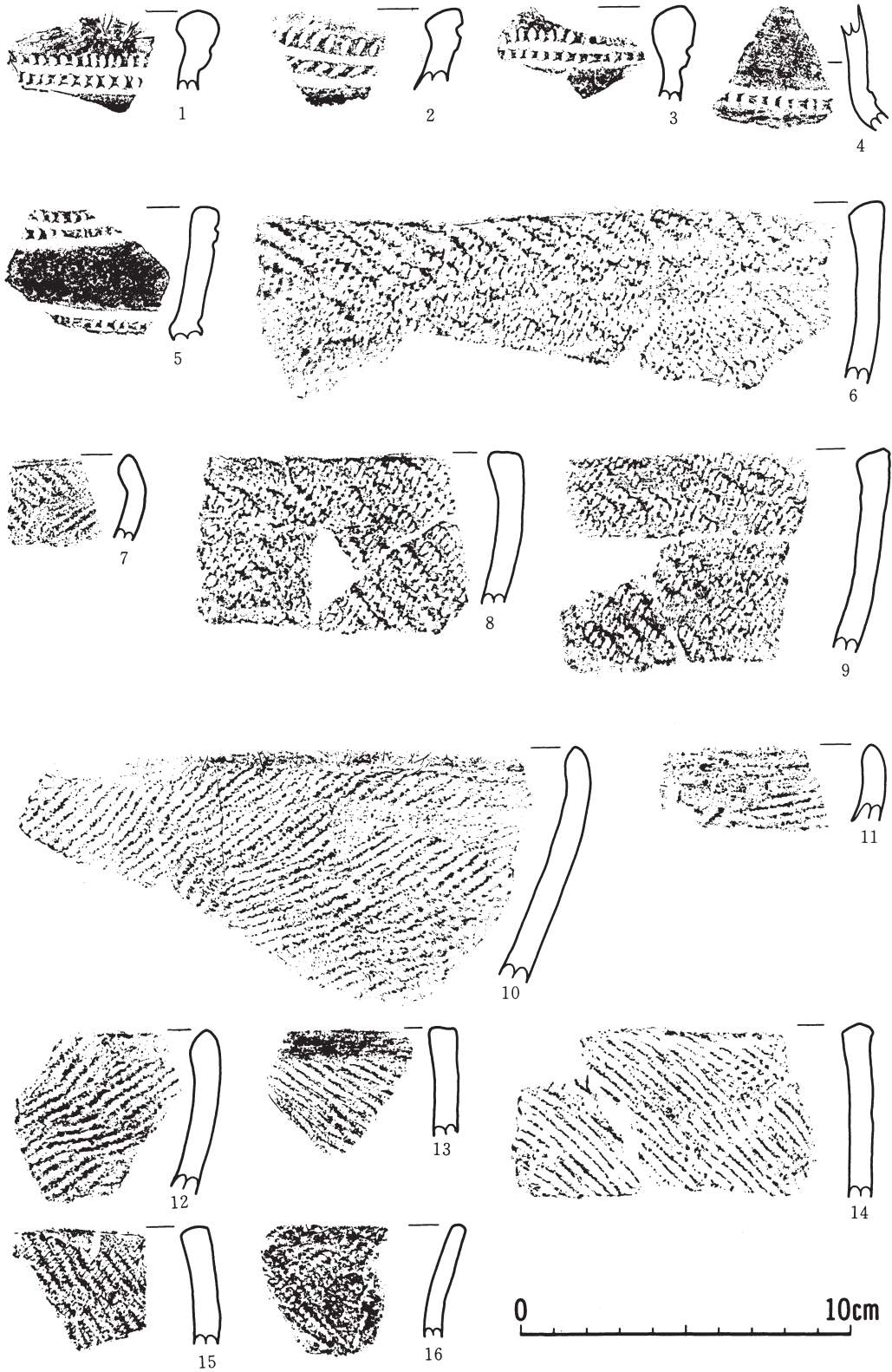


图12 4類(2)土器拓影図(1~2)十腰内I群式
5類 土器拓影図(3~10)十腰内IV群式



5類 土器拓影図(1~5) 十腰内IV群式
 6類 土器拓影図(6~14) 十腰内IV群式に共伴

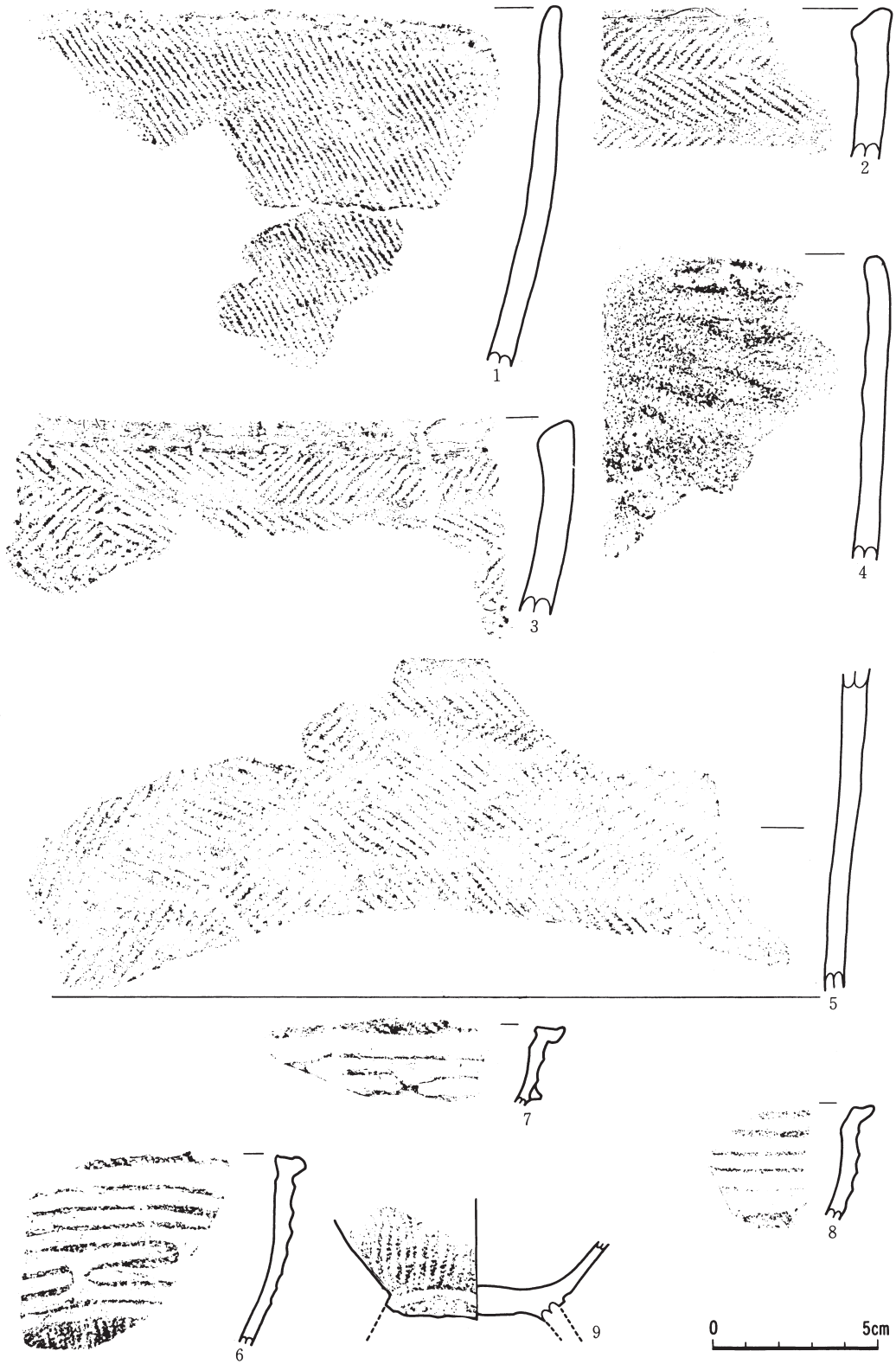


図14 6類(1)土器拓影図((1)1) 十腰内IV群式に共伴
 (2)2、3、5
 7類 土器拓影図(6~8) 大洞A式

3 まとめ

出土土器の中で主体を占める十腰内 群式土器の特徴について若干触れてまとめとする。本遺跡で 5 類とした第 群土器の中には、文様構成上では、第 群土器と類似する点がみられるので、第 群、 群の相違点を明らかにしながら、5 類を第 群土器に比定する土器とみなした理由を述べることにする。

本遺跡出土の 5 類とした土器の中で、かつて磯崎正彦氏（「岩木山」1968年）が述べている第 群、 群とに類似する点としてつぎの二つの点をあげることができる。

1. 器表面の文様の特徴として、両群に羽状縄文がみられること
2. 口縁部に、連続した刻目を有する土器がみられること

1 の羽状縄文については、磯崎氏が、第 群土器の場合は「羽状縄文が右方向に撚った 1 段多条の原体 $R \begin{cases} L \\ L \end{cases} \begin{cases} \uparrow \\ \downarrow \end{cases}$ を上下、左右と回転方向を違えることによって作り出した」とし、第 群土器の場合は「左右撚りの違った原体を用意し、それを交互に押捺して羽状縄文を作り出していることである。」としている。

本遺跡の 5 類土器を観察した結果では、すべて、左右の撚りの違った原体を使用して施文した羽状縄文である。また、羽状縄文は、十腰内第 群土器では縦方向に走り、十腰内第 群土器では横方向に走るとされているが、5 類は十腰内第 群に比定し、後者に属するものである。

2 の、口縁部に連続した刻目のある土器は、磯崎氏が十腰内第 群土器の特色として本文では上げているが、写真図版では十腰内第 群、第 群土器とした中にもみられることから詳細は不明であるが、刻目については十腰内第 群から第 群にかけてみられるものと考えていたのではないだろうか。

本遺跡で 5 類とした中にも、口縁部、頸部に連続する刻目がみられ、刻目列の下は無文部となっているが、小破片のため全体の文様構成を把握することはできない。刻目を有する土器が、出土層位、地点とも 5 類の十腰内第 群に比定する土器と共伴していることから、5 類は十腰内第 群のものとして分類した。

さらに、5 類とした土器には、十腰内第 群土器の特徴である「上向きの弧と下向きの弧とを巧妙に組み合わせた」文様構成がみられる。

以上のことから 5 類の十腰内第 群とした土器については、羽状縄文、刻目などの特徴以外に、他の観点からも検討できる資料によって、より明確にしなければならない土器群である。

（一町田 工）

4 分析

陣馬川原遺跡出土火山灰の蛍光X線分析

三辻 利一

青森県下の遺跡に堆積する火山灰は、蛍光X線分析により分類されることが知られている。本報告では、陣馬川原遺跡で採集された火山灰の蛍光X線分析の結果について報告する。

はじめに、青森県下の遺跡から採集された火山灰を、蛍光X線分析によって分類した結果について述べる。図15-1には、Rb-Sr分布図を示してある。この分布図を火山灰にも適用してみた訳である。Rb、Srは同時に測定された標準試料JG-1による規格化値である。図15-1に示されているように、青森県下の遺跡から採集された火山灰は、Rb-Sr分布図で明らかに3グループに分けられることが分かる。Rbが多く、Srが少ないA群、逆にRbが少なくSrが多いC群、そして、その中間に分布するB群の3グループである。そして、全体として眺めると、RbとSrの間には逆相関の関係があることが分かった。

次に、この3グループの間の層序的關係を調べてみた。そうすると、松山 力氏が陣馬川原遺跡から採集した火山灰のうち、十和田 a 火山灰上部と同定した試料はA群に所属し、同じく十和田 a 最下部と同定した火山灰はC群に所属した。したがって、A群よりC群の方が古い降下火山灰であることになる。一方、南郷村馬場瀬で採集された上位火山灰はB群に、また、下位火山灰はC群に所属したところからB群よりもC群の方が古い火山灰であることが明らかになった。しかし、A群とB群の層序的關係についてはこれまでのところ明らかでない。

A、B、C群の分類は、Rb-Sr分布図のみならず、Fe量でもみられる。図15-2には、3グループのFe量を比較してある。この結果、Fe量も各群ごとによくまとまることが分かった。最も、Fe量の多いのはB群で、次いでA群、C群は最もFe量が少なかった。そして、3群間の相互識別はFe量でも可能であることが分かった。図15-1・2に示されたように青森県下の遺跡から採集された火山灰が、何故3グループに分けられるのかについての十分な説明は目下のところない。しかし、とにかく、3グループに分けられることだけは明らかになった。A群もC群も十和田 a 火山灰であるところから、噴出の時期によって化学組成に違いがあるのみならず、RbとSrの間に逆相関の關係が成り立つと推定される。なお、十和田 a よりも古い十和田 b 火山灰はRb-Sr分布図ではC群に属し、Fe量ではC群よりも多く、A群に対応した。したがって、十和田 a 最下部と十和田 b は識別出来ることになる。

火山灰が堆積後の風化の影響については目下のところよくわからない。しかし、図15-1・2に示されたごとく、各グループ間に明確な相違があるところから、風化の影響が余り認められないと考えた方が良さそうである。もし、風化の影響があればもっと分布はばらつくと思われる。したがって、Rb-Sr分布図、Fe量にみられる相違は降下火山灰そのものの特性の違いと考えられる。

このように、青森県下の遺跡に堆積する火山灰が分析によって分類されると、その結果から遺跡の年代は推定されることになる。次に、火山灰の分析結果から遺跡の年代を推定した結果を述べよう。図16 - 1 には陣馬川原遺跡の火山灰のRb - Sr分布図を示す。A群に所属することは明らかである。このことは、図16 - 2 のFe量でも確認された。したがって、陣馬川原遺跡の火山灰は、十和田 a 上部に対応する比較的新しい火山灰であることが明らかになった。この遺跡は比較的新しい遺跡である。

図15-1 青森県下遺跡出土火山灰のRb-Sr分布

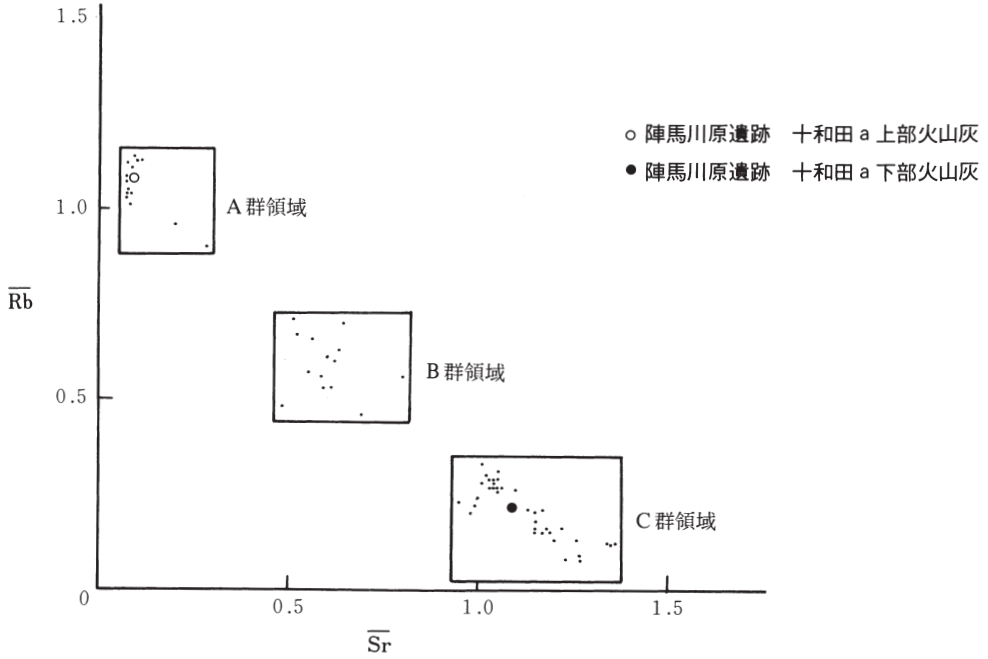


図15-2 青森県下遺跡出土火山灰のFe量

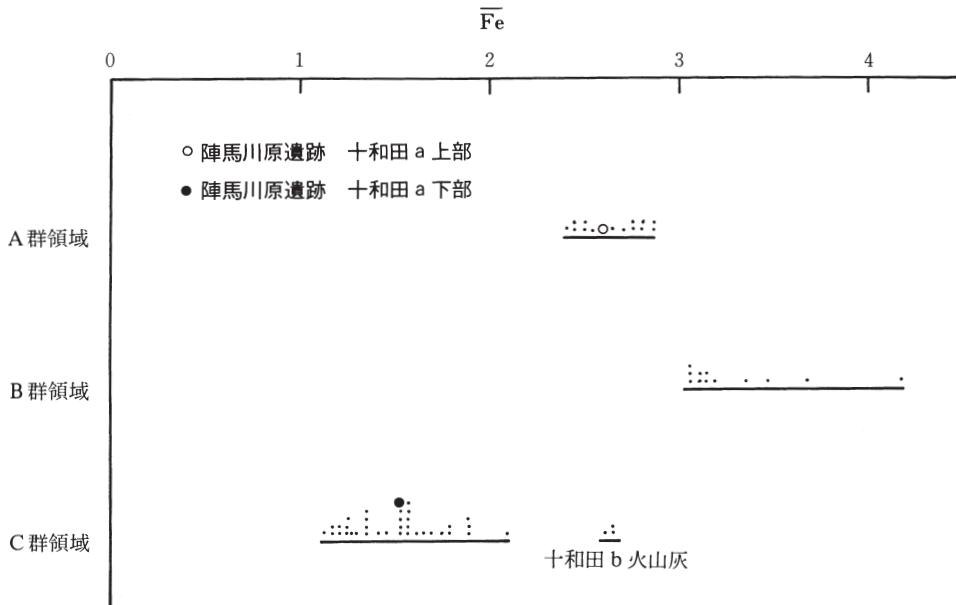


図15 青森県下遺跡出土火山灰のRb-Sr分布とFe量

図16-1 陣馬川原遺跡出土火山灰のRb-Sr分布

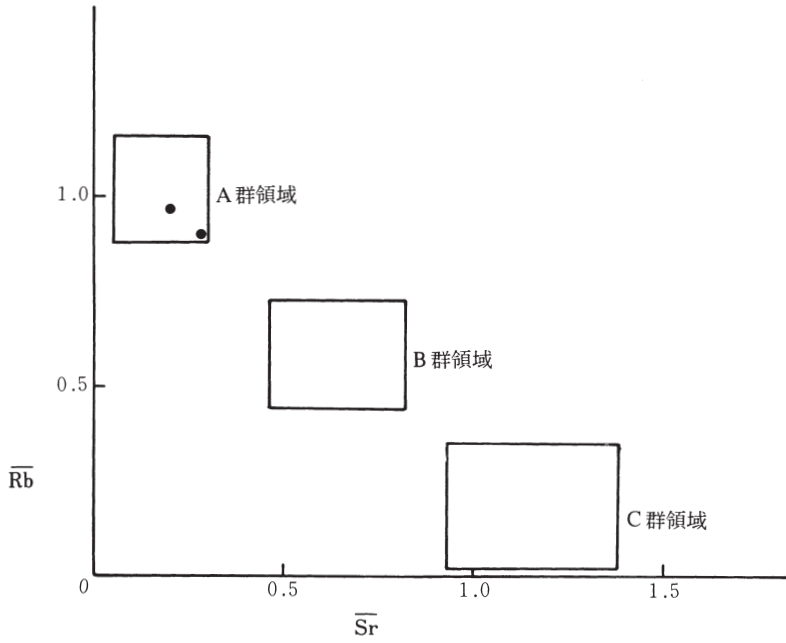


図16-2 陣馬川原遺跡出土火山灰のFe量

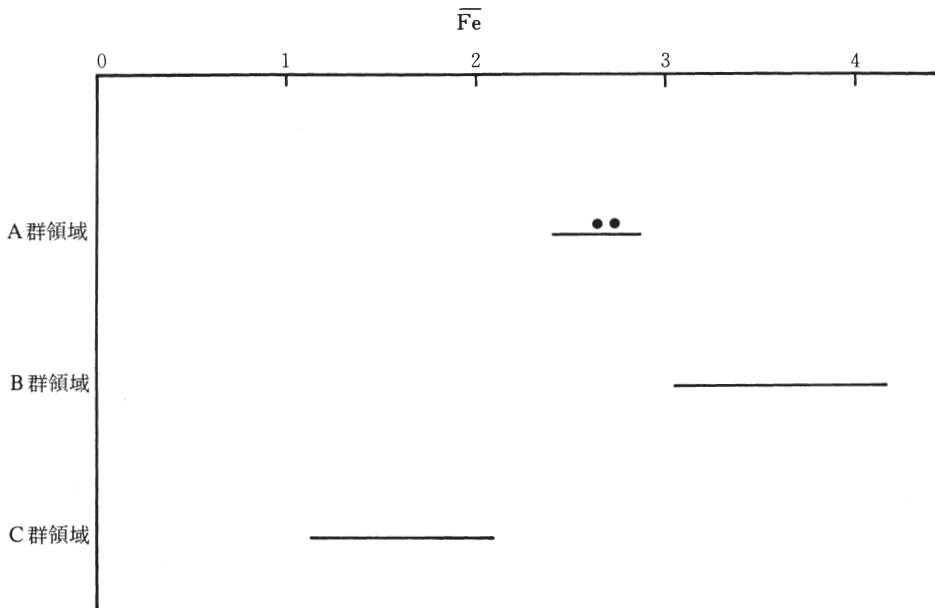
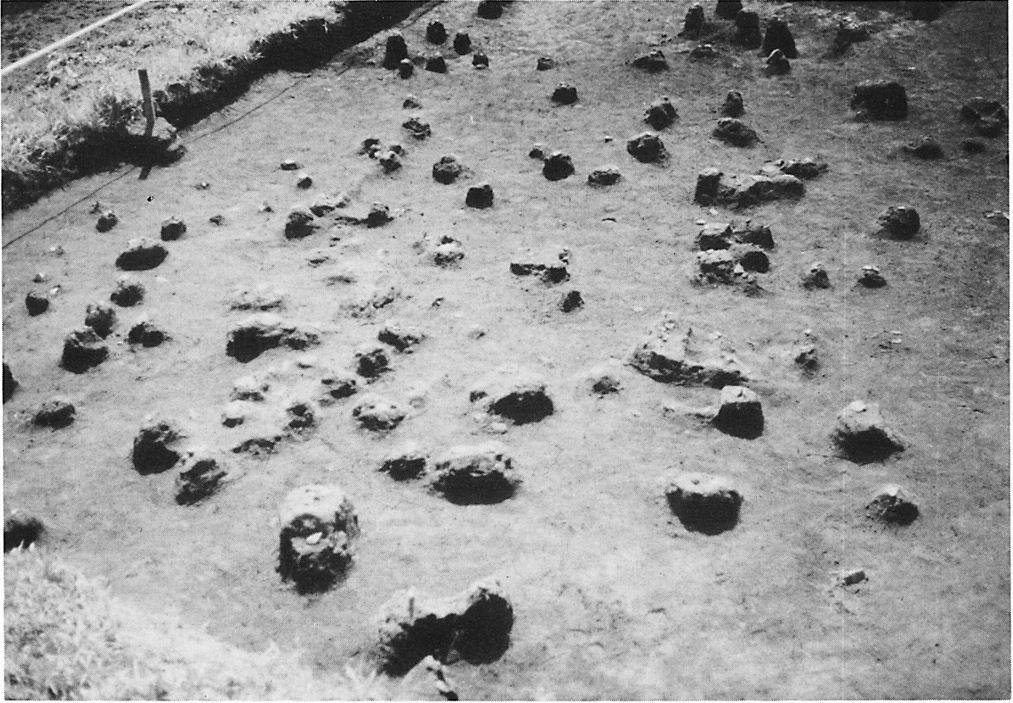


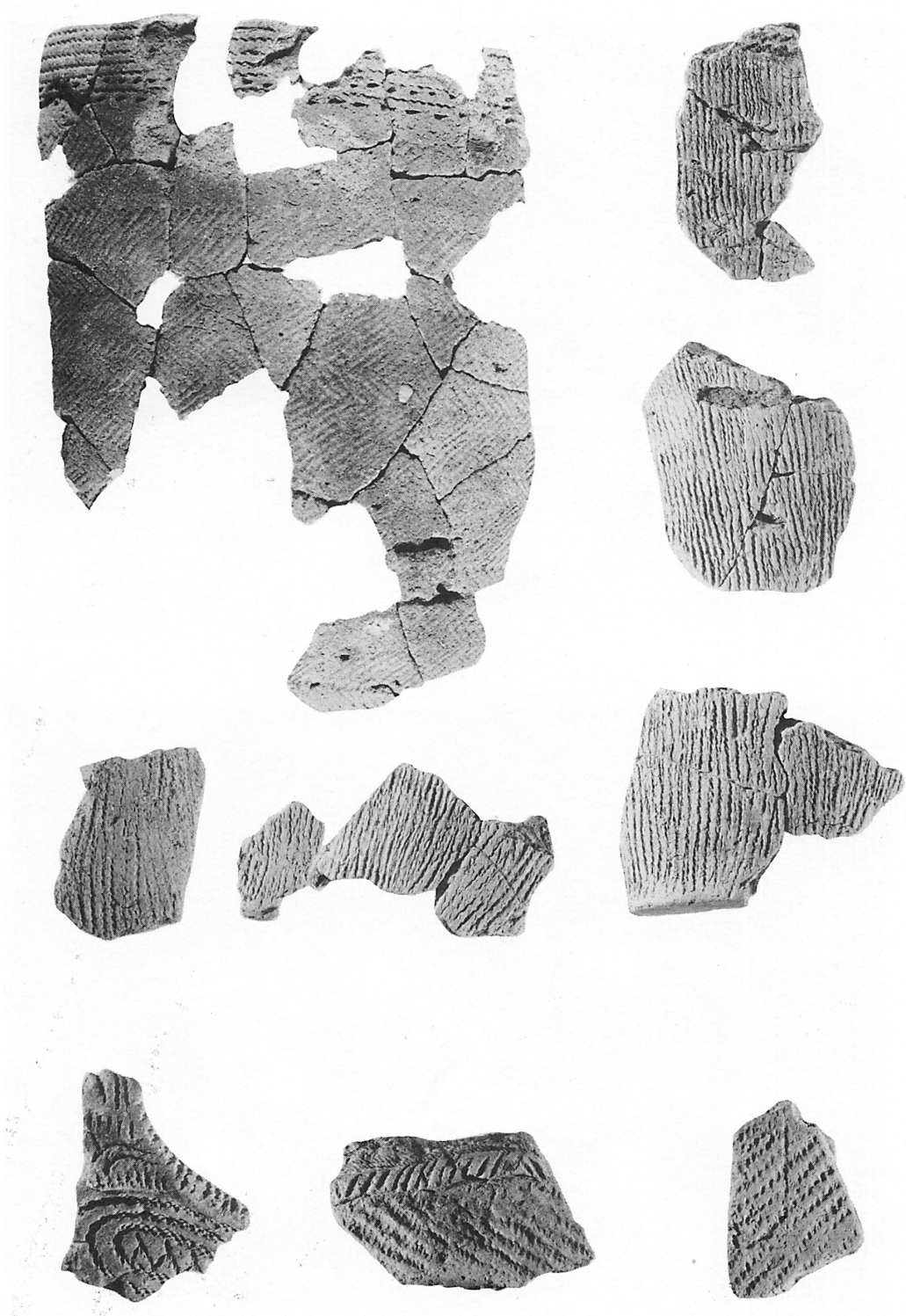
図16 陣馬川原遺跡出土火山灰のRb-Sr分布とFe量



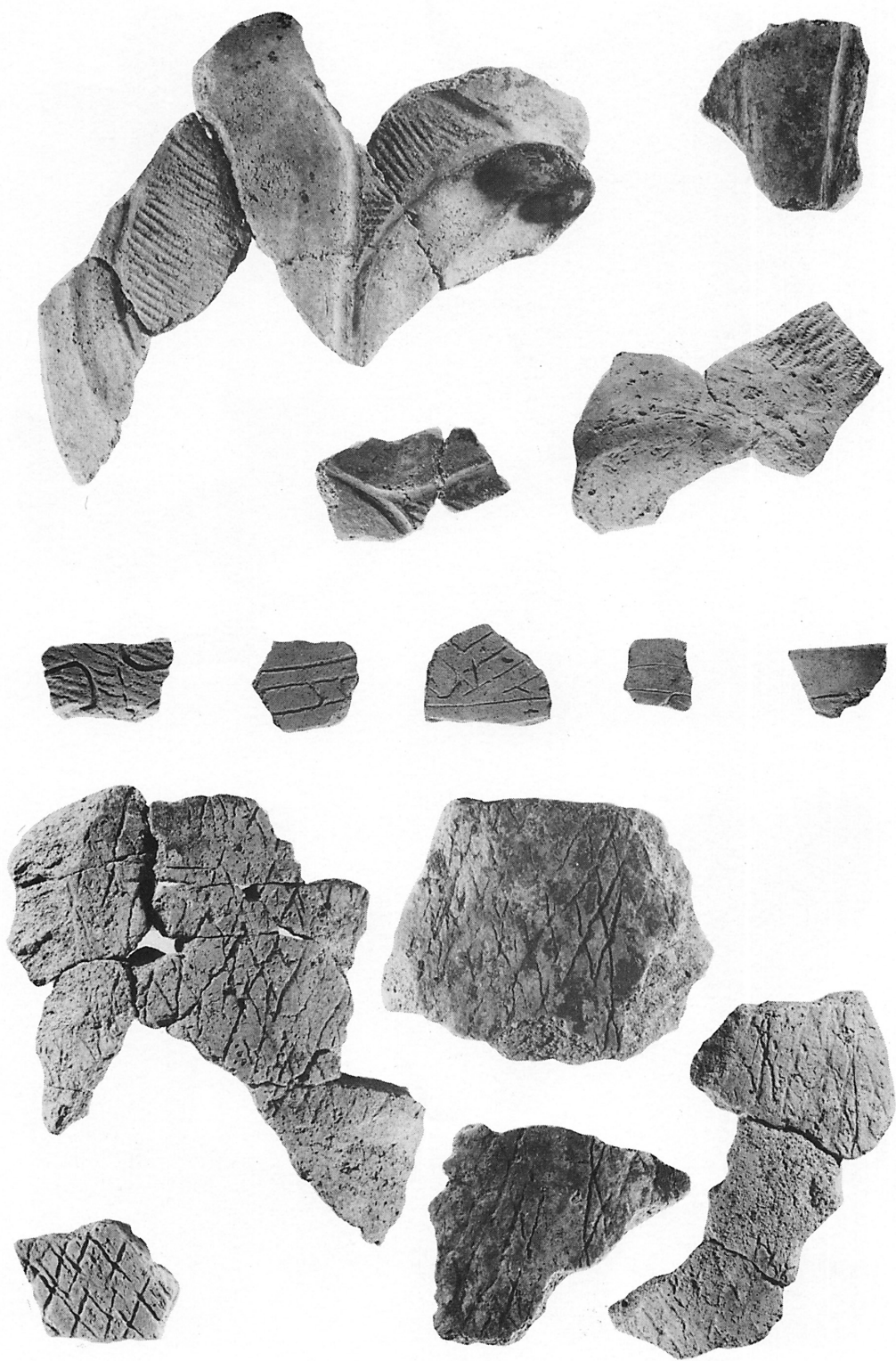
PL. 1 遺跡近景と調査風景



PL . 2 遺物出土状況



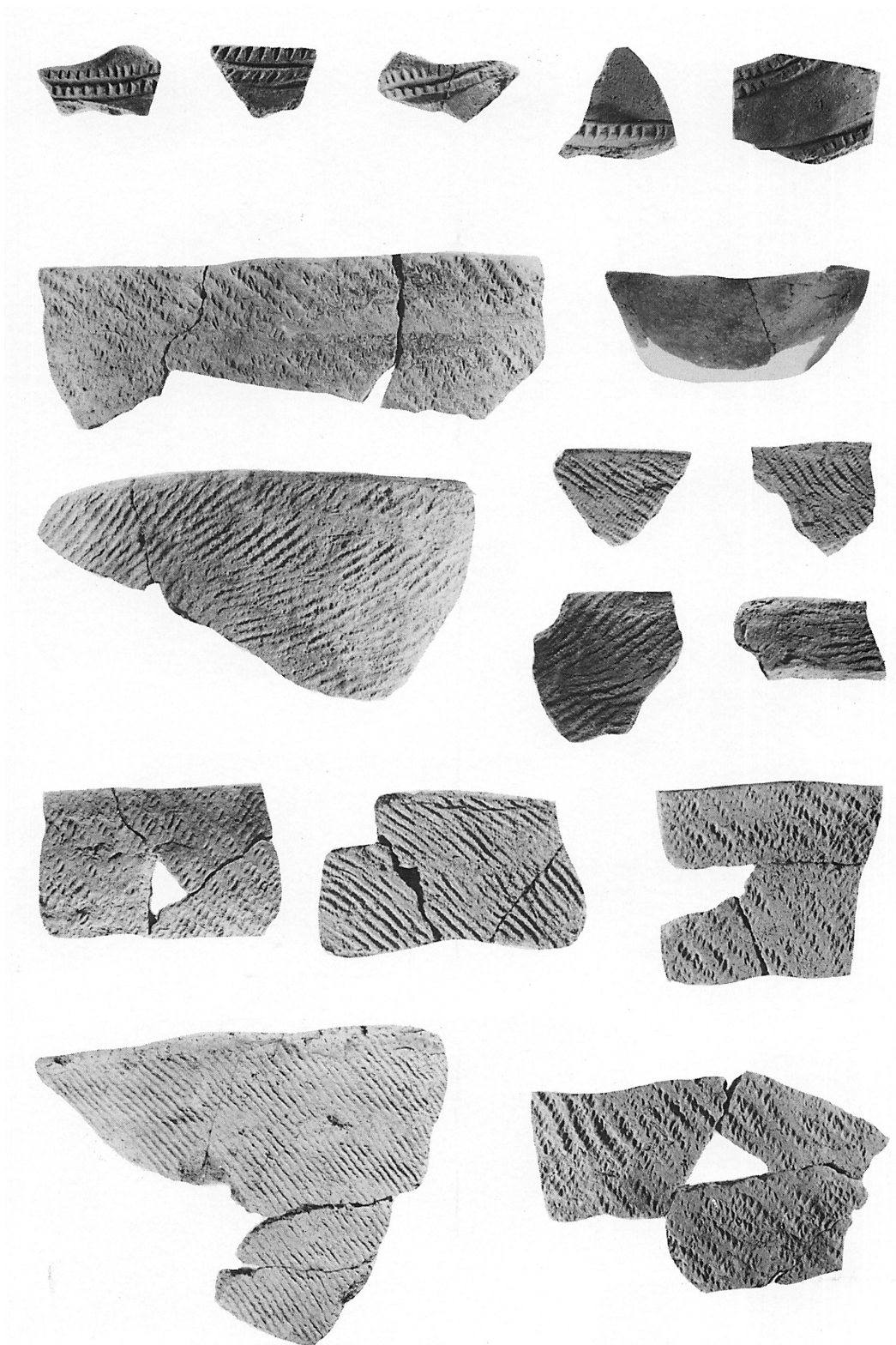
PL. 3 出土土器 1、2類



PL. 4 出土土器 3、4類



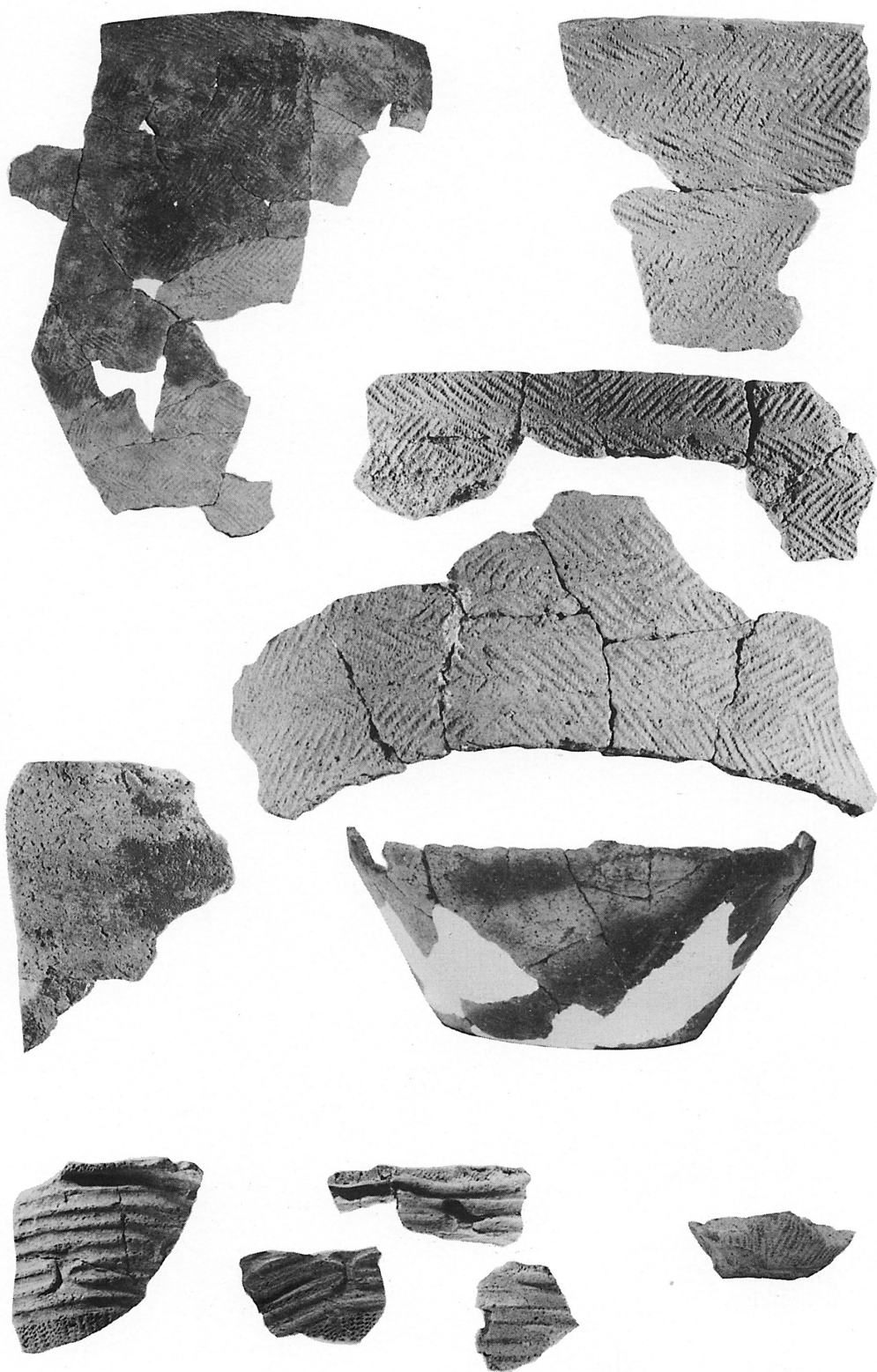
PL. 5 出土土器 5類



PL. 6 出土土器 5、6類



PL. 7 出土土器6類



PL. 8 出土土器 6、7類

槻ノ木遺跡



遺跡近景

IV-2 槻ノ木遺跡

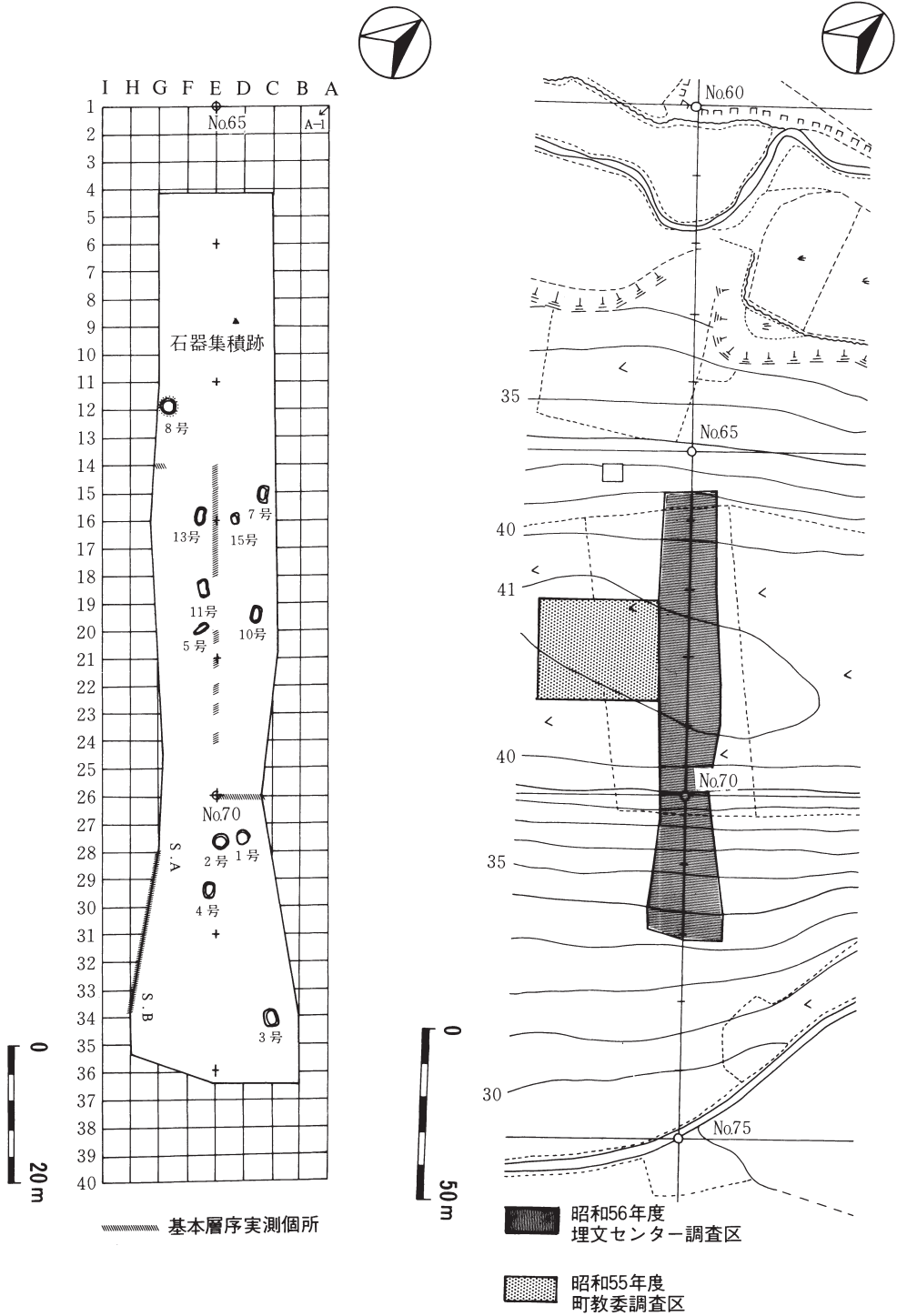


図1 遺跡地形図、グリッド・遺構配置図

1 基本層序

松山 力

槻ノ木遺跡は、鳥井平で野辺地湾に注ぐ近沢川の、河口から約1km上流の右岸側、中位段丘面上に位置している。

発掘の及んだ限りでの最下位層は、茶褐色で粘土質の上北中部火山灰層（ローム層）の上部で、これを基底に、千曳浮石層を伴う上北上部火山灰層、黒色土層が重なっている。これらの土層（地層）は、上から順に 層から 層までに区分でき、そのうち上方の 層から 層までが腐植質の黒色土類である。

層は、現耕作土を含む表土層で、おもに黒褐色土（10Y R2/3）よりなっている。粘性に乏しくしまっていて、粘土質の微細粒浮石がわずかに混じっていることが多い。厚さは10～20cmで、厚いところでは25cm前後、一部で最大50cm余りとなり2層（上から a、b層）に区分できる。この場合は a層が耕作土に相当し、暗褐色その他の下位の土塊やその他の雑多な混入物を含んでいる。なお本層中の一部にみられる火山灰層は、Rb - Sr 相関でみる限り、十和田 a 降下火山灰層及び苫小牧火山灰層のいずれにも属さないものである。

層は黒色（5Y R1.7/1）のやや粘土質の土層で、ふつう5～10cm、ところによって最大20cm程度の厚さであるが、その分布は断続的で、層と下位層との間にレンズ状にはさまれていることが多い。

層は黒褐色土層（10Y R3/2）で、層とともに粒子は細かいが層より粘土質で、浮石が散るように含まれ、また一部に炭化物が混じっている。厚さは普通5～20cm程度であるが、40cmをこすところがある。層と層、層を欠くところでは層と層の間に、厚さ4～12cm程度の厚さの褐色土層（10Y R4/4）がはさまれているところがある（間A層）。粘土質の火山灰で、粒径1～2mm程度の浮石粒を含んでいるが、何らかの原因（おそらく人為的に掘りあげられたもの）で下位層の一部が移動したものであろう。E - 14グリッドでは、この下に厚さ20cm以内の暗褐色土層（7.5Y R3/4）が存在し（間B層）、さらに間A層あるいは間B層の下位に間C層（にぶい黄褐色土 - 10Y R4/3）間D層（褐色土 - 10Y R4/4）がある。間B層はややローム質で浮石粒を含み、間C層は厚さ最大30cmで粒径2cm程度の大きい浮石粒や砂を含むほかに炭化物が多数含まれるしまりのない土層である。間D層は腐植土質褐色（10Y R4/4）火山灰層で粘性に乏しく、粒径2～10mの浮石を多量に含んでおり、20cm以内の厚さをもっている。間B・間C・間D層は間A層の下で順次横にずれるように堆積位置が変化しているので、一つ一つの最大層厚は大きいですが、間A層を含めた合計層厚は約40cmとなり、それほど厚くない。ここでは、～層が欠如しかつ間A層から間D層までの土層の特徴の変化は、層から層までの土層（地層）の特徴の推移を順不同にしたものによく似ているので、おそらく人為的に掘り上げられたものであろう。

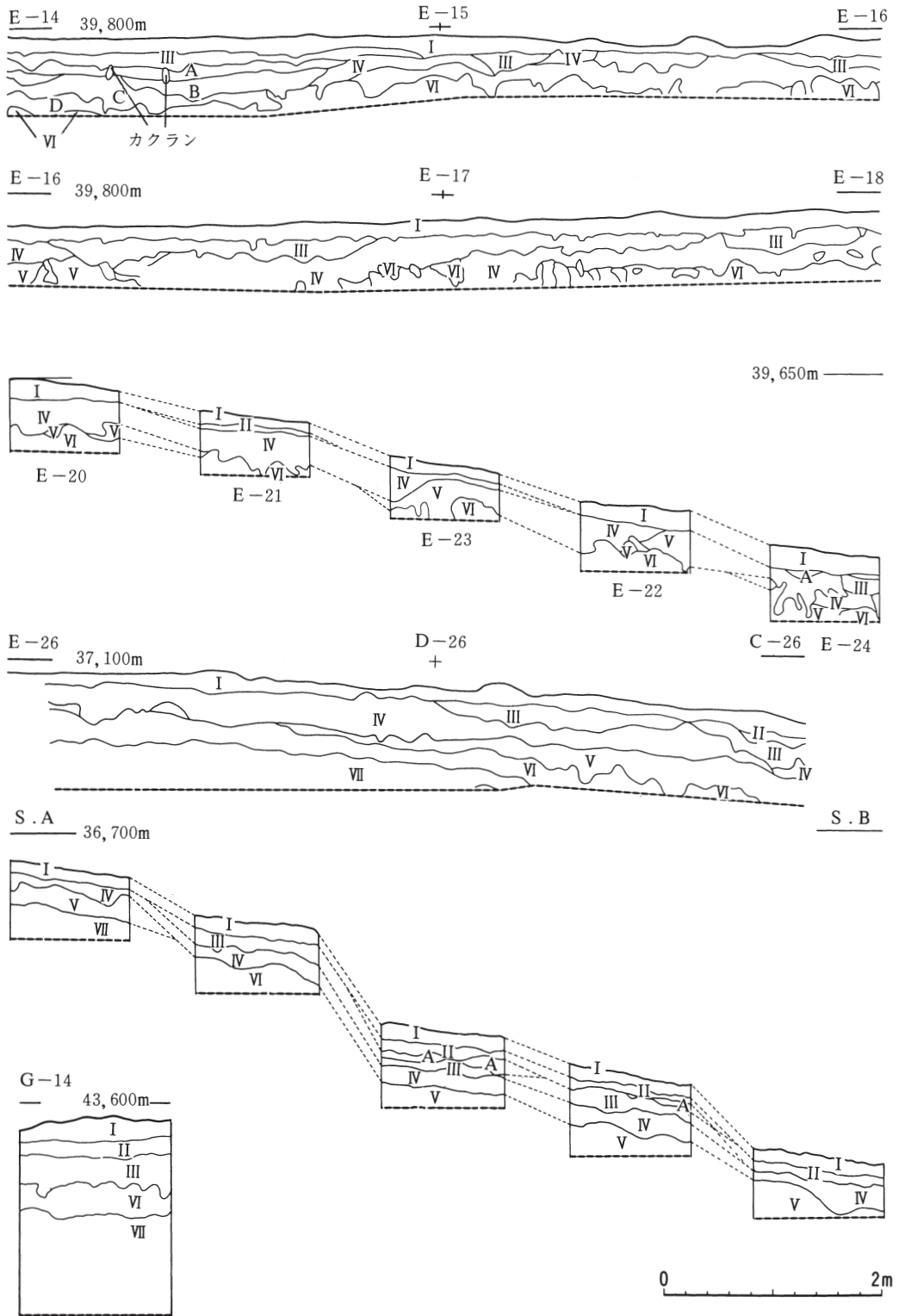


図2 基本層序

層は、暗褐色（10Y R3/3）の粘土質火山灰質の土層で、浮石が散らばって含まれる。下位の層と上位の層の漸移層にあたり、部分的に層に近い特徴、また部分的に層に近い特徴をもっている。20～40cm程度の厚さの部分が多いが、ところによっては欠如し、ところによっては柱状に層にくいこみ、上位の層あるいは下位の層との境界が波状で、また層との境界はかなり漸移的で判然としないことがある。

層は、粘土質で浮石粒の散らばる褐色（7.5Y R4/4）の火山灰層（ローム）で、上北上部火山灰層に相当する。厚さは20～50cmで、30～40cmが平均的な厚さである。

層は、上北上部火山灰層下部の千曳浮石層で、層の上北中部火山灰層とともに、すでになお層から層までの各層の厚さの変化が大きく、また、特に層、それについて層の欠如するところも多く、層もところによって欠如しているので、層を合わせた層厚は一層大きく変化するように思えるが、実際には層から層までを合わせた厚さはそれほど変化せず、70～100cm程度のところが多い。

2 検出遺構

(1) 土壌

検出した土壌は11基である。これらの土壌が確認されたのは第層～第層であるが、耕作や杉の植林等による人為的作用を受けているため、土壌の構築面は確認できなかった。また、土壌番号は調査順に付したが、第6・9・12・14号土壌は精査の結果、攪乱や風倒木痕であることが判明したため、記述を省略した。

第1号土壌（図3）

位置と確認 C・D - 27グリッドで、褐色土の落ち込みを確認した。

平面形・規模 開口部は180×152cm、底部は165×140cmの楕円形である。

壁・底 壁高は、北壁で82cm、南壁で48cmである。壁の立ち上がりは急で、北壁の一部と南東壁が袋状に掘り込まれている。

覆土 5層に分層できた。褐色～にぶい褐色土で大半を占められ、壁際に明黄褐色土（ローム質）、底面に暗褐色土（シルト質）が認められた。

出土遺物 第1層上位に自然礫が4点出土している。流れ込みによるものと思われる。

第2号土壌（図3）

位置と確認 D - 27グリッドで黒褐色～褐色土の落ち込みを確認した。

平面形・規模 開口部は160×133cmの楕円形で、底部は161×150cmのやや不整な円形である。

壁・底 壁高は北西壁で87cm、南東壁で51cmである。北壁を除き袋状に掘り込まれている。

覆土 7層に分層できた。大半が黒褐色～暗褐色土で占められている。

出土遺物 ない。

第3号土壙(図4、図8-1)

位置と確認 B・C-33・34グリッドで黒褐色土の落ち込みを確認した。

平面形・規模 開口部は221×170cmの楕円形で、底部は179×80cmの長楕円形ないしは隅丸長方形である。

壁・底 壁高は北西壁で106cm、南東壁で90cmである。北西壁は袋状に掘り込まれている。

覆土 7層に分層できた。上半部では黒色～黒褐色土(第1層～第5層)、下半部では暗褐色土(第6層)、褐色土(第7層)で占められている。

出土遺物 第3層上位と第6層から土器片がそれぞれ1点ずつ出土し、接合した。

第4号土壙(図4、図8-2)

位置と確認 E-29グリッドで黒褐色～暗褐色土の落ち込みを確認した。

平面形・規模 開口部は237×155cmの楕円形で、底部は206×90cmの隅丸方形である。

壁・底 壁高が北西壁で91cm、南東壁で55cmである。北西壁は袋状に掘り込まれている。

覆土 8層に分層できた。黒褐色～暗褐色土が大半を占めている。壁際にはローム質の褐色～黄褐色土が見られた。

出土遺物 第1層下位に自然礫が、第3層上位に土器片が1点出土した(図8-2)。

第5号土壙(図5)

位置と確認 E-19・20グリッドで暗褐色土の落ち込みを確認した。第1層下位から掘り込まれている。

平面形・規模 開口部は145×61cmの長楕円形、底部は106×32cmの長楕円形である。

壁・底 壁高は南端が67cmで、中央付近は79cm、北端のピット状に掘り込まれているところでは98cmである。壁・底面共にしまりなく、柔らかい。

覆土 暗褐色と褐色土の2層に分層できた。

出土遺物 ない。

第7号土壙(図5)

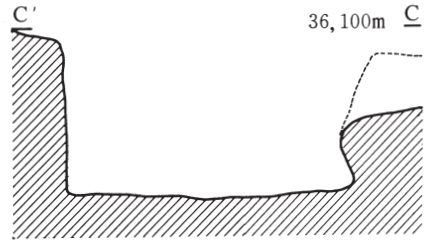
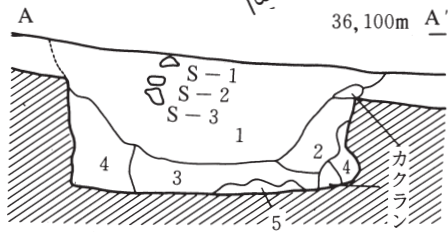
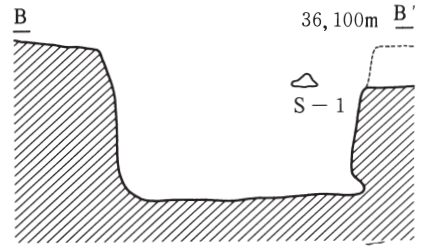
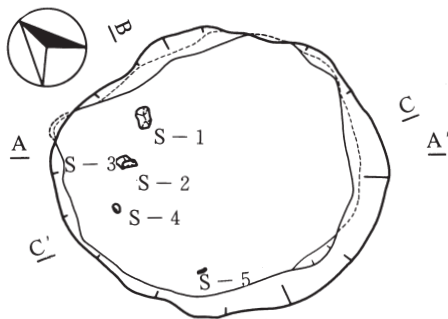
位置と確認 C-14・15グリッドで暗褐色土の落ち込みを確認した。

平面形・規模 開口部は200×76cm、底部は173×63cmの長楕円形である。

壁・底 壁高は49cmで壁の立ち上がりは急である。

覆土 2層に分層できたが、ほとんど第1層の暗褐色土で占められている。

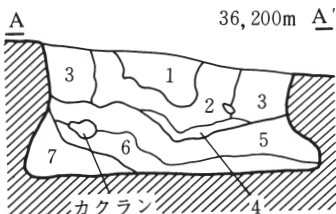
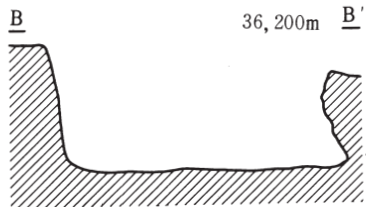
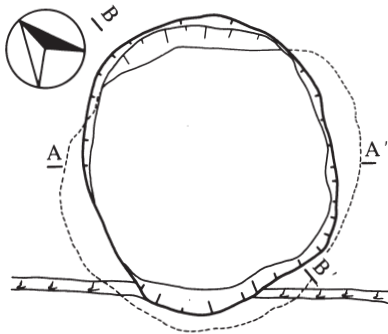
出土遺物 ない。



第1号土坑

土層注記

- 第1層 褐色土 (10YR 5/2) しまり・粘性なく、炭化物・ローム粒微量混入。
- 第2層 にぶい褐色土 (10YR 5/2) しまりある。ローム粒少量混入。
- 第3層 にぶい褐色土 (10YR 5/2) 硬く、しまり・粘性ある。炭化物・ローム粒混入。
- 第4層 明黄褐色土 (10YR 5/6) しまりなく、炭化物少量・ローム粒多量混入。
- 第5層 暗褐色土 (10YR 5/3) しまりないが、粘性ややある。ローム粒微量混入。

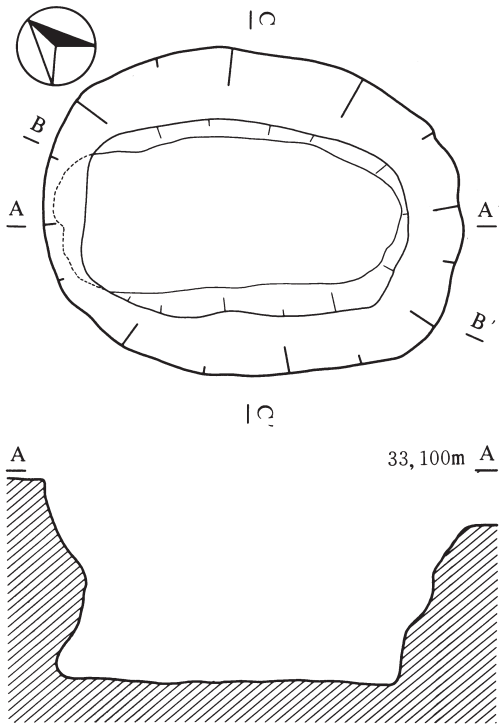


第2号土坑

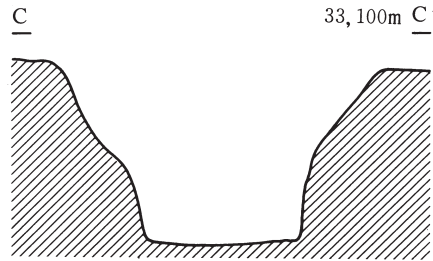
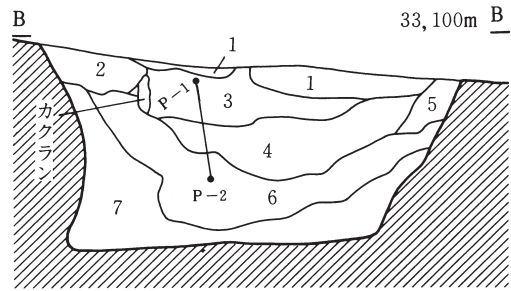
土層注記

- 第1層 黒褐色土 (5YR 5/2) 粘性弱い。若干の焼土粒と炭化物混入。
- 第2層 褐色土 (10YR 5/2) 粘性強く、しまりある。ローム質。
- 第3層 暗褐色土 (10YR 5/3) 粘性弱い。パーミス粒混入。
- 第4層 暗褐色土 (7.5YR 5/2) 粘性弱い。ローム粒少量混入。
- 第5層 黒褐色土 (10YR 5/2) 粘性強く、しまりある。炭化物・ローム粒混入。
- 第6層 暗褐色土 (10YR 5/3) 粘性強く、パーミス粒混入。
- 第7層 褐色土 (7.5YR 5/2) 粘性強く、ローム粒多量混入。

図3 土坑実測図(1)

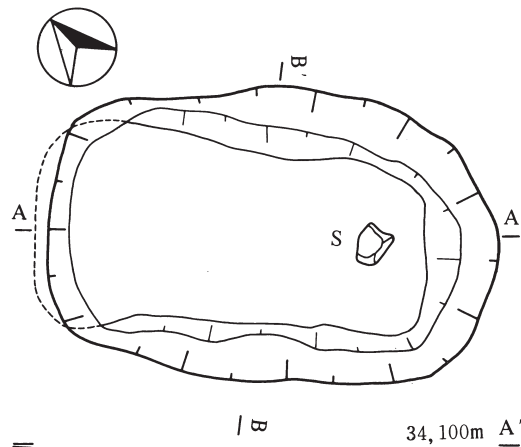


第3号土坑

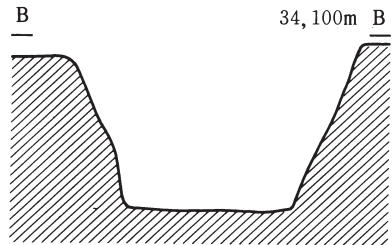


土層注記

- 第1層 黒色土 (10Y R 3/4) 硬く、しまりある。炭化物・ローム粒微量混入。
- 第2層 黒褐色土 (10Y R 5/6) 軟らかく、しまり・粘性ない。ローム粒微量混入。
- 第3層 黒褐色土 (10Y R 5/6) 硬く、しまりある。炭化物微量、ローム粒少量混入。
- 第4層 黒色土 (10Y R 3/4) 硬く、しまりある。炭化物微量、ローム粒多量混入。
- 第5層 暗褐色土 (10Y R 3/4) 軟らかく、しまりない。ローム粒多量混入。
- 第6層 暗褐色土 (10Y R 3/4) 硬く、しまりある。ローム粒多量混入。
- 第7層 褐色土 (10Y R 5/6) 硬く、しまりある。粘性強い。炭化物微量混入。ローム質。



第4号土坑



土層注記

- 第1層 黒褐色土 (10Y R 3/4) 硬く、しまり・粘性ない。炭化物・ローム粒混入。
- 第2層 暗褐色土 (10Y R 3/4) 軟らかく、しまり・粘性ない。炭化物・ローム粒混入。
- 第3層 暗褐色土 (10Y R 3/4) 軟らかく、しまり・粘性ある。ローム粒多量混入。
- 第4層 暗褐色土 (10Y R 3/4) 硬く、しまり・粘性ある。
- 第5層 褐色土 (10Y R 5/6) 硬く、しまり・粘性強い。ローム質。
- 第6層 褐色土 (10Y R 5/6) 硬く、しまりある。粘性ない。
- 第7層 黄褐色土 (10Y R 5/6) 基本層の第VI層と同じ。
- 第8層 褐色土 (10Y R 5/6) 軟らかく、しまりない。粘性強い。ローム粒多量混入。



図4 土坑実測図(2)

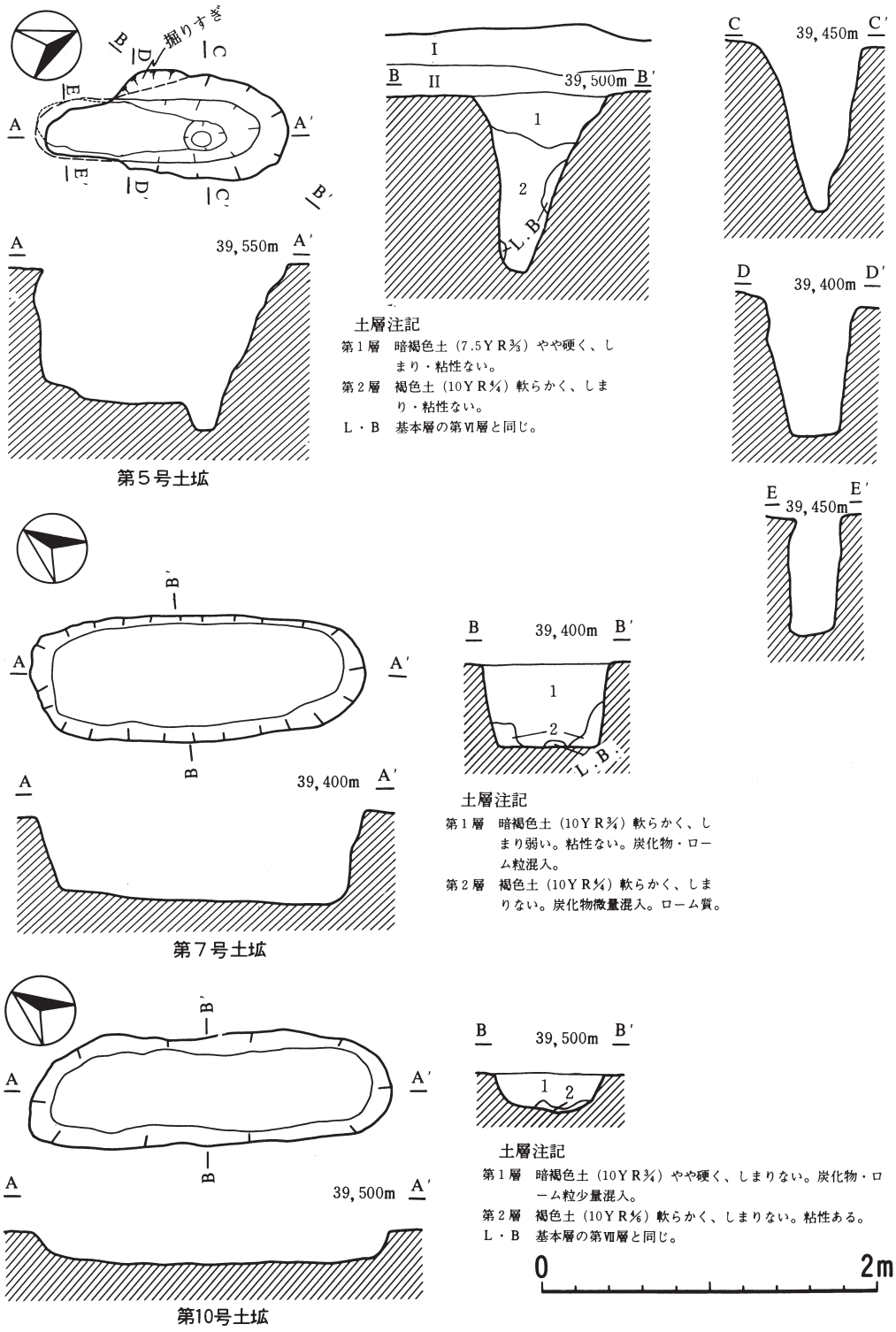


図5 土塚実測図(3)

第8号土壙（図6、図8 - 3、図9、図10 - 1、図11）

位置と確認 F - 11・12グリッドで黒褐色～暗褐色土の落ち込みを確認した。

平面形・規模 開口部は205×195cm、底部は190×187cmのほぼ円形である。

壁・底 壁高は85cmで、壁中位でいく分すぼまり、底部は外方へ張り出している。

覆土 6層に分層できた。黒褐色～暗褐色土が大半を占めている。

出土遺物 第1層から第4層にかけて遺物は多量に出土した。土器は第 群・第 群土器で、およそ140点である。位置的には全体に散在してはいるが、やや東壁寄りに多く、土壙外から流入または廃棄されたものと考えられ、土壙外のF - 11、F - 12グリッド出土の土器と接合しているものもある。復原できたのが2個体あり、やはり土壙外出土の土器片と接合している。いずれも第 群土器である。また石器は石鏃、石槍（未成品）、R - フレイク、磨石類など7点、フレイク、自然礫が28点出土している。

第10号土壙（図5、図10 - 2～4）

位置と確認 C - 19グリッドで暗褐色土の落ち込みを確認した。

平面形・規模 開口部が216×66cm、底部が182×46cmの長楕円形である。

壁・底 壁高は18cmで浅く、やや緩かに立ち上がる。

覆土 2層に分層できたが、ほとんどが第1層の暗褐色土で占められている。

出土遺物 第1層から土器片が3点出土している。

第11号土壙（図7）

位置と確認 E - 18グリッドで黒褐色土の落ち込みを確認した。

平面形・規模 開口部で196×67cm、底部が182×54cmの隅丸方形である。

壁・底 壁高は20cmで浅く、急な立ち上がりをみせている。

覆土 2層に分層できたが、ほとんどが第2層の暗褐色土で占められている。

出土遺物 ない。

第13号土壙（図7、図10 - 5～7）

位置と確認 E - 15・16グリッドで黒褐色土の落ち込みを確認した。

平面形・規模 開口部が237×115cm、底部が213×64cmの長楕円形である。

壁・底 壁高は67cmで、急な立ち上がりをみせている。

覆土 底面にまで達する大きな攪乱が見られたが、4層に分層できた。黒褐色～暗褐色土が大半を占めている。

出土遺物 確認面から1点、底面直上から1点、底面に横転した土器が1個体つぶれて出土した。いずれも第 群土器である。

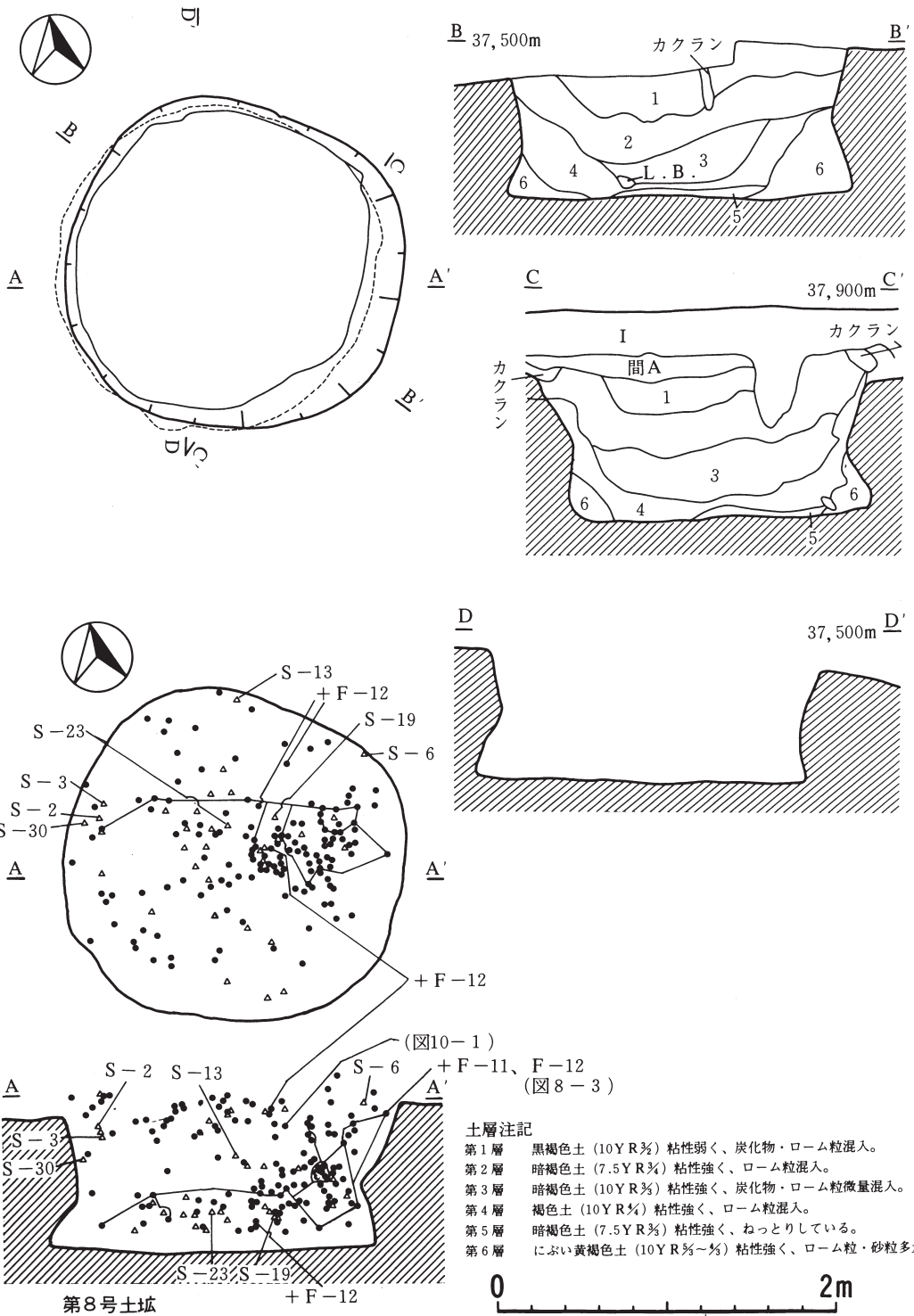
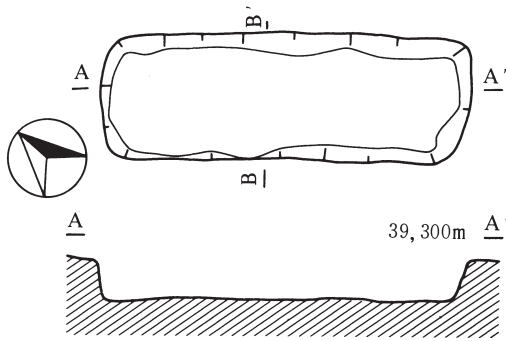
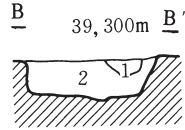


図6 土坑実測図(4)

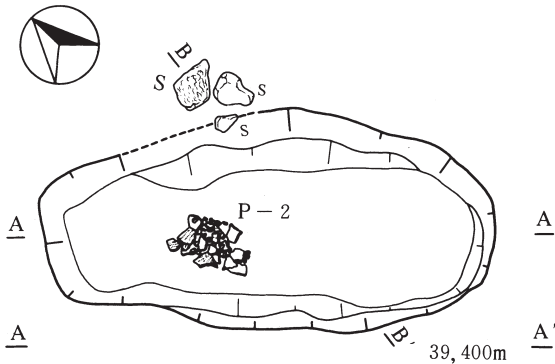


第11号土塚

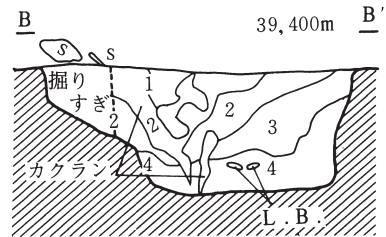


土層注記

- 第1層 黒褐色土 (10YR 2/4) しまり・粘性ある。パーミリス粒混入。
- 第2層 暗褐色土 (10YR 3/4) しまり・粘性ある。炭化物微量混入。パーミリス粒混入。

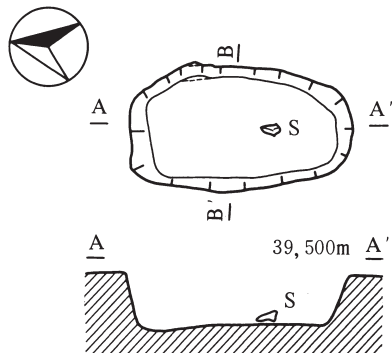


第13号土塚

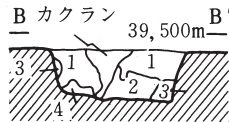


土層注記

- 第1層 黒褐色土 (10YR 2/4) 軟らかく、しまりない。パーミリス粒混入。
- 第2層 暗褐色土 (10YR 3/4) やや硬く、しまりある。パーミリス粒混入。
- 第3層 暗褐色土 (10YR 3/4) やや軟らかく、しまり弱い。パーミリス粒混入。
- 第4層 褐色土 (10YR 4/4) しまり・粘性ある。パーミリス粒混入。ローム質。



第15号土塚

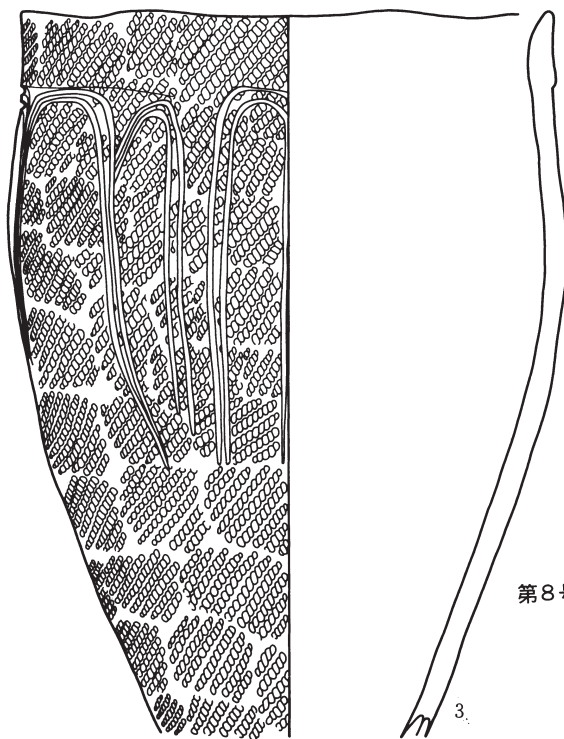
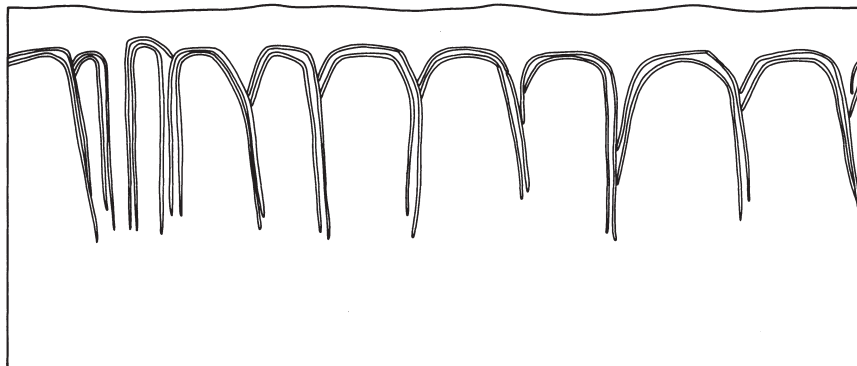


土層注記

- 第1層 暗褐色土 (10YR 3/4) しまり・粘性ない。炭化物・パーミリス粒混入。
- 第2層 褐色土 (7.5YR 4/4) 粘性強い。パーミリス粒混入。
- 第3層 褐色土 (10YR 4/4) 粘性強い。ローム質。



図7 土塚実測図(5)



第8号土坛(1~4層)+F-11区+F-12区

0 10cm

图8 土坛内出土土器(1)

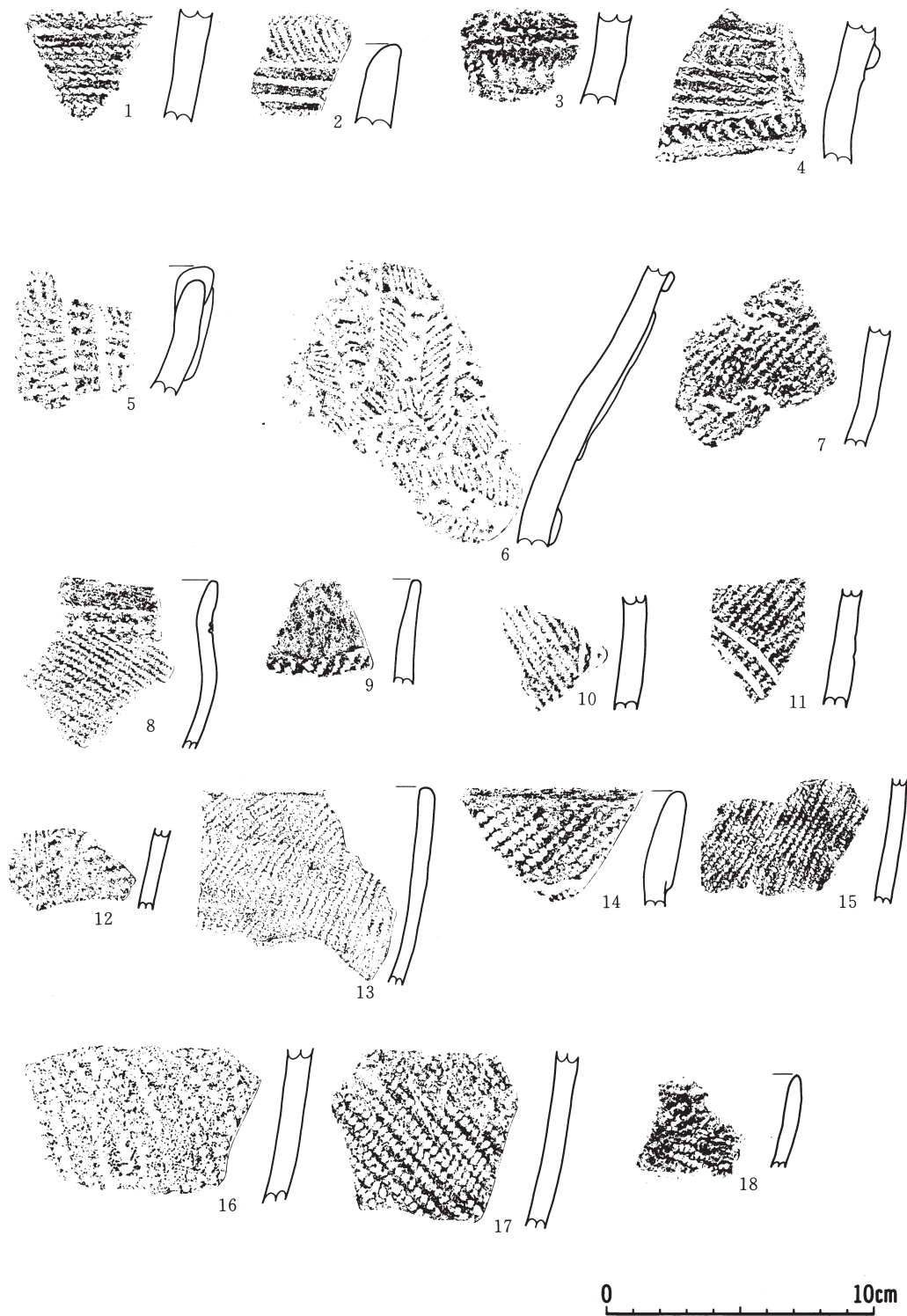
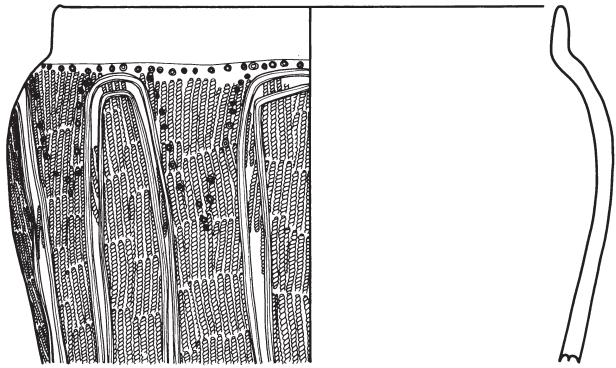
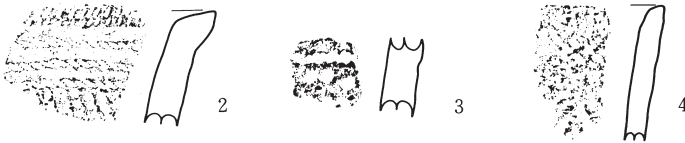


图9 土坛内出土土器(2)



第8号土坑 (1層) + F-12区

1

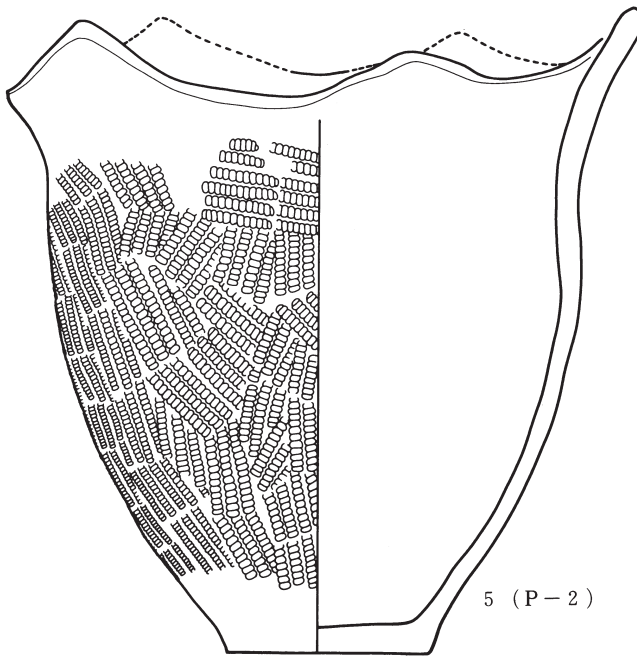


第10号土坑 (2~4)

2

3

4



第13号土坑 (5~7)

5 (P-2)



6 (確認面)



7 (P-1)



图10 土坑内出土土器(3)

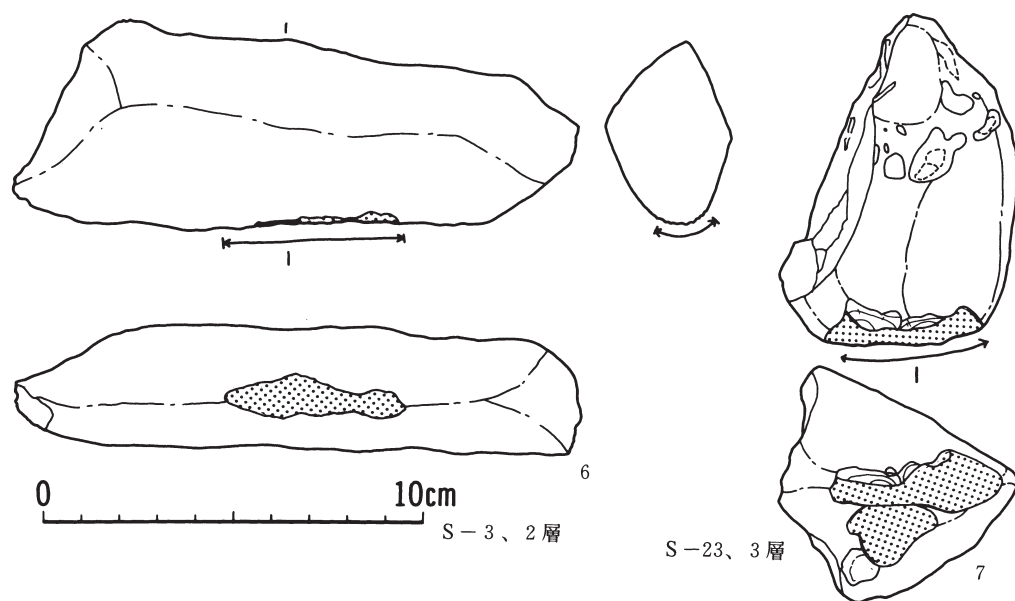
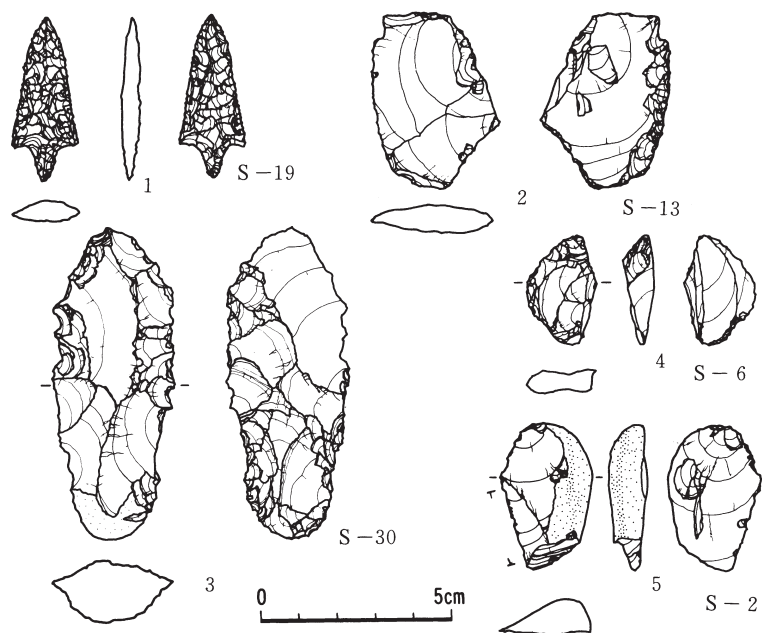


图11 第8号土坑出土石器

第15号土壌（図7）

位置と確認 D - 15・16グリッドで暗褐色土の落ち込みを確認した。

平面形・規模 開口部は117×66cm、底部は99×54cmの楕円形である。

壁・底 壁高は32cmで、急な立ち上がりをみせている。

覆土 4層に分層できたが、大半が暗褐色土（第1層）で占められている。

出土遺物 中央からやや南寄りの底面直上（第2層）に自然礫が1個出土した。

（2）土壌小結

検出した11基の土壌は、形態・規模などの特徴から次のように分類することが出来る。

A類 平面形の上縁が円形ないし、円に近い楕円形で、深い土壌

1. 断面フラスコ形 - 第2号、第8号
2. 断面ピーカー形 - 第1号

B類 平面形の上縁が楕円形で、壙底部が隅丸長方形である土壌……第3号、第4号、第13号

C類 平面形の上縁が楕円形と隅丸長方形である土壌……第7号、第10号、第11号、第15号

D類 平面形の上縁が楕円形で、溝状である土壌……第5号

また、主軸方位についてみると（図12）ほとんどの土壌がN - 27° - W ~ N - 75° - Wにおさまり、N - 27° - W ~ N - 55° - Wに集中している。ただし、A類のほぼ円形の第8号土壌については計測せず、第1号、第2号土壌については、B類の第3号、第4号土壌と近接しているためあえて計測した。

また、堆積状況についてみると、A・B・D類の各土壌は自然堆積、C類の土壌は浅いが、人為堆積の様相を示していると思われる。

A類の土壌は貯蔵穴と考えられる。ただし、第1号・第2号土壌は立地的にはB類の土壌と一群を形成していた可能性が考えられる。

B類の土壌は、緩斜面上にあり、土壌の主軸は等高線に直交するように立地している。関東・中部地方に多く見られる落し穴に類似し、今村分類のD型（1973）^{注1} 宮澤・今井分類のA類（1976）^{注2}に相当する。

C類の土壌は、台地の平坦地に立地している。三内丸山（ ）遺跡（青森市）^{注3}で、検出された土壌墓に形態・規模・堆積状況がよく似ている。三内丸山（ ）遺跡では、ほぼ南北に主軸をもつ56基の土壌が直線的に並列している。本遺跡の場合そのような傾向は見られないが、土壌の主軸は、ほぼ一致して、土壌墓的要素が強いと思われる。

D類の土壌は、県内で溝状ピットと呼ばれている土壌に類似している。

注1 今村啓爾 『霧ヶ丘』武蔵野美術大学考古学研究会1973年

2 宮澤 寛・今井康博 『縄文時代早期後半における土壌をめぐる諸問題 - いわゆる落し穴について』『調査研究集録』1976年

3 青森県教育委員会 『近野遺跡・三内丸山（ ）遺跡発掘調査報告書』1976年

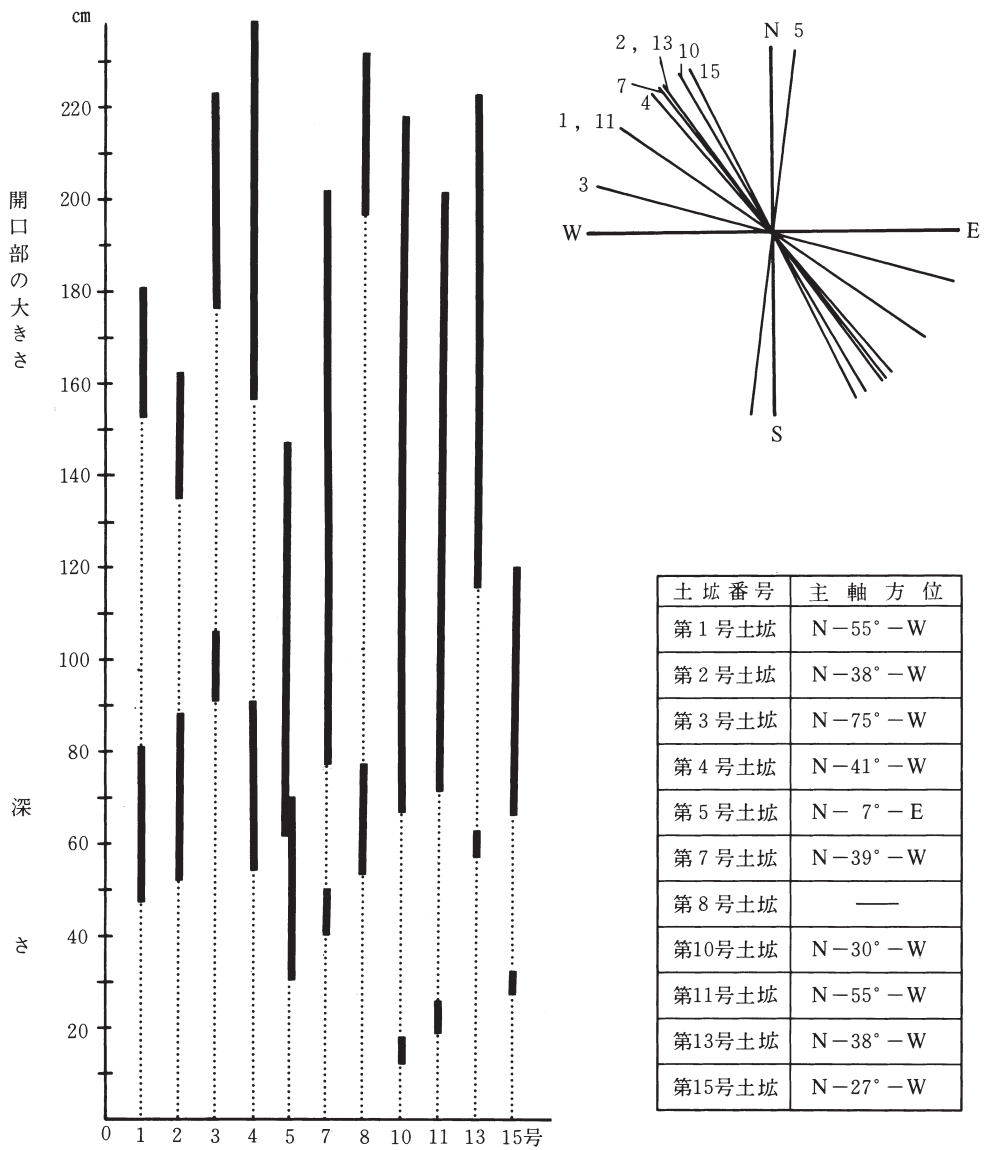


図12 土塚の規模と主軸方位

(3) 石器集積跡 (図31~36)

D - 8 グリッドの第 層から29点の打製石斧、あるいは大形の筧状石器と考えられる石器がまとめて出土した。このうち26点 (S - 1 ~ 6、8 ~ 26、29) が斜めに集積した状態で出土した。S - 7、27は集積のすぐそばに、S - 28は西へ50cmほど離れて出土した。

集積下には、遺構は確認されなかった。周辺から出土した土器は、縄文時代前期から晩期にかけてのもので、どの時期に相伴しているかは、明確にすることができなかった。ただし、量的には、縄文時代中期末葉 (第 群土器) の土器が多く出土したので、当該時期に相伴する可能性は高い。

3 出土遺物

(1) 縄文時代の出土遺物

土 器

縄文時代の土器が整理用平箱 (60×36×16cm) で、約7箱分出土した。出土土器の約7割が台地中央のC ~ F - 10~16グリッドで囲まれた地域から、残り約3割は他地域に散在して出土した。層位的には、第 層から第 層にかけて混在して出土し、層と土器との関係は把握できなかった。時期的には縄文時代前期末葉から晩期の土器が見られる。これらの土器を次のように分類した。

第 群土器 縄文時代前期末葉 (円筒下層 d 式)

第 群土器 縄文時代中期前葉 (円筒上層 a 式・b 式)

第 群土器 縄文時代中期末葉 (大木系)

第 群土器 縄文時代後期初頭 (十腰内 式)

第 群土器 縄文時代晩期

第 群土器 (図13 - 1 ~ 19)

縄文時代前期末葉の円筒下層 d 式に比定される土器である。破片のみで、全体の器形・特徴を知り得るものはない。

口唇が肥厚するものはない。口唇には竹管による刺突や、絡条体の圧痕が見られるものがある。

口縁部文様帯は3~5cm内外で、口縁部文様には絡条体圧痕文、撚糸圧痕文が、口縁に対し平行して施文されているものが多い。また口縁部文様帯をもたず、口縁部から撚糸文が施文されているもの (図13 - 10) や、縄文が施文されているもの (図13 - 11) もある。口縁部文様帯と胴部文様には、撚糸文、木目状撚糸文、多軸絡条体撚糸文がある。

胎土には繊維が含まれる。

第 群土器

縄文時代中期前葉の円筒上層 a 式、b 式に比定される土器である。量的には、第 群土器の次に多く出土しているが、復原されたものではなく、全体の器形・特徴を知り得るものはない。

第 1 類 (図13 - 20 ~ 23)

円筒下層 d 式から円筒上層 a 式に至る過渡期のものと考えられる土器である。ここでは円筒上層 a 式の最も古い時期に属するものと考え、本類に含めた。

口唇が肥厚するものと、肥厚しないものがある。口唇には絡条体圧痕文、撚糸圧痕文、斜行縄文などが見られる。波状口縁のものが 1 例あり、波状部分には小突起が見られる(図13 - 21)。

口縁部文様帯には、絡条体圧痕文、撚糸圧痕文のいずれか、または、混用して施文されている。撚糸圧痕文は 2 本 1 組の撚紐を、口縁に対し平行に押圧されるのが一般的であるが、縦位に押圧されているものもある。

胴部文様帯との境に隆帯を巡らしているものがある。隆帯上には刺突文や撚糸圧痕文が見られる。

胴部文様には、撚糸文が見られるもの、斜行縄文が見られるものがある。

胎土には繊維が含まれているものと含まれないものがある。

第 2 類 (図14・図15)

円筒上層 a 式に比定される土器である。第 1 類にくらべて、口唇・口縁の突起・隆帯文の発達が目立っている。

口唇は肥厚し、撚糸圧痕文が見られる。

図14 - 2 ~ 10は、2 ~ 3 本の撚紐を 1 組として数段口縁に対して平行に押圧施文し、さらに、各間に短線の撚糸圧痕文を施文している。短線の撚糸圧痕文は、先の撚糸圧痕文に対して垂直か斜めに施文されるものが多い。図14 - 6・7は短線の撚糸圧痕文が斜交して、網目状に施文されたもの、図14 - 8・9・13は波状に施文されたものである。

隆帯文は口縁部文様帯に見られ、口縁を縁どるように巡らされているもの、胴部文様帯との間に巡らされているもの、渦巻状に見られるものなどがある。隆帯上には撚糸圧痕文が見られる。また、隆帯文の間には、撚糸圧痕文が隆帯に沿って施文されたり、渦巻状に施文されているものがある。

図14 - 12は王冠状突起、図15 - 9は弁状突起の破片である。

胎土には繊維が含まれないものが多く、まれに極少量の繊維を含むものがある。

第 3 類 (図9 - 6、図15 - 6・8)

円筒上層 b 式に比定される土器である。量的には少ない。隆線文の間に馬蹄形の短かい撚糸圧痕文が施文されている。図9 - 6は大形の扇状突起の部分である。

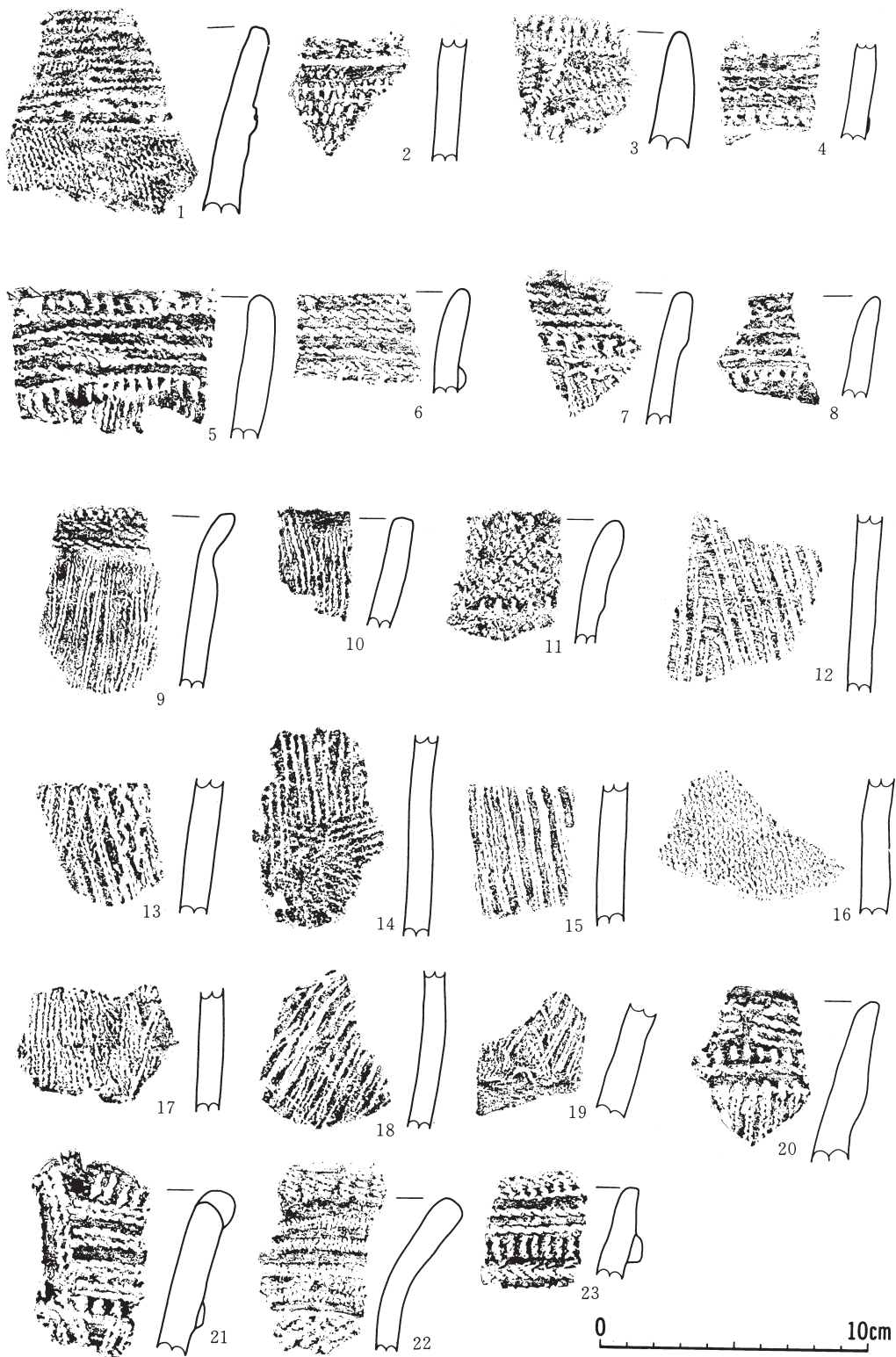


图13 遺構外出土土器拓影図(1)



图14 遺構外出土土器拓影图(2)

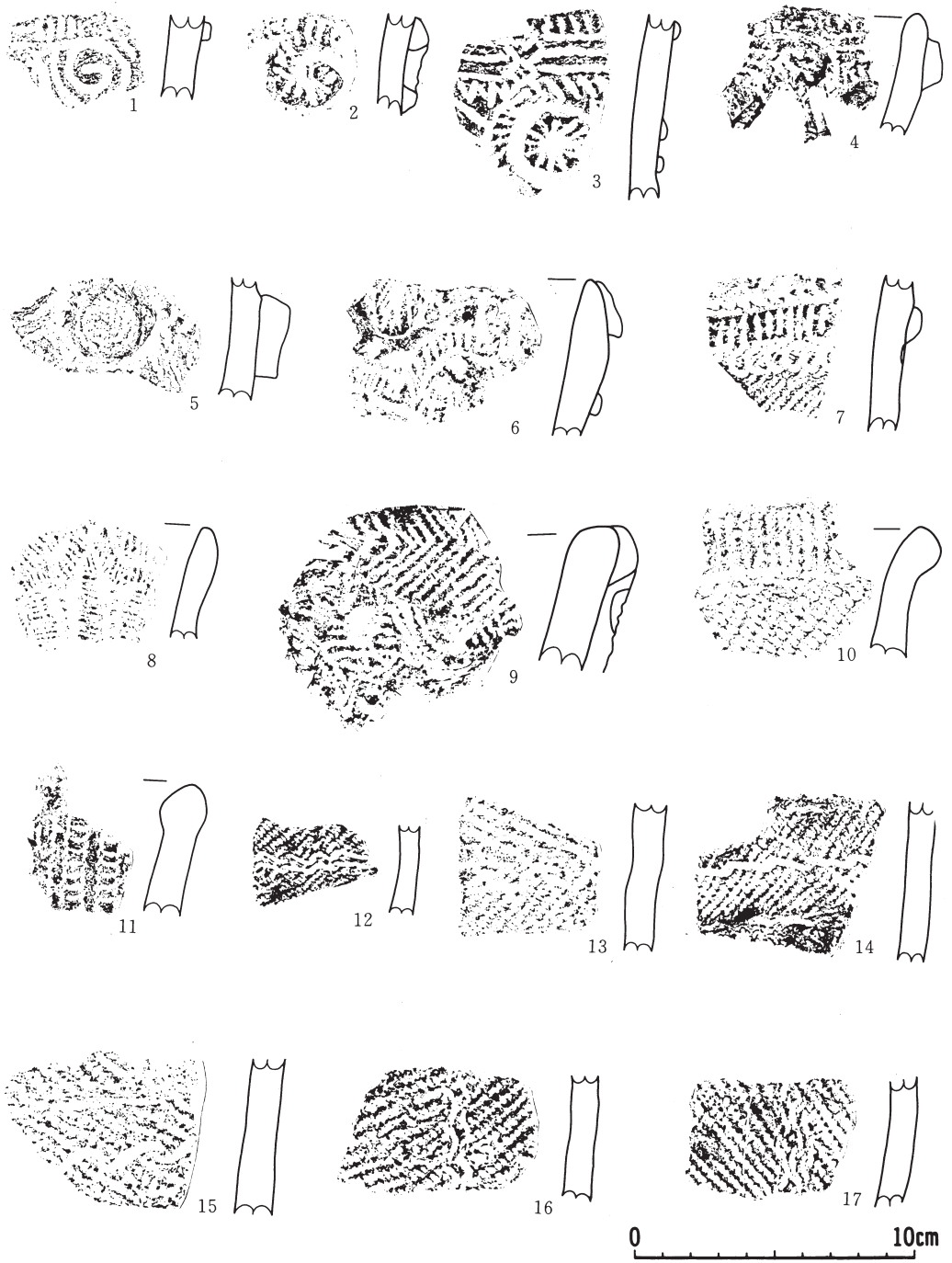


图15 遺構外出土土器拓影图(3)

第 群土器

縄文時代中期末葉の大木系土器を一括した。文様構成から、次のように細分することができる。

第 1 類 口縁部が無文で、地文に円形刺突文・沈線文が見られる土器

第 2 類 口縁部から縄文が施され、円形刺突文・沈線文が見られる土器

第 3 類 第 1 類・第 2 類に属する胴部破片

第 4 類 磨消縄文の見られる土器

第 5 類 縄文のみの土器

第 1 類土器

a 円形刺突文が見られる土器（図 9 - 8、図 16 - 1）

図 9 - 8 と図 16 - 1 は同一個体と思われる。口縁は平縁で、胴部でふくらみ、頸部でくびれ、口縁が若干外反する器形である。口縁は折り返し状を呈し、その部分が無文帯となっている。胴部文様は斜行縄文が施され、円形刺突文は無文帯との境に連続して加えられている。

b 沈線文が見られる土器（図 16 - 2 ~ 4、8・9）

図 16 - 2 は横位の沈線文の下に、幅の狭い長楕円形状の懸垂文が、図 16 - 4 は 1 条の懸垂文が見られる。なお、図 16 - 3 は無文帯と地文とを区画する沈線文が見られることから本群に含めたが、器形が他の土器と異なり、疑問の残る土器である。

図 16 - 8・9 は、口縁が折り返し状を呈し、その部分が無文帯となっている。地文には幅の広い逆「U」字文が見られる。

c 円形刺突文と沈線文が混用されている土器（図 10 - 1、図 16 - 7、図 20 - 1）

図 10 - 1 は平縁で、口縁はわずかに外反し、頸部でくびれ、胴部上半（肩部）が外へ張り出す器形である。最大径は胴部上半にある。頸部から上位は無文帯で、地文には幅の広い逆「U」字文が見られる。円形刺突文は、無文帯との境と逆「U」字文の外側に見られる。

図 16 - 7 と図 20 - 1 はともに平縁で、口縁が直立気味に立ち上がる器形である。胴部上半に幅の広い無文帯が見られ、無文帯と地文との境には、円形刺突文が連続して巡らされている。図 16 - 7 では、小さな瘤状の貼り付けが見られる。図 20 - 1 は 2 条の懸垂文が、図 16 - 7 は幅の広い逆「U」字文が施文されている。

d 把手の見られる土器（図 20 - 2）

胴部中央付近で最もふくらみ、胴部上半がすぼまり、直立気味の口縁をもつ広口壺である。口縁はゆるい波状を呈し、2 個の突起をもつ。口縁部には細い隆帯を巡らしている。また、口縁部から底部へ垂下する 2 列の隆帯が見られ、ちょうど突起部の下方に位置している。この隆帯をつないで、口縁と肩部に 2 個 1 対の把手が付けられている。胴部上半は幅の広い無文帯が

見られ、胴部下半は区画された逆「U」字文が見られる。区画外の縄文が磨消されている。

第2類（図8 - 3、図16 - 5・10・14、図20 - 3）

口縁から縄文が施文されている土器で、器形・文様構成は第1類に類似している。平口縁が多く、波状口縁は少ない。口縁は折り返し状のものが多い。

図16 - 5は小さな突起をもっていて、栓抜状の沈線文が口縁直下から施文されている。

第3類（図16 - 12・13・15、図17 - 1～11）

第1類・第2類に属する胴部破片で、懸垂文、逆「U」字文、円形刺突文が見られる。

図17 - 2・3は2条の沈線で波状に施文されている。

第4類（図17 - 12～17、図18 - 1・2）

縄文を施文した後に、沈線による曲線文を施文し、磨消しが行なわれている。細片のため、全体の文様構成は不明である。

図17 - 12は口縁が若干内湾する器形と思われる。

図18 - 1は胴部で若干ふくらみ、口縁部がゆるく外反する。図18 - 2は1より外反の度合いが弱い。

地文の縄文は、単節縄文である。

第5類（図10 - 5、図18 - 3～16、図21、図22、図23 - 1～3）

a 縄文のみ施文される土器

折り返し口縁が見られるものと、見られないものがある。折り返し口縁の見られるものには、口縁部が幅の狭い無文帯をもつものと、無文帯が見られないものがある。

復原または図上復原できた土器の大半は、第1類・第2類土器と類似する器形であり、本類のほとんどが、第1類・第2類土器と共伴しているものと考えられる。

図10 - 5は5個の突起をもつ波状口縁で、胴部で若干ふくらみ、口縁が外反する器形である。口縁部に幅の狭い無文帯が見られ、胴部上半から底部近くまで単節RLの斜行縄文が施文されている。この土器には第2類土器（図10 - 7）が共伴している。

b 底部

底面に網代痕が見られるものが多い。図21 - 5はすだれ状圧痕が見られるもので、1点出土した。

以上、第群土器を五つに分類したが、第1類～第3類土器は中の平式に、第4類土器は大木10式に併行する土器に比定できる。第5類土器の大半は中の平式に共伴すると思われる。

第群土器（図19 - 1～3、図23 - 4）

縄文時代後期初頭の十腰内式に比定される土器である。図23 - 4は2条の沈線文の間に、刺突が加えられている。底面には3条の沈線（途中で1条ふえる）で円形に施文されている。

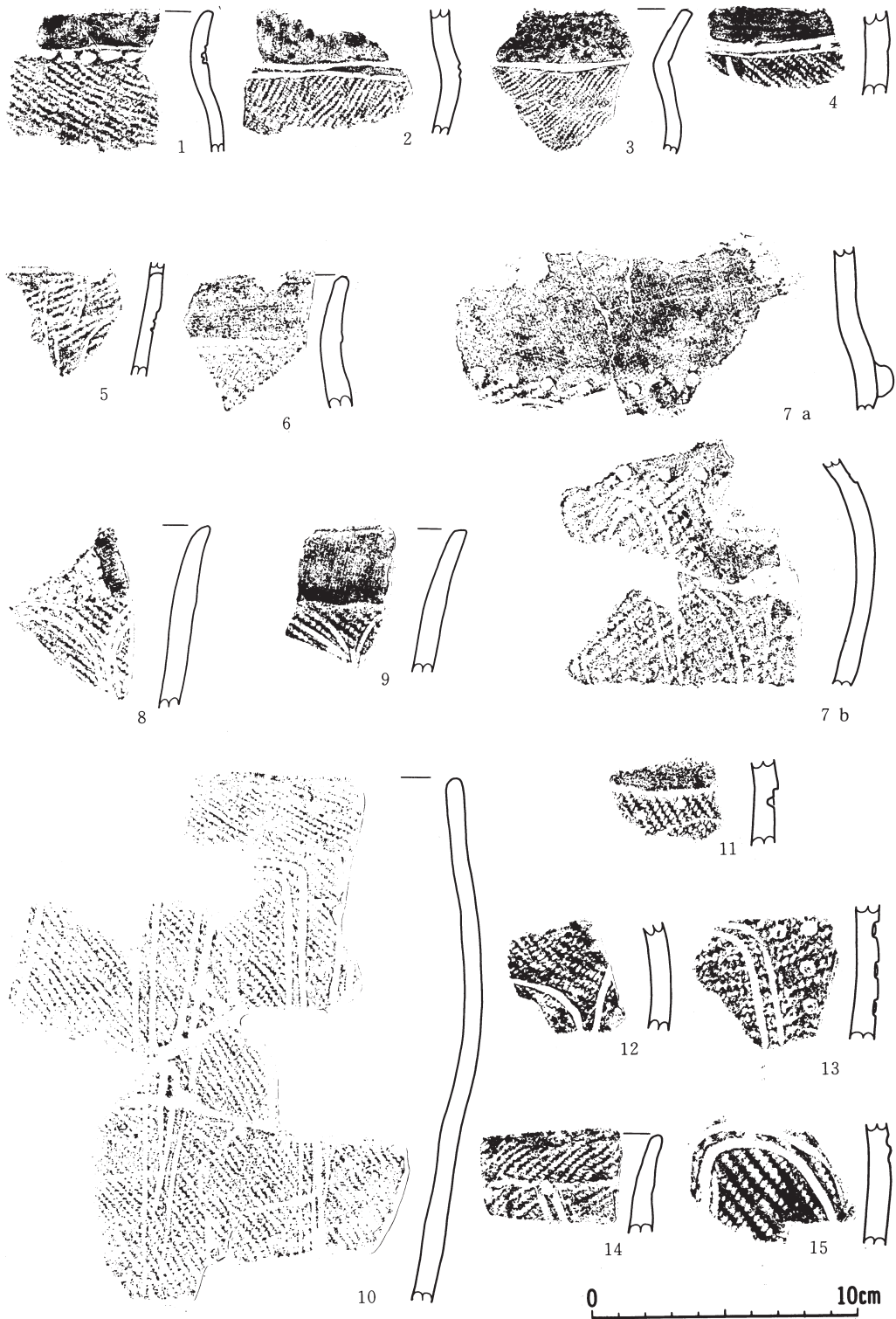


图16 遺構外出土土器拓影图(4)

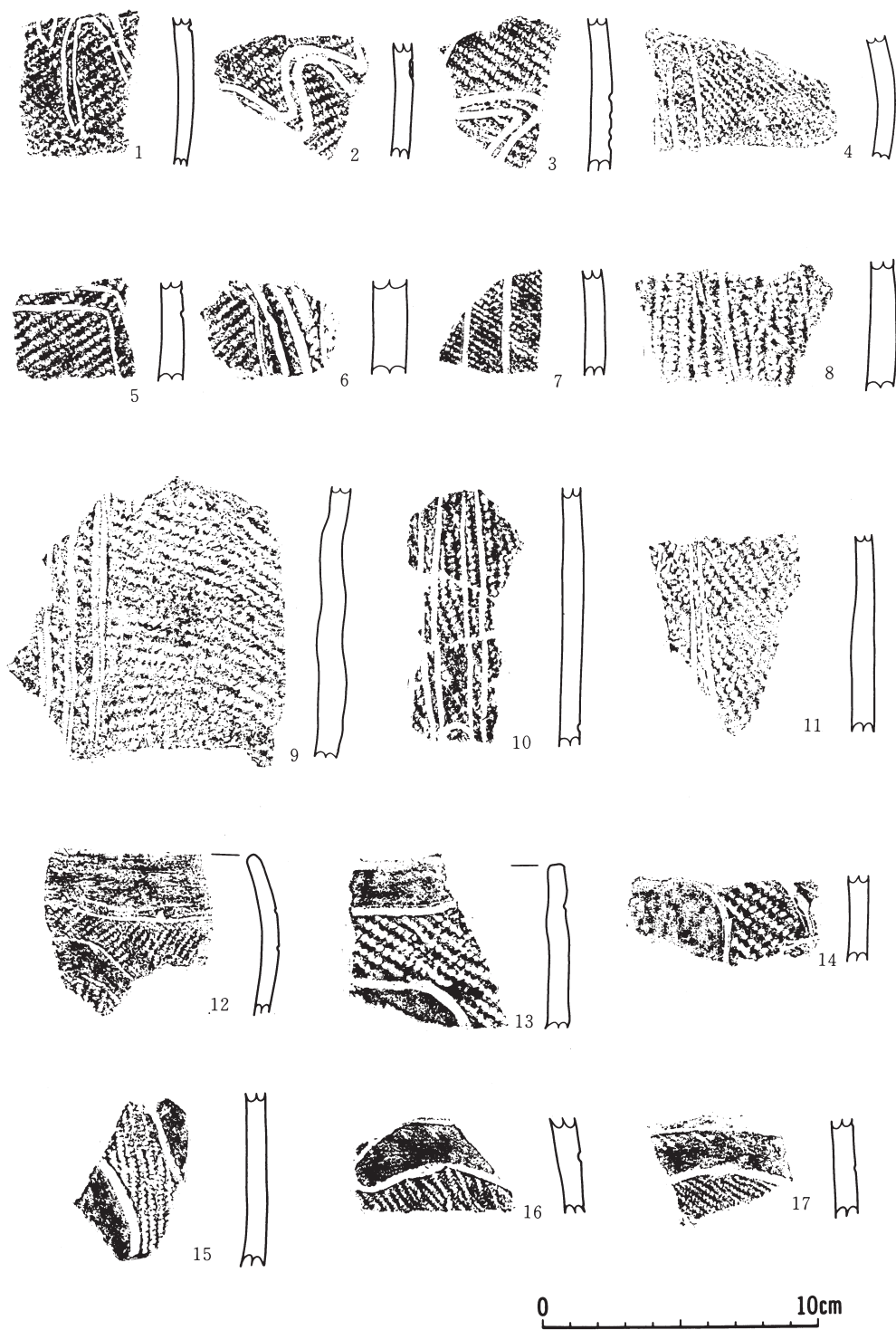


图17 遺構外出土土器拓影图(5)

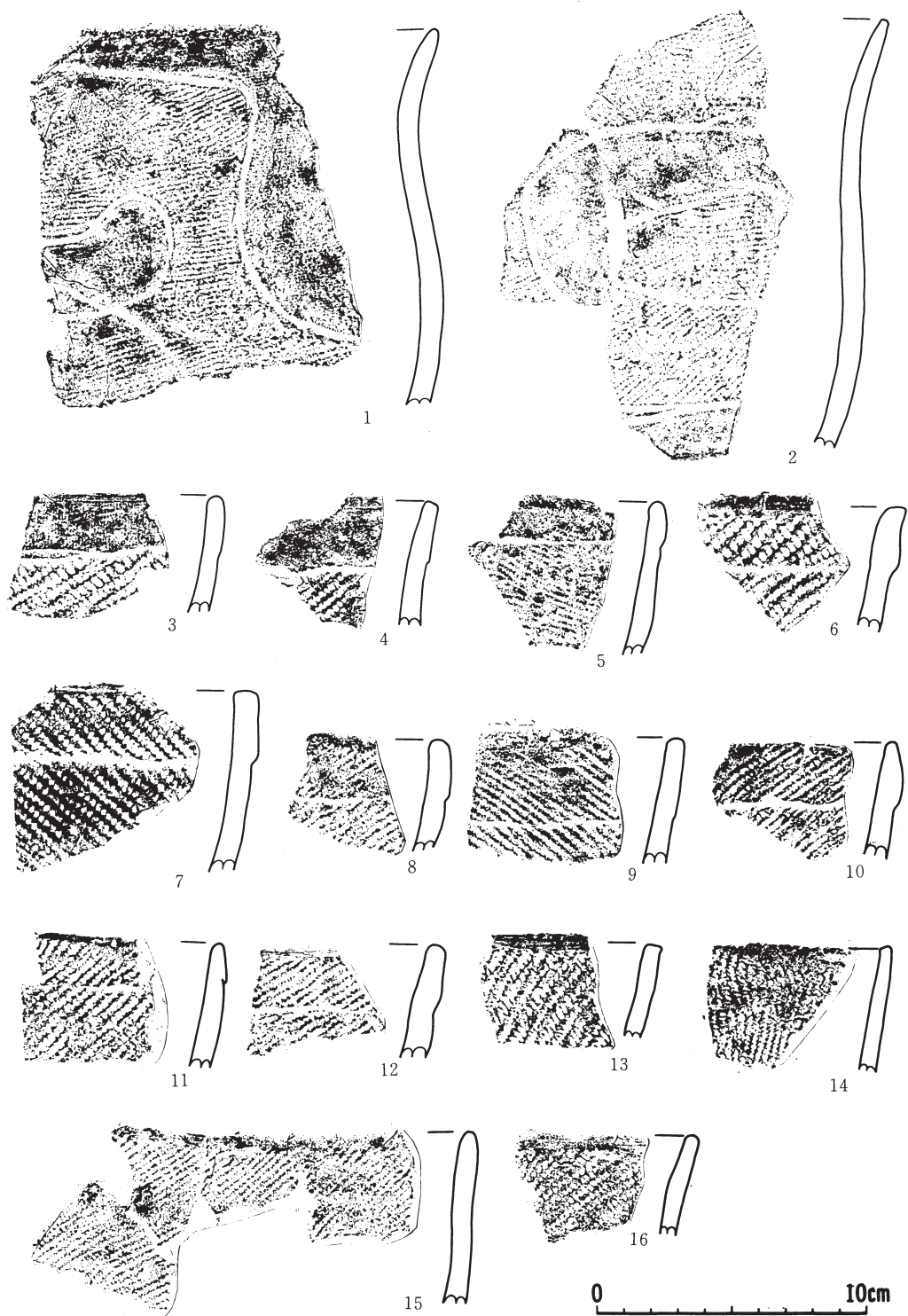


图18 遺構外出土土器拓影图(6)

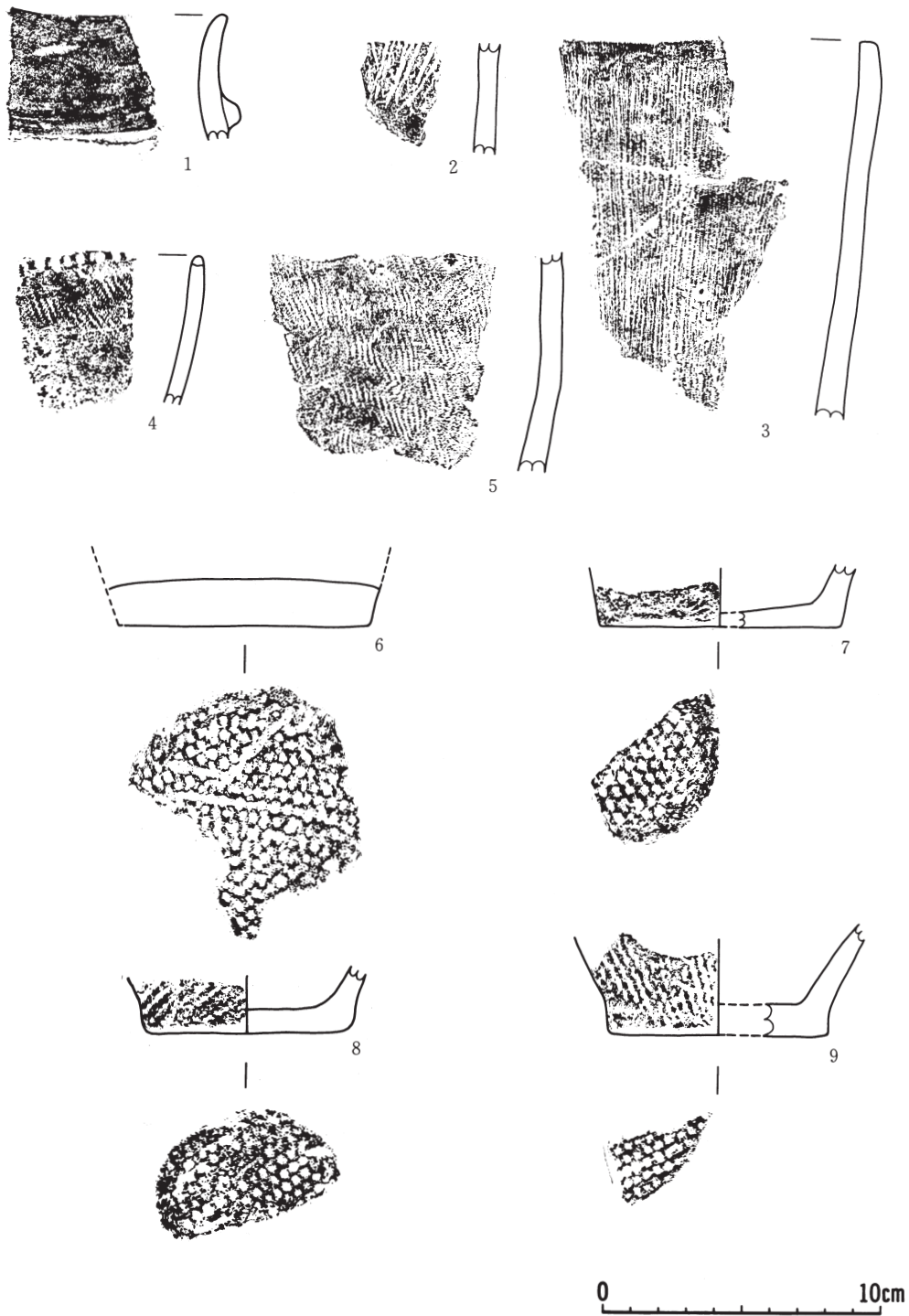


图19 遺構外出土土器拓影図(7)

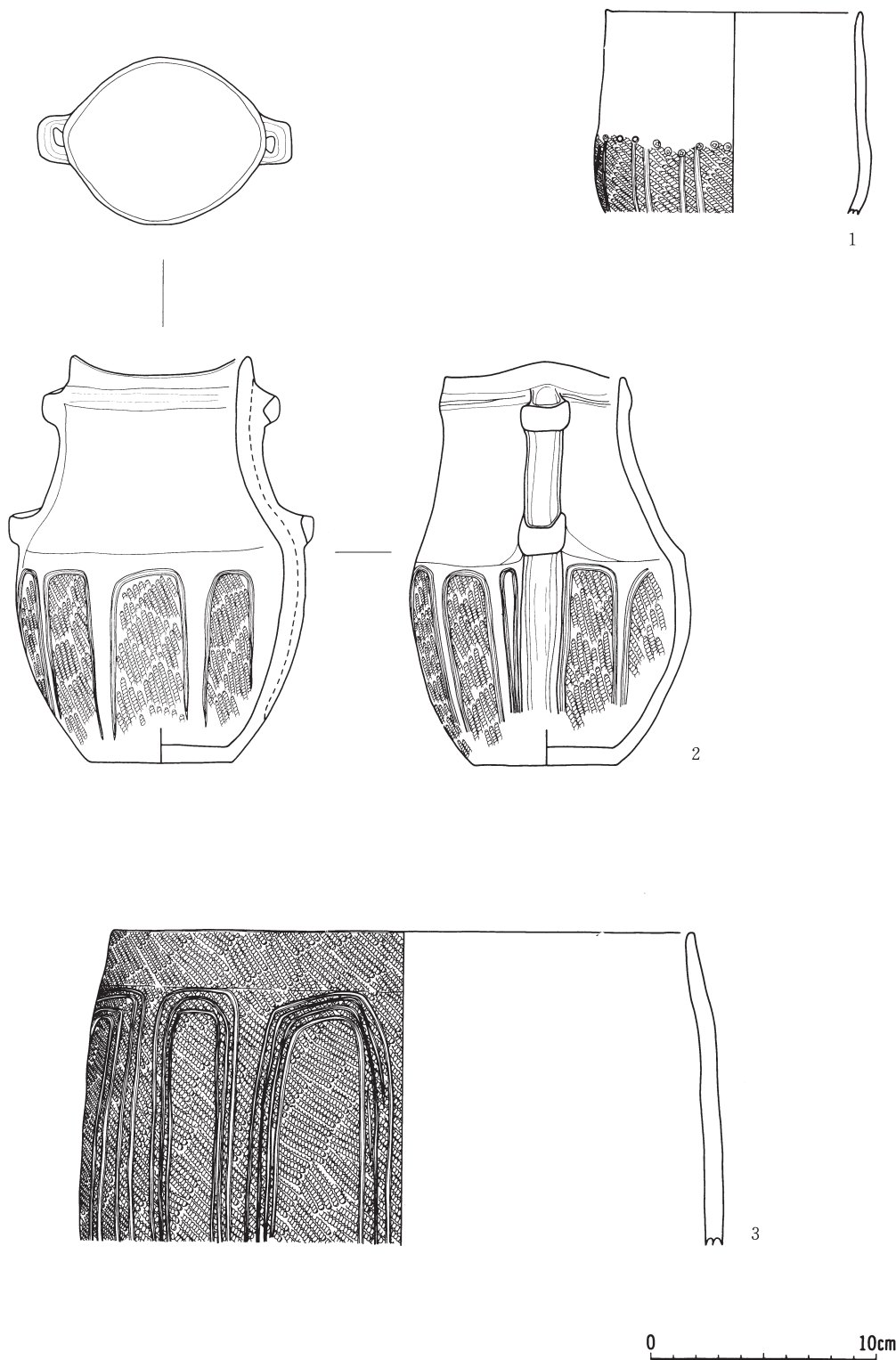


图20 遺構外出土土器実測図(1)

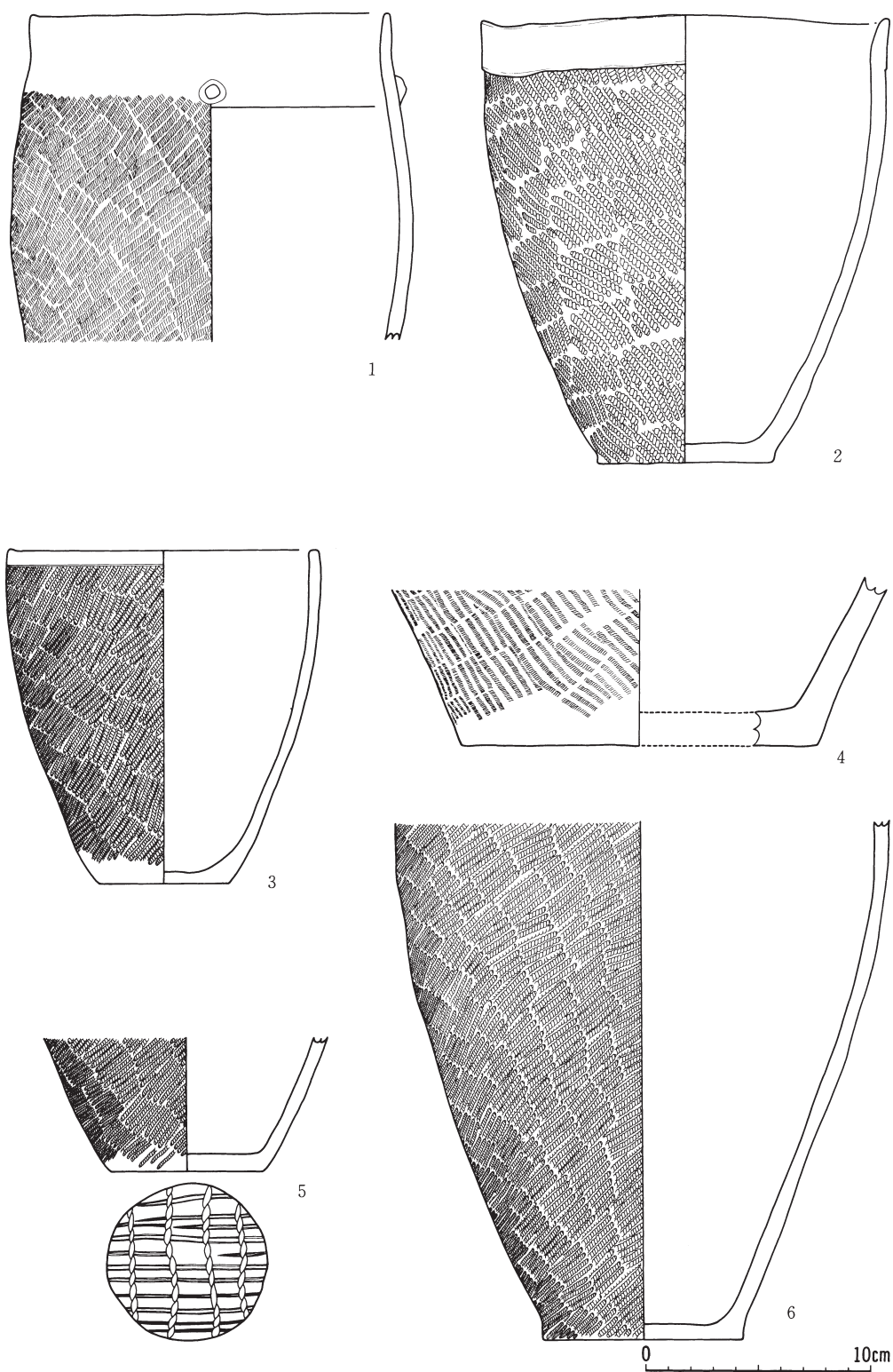


图21 遺構外出土土器実測図(2)

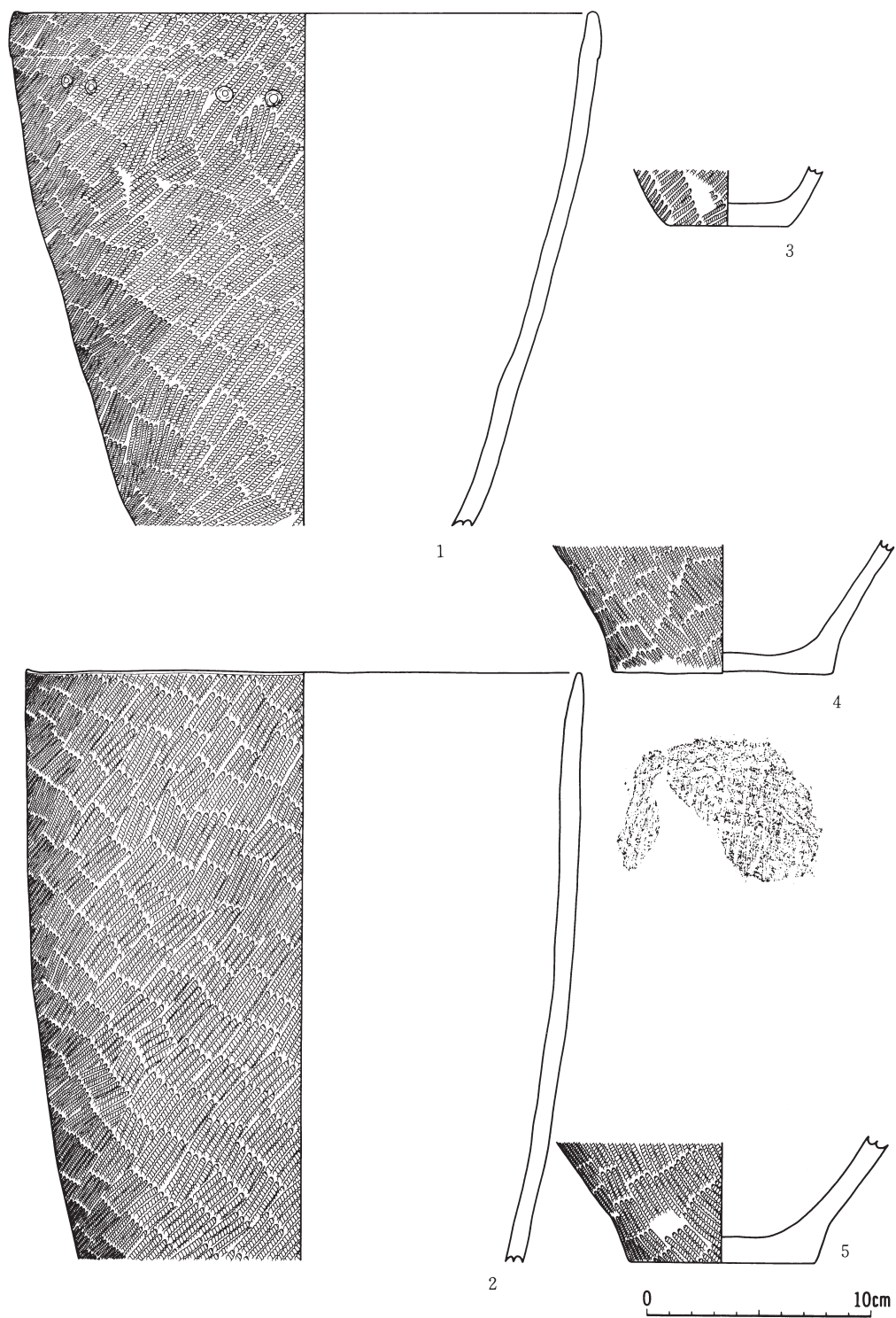


图22 遺構外出土土器実測図(3)

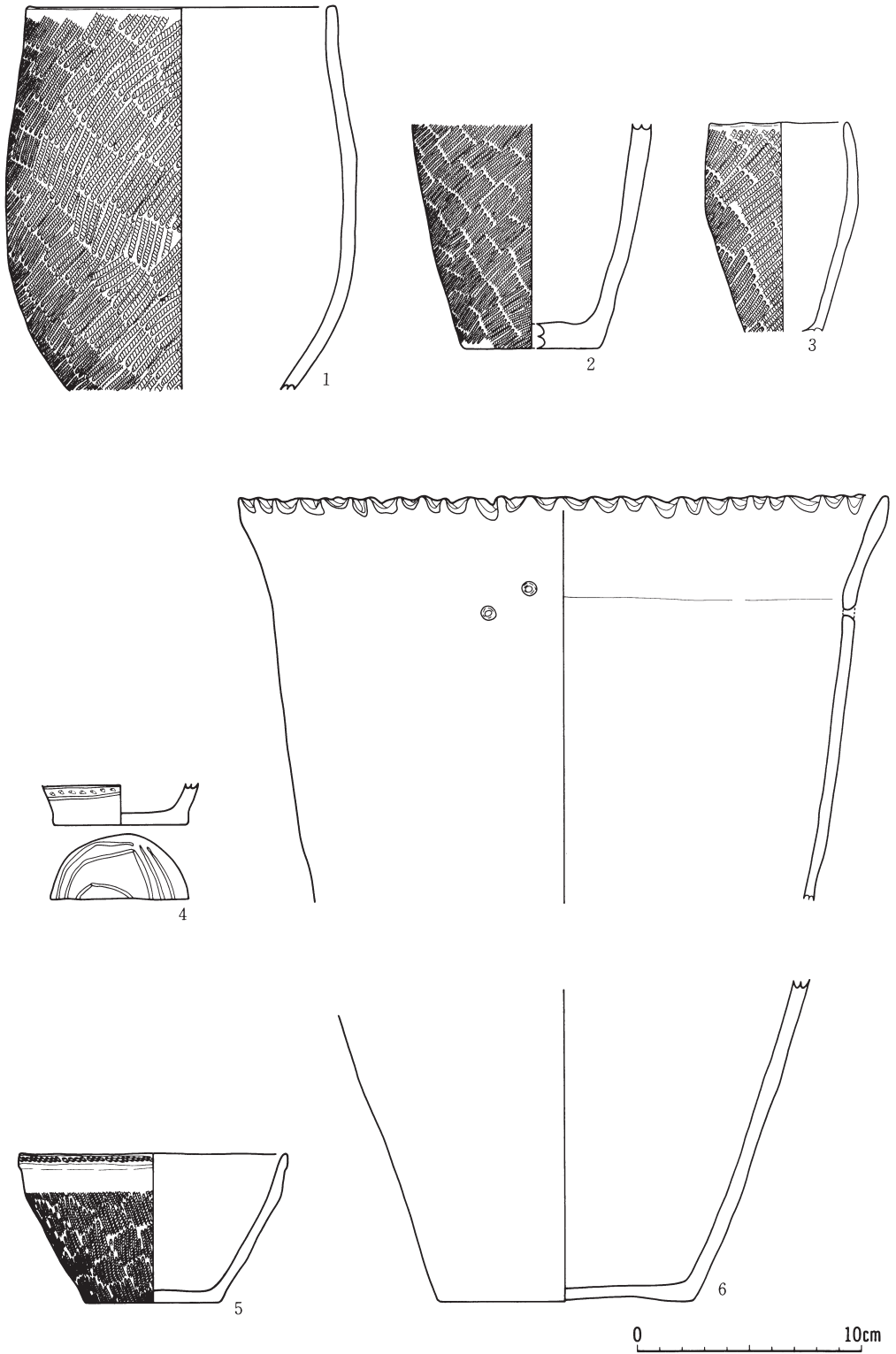


图23 遺構外出土土器実測図(4)

この他に、口縁で若干外反する無文のもの（図19 - 1）刷け目状の細沈線が縦に見られるもの（図19 - 3）などがある。

第 群土器（図19 - 4・5、図23 - 5・6）

縄文時代晩期に比定される土器である。メルクマール文様が見られないため、型式名は不明である。図23 - 5 は平縁の鉢形土器である。縄文を施文した後に、口縁部上縁の縄文をわずかに残して1 cm幅の磨消帯をもうけている。図19 - 4 と5 は同一個体である。口唇に刻みが加えられ、小波状を呈している。器面には単節 R L の縄文が、間隔をおいて施文されている。図23 - 6 は、口縁が外反する大形の深鉢形土器である。口唇に刻みが加えられ、小波状を呈している。無文である。

石器

フリイクを含めて総数210点出土した。その内訳を右表に示した。台地の中央部（C - F - 10 ~ 16）で囲まれた地域に比較的多く出土している。層位的には耕作等により不明確であるため、土器との関係は把握できなかった。

石	鏃	26	筥状石器	1	磨製石斧	2
石	槍	3	不定形石器	21	磨石類	52
石	錐	3	ビーエス・エスキュー	1	石皿・砥石	3
石	ヒ	1	打製石斧あるいは大形筥状石器	29	フリイク	68

表 1 出土石器一覧表 総数 210点

石鏃（図37、図38）

26点出土した。基部形態から、無茎のものと、有茎のものに分類することができる。

第 類 無茎のもの（4点）、いずれも基辺が内湾している。形態から次のように細分することができる。

- a 三角形に近い形態であるもの（図37 - 1・2）。1の側縁はほぼ直線であるが、2はわずかに外湾している。
- b 両側縁が強く湾曲し、最大幅が中央下半にある（図37 - 3）。
- c 両側縁が下半で内湾、上半で外湾している（図37 - 4）。

第 類 有茎のもの（22点）、基部形態から次のように分類することができる。

- a 基部がT字状を呈するもの（7点）。
 - イ 両側縁が外湾し、最大幅が基部にある（図37 - 5 ~ 7）。
 - ロ 両側縁が外湾し、最大幅が中央下半にある（図37 - 8 ~ 10）。
 - ハ 両側縁が下半で内湾、上半で外湾している（図11 - 1）。
- b 基部がY字状を呈するもの（11点）。
 - イ 両側縁が外湾し、最大幅が基部にある（図37 - 12、図38 - 4・5）。
 - ロ 両側縁が外湾し、最大幅が中央上半にある（図37 - 14）。

- 八 両側縁が外湾し、最大幅が中央下半にある（図37 - 11・13）。
 - 二 両側縁が直線で、最大幅が基部にある（図38 - 1～3・7）。
 - ホ 両側縁が内湾し、基辺が張り出す（図38 - 10）。
- C 上記の分類に該当しないもの（4点）。
- イ 茎と基辺との境が不明瞭で、いわゆる柳葉形石鏃に近いもの（図38 - 6・8・9）。
 - ロ 茎を大きく欠損して分類不可能なもの（図38 - 11）。

破損部位と破損率 破損部位にはa、先端のごく一部（2mm前後）b、先端部 c、柄部 d、先端部と柄部が見られる。このうちaの場合は、製作から使用に至る間の管理上の不手際や調査時の不注意による破損が考えられる。

破損率は65.0%（完形品9点、破損品17点）である。

調整・再生 出土した石鏃の全部は、両面に調整加工が施されている。調整加工は全面に及ぶものが多いが、第一次剥離面を多少なりとも残すものもある。また、図37 - 8・14は幅に比べて長さがなく、ずんぐりとしている。先端部は両面とも、新しい剥離面で覆われており、先端部を破損した後に再生され、利用されたものと考えられる。

大きさ 完形品と破損部位aのものを対象にグラフを作成した（図24）。ただし後者の場合、長さについてのみ図上復原した推定値を用いている（2mm前後の増加が見られた）。

類は長さ1.8～3.5cm、幅1.3～1.7cm、厚さ0.4～0.8cm、重さ1.7～3.4gにおさまる。ただし図37 - 9の場合、茎が図37 - 10のようになると考えた時には長さで1cm、重さで1g前後上記の値より上回る。

ピッチ痕 基部にピッチ痕が見られたものが5点ある（図37 - 9・10・12・14、図38 - 10）

石槍（図11 - 3、図39 - 1・2）

3点出土した。図39 - 1・2は、図41 - 1～4の剥片と共伴している。いずれも両面加工で、左右均整である。1は先端部をわずかに欠いている。2は先端部が丸味をおび、鋭さに欠く。図11 - 3は第8号土壌から出土したもので、調整は粗く、表皮面が広く残されている未成品である。

石錐（図38 - 12、図39 - 4・6）

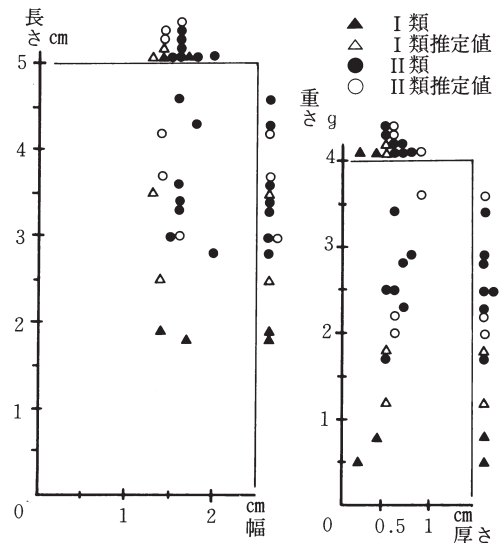


図24 石鏃計測グラフ

3点出土した。図38-12は石鏃からの転用品で、先端部にノッチを施し、錐部を作出している。図39-4は尖頭状削器の両端をドリルとして利用したものである。両端の錐部は磨耗し、螺旋状の線条痕が顕著に見られ、段をなしている。石・骨などの硬度の高い物質に穿孔したものである。図39-6は、断面三角形の棒状の剥片に調整加工を施したものである。片端に調整加工が集中し、先細となっていることから刺突・穿孔の機能が考えられ、石錐とした。

石ヒ (図39-3)

1点出土した。つまみ部の上部がわずかに欠損している。

篋状石器 (図39-5)

1点出土した。基部・側縁部・刃部の調整は粗雑で、篋状石器の未成品、あるいは製作上の失敗品と思われる。刃部角は約75°である。

不定形石器 (図11-2・4・5、図40-1~11、図41-1)

以上の分類に該当しないものを一括した。19点出土した。

1. 不定形スクレイパー (図11-2、図40-2)。2点出土した。図11-2は横長剥片を利用し、裏面にはバルブを残している。
2. 定形石器の破損品と思われるもの (図40-4・7)。3点出土した。図40-4は石槍もしくは石篋の破損品と思われ、基部のみ残存している。
3. R-フレイク (図11-4、図40-3・5)。5点出土した。
4. U-フレイク (図11-5、図40-6・8~11、図11-1)。7点出土した。剥片の鋭い縁辺をそのまま刃部として使用され、刃こぼれ・磨耗等の使用痕が見られる。

ピーエス・エスキュー (図39-7)

1点のみ出土した。小形で四辺形を呈し、実測図のL面両側に原石面を残している。上下両端に2個1対の刃部を有し、刃部には細かな刃こぼれのようなものが見られる。R面には階段状剥離が見られる。『聖山』(阿部朝衛、1979)の類^{注1}dに相当する。

磨製石斧 (図40-12・13)

2点出土した。ともに基部を破損している。

打製石斧あるいは大形篋状石器 (図31~図36)

D-8グリッドの石器集積跡から29点の剥片石器が出土した。それらは形態・調整などに若干の相違点が見られるが一つのまとまった石器群と考えることができる。この石器にもっとも類似するものとしては打製石斧か篋状石器が考えられる。しかし、打製石斧と篋状石器については、未だ不明瞭な点が多く、本石器の場合はどちらとも決め難い。したがって、現時点では両方の可能性が考えられるという意味で「打製石斧あるいは大形篋状石器」とした。

形態 全般に、基部・刃部が湾曲し、基部が狭く、刃部で広がる楕円形のものが多い。ま

れに、刃部が直線で、短冊形に近い形態のものもある（S - 1・S - 7）。

大きさ 長さと幅、厚さと重さについて、グラフを作成した（図26）。長さは、最大17.3cm、最小7.0cmで、平均10.2cmである。最大のものを除いた平均は9.9cmである。幅は最大4.8cm、最小1.0cmで、平均3.3cmである。厚さは、最大2.5cm、最小1.0cmで、平均1.6cmである。重さは、最大169.2g、最小24gで、平均57.9gである。最大のものを除いた平均は54.0gである。グラフを見る限り、最大のもの（S - 22）を除いた28点は、規格性の強い石器であることは明瞭である。

調整 全般に、大きな調整剥離を両面に施している。この剥離痕の観察から、剥離する順序に、きわだった規則性は見出すことはできない。

側縁には、細かく押しつぶされたような痕跡が見られるものがあり、刃潰し加工と思われる（実測図に矢印で示した）。刃潰し加工は、側縁の一部に短かく見られるものや、長く見られるものがある。刃潰し加工が行われることによって、石器の正面観と側面観では、側縁の描く線は凹凸の少ないものとなっている。とくに正面観では、そのことが明瞭に表われている。

調整剥離は全面を覆うものが多いが、なかには旧剥離面が見られるものがある。旧剥離面は、一方の面に見られるものと、両面に見られるものがある。旧剥離面のあり方には、器面の一部に痕跡として見られるもの、基部か刃部、またはその両方に見られるもの、器面中央から基部、または刃部にかけて広く見られるものなどがある。また旧剥離面を観察すると、横方向からの打撃痕が見られ、いわゆる横長剥片を素材としているものが多い。

整形調整が粗雑であったり、細部調整が加えられてない石器がある。S - 5・S - 13・S - 21・S - 23が該当し、これらは未成品か、製作上の失敗品の可能性が考えられる。

刃部の形状・調整・角度 未成品か製作上の失敗品の可能性が考えられる4点を除いて刃部を形成する面についてみると、八割近い石器が、両面とも調整剥離によって刃部を作出し、他に両面とも旧剥離面を利用したもの（S - 1・S - 2）、一方の面は旧剥離面を利用し、残る一方の面は調整剥離によって刃部を作出しているもの（S - 6・S - 7・S - 17・S - 20）がある。調整剥離によって刃部を作出しているものには、フルーティング様の細長い、平行した剥離が施されているものもある。

刃部角については、5度間隔のスケールをつくり、スケールに刃部をあてて計測した。計測箇所は刃部の中心（中軸線上）と、刃部と側縁部が交わる左右の点、都合3箇所とし、平均値を求めた。以上の方法で刃部角を求めた結果、50°~60°に集中する傾向を示した（図25）。

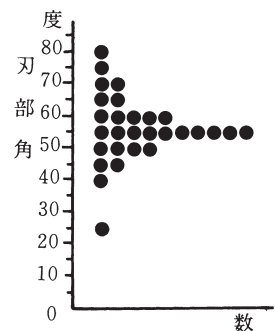


図25 刃部角の分布

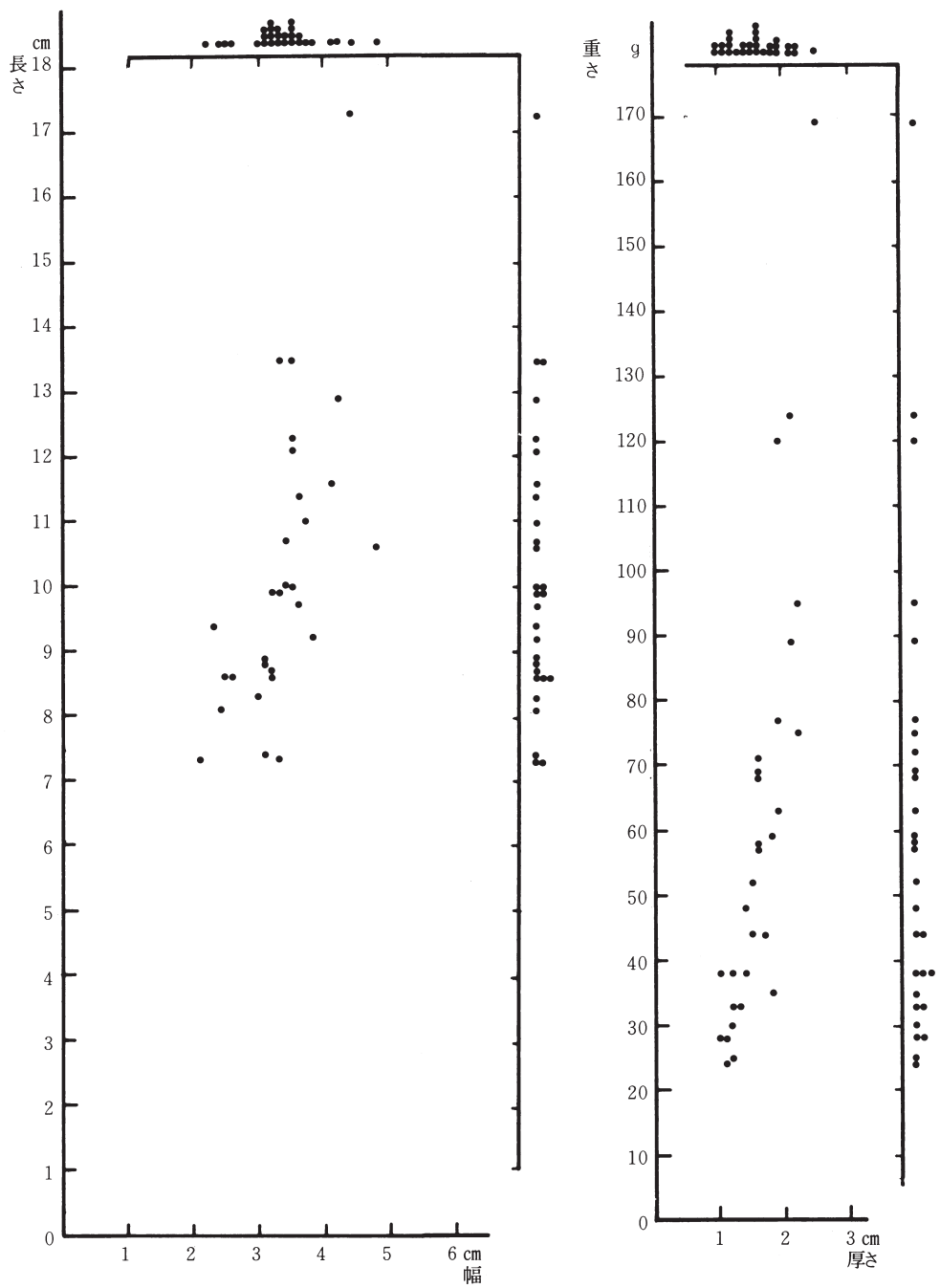


図26 石器集積跡出土石器計測グラフ

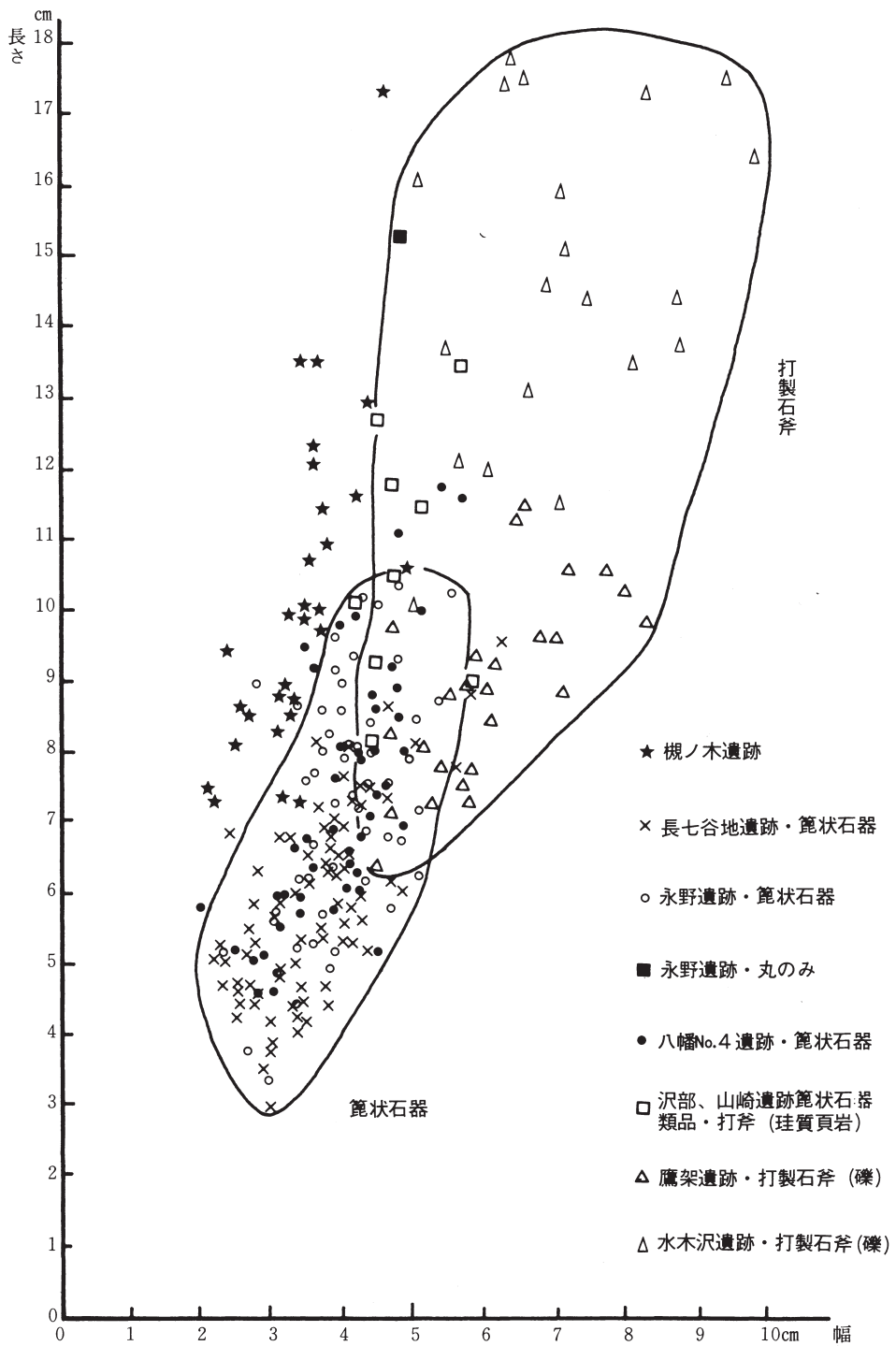


図27 籠状石器と打製石斧の長幅相関図

磨耗痕など 刃部及び刃部以外の面に磨耗痕（ドッドのスクリーントーン）が見られる。刃部先端のごく狭い部分に見られるもの（S - 3・S - 9・S - 10・S - 12・S - 16・S - 29）、やや広く見られるもの（S - 1・S - 18・S - 24）、刃部以外にも見られるもの（S - 1・S - 6・S - 9・S - 10・S - 12・S - 17・S - 18・S - 24）がある。それぞれ、使用痕、装着痕と考えられる。またS - 19は、加熱を受けたような痕跡が見られ、スス状の黒褐色の物質が付着している。付着物については不明であるが、この痕跡は着柄に関するものと推定される。

石材 全て珪質頁岩である。肉眼による観察から、同一母岩から作出されたと考えられるものに、S - 5とS - 13、S - 8とS - 10、S - 18とS - 20、S - 21とS - 26がある。

以上、本石器は使用痕のあり方から、木工具と推定される。類例は県内でも散発的に知られるが、量的には少なく、報告書では打製石斧と記載される例が多い。

図27は、本石器と打製石斧および筧状石器について、長さと幅の分布を示したものである。時期差・地域差は考慮していないが、ひとつの目安として見ると、それぞれが独立した分布を示している。本石器に最も近く分布するものは、珪質頁岩の大形剥片を素材とした打製石斧である。また、永野遺跡（碓ヶ関村）出土の筧状石器の大形品や丸のみ、八幡原 4 遺跡（山形県米沢市）出土の打製石斧・筧状石器なども、本石器の近くに分布している。これらの石器が、本石器と密接な関係にあることが感じられるが、本石器のように一つのまとまった石器群として把握でき得るかどうかについては、類例の増加と詳細な分析が必要である。今後、打製石斧と筧状石器との関係のみならず、縄文時代における労働用具のあり方を解明していく上で、本石器のもつ意味・性格は、種々の点で問題となる。

磨石類（図42～図47 - 1）

ここで取り扱うのは「する」「すられる」「たたく」「たたかれる」作業の結果として、磨（擦）痕、敲打痕が器面に残された礫石器である。いわゆる磨（擦）石、敲石、凹石、半円状偏平打製石器が含まれるが、中村良幸（1979）^{注3}や後藤守一（1979）^{注4}工藤大（1981）^{注5}らが述べているように器面に残された痕跡から複数の機能を有していたと思われるものが多く、従来の形態分類が使用痕のみで分類することは困難である。したがって、ここでは、これらの礫石器を一括して「磨石類」とし記述することにした。

磨石類の用いられる礫の形状と使用痕の見られる個所・種類は次のように分けられる。

形状

- A．球状・楕円球状
- B．平面形が楕円形で偏平
- C．Bの周縁に調整（整形痕）
- D．棒状ないしは長楕円状
- E．板状

使用痕の見られる箇所

a . 器面全面 b . 側縁 c . 端部 d . 偏平面

使用痕

ア . 磨痕 イ . 敲打痕 ウ . 凹孔
エ . 磨痕 + 敲打痕 オ . 磨痕 + 凹孔 カ . 線条痕

以上の分析によって得られる組合せから、磨石類は以下のように細分される。

A - a - ア (図42 - 1 ~ 3) 球状磨石と称されるもので、器面全面が機能面となっている。

B - b - ア (図42 - 6 ~ 8) 偏平磨石と称されるもので、側縁には溝状の細長い磨痕が見られる。図42 - 8 の片面全面に加熱痕が見られ、磨痕は側縁の一部に見られる。

B - b - エ (図43 - 1 ・ 2 ・ 4) 偏平磨石と称されるもので側縁は磨痕と敲打痕が共存して見られる。

B - b - イ (図11 - 6、図42 - 9、図43 - 5 ・ 6) 偏平磨石と称されるものであるが、側縁には敲打痕のみが見られる。

B - b - ア + d - カ (図44 - 1) 偏平磨石の一方の平坦部に条痕が見られる。

b - a - ア + c - ア (図42 - 5) 長軸端部に強い磨痕が見られる。

D - c - イ (図11 - 7、図47 - 1) 敲石と称されるもので、長軸端部に敲打痕が見られる。図11 - 7 はハンマー・ストーンと思われる。

C - b - ア (図43 - 3、図44 - 2 ~ 4) 図44 - 4 は表裏両面に調整 (整形) 痕が見られ、下側縁は幅狭い磨り面となっている。図44 - 2 と 3 は片面が自然面、片面に打ち欠きが見られ、やや幅広の磨り面をもつ。図43 - 3 は下側縁のみ、図42 - 7 は周縁の一部と下側縁の片面に調整痕が見られる。

A - a - ア + d - ウ (図46 - 2) 球状磨石に敲打痕が見られるもので、これを浅い凹孔と理解した。

B - c - ア + d - ウ (図46 - 4) 偏平磨石の偏平面に凹孔が見られるもの。側縁には磨痕のみが見られる。

B - c - エ + d - ウ (図46 - 3 ・ 5) 凹石の端部に磨痕と敲打痕が見られる。

B - b ・ d - ウ (図46 - 1) 全面に凹孔が見られるもので、総数 9 個の凹孔が見られる。

E - d - ア + d - ウ (図46 - 6) 砥石あるいは石皿の破片と思われるもので平坦面に凹孔が見られる。

B - d - ウ (図44 - 5 ~ 7、図45) 凹孔のみが見られるものである。

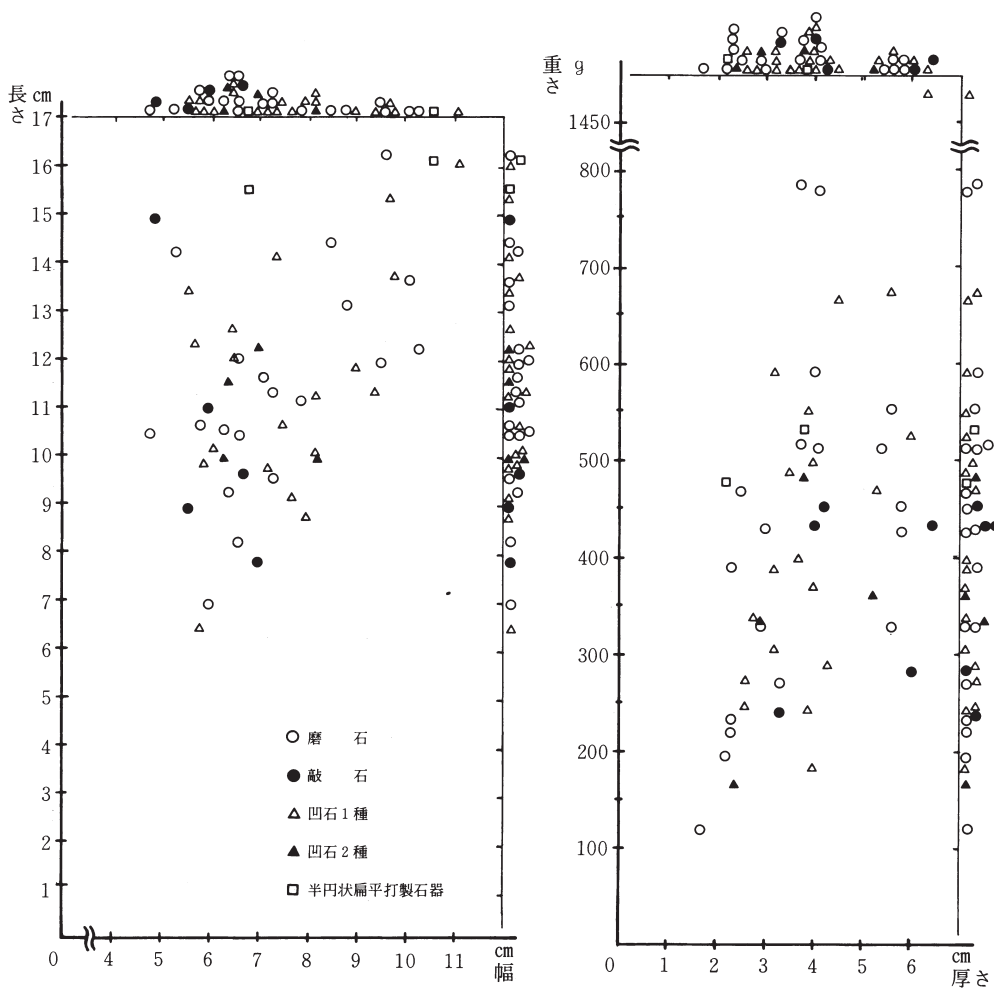


図28 磨石類計測グラフ

以上見てきたように、1個の礫に複数の痕跡が残される場合が多く、これらは「する」「すられる」「たたく」「たたかれる」といった一連の作業の結果によるものであり、切り離しては考えられないと思われる。

なお図28では、長さと幅、厚さと重さをグラフで示したが、ここでは、従来通りの器種分類を行っている。凹石1種は凹孔だけのもの(・) 凹石2種は他の機能も見られるもの(～・)をさす。また、表2にはいわゆる凹石の凹孔のあり方について示した。凹孔は両面対になっているものが多い。

凹孔のあり方 (面と凹孔の数)		1 種	2 種
片面に見られるもの	1	3(1)	(1)
	2	1	1
両面に見られるもの	1+1	5	1
	1+2	4	
	2+2	2(1)	2(1)
	1+4	(1)	
3面に見られるもの	2+2+1	1	
6面に見られるもの	2+2+2+1+1+1	1	

砥石・石皿類 (図47-2~4)

表2 凹孔のあり方 ()は欠損品

3点出土した。2は手持ちの砥石あるいは石皿の破片と思われるもので、使用面はいく分凹み、滑らかな磨痕が見られる。3、4は石皿である。3には弱い敲打痕と磨痕が見られる。4は表裏両面が使用され、いく分ざらざらとした磨痕が見られる。

注1 『聖山』東北大学文学部考古学研究会1979年

注2 グラフに用いた資料は、『長七谷地貝塚』1980年、『永野遺跡』1980年、『沢部遺跡』1977年、『山崎遺跡』1981

年、『鷹架遺跡』1981年、『水木沢遺跡』1977年(以上、青森県教育委員会)、『八幡原 4遺跡』1982年(米沢市教育委員会)の報告書から引用している。

注3 『立石遺跡』岩手県大迫町教育委員会1979年

注4 注1に同じ

注5 『馬場瀬遺跡』青森県教育委員会1981年

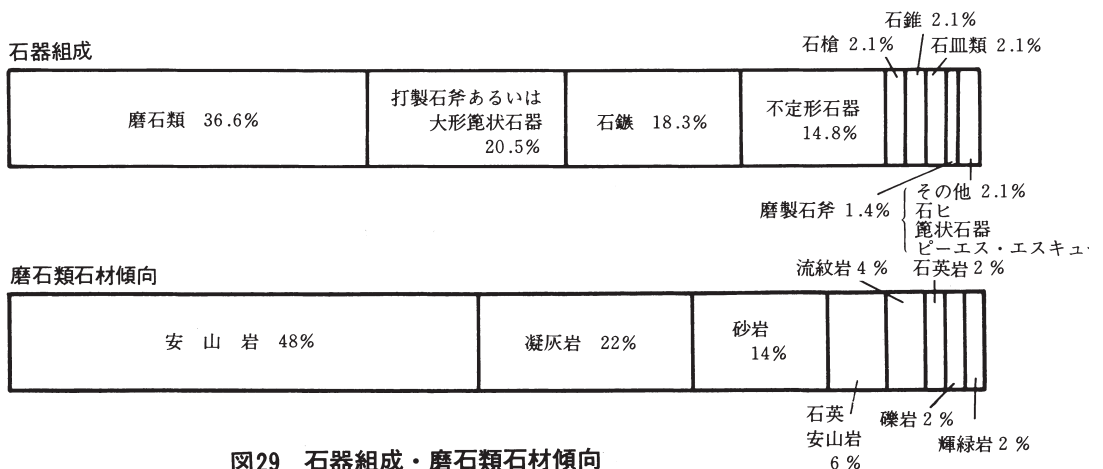


図29 石器組成・磨石類石材傾向

表3 石器観察表

図番号	器種名	出土地	層	大きさ(最大値) cm			重さ (g)	石材	備考
				長さ	幅	厚			
31-1	石 鏃	C-12	Ⅲ	1.9	1.4	0.2	0.5	珪質頁岩	I a
2	"	E-13	Ⅲ	1.8	1.7	0.4	0.8	"	I a
3	"	F-10	Ⅳ	<2.3> (2.5)	1.4	0.5	<1.2>	"	I b
4	"	G-33	Ⅳ	<3.0> (3.5)	1.3	0.5	<1.8>	"	I c
5	"	F-10	Ⅲ	<2.8> (3.0)	1.6	0.6	<2.0>	"	II a i
6	"	D-24	Ⅲ	<2.2>	1.4	0.4	<1.1>	"	II a i
7	"	D-33	I	3.4	1.6	0.5	2.5	玉 ず い	II a i
8	"	D-15	Ⅲ上	2.8	2.0	0.7	2.3	珪質頁岩	II a ロ
9	"	E-15	Ⅲ	<4.8>	1.6	0.7	<3.7>	"	II a ロ
10	"	D-5	Ⅳ	4.6	1.6	0.6	3.4	"	II a ロ
11	"	F-11	Ⅱ	<2.9>	1.6	0.5	<2.4>	"	II b ハ
12	"	D-13	Ⅲ	3.3	1.6	0.6	2.5	"	II b i
13	"	D-13	Ⅲ	<3.1>	1.5	0.6	<2.4>	"	II ハ
14	"	E-18	Ⅲ下	<3.0>	1.5	0.5	1.7	"	II b
32-1	"	E-5	Ⅳ	<2.4>	1.2	0.4	<1.0>	"	II b ニ
2	"	E-18	Ⅲ下	3.6	1.6	0.8	2.9	玉 ず い	II b ニ
3	"	E-11	Ⅲ	<2.8>	1.5	0.5	<1.8>	"	II b ニ
4	"	F-9	Ⅲ	<4.1>	1.2	0.6	<2.3>	珪質頁岩	II b i
5	"	F-12	Ⅲ	<4.0> (4.2)	1.4	0.9	<3.6>	"	II b i
6	"	C-15	Ⅲ	<4.2>	1.3	0.7	<3.5>	"	II c i
7	"	C-22	I	<4.4>	1.6	0.4	<3.0>	"	II b ニ
8	"	D-10	Ⅱ	<3.5> (3.7)	1.4	0.6	<2.2>	"	II c i
9	"	C-17	Ⅲ上	<3.3>	1.5	0.5	<2.5>	"	II c i
10	"	D-13	Ⅲ	<3.1>	2.1	0.6	<1.7>	"	II b ホ
11	"	F-15	Ⅲ	<3.1>	1.7	0.8	<3.5>	"	II c ロ
11-1	"	8号土拡	3下	4.3	1.8	0.5	2.8	"	II a ハ S-19
39-1	石 槍	E-25	Ⅲ	<8.5> (8.7)	3.0	1.5	28.5	"	} 図41のU-フレイク、フレイクと共伴。先端部ごくわず か欠損。大形鏃状石器、あるいは打製石斧とした石器の } 可能性もある。
2	"	E-25	Ⅲ	7.7	2.6	1.3	?	"	
11-3	"	8号土拡	2	8.2	3.2	1.6	38.1	"	粗雑で原石面を広く残す。未成品。
38-12	石 鏃	E-8	Ⅲ	3.5	1.7	0.5	2.3	"	石鏃からの転用品。
39-4	"	D-12	Ⅲ	7.0	2.2	1.1	13.1	"	尖頭状削器の両端使用。螺旋状の磨減痕。
6	"	C-14	Ⅲ下	4.9	1.2	1.0	5.4	玉 ず い	
39-3	石 匕	D-27	I	<5.7>	3.7	1.0	22.3	珪質頁岩	つまみ部の一部を欠損。
5	鏃状石器	F-12	I	4.8	2.3	1.3		"	刃部の作出が粗雑。
40-1	不定形石器	E-11	Ⅱ	5.9	2.0	1.8	14.8	"	下端に調整痕が集中。ドリル?
2	"	C-19	Ⅲ	3.1	2.3	0.7	5.9	"	不定形スクレイパー
3	"	表 採		4.8	2.0	1.3	10.8	"	R-フレイク
4	"	F-12	I	3.2	2.8	0.7	7.0	"	定形石器の破損品?
5	"	E-9	Ⅱ	4.6	2.5	0.7	8.2	"	R-フレイク
6	"	F-12	I	3.6	3.5	1.1	14.0	"	U-フレイク
7	"	F-4	Ⅱ	3.8	2.5	1.3	12.6	"	定形石器の破損品?
8	"	E-18	Ⅲ	2.7	2.3	0.7	4.4	"	U-フレイク
9	"	E-13	Ⅱ	3.6	4.1	0.9	12.1	"	"
10	"	F-20	Ⅱ	4.6	2.8	0.9	10.9	"	"
11	"	D-12	Ⅲ	7.6	3.7	2.3	42.8	"	"
41-1	"	E-25	Ⅲ	9.2	5.3	2.4	114	"	U-フレイク。図39-1、2の石槍と共伴。
2	"	"	"	10.6	4.9	2.2	117	"	フレイク。 "

図番号	器種名	出土地	層	大きさ(最大値) cm			重さ (g)	石材	備考		
				長さ	幅	厚					
3	不定形石器	E-25	III	11.9	5.5	1.8	117	珪質頁岩	フレイク。	〃。	
	〃	〃	III	6.8	8.5	1.7	72.0	〃	〃。	〃。	
	〃	F-13	II	2.9	1.8	0.4	2.9	〃	不定形スクレイパー		
	〃	E-7	III	6.2	4.9	1.7	59.1	〃	R-フレイク		
	〃	F-12	I	4.9	1.6	0.6	3.7	〃	〃		
11-2	〃	8号土拡		4.6	3.2	0.7	11.6		不定形スクレイパー	S-13	
4	〃	〃		2.9	1.8	0.8	2.9		R-フレイク	S-6	
5	〃	〃		3.9	2.4	0.9	7.6		U-フレイク	S-2	
39-7	ビーエス・ エスキューユ	F-10	II	1.8	2.3	0.7	3.8	珪質頁岩			
40-12	磨製石斧	F-11	III	<4.2>	<2.2>	<0.9>	<11.8>	輝緑凝灰岩	刃部残存。		
13	〃	E-5	IV	<5.8>	4.1	<2.1>	<85.0>	緑色頁岩	〃		
31~36	打製石斧 or 大形鏃状石器	D-8	III	8.6	3.2	1.4	37.6	珪質頁岩	45°	刃部に磨耗痕。	S-1
〃	〃	〃	〃	8.7	3.2	1.5	44.2	〃	55°	〃	S-2
〃	〃	〃	〃	8.9	3.1	1.2	32.7	〃	50°	刃縁に磨耗痕。	S-3
〃	〃	〃	〃	10.7	3.4	2.2	74.8	〃	55°	〃	S-4
〃	〃	〃	〃	7.3	3.3	1.2	29.2	〃	60°	未成品?	S-5
〃	〃	〃	〃	10.0	3.4	1.6	58.3	〃	40°	刃部以外に磨耗痕。	S-6
〃	〃	〃	〃	9.9	3.2	1.4	47.7	〃	75°	〃	S-7
〃	〃	〃	〃	10.6	4.8	1.6	68.6	〃	55°	〃	S-8
〃	〃	〃	〃	11.6	4.1	2.1	89.0	〃	55°	刃部及び刃部以外に磨耗痕。	S-9
〃	〃	〃	〃	12.9	4.2	2.1	123.9	〃	55°	〃	S-10
〃	〃	〃	〃	12.1	3.5	1.9	69.6	〃	50°	〃	S-11
〃	〃	〃	〃	11.4	3.6	1.6	68.0	〃	60°	粗雑な調整だが刃部に磨耗痕。	S-12
〃	〃	〃	〃	7.4	3.1	1.1	24.0	〃	55°	未成品?	S-13
〃	〃	〃	〃	9.2	3.8	1.8	59.1	〃	65°	〃	S-14
〃	〃	〃	〃	7.3	2.1	1.2	24.5	〃	60°	〃	S-15
〃	〃	〃	〃	8.1	2.4	1.8	34.8	〃	70°	刃部に磨耗痕。	S-16
〃	〃	〃	〃	8.6	2.6	1.1	28.3	〃	45°	側縁の一部に磨耗痕。	S-17
〃	〃	〃	〃	9.9	3.3	1.9	63.1	〃	70°	刃部と刃部以外に磨耗痕。	S-18
〃	〃	〃	〃	11.0	3.7	1.6	71.3	〃	55°	スス状の付着物。	S-19
〃	〃	〃	〃	12.3	3.5	1.9	77.1	〃	25°	〃	S-20
〃	〃	〃	〃	10.0	3.5	1.6	57.6	〃	80°	未成品?	S-21
〃	〃	〃	〃	17.3	4.4	2.5	169.2	〃	50°	〃	S-22
〃	〃	〃	〃	13.5	3.3	1.7	44.3	〃	55°	未成品?	S-23
〃	〃	〃	〃	9.7	3.6	1.5	51.8	〃	50°	刃部と刃部以外に磨耗痕。	S-24
〃	〃	〃	〃	8.8	3.1	1.2	37.6	〃	55°	〃	S-25
〃	〃	〃	〃	8.3	3.0	1.3	33.0	〃	60°	〃	S-26
〃	〃	〃	〃	13.5	3.5	2.2	95.4	〃	55°	〃	S-27
〃	〃	〃	〃	8.6	2.5	1.0	27.7	〃	60°	〃	S-28
〃	〃	〃	〃	9.4	2.3	1.0	38.0	〃	65°	刃部に磨耗痕。	S-29
42-1	磨石類	D-19	I	9.6	6.7	6.4	434	安山岩			
2	〃	C-12	II	8.2	6.6	5.8	427	〃			
3	〃	C-10	III	<6.3>	6.7	3.9	<133>	凝灰岩			
4	〃	D-19	I	9.2	6.4	5.8	452	安山岩	磨痕+打痕。		
5	〃	G-34	I	8.5	3.8	2.9	120	流紋岩			
6	〃	F-11	III	15.5	6.8	3.8	533	安山岩			
7	〃	D-7	III	11.9	9.5	2.3	390	〃			
8	〃	E-11	III	<6.9>	<6.0>	3.0	<179>	凝灰岩	欠損(1/2)、R面に加熱痕。		
9	〃	F-12	II	11.3	7.3	4.1	513	安山岩	打痕。		

図番号	器種名	出土地	層	大きさ(最大値) cm			重さ (g)	石材	備考
				長さ	幅	厚			
43-1	磨石類	F-19	II	<10.1>	6.4	4.0	<502>	安山岩	片端欠損。
2	〃	E-7	III	7.8	7.0	3.3	241	石英安山岩	打痕+磨痕。扁平な円礫の周縁を利用。
3	〃	F-20	I	10.6	5.8	2.3	231	安山岩	
4	〃	C-12	II	13.1	8.8	3.7	518	石英安山岩	上下両側縁(長軸の)に磨痕+打痕。
5	〃	C-12	III	10.5	6.3	2.3	220	砂岩	磨痕+打痕。
6	〃	E-5	III	11.6	7.1	5.6	551	安山岩	打痕。
44-1	〃	F-4	III	<7.3>	7.1	3.6	<225>	砂岩	欠損(1/2)。片面に線条痕。
2	〃	F-12	II	16.2	9.6	3.7	786	安山岩	
3	〃	F-11	II	14.4	8.4	2.5	468	〃	
4	〃	E-4	III	<8.3>	6.6	1.9	<144>	凝灰岩	欠損(1/2)。
5	〃	F-13	II	<11.5>	7.1	3.0	<381>	安山岩	片端欠損(1)、凹孔のある面は、磨痕が見られるが、自然的要因も考えられる。
6	〃	E-14	II	12.3	5.7	3.2	388	〃	(2+1)
7	〃	F-4	III	13.4	5.6	3.5	490	〃	(2)
45-1	〃	F-11	III	10.1	6.1	3.9	241	砂岩	(1+1)
2	〃	E-12	I	12.0	6.5	5.6	675	〃	(1)
3	〃	F-11	II	<10.5>	7.5	2.9	<305>	凝灰岩	欠損(4+1)
4	〃	F-19	II	11.8	9.0	3.9	552	〃	(2+2)
5	〃	D-11	II	10.5	7.5	4.0	369	安山岩	(2+1)
6	〃	D-9	III	8.7	8.0	3.2	306	〃	(2+1)
46-1	〃	F-12	II	9.7	7.2	5.3	470	砂岩	6面に凹孔(2+1+2+2+1+1)
2	〃	C-12	I	9.9	6.3	5.2	361	石英安山岩	(2)、磨石(球状)。
3	〃	E-16	II	11.5	6.4	2.4	169	砂岩	(2+2)、敲石。
4	〃	E-25	III	9.5	7.3	2.2	171	安山岩	磨痕+打痕。
5	〃	D-4	II	12.2	7.0	2.9	332	凝灰岩	(2+2)、磨石。
6	〃	C-19	I	9.9	8.2	3.8	484	安山岩	(1+1)、砥石(?) L面は凹湾している。
47-1	〃	E-12	I	14.9	4.9	4.2	453	〃	棒状礫の一端に打痕。
2	砥石又は石皿	F-19	II	13.7	6.4	5.7	794	〃	滑らかな磨痕。
4	石皿	D-19	I	21.5	17.0	8.3	4,820	〃	両面使用。ざらざらした磨痕。
3	〃	F-11	III	27.8	17.5	7.3	4,473	砂岩	弱い敲打痕と磨痕。
11-6	磨石類	8号土抔	2	14.2	5.3	3.3	270	凝灰岩	打痕。 S-3
7	〃	8号土抔	3下	8.9	5.6	6.0	285	石英岩	ハンマーストーン。 S-23
	〃	C-12	III	<8.6>	<8.3>	3.4	<387>	安山岩	欠損(1/2)。
	〃	D-7	III	<6.8>	<6.6>	3.5	<194>	〃	片端欠損。
	〃	C-35	I	6.9	6.0	5.6	328	〃	球状磨石。
	〃	D-12	III上	11.3	9.4	4.0	499	凝灰岩	(1+1)
	〃	E-19	II	16.0	11.2	6.3	1,480	安山岩	(1+1)
	〃	C-30	I	9.8	5.9	4.3	289	凝灰岩	(2+2+1)、三角柱状礫。
	〃	F-19	II	14.1	7.4	2.6	273	安山岩	(2+1)、扁平礫。
	〃	E-5	IV	15.3	9.7	3.2	593	凝灰岩	(1+1)、扁平礫。
	〃	F-12	III	9.1	7.7	2.6	248	流紋岩	(1)
	〃	D-15	III	13.7	9.8	4.5	668	凝灰岩	(2+2)
	〃	E-8	II	<7.3>	<4.5>	2.1	<66>	〃	(2+2)、欠損品。
	〃	F-11	III	6.4	5.8	4.0	183	安山岩	(1)
	〃	F-12	III	10.0	8.2	6.0	526	〃	(1+1)
	〃	D-12	II	<7.0>	<5.5>	3.3	<139>	礫岩	(2+2)、磨石、欠損品。
	〃	D-26	IV	<6.8>	<6.8>	3.2	<191>	輝緑岩	(1)、磨石、欠損品。

注1.<>は現存値、()は推定値を示す。

2. 打製石斧 or 大形筥状石器の備考欄の最初の数字は刃部角である。

3. 磨石類の備考欄の()内の数字は凹孔の数を示す。

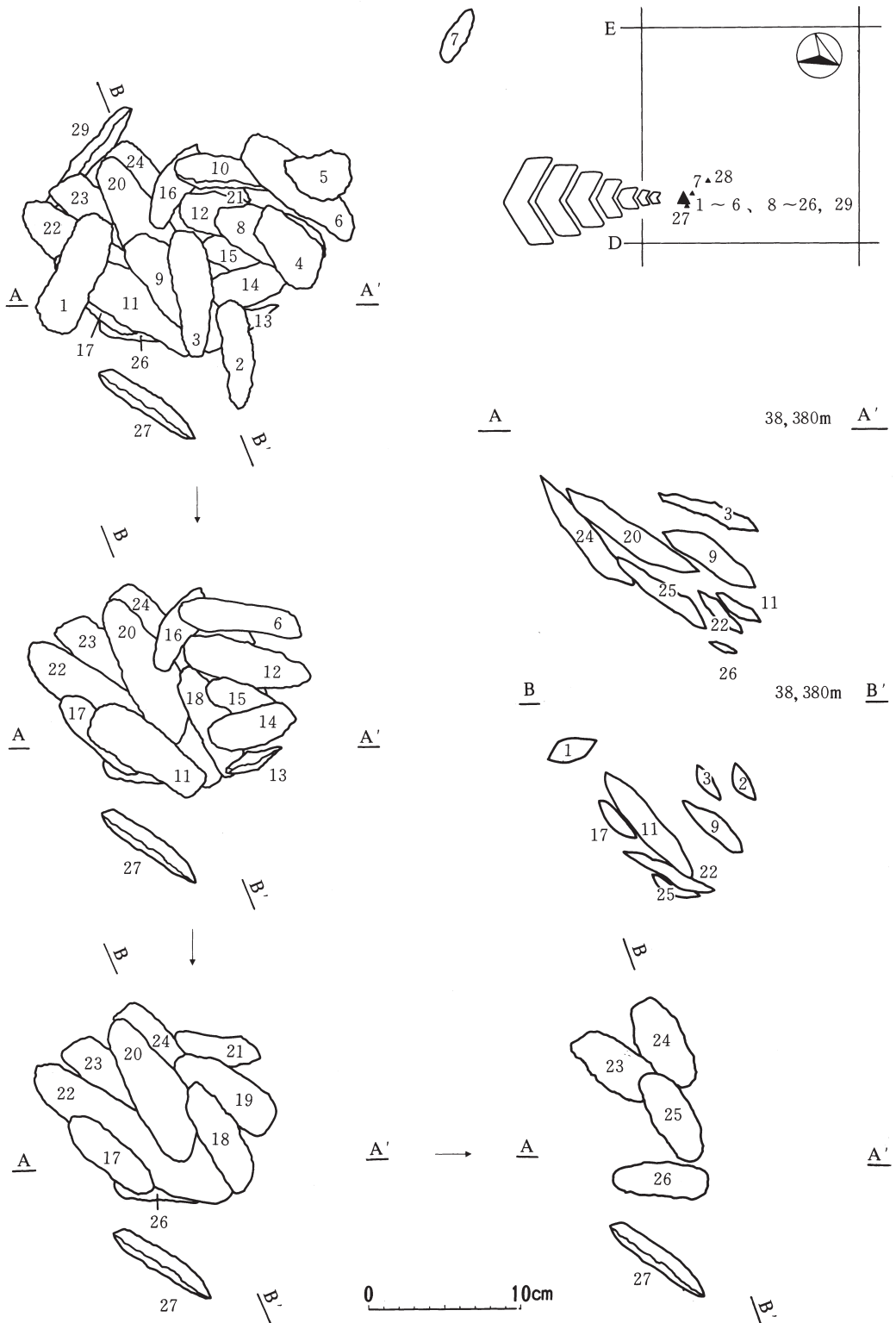


图30 石器集積跡検出状況

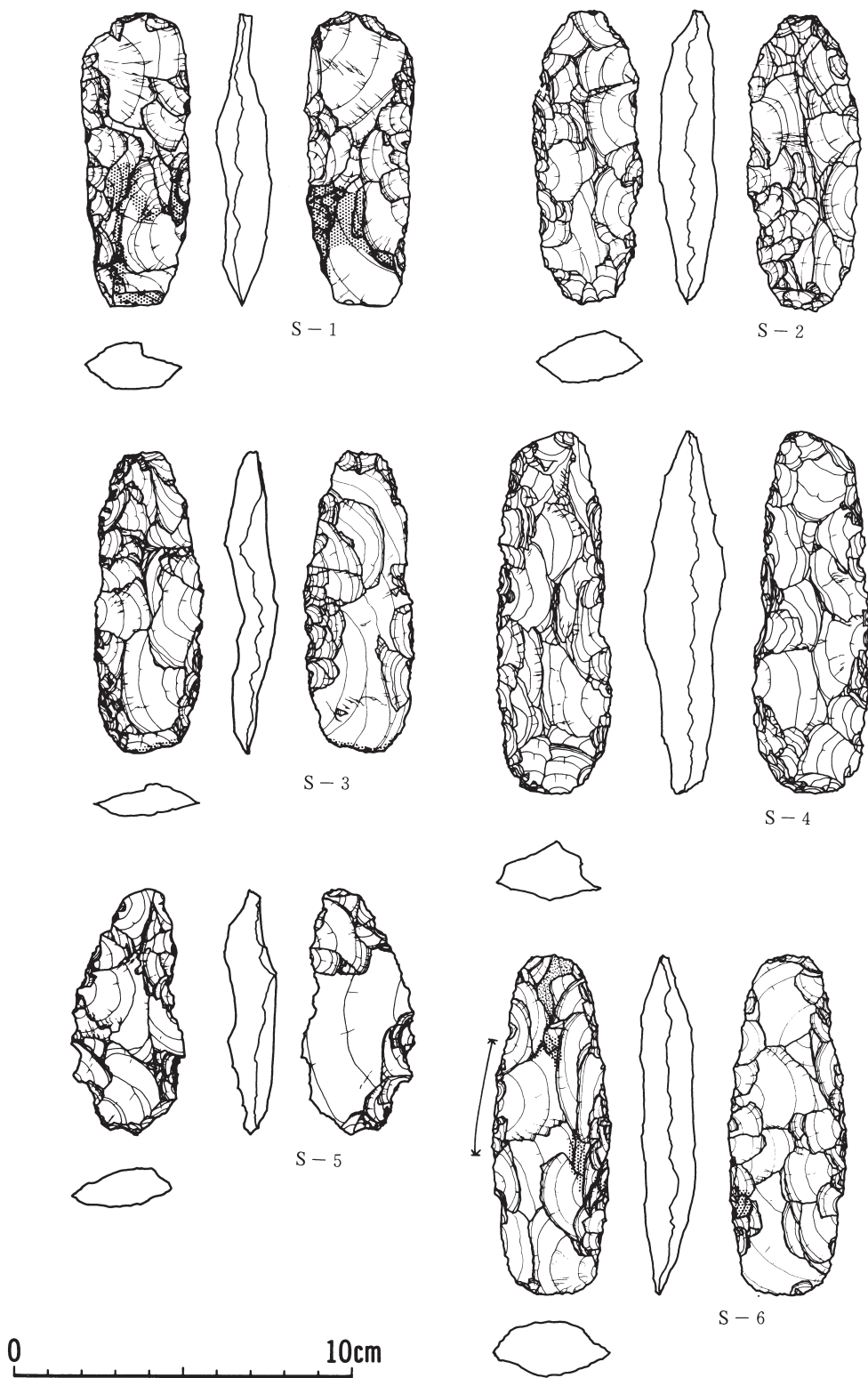


图31 石器集積跡出土石器実測図(1)



图32 石器集積跡出土石器実測図(2)

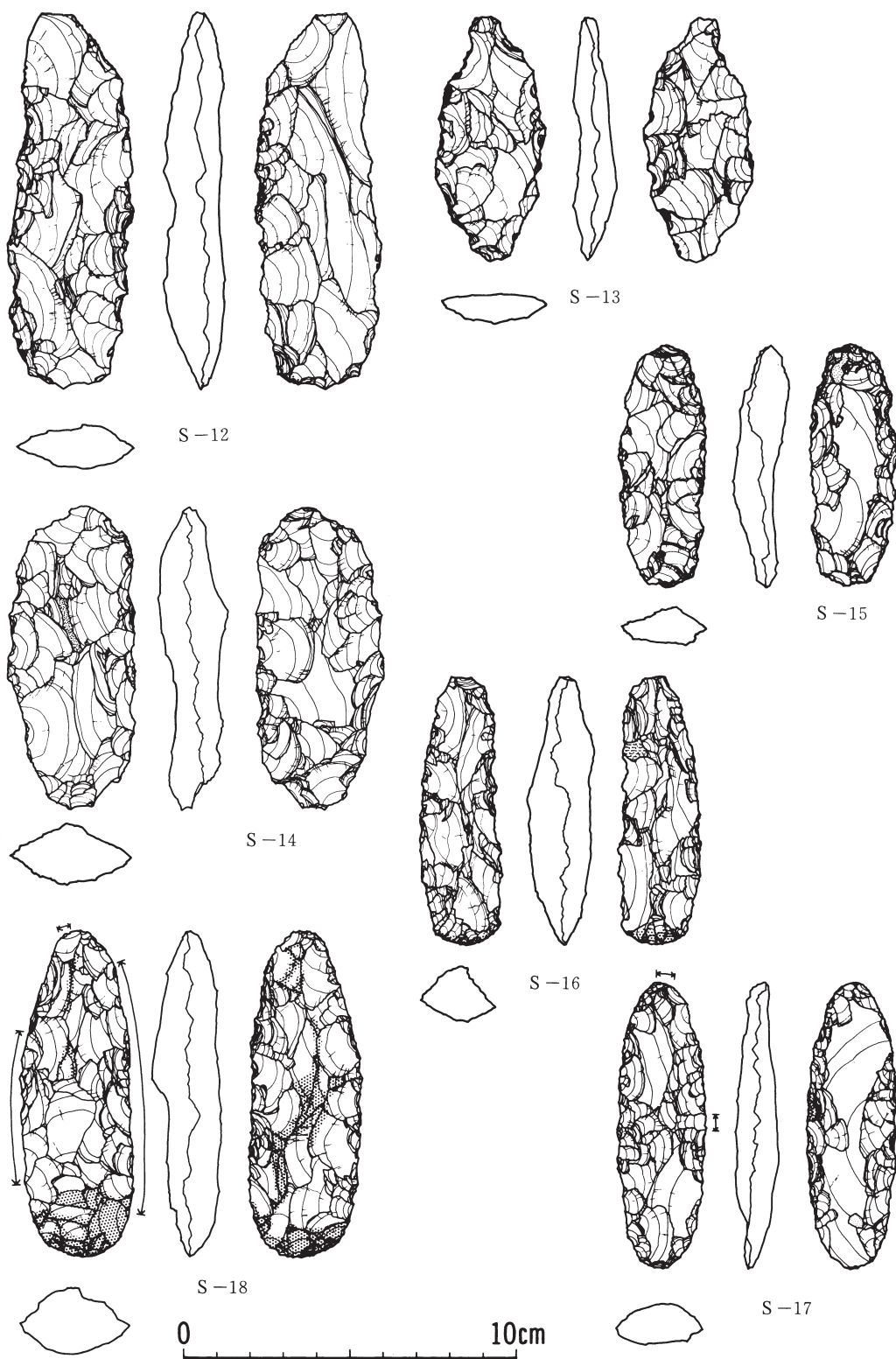


图33 石器集積跡出土石器実測図(3)

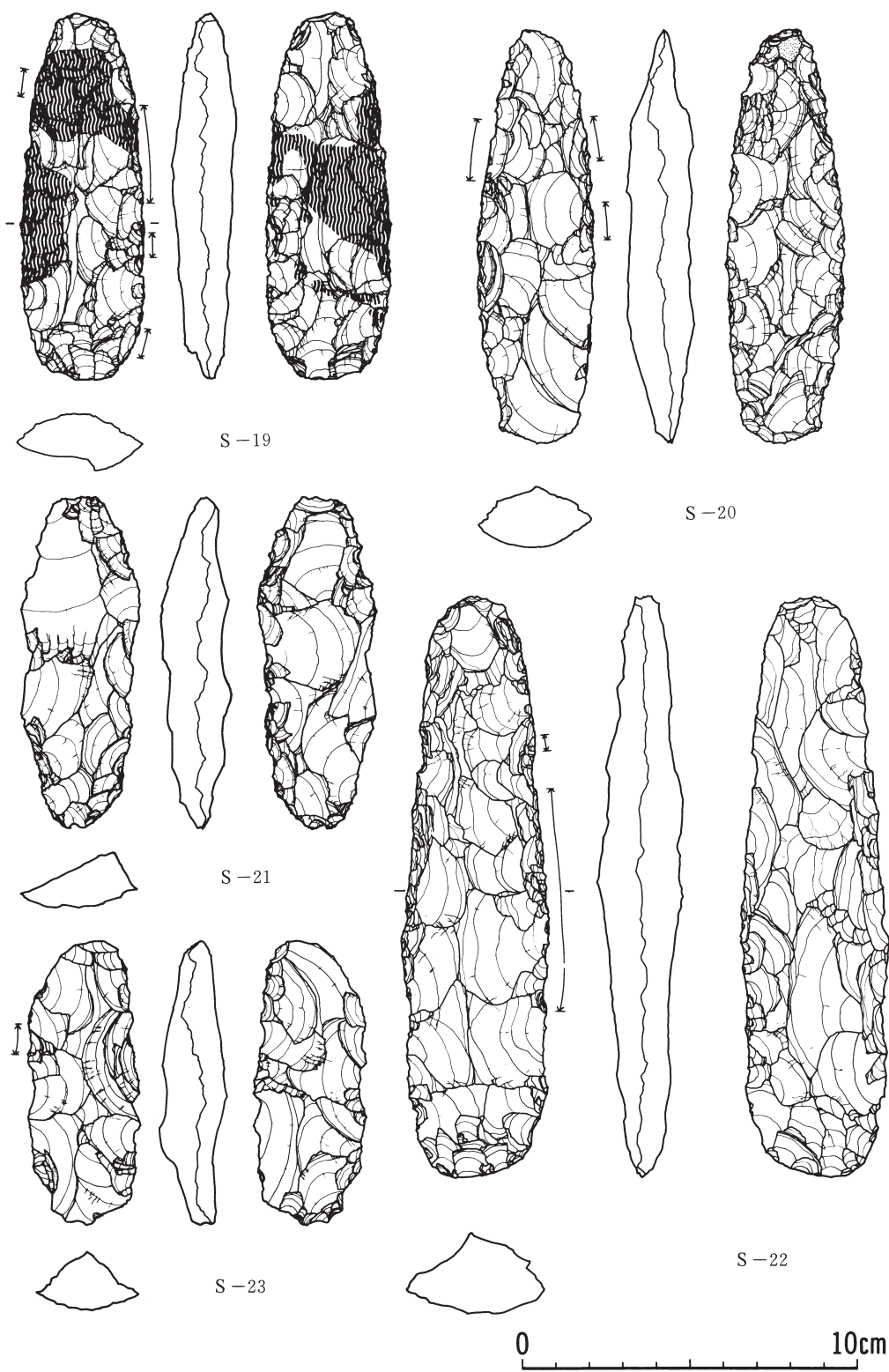


图34 石器集積跡出土石器実測図(4)

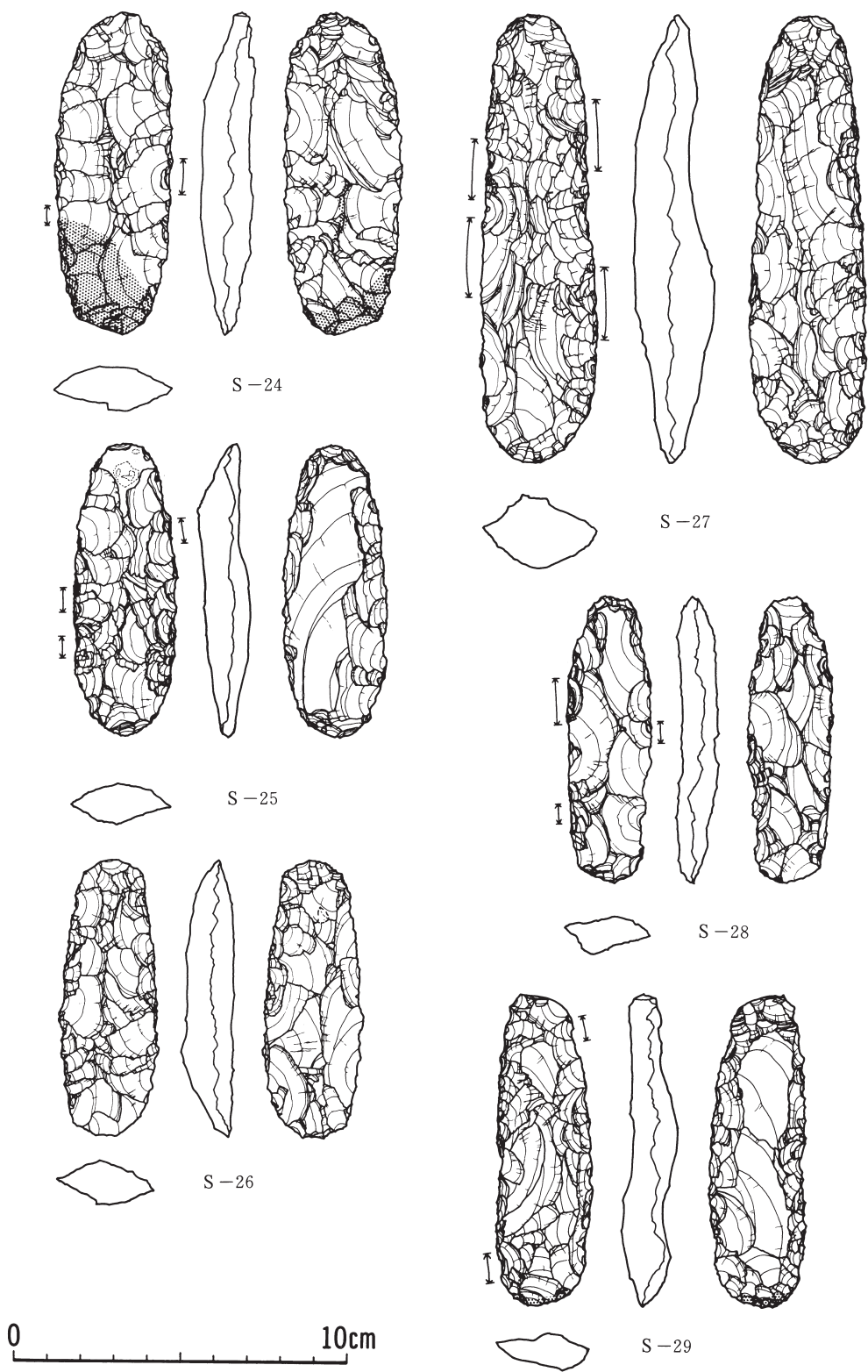


图35 石器集積跡出土石器実測図(5)

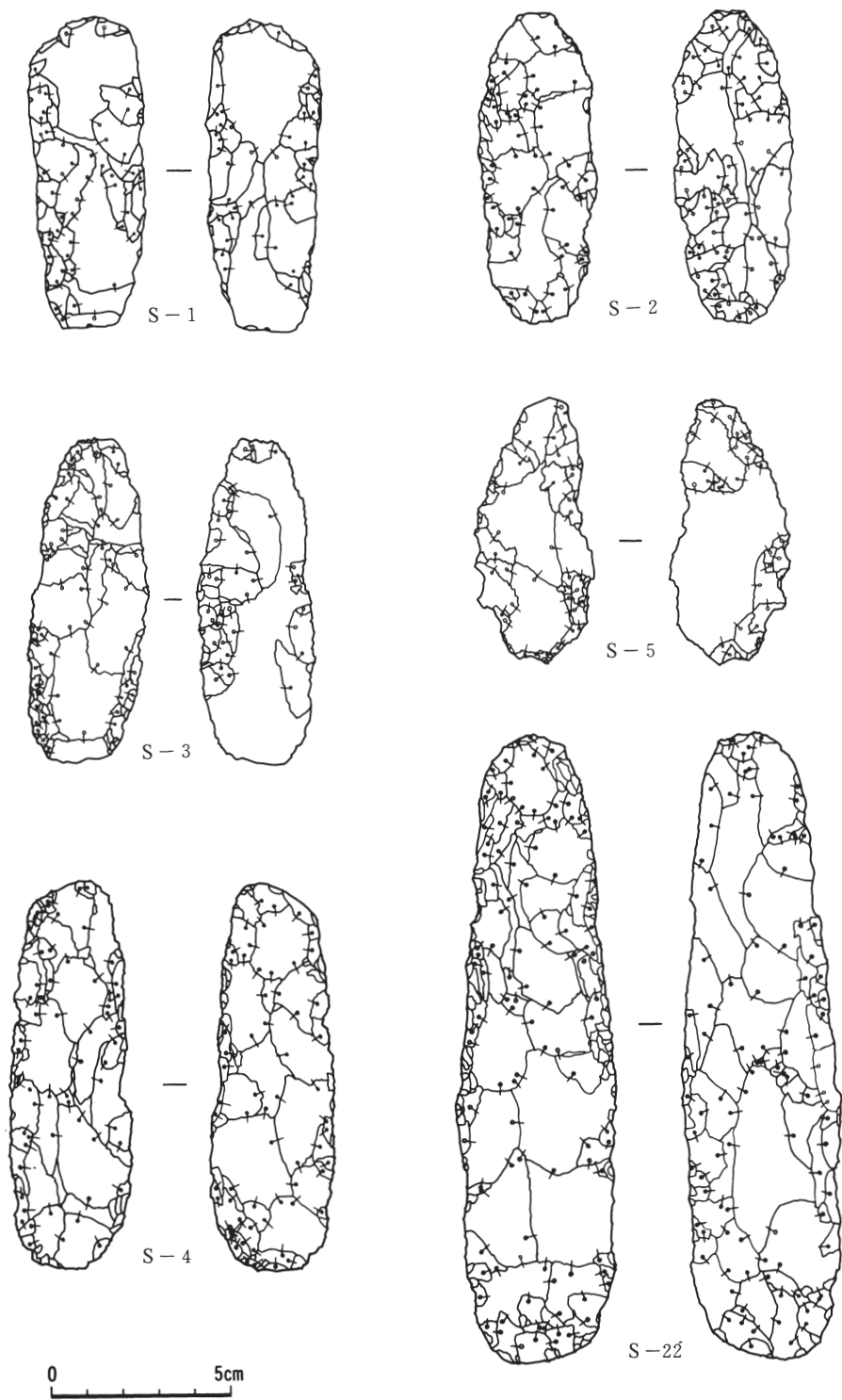


图36 石器集積跡出土石器剝離狀況図

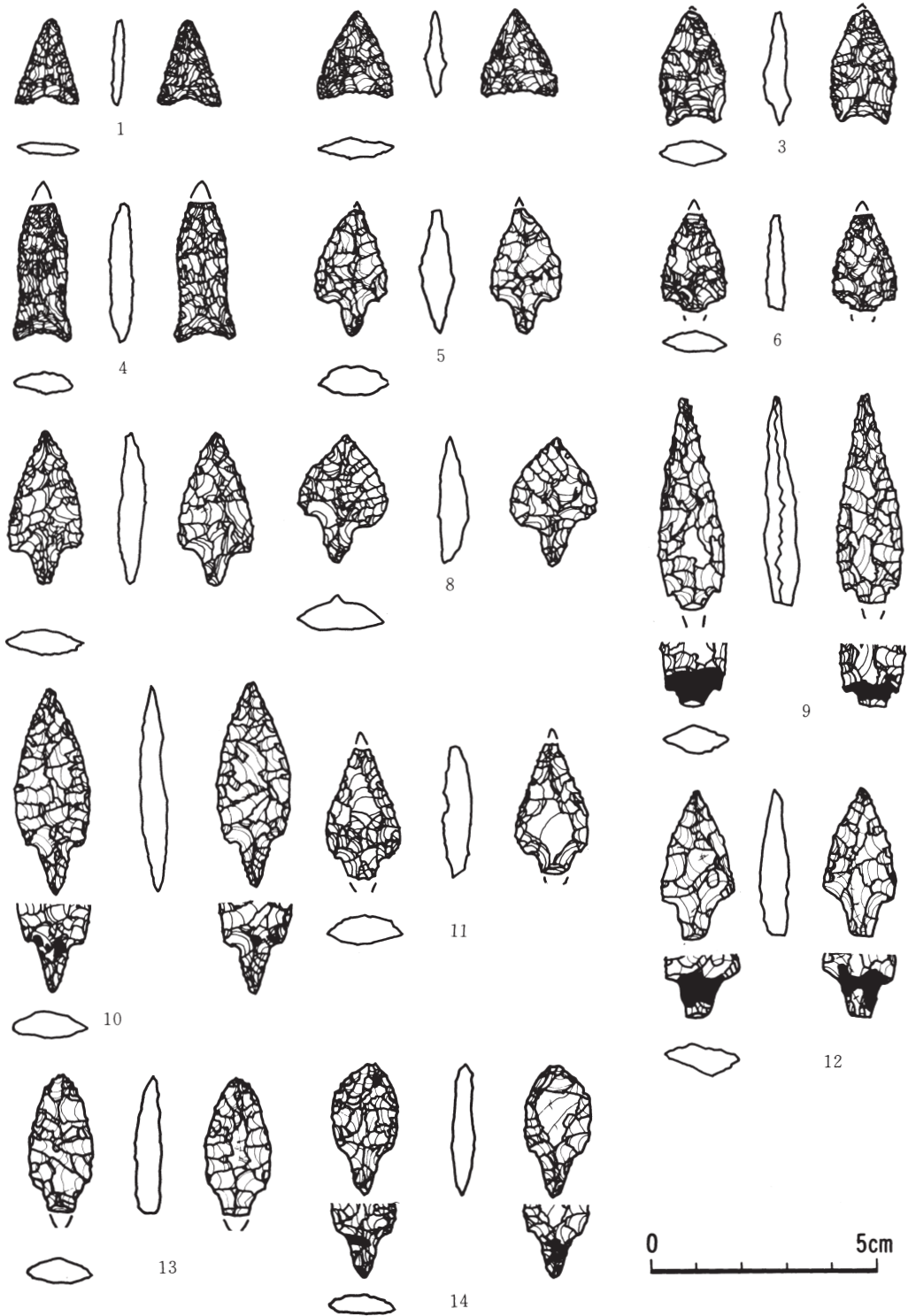


图37 遺構外出土石器実測図(1)

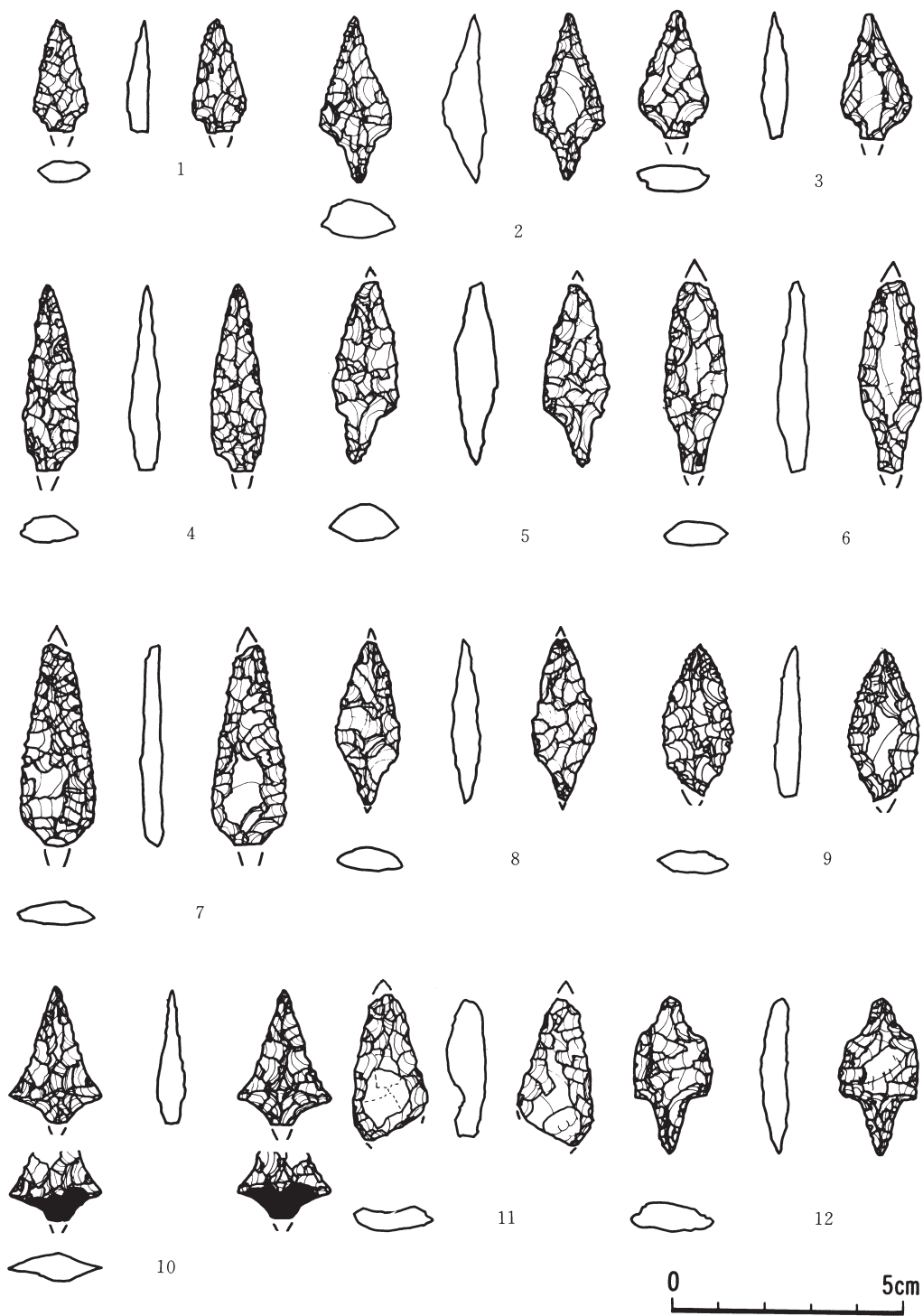


图38 遺構外出土石器実測図(2)

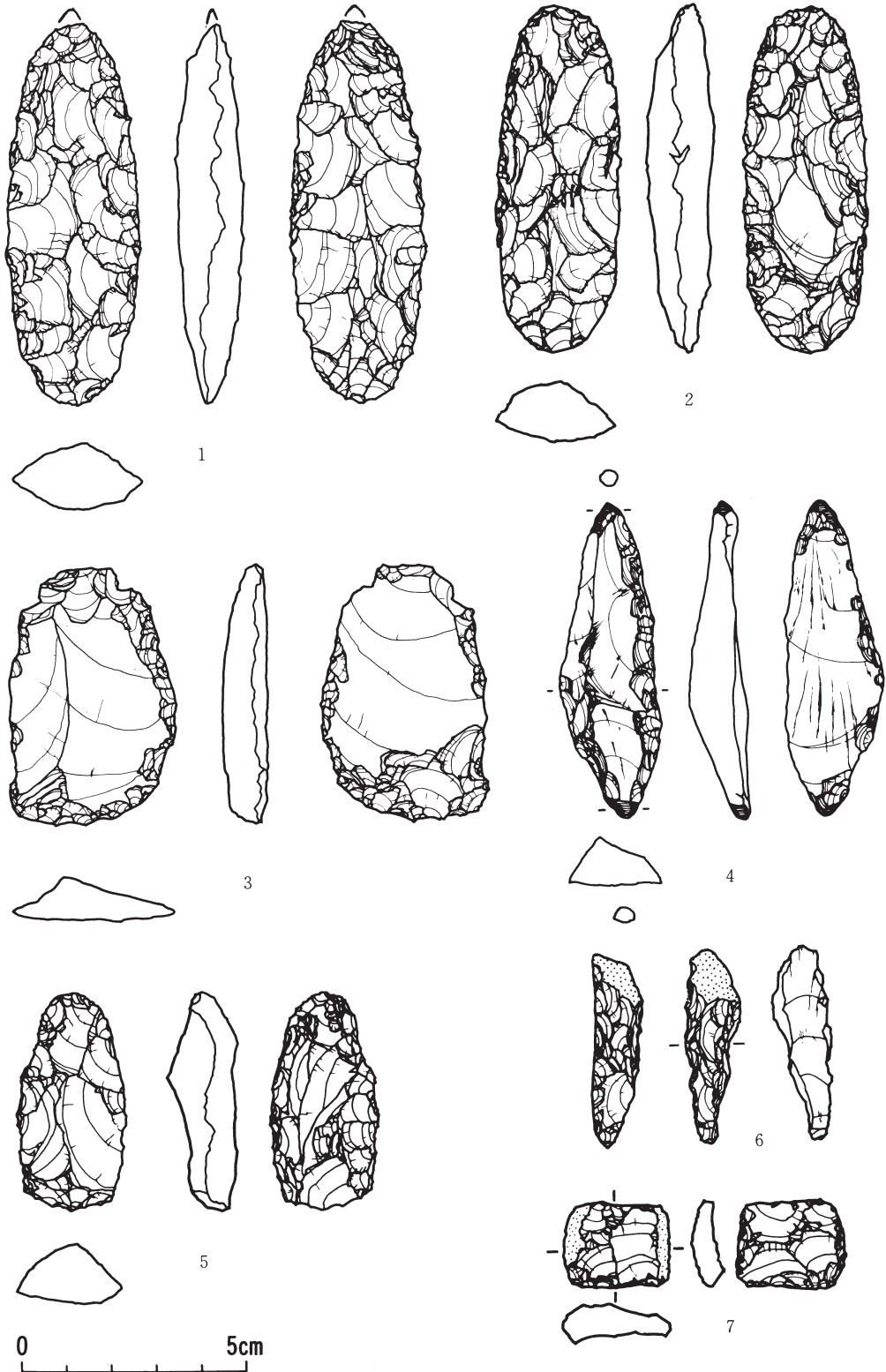


图39 遺構外出土石器実測図(3)

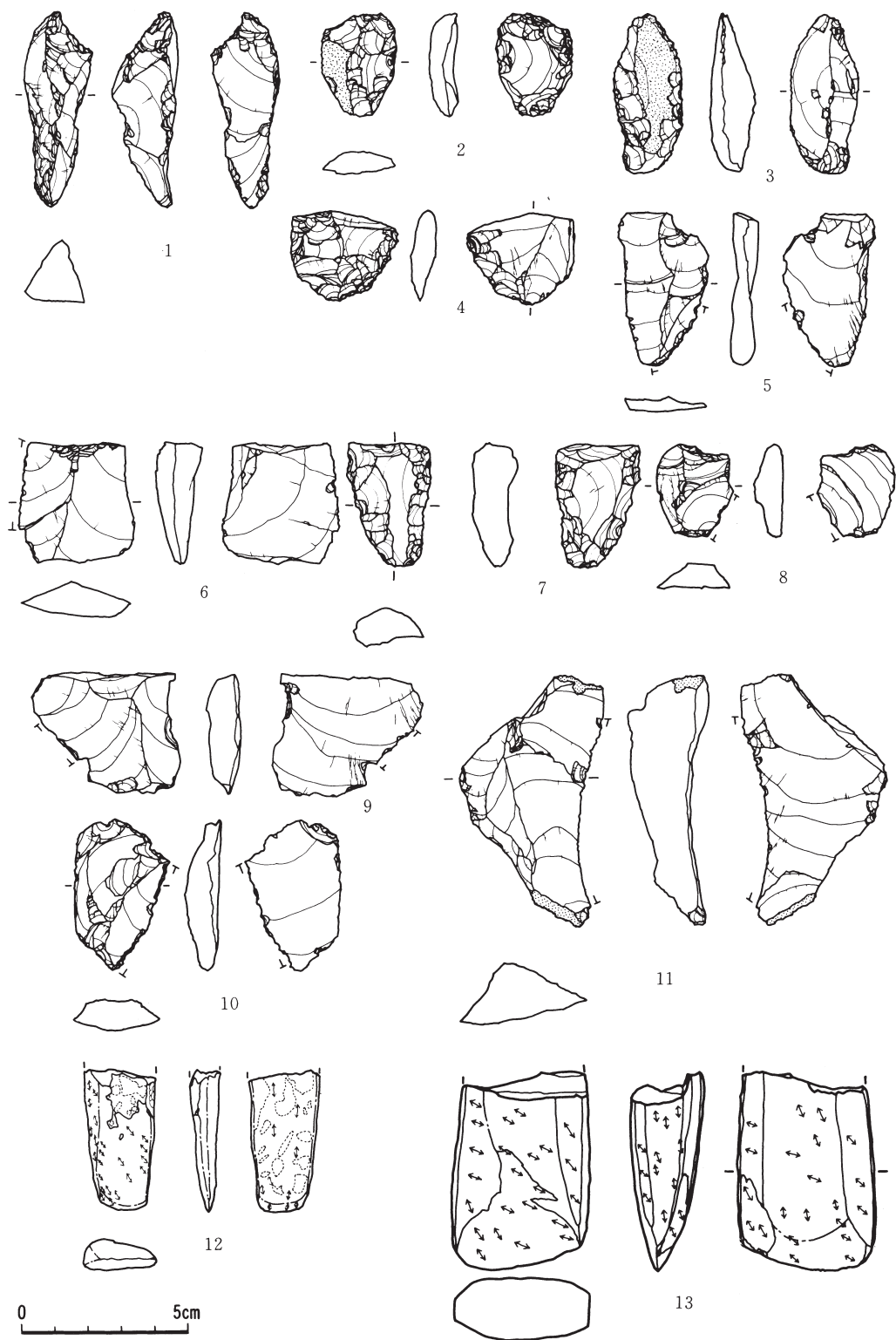


图40 遺構外出土石器実測图(4)

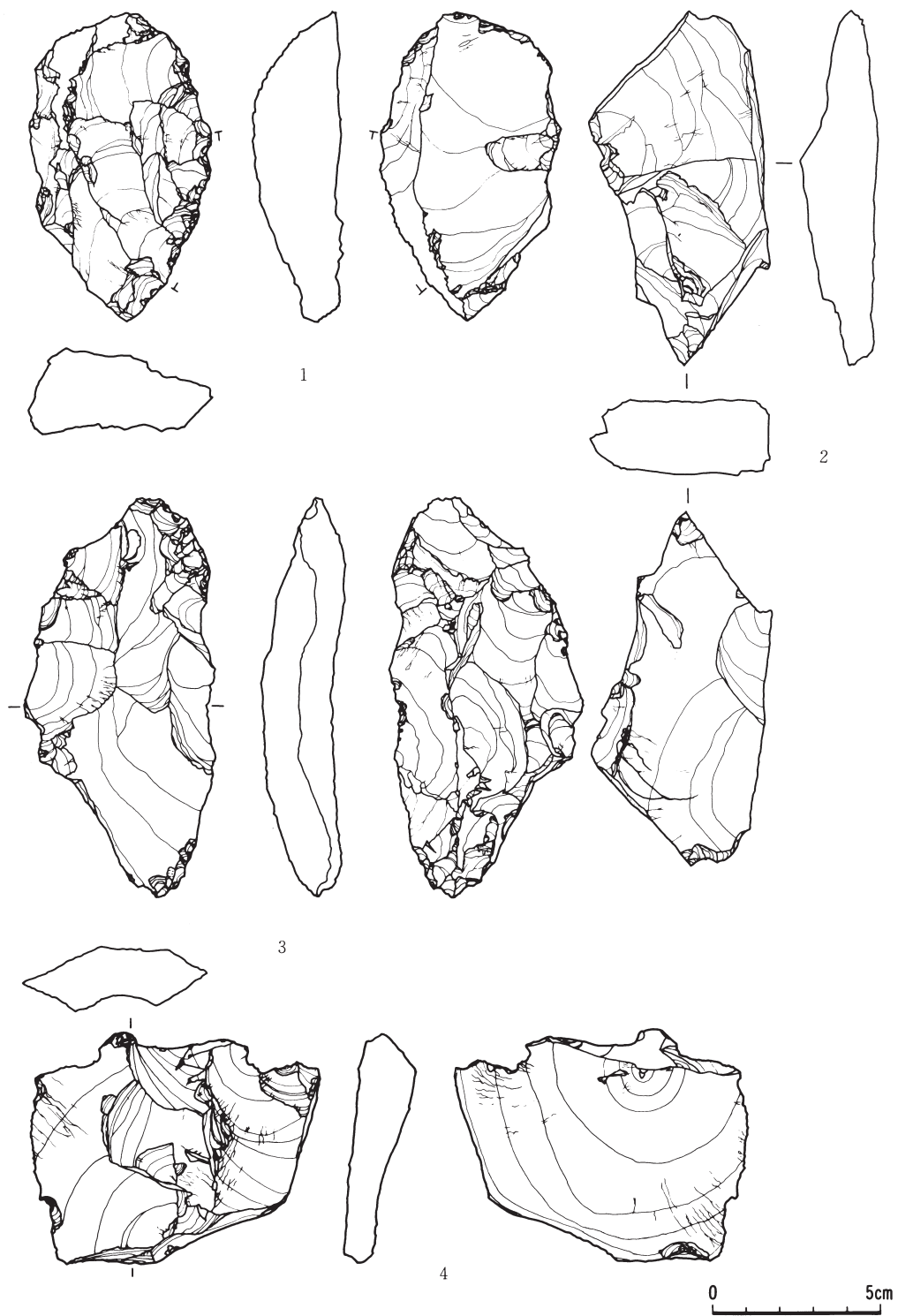


图41 遺構外出土石器実測図(5)

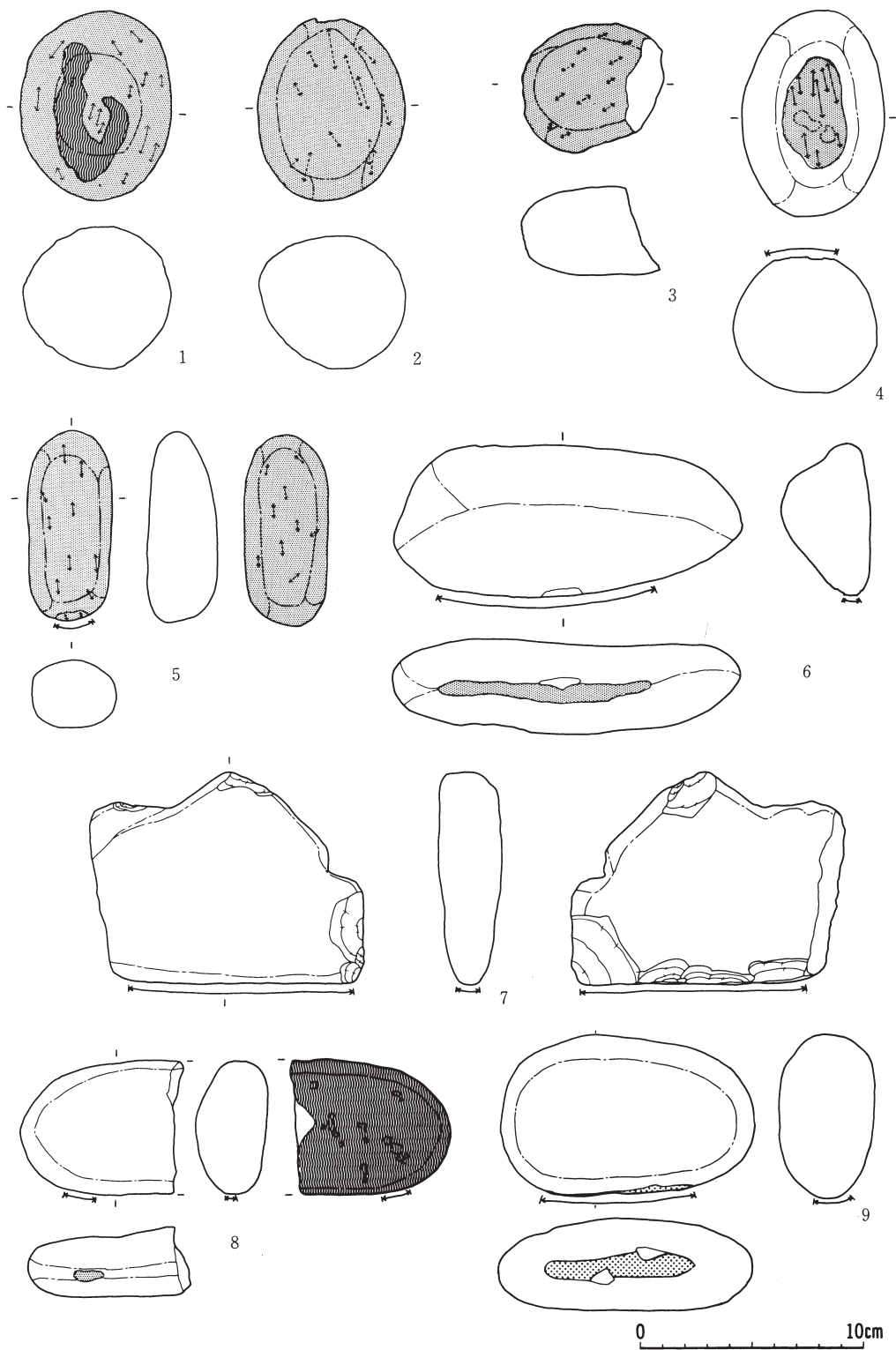


图42 遺構外出土石器実測図(6)

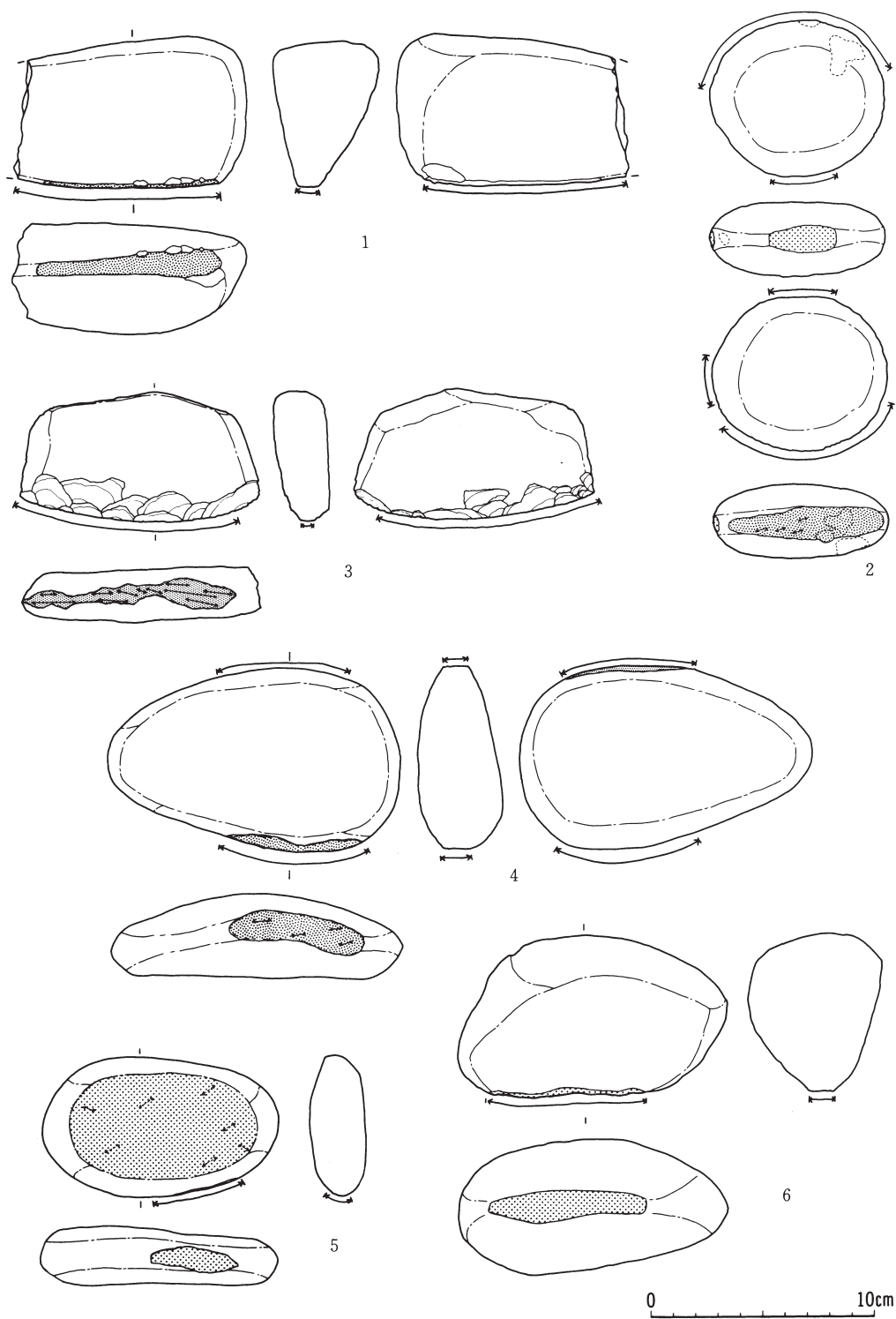


图43 遺構外出土石器実測図(7)

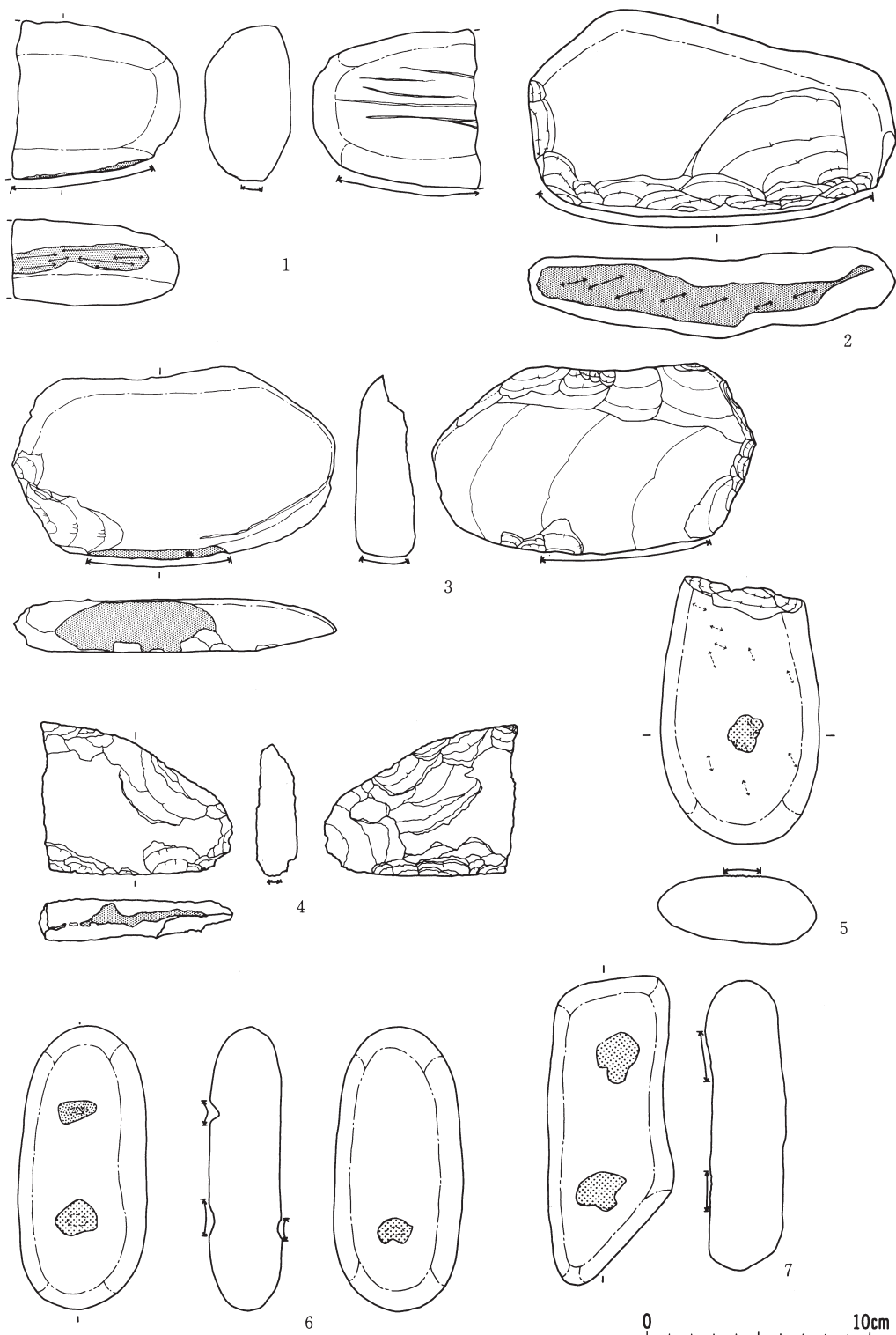


图44 遺構外出土石器実測図(8)

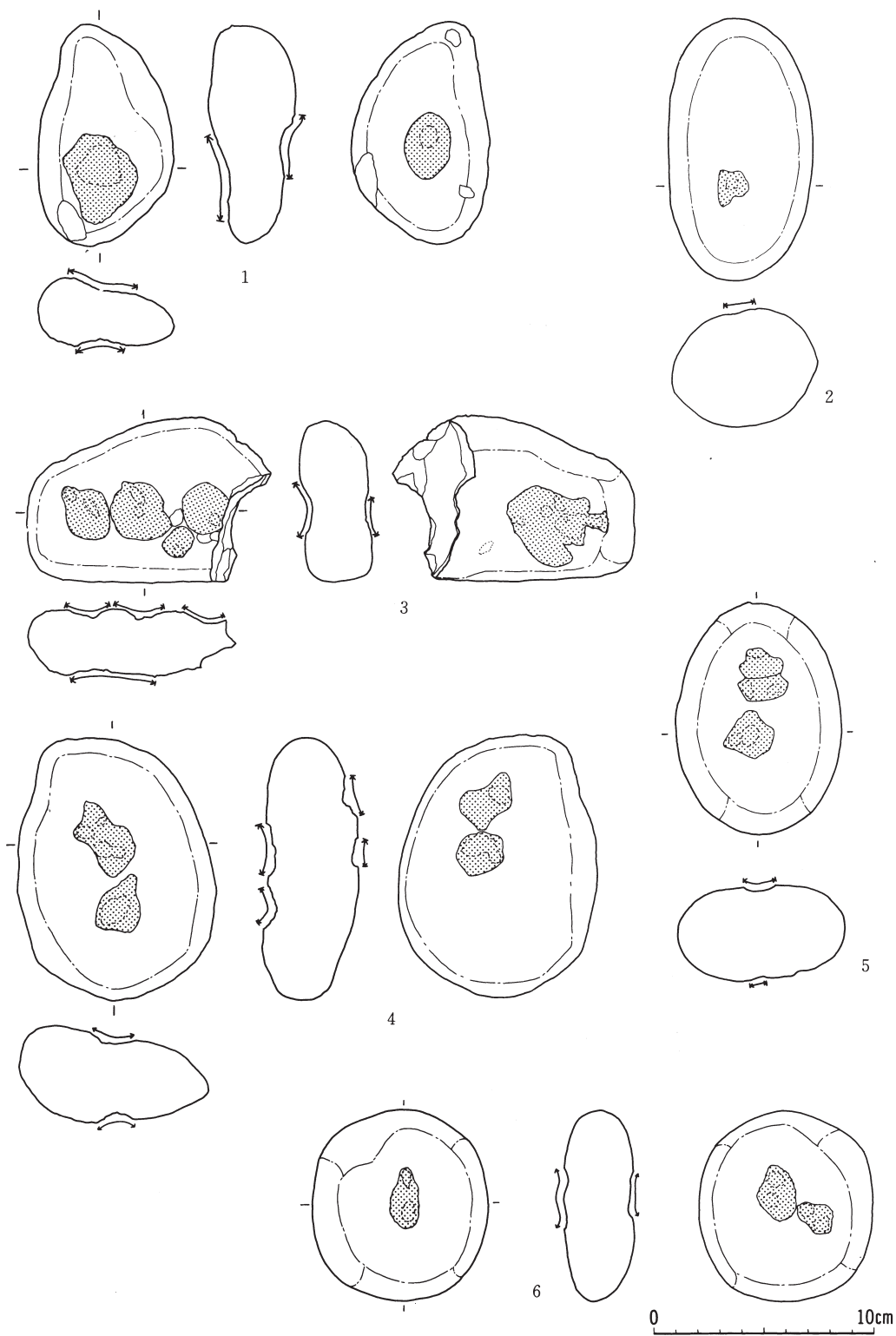


图45 遺構外出土石器実測図(9)

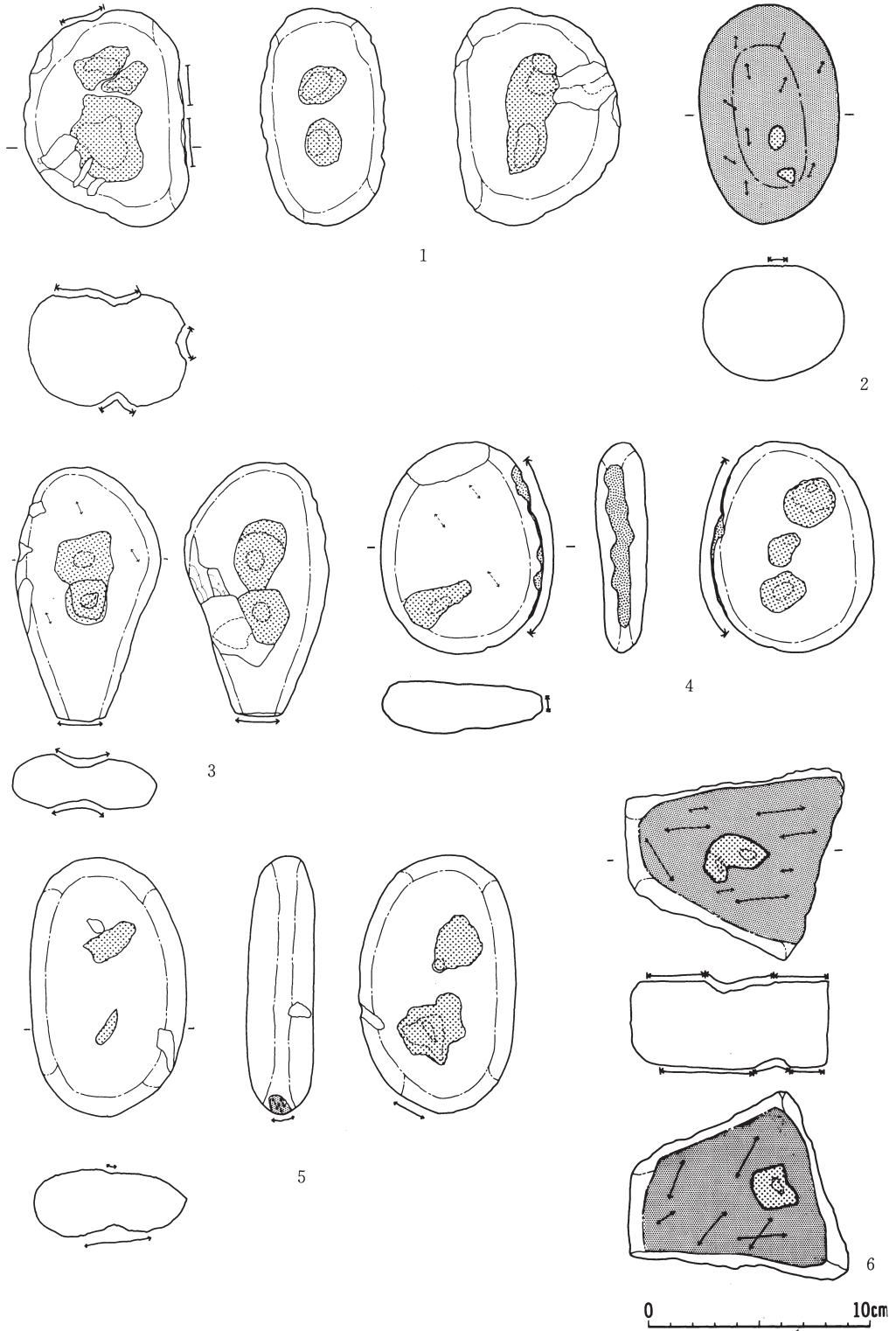


图46 遺構外出土石器実測図(10)

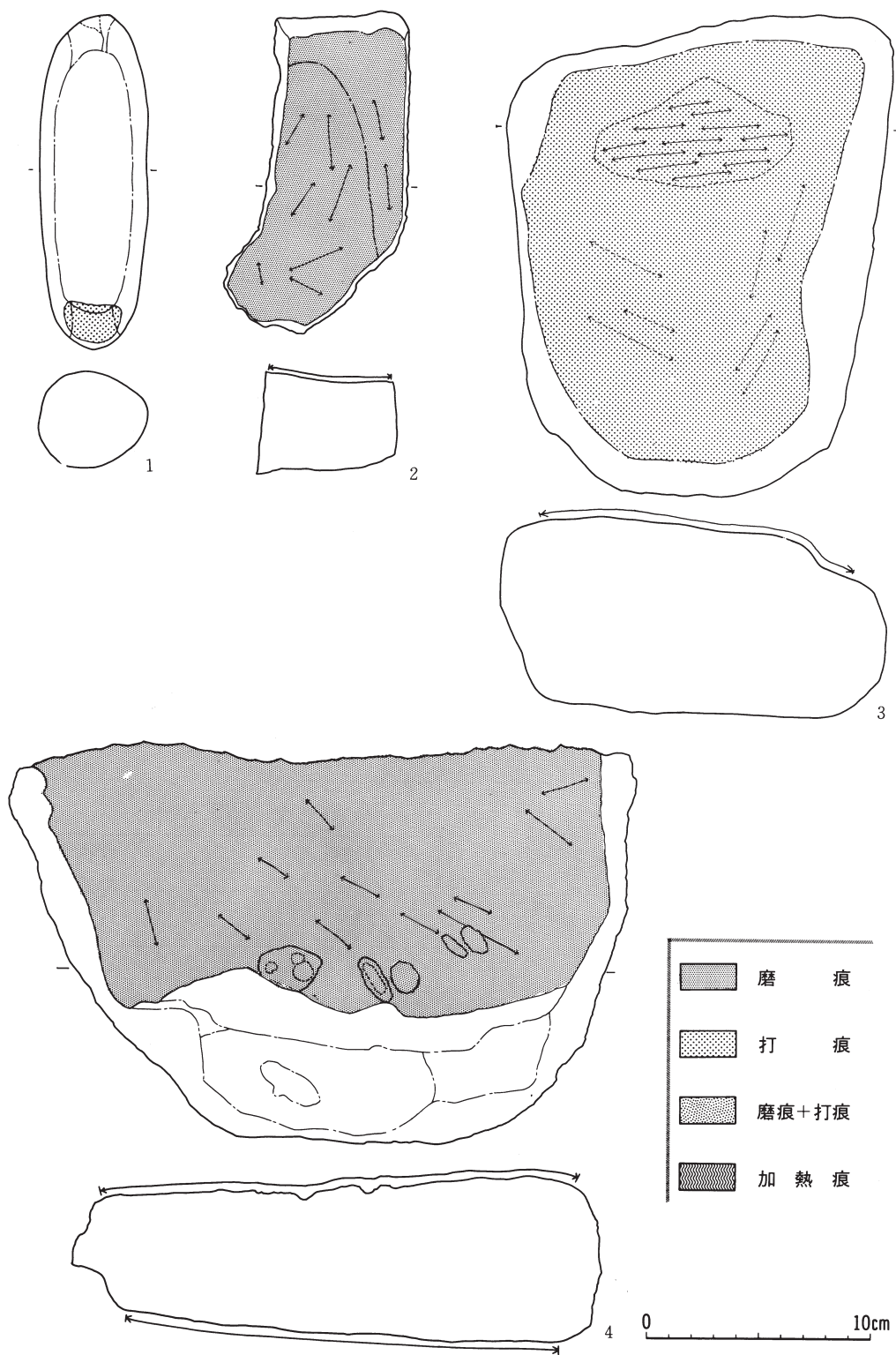


图47 遺構外出土石器実測図(1)

文化遺物

円板状土製品 (図48 - 1 ~ 3)

3点出土した。土器片を円形ないしは楕円形に加工したものである。3点とも周縁を敲打調整によって丸く仕上げ、その後、周縁を研磨している。

三角形土製品 (図48 - 4)

1点出土した。土器片を敲打調整によって三角形に加工したものである。

土偶の脚 (図48 - 5)

土偶の脚と思われるもので、1点出土した。

球状土製品 (図48 - 6)

直径約14mmの土玉に、3列の刺突列が互いに交叉するように施文されているもので、1点出土した。重さは2.3gである。

有孔石製品 (図48 - 7)

1点出土した。台形状に仕上げられ、上部に両面から穴が穿たれている。器面全面に研磨痕が見られる。凝灰岩製である。

その他 (図48 - 8 ~ 10)

表裏両面に文様が見られるもので、3点出土した。土偶か土器片と思われるが、細片のため、判断できなかった。

8・9は捺糸圧痕文が施文されている。胎土には繊維の混入が見られる。10は刺突文、細沈線文が施文され、胎土に繊維の混入は見られない。

(2) 江戸時代以降の出土遺物 (図49)

寛永通宝が4枚、1銭が3枚出土している。

(3) 自然遺物 (P L 21)

D - 3 グリッド第 層から石炭が少量出土した。縄文時代に属するものかどうかは不明である。なお、本遺跡出土の石炭が近域から産出されたものとするならば、東通村猿ヶ森近辺のものと思われる。

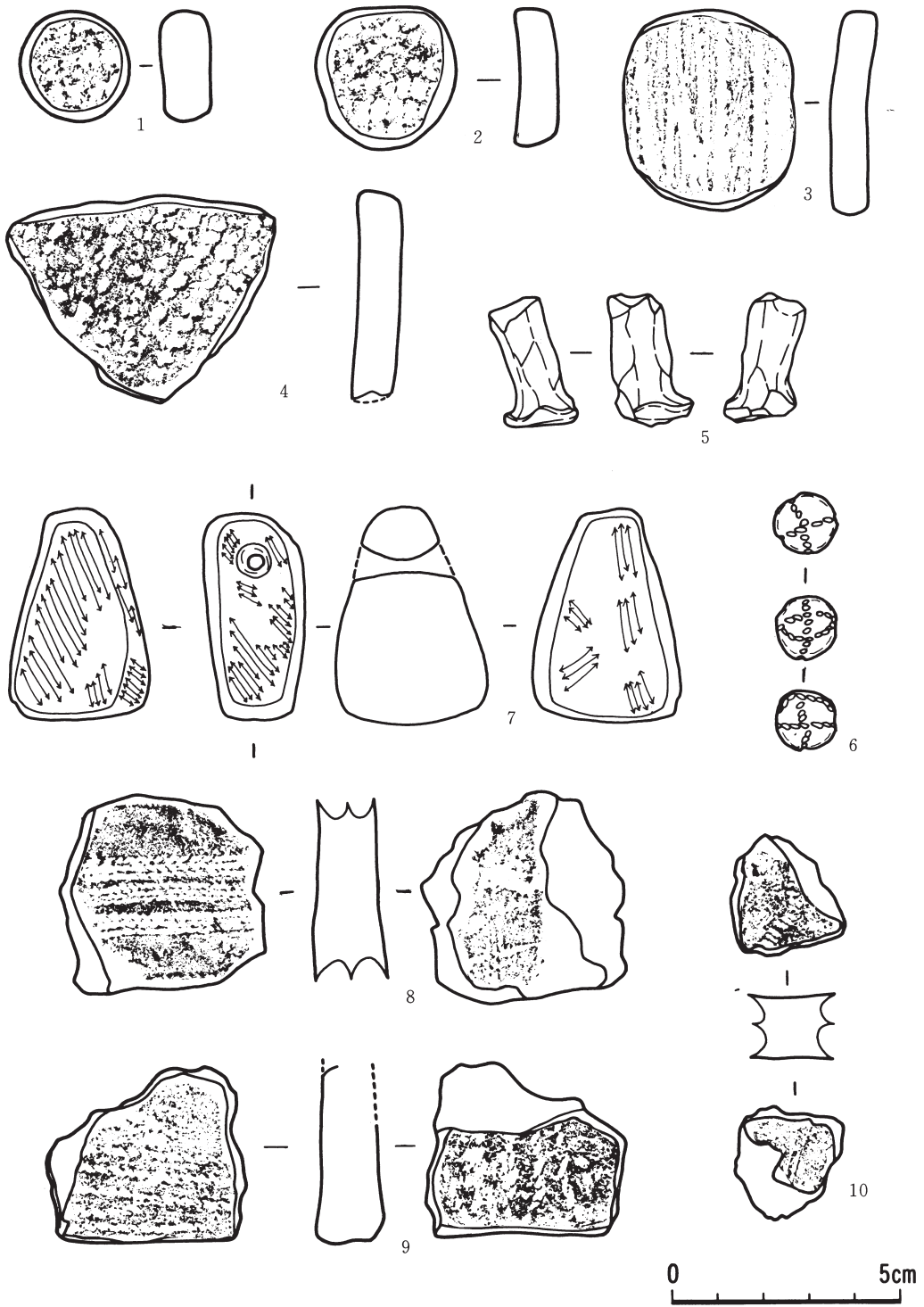


图48 文化遺物

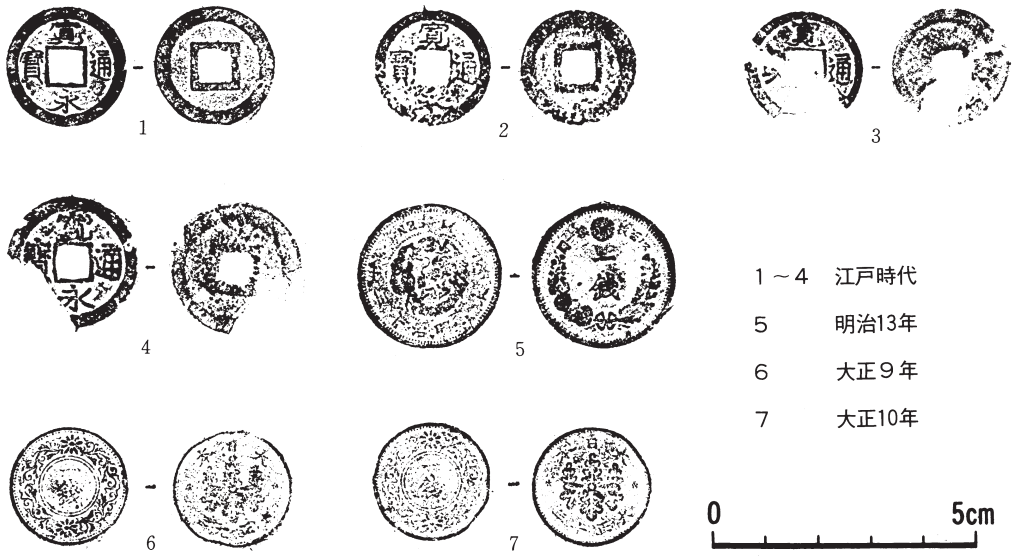


图49 古 钱

4 まとめ

槻ノ木遺跡は、昭和55年度に野辺地町教育委員会で発掘調査を実施している。

今回の調査で、隣接する同遺跡を調査し、土壌11基、石器集積跡1基と縄文時代前期末葉から晩期の遺物を確認した。

11基の土壌は、形態からA～Dの4類に大別することができた。このうち、A・B・D類の土壌は前回の調査で確認されなかったものであり、今回の調査で、多様な形態を有する土壌が存在していることが判明した。C類の土壌は前回の調査で1基確認されている。主軸方位はほぼ一致している。C類の土壌は少なくとも、東西へ分布していることが指摘できる。土壌の機能・用途としては、貯蔵穴・落し穴・土壌墓などが考えられるが、小範囲の調査で決め手となる遺物が出土しなかったため、明確にすることができなかった。

出土土器は、前年度の調査結果とほぼ同様であるが、今回の調査では弥生時代の土器が出土しなかった。最も多量に出土しているのは、縄文時代中期末葉の大木系土器であり、東北地方北半における当該土器の一端を解明していく上で、貴重な資料を得た。

石器についてみると、螺旋状の線状痕が見られる石錐と、石器集積跡から出土した打製石斧とも、筥状石器とも考えられる29点の剥片石器が注目され、また、石器組成上からは、磨石類の占める割合が高いことが指摘できる。磨石類では凹石が多数を占めることが注目される。

二度にわたる調査では、縄文時代前期中葉の土器は確認されなかったが、調査区の西方へ、約100m行った場所では、縄文時代前期中葉から中期末葉に至る遺物包含層の存在が、地元の研究者達によって確認されている。しかし、現在は植林によって杉林となっており、確認することは困難であるが、十年位前までは畑地であり、多数の遺物を採集できたという。以上のことから槻ノ木遺跡は縄文時代前期中葉から晩期、弥生時代に至るまで、長期間にわたって営まれた一大複合遺跡と考えられる。

(畠山 昇)

5 分析

火山灰と土壌の蛍光X線分析

三辻 利一

青森県下の遺跡に堆積する火山灰はRb - Sr分布図、およびFe量によって3グループに分類できる。図50 - 1には青森県下遺跡出土火山灰のRb - Sr分布図を示す。全体として、RbとSrの間には逆相関の関係が成り立つ。そして、Rb量が多くSr量の少ないA群、逆に、Rb量が少なくSr量の多いC群、その中間に分布するB群の3グループに明らかに分類される。同じようなことはFe量でもみられる。Rb - Sr分布図でB群に対応する火山灰は最もFe量が多く、C群は最も少ない。A群はその中間に分布する。

これらの降下火山灰のうち、松山 力氏が陣馬川原遺跡で採集し、十和田a上部と同定した火山灰はA群に所属し、十和田a下部と同定した火山灰はC群に所属したところから、層序的にはC群がA群より古いと考えられる。さらに、南郷村馬場瀬で採集した上位火山灰はB群に下位火山灰はC群に所属したところからB群よりもC群の方が古いと考えられた。A群とB群の層序的關係については明らかではない。なお、十和田aよりも古い十和田bは、Rb - Sr分布図ではC群に属し十和田a下部と区分はつかないが、図50 - 2のFe量では十和田bの方が多く、相互識別できることがわかる。図50 - 1と図50 - 2の3グループの分布は比較的シャープに分かれており、これらの分布の違いは風化によるものとは考え難い。噴出の時期により火山灰自身の特性に違いがあると考えられる。そうだとすると、その特性の違いを利用して蛍光X線分析により青森県下の遺跡に堆積した火山灰を同定することができ、さらに、その結果から遺跡の年代を知る手掛りが得られることになる。

図51 - 1には、槻ノ木遺跡で採集した火山灰のRb - Sr分布図を示す。B群に所属する。したがって、C群すなわち十和田a下部より若い年代を与えることになる。ただ、ここで問題は、Rb - Sr分布図と図51 - 2のFe量との結果が矛盾することである。Rb - Sr分布図では槻ノ木遺跡の2点の火山灰はB群に所属するのに対し、Fe量ではC群に所属し矛盾する。この矛盾をどう理解してよいかよく分らない。Rb - Sr分布図の結果を優先すると、この火山灰はB群となり、槻ノ木遺跡の年代は十和田a下部より若くなる。Fe量を優先すると十和田a下部に対応することになり、十和田a上部より古い遺跡であることは間違いない。

次に、遺跡の土壌を分析した結果について述べる。P(リン)は検出されなかった。蛍光X線分析法のPの検出感度は余り良くないが、それよりも長年埋藏中にPは地下水により洗い流されたものと考えの方が妥当である。土壌の質の違いを示すために他の遺跡の土壌との違いをRb - Sr分布図によって比較してみた。図52 - 1には山崎遺跡の土壌のRb - Sr分布図を示す。また、図52 - 2には槻ノ木遺跡の土壌の分布領域を山崎遺跡、松原遺跡と比較して示してある。このように、土壌の地域差もRb - Sr分布図で示すことができることが分かった。

図50-1 青森県下遺跡出土火山灰のRb-Sr分布

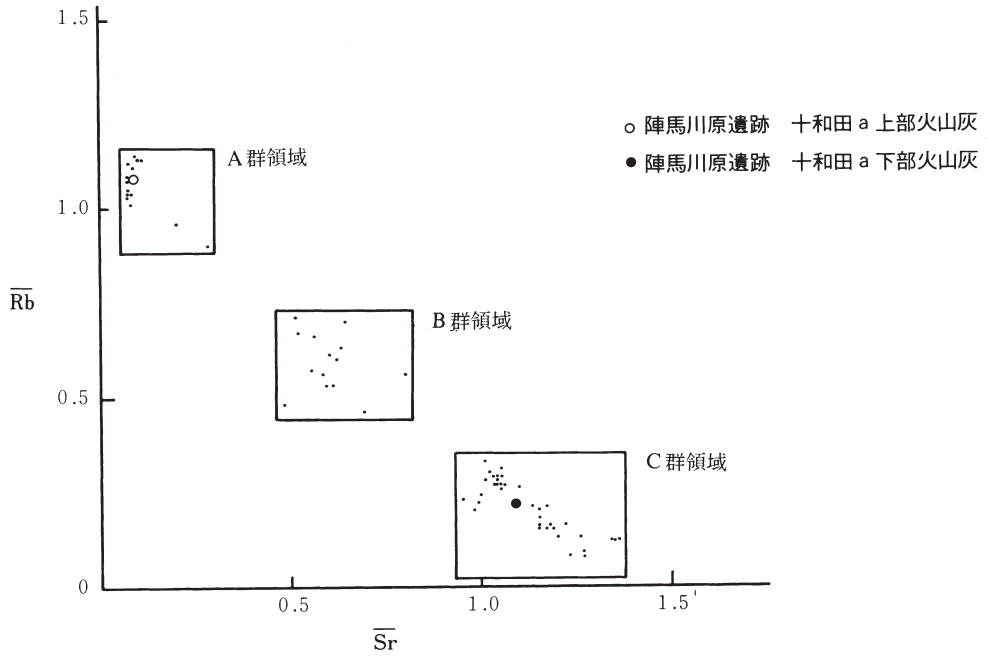


図50-2 青森県下遺跡出土火山灰のFe量

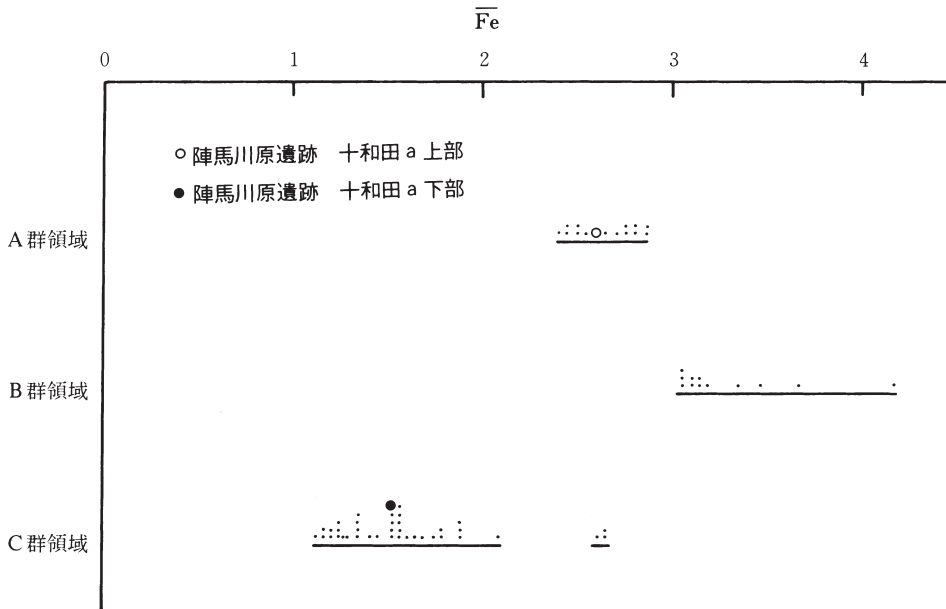


図50 青森県下遺跡出土火山灰のRb-Sr分布とFe量

図51-1 槻ノ木遺跡出土火山灰のRb-Sr分布

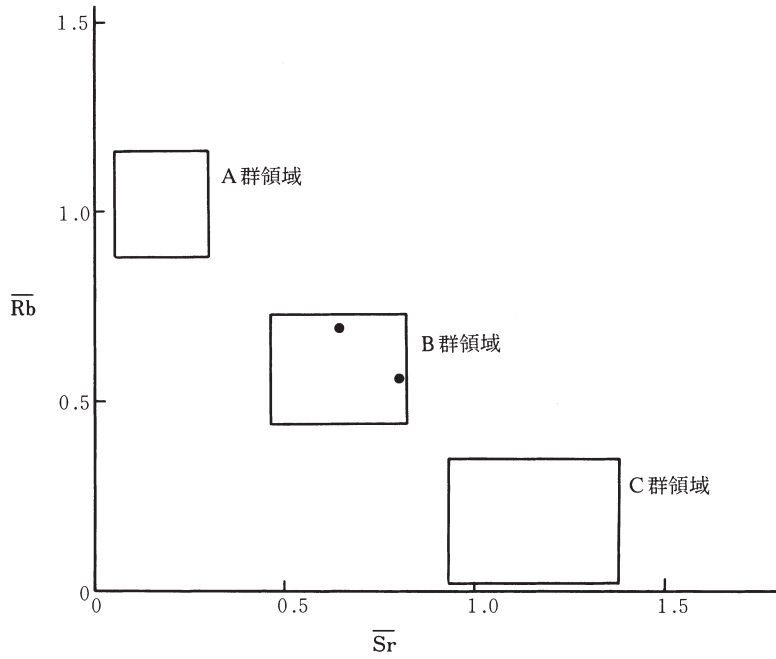


図51-2 槻ノ木遺跡出土火山灰のFe量

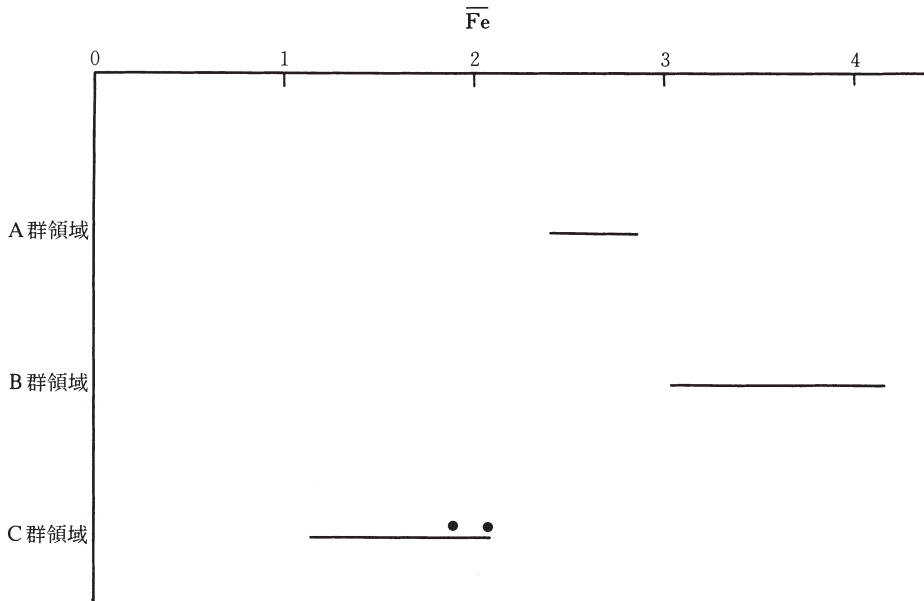


図51 槻ノ木遺跡出土火山灰のRb-Sr分布とFe量

図52-1 山崎遺跡土壌のRb-Sr分布

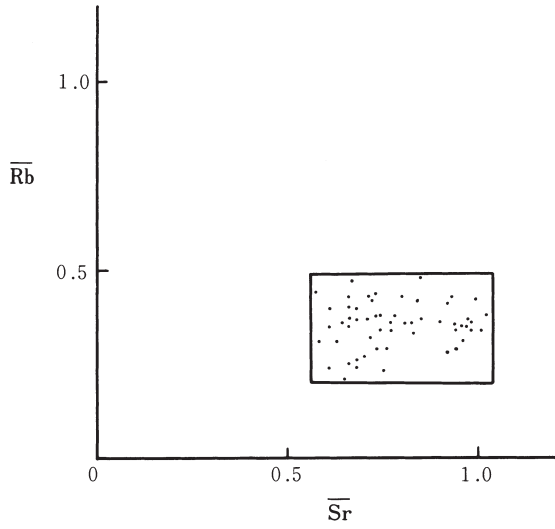


図52-2 槻ノ木遺跡のRb-Sr分布

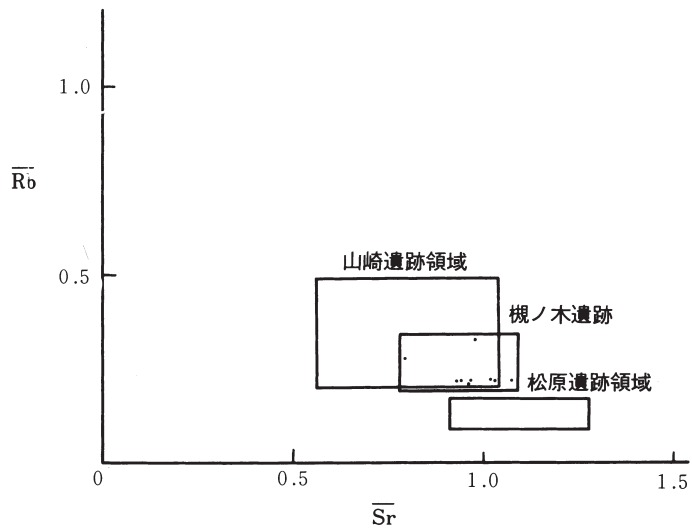
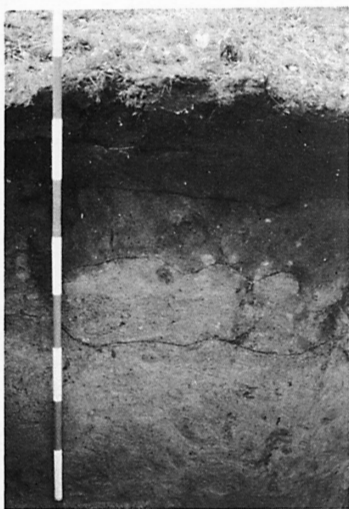


図52 山崎遺跡土壌と槻ノ木遺跡土壌のRb-Sr分布



G-14グリッド基本層序



C・D-12グリッド遺物出土状況



第1号土坑



第2号土坑

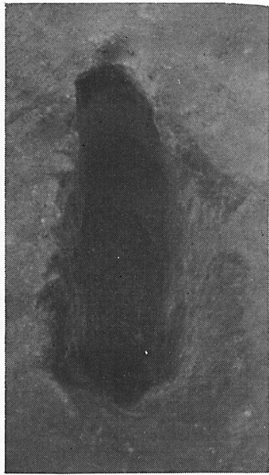


第3号土坑



第4号土坑

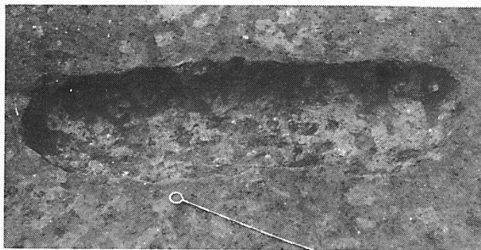
PL. 1 基本層序、遺物の出土状況、土坑



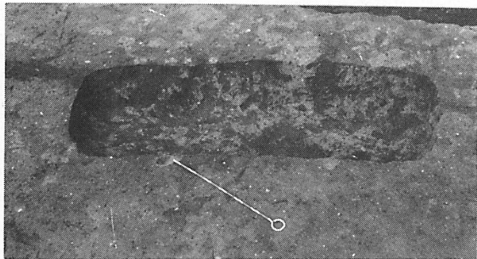
第5号土塚



第7号土塚



第10号土塚



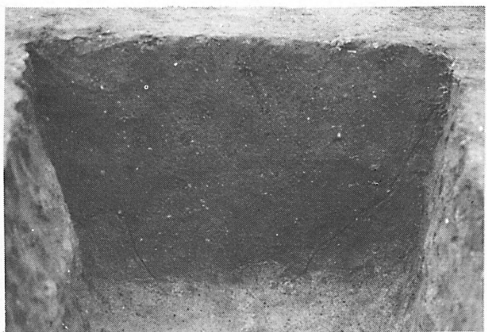
第11号土塚



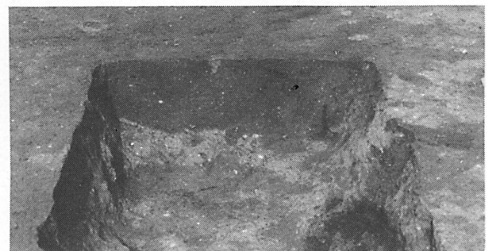
第8号土塚遺物出土状況



第8号土塚

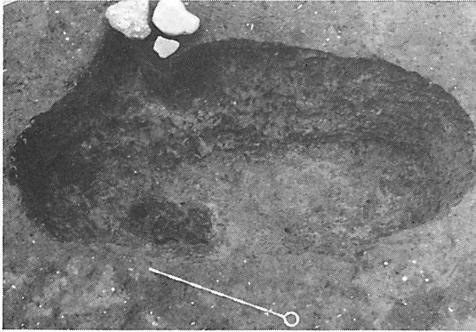


第7号土塚セクション



第11号土塚セクション

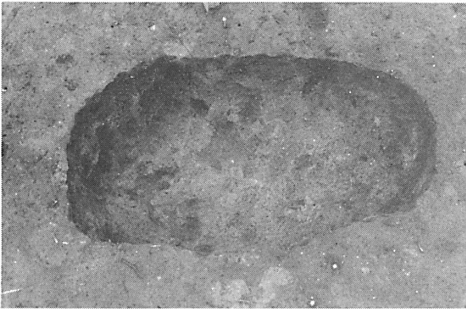
PL. 2土 塚



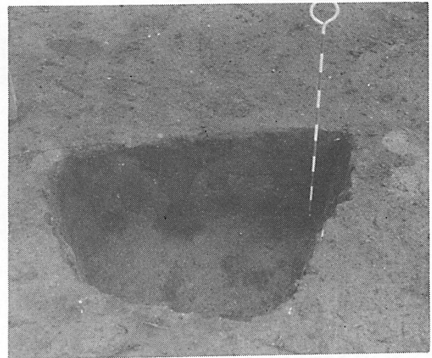
第13号土坑



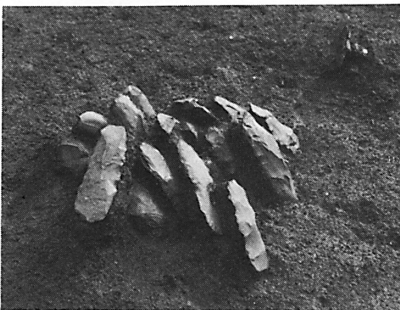
第13号土坑土器出土状況



第15号土坑



第15号土坑セクション



PL. 3 土坑、石器集積跡

石器集積跡検出状況

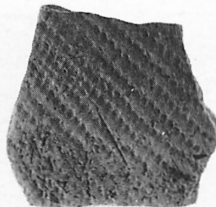
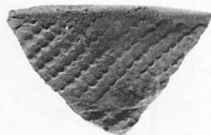
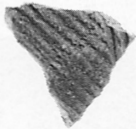
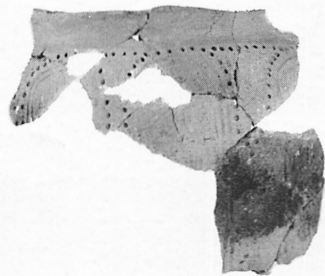


第3号土坑



第4号土坑

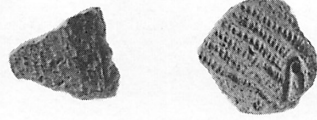
第8号土坑



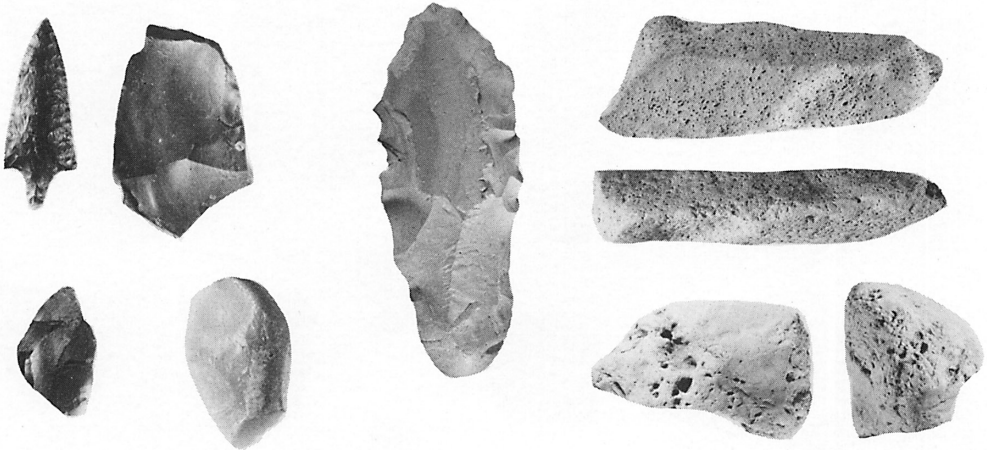
PL. 4 土坑内出土土器



第10号土坑出土土器

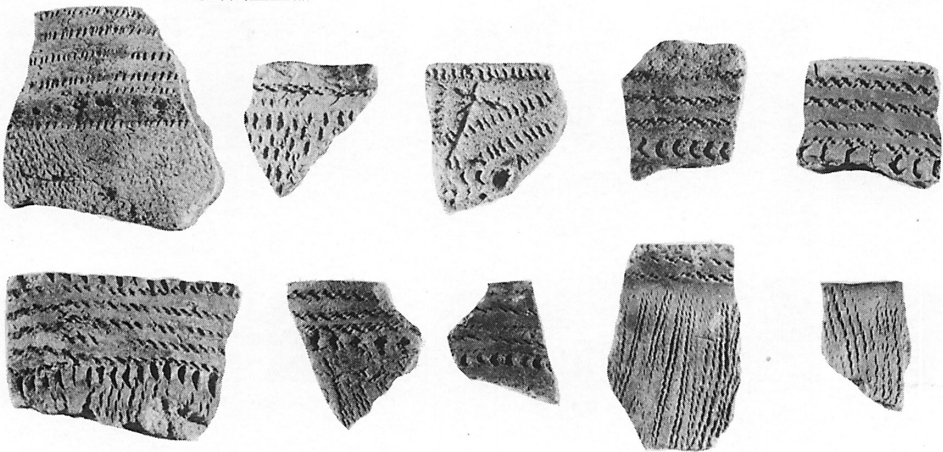


第13号土坑出土土器

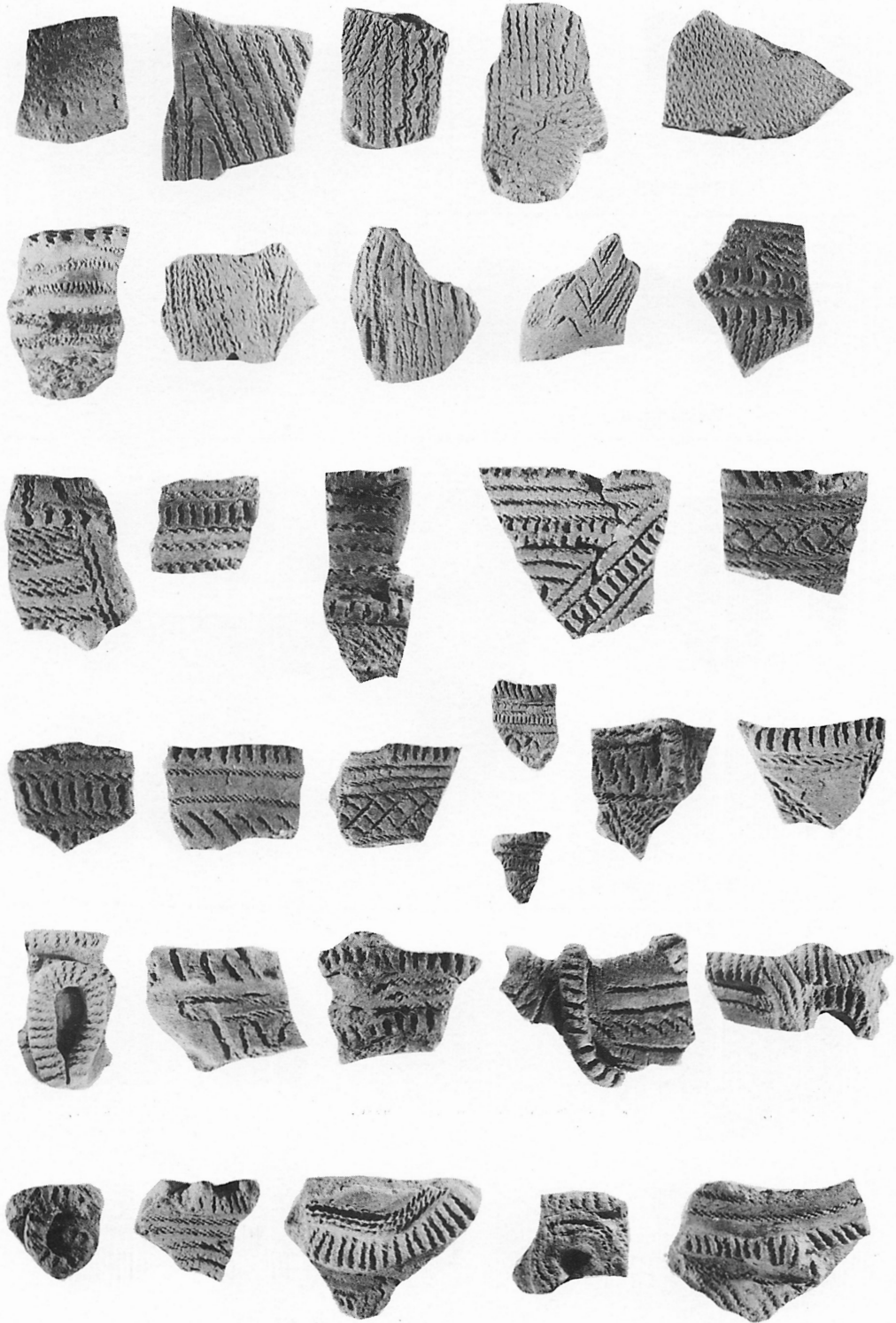


第8号土坑出土石器

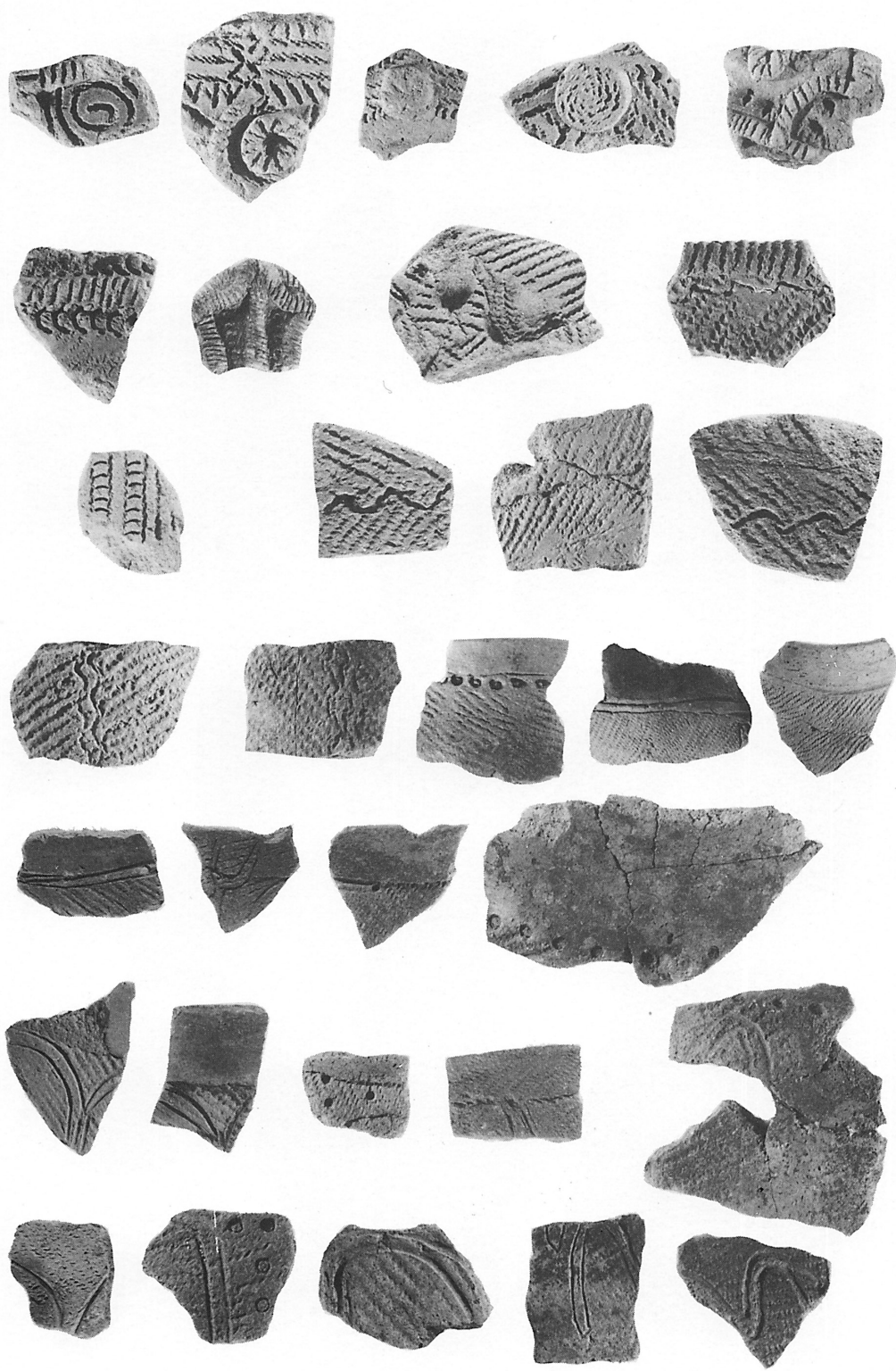
遺構外出土土器



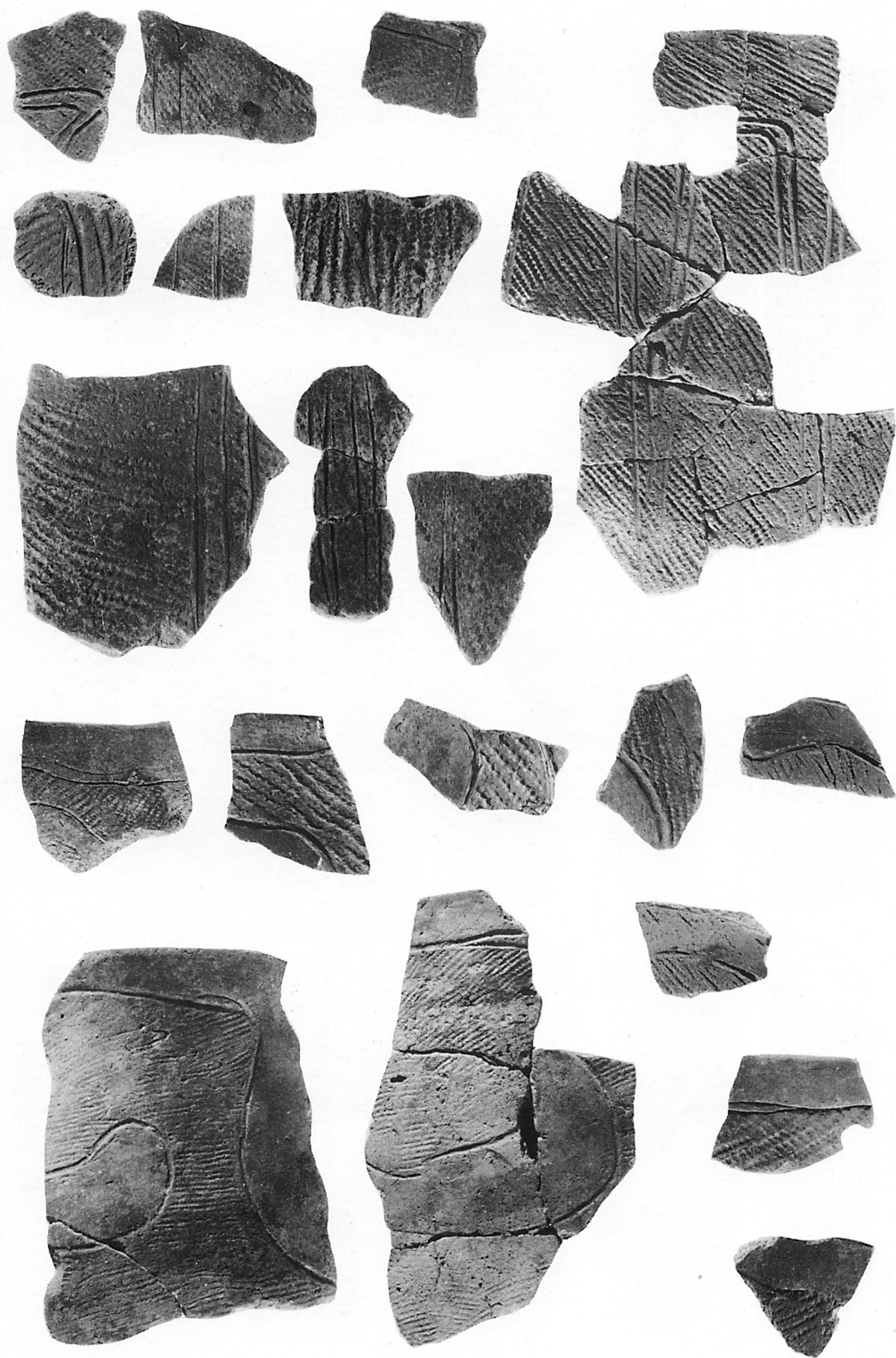
PL. 5 土坑内出土土器・石器、遺構外出土土器



PL. 6 遺構外出土土器



PL. 7 遺構外出土器



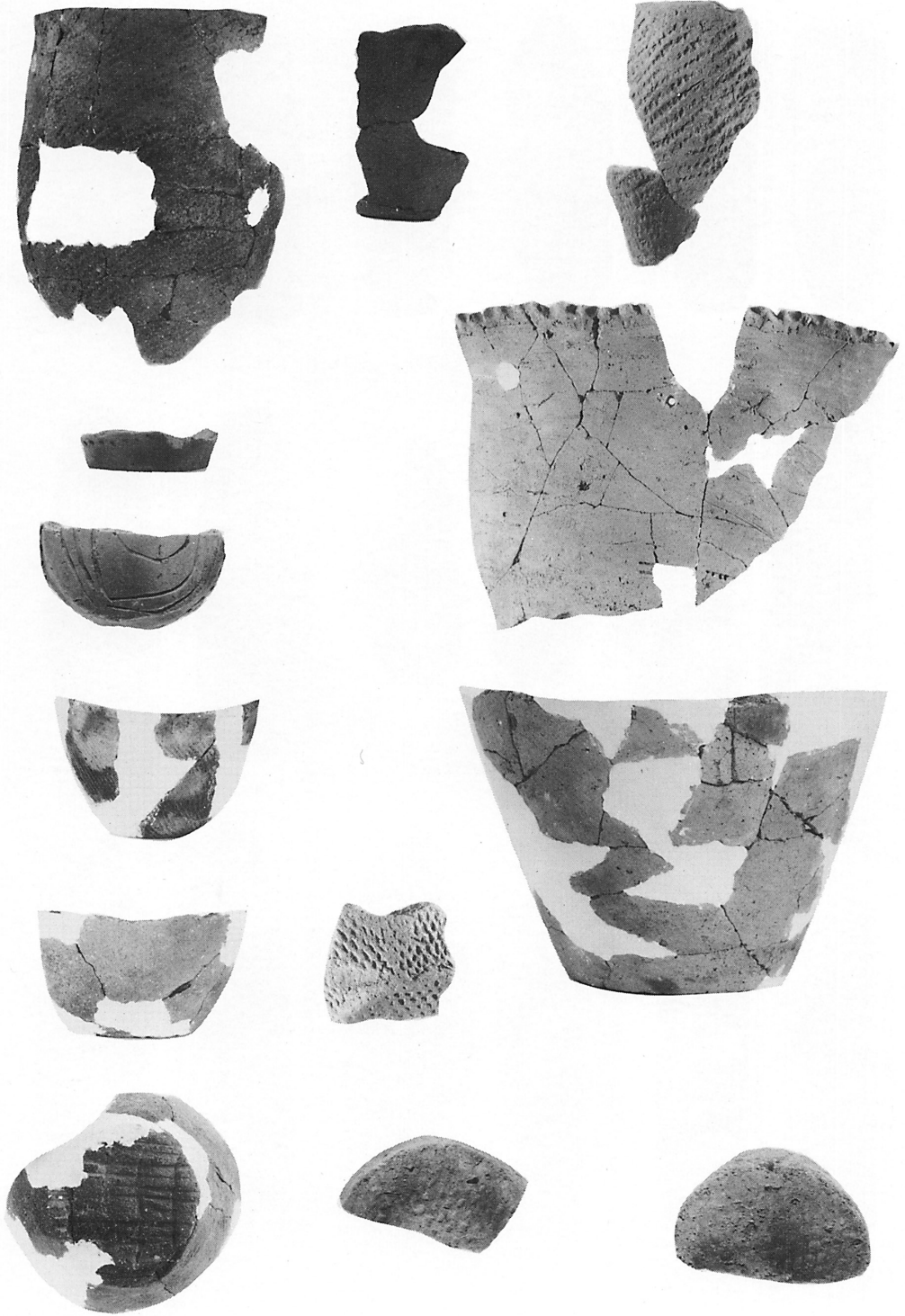
PL. 8 遺構外出土土器



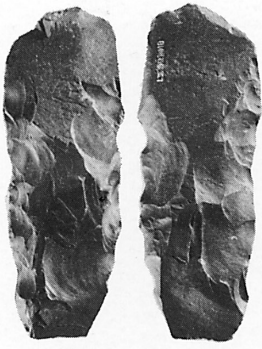
PL. 9 遺構外出土土器



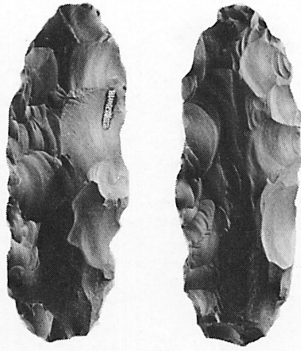
PL. 10 遺構外出土土器



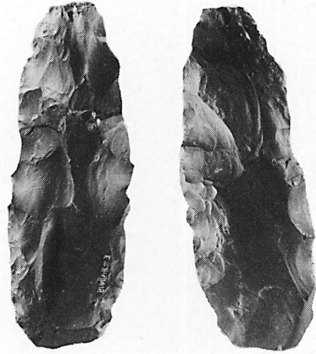
PL. 11 遺構外出土土器



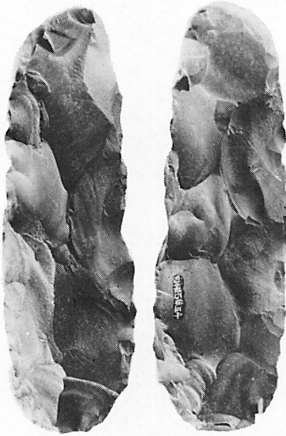
S-1



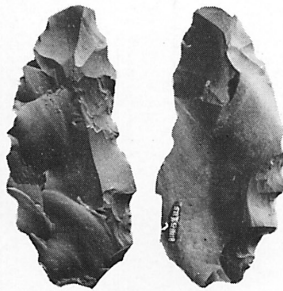
S-2



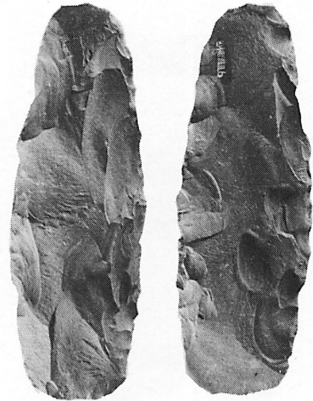
S-3



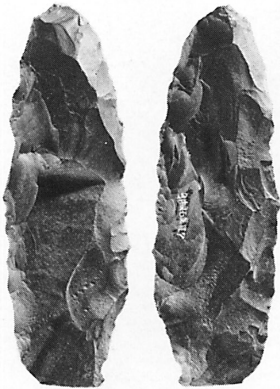
S-4



S-5



S-6



S-7



S-8



S-11

PL. 12 石器集積跡出土石器



S-10



S-12



S-13



S-15



S-14



S-16



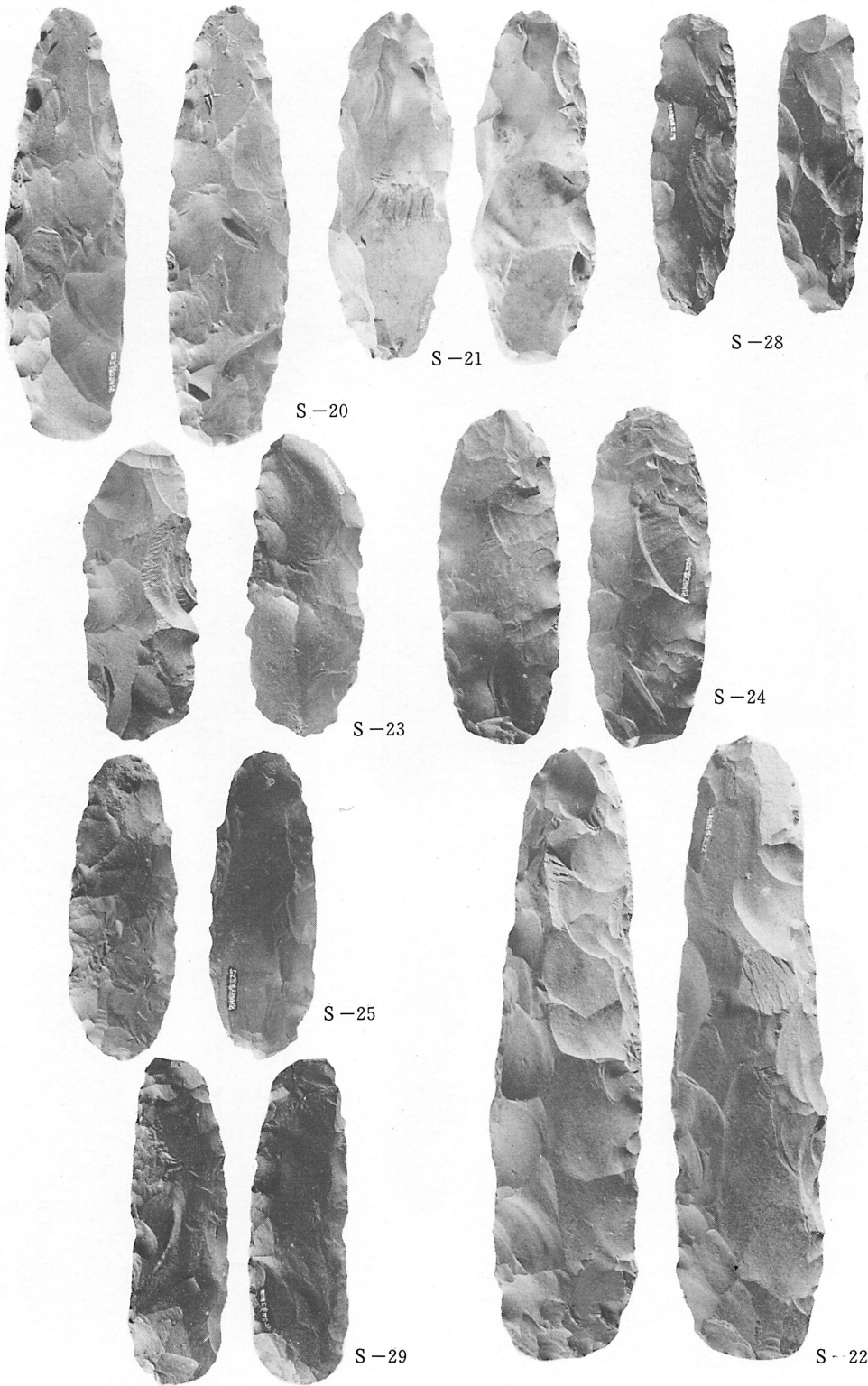
S-17



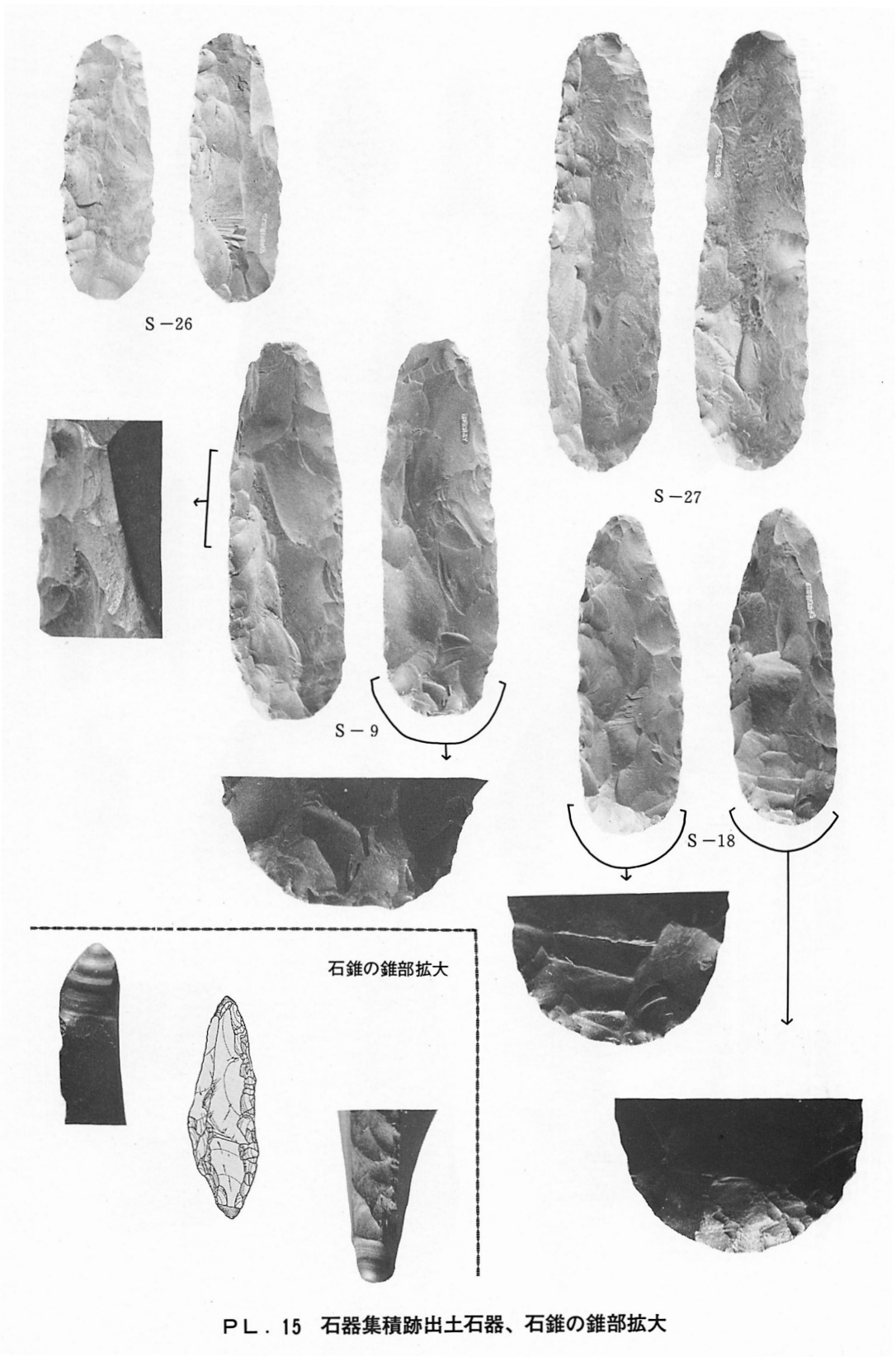
S-19



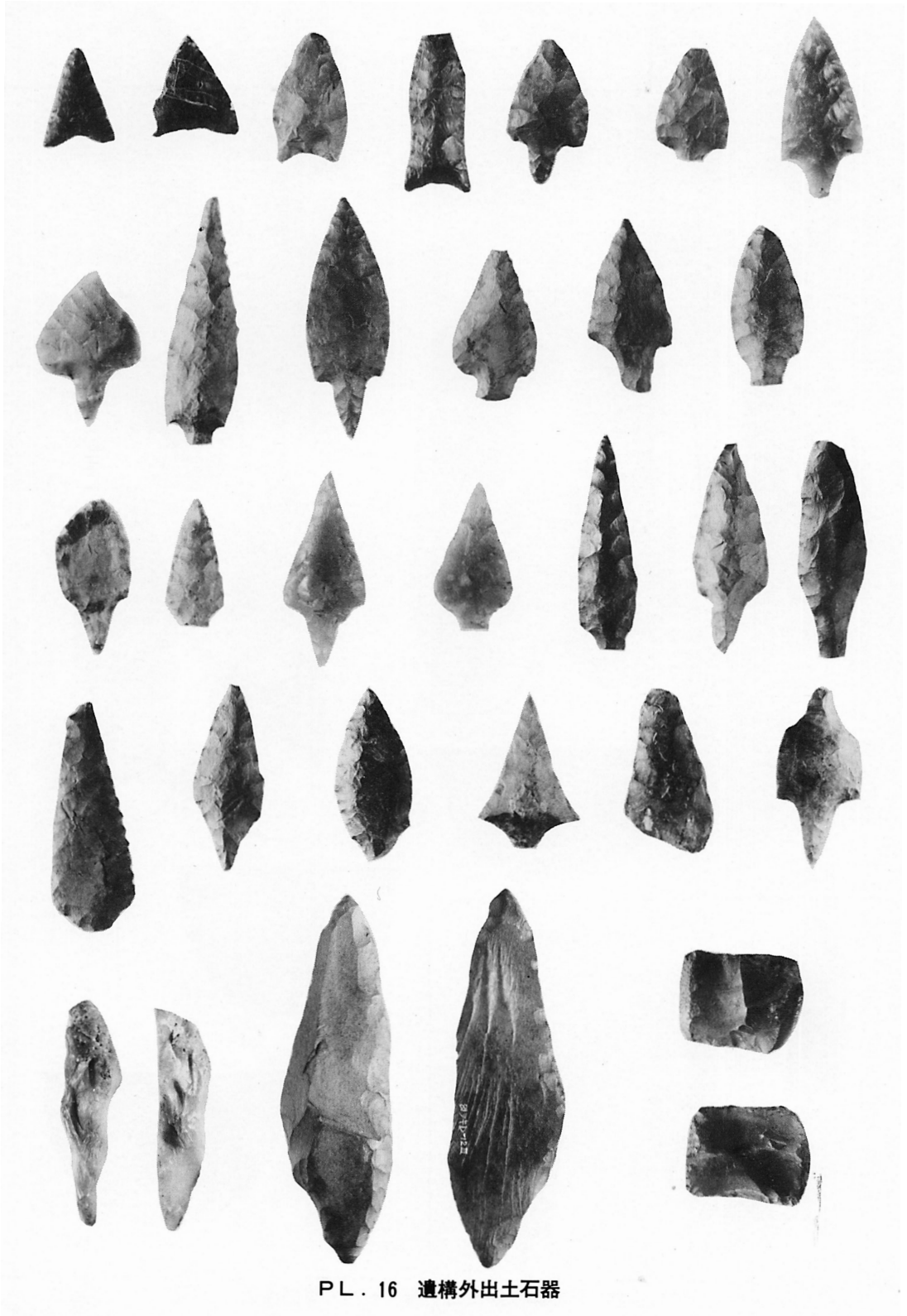
PL. 13 石器集積跡出土石器



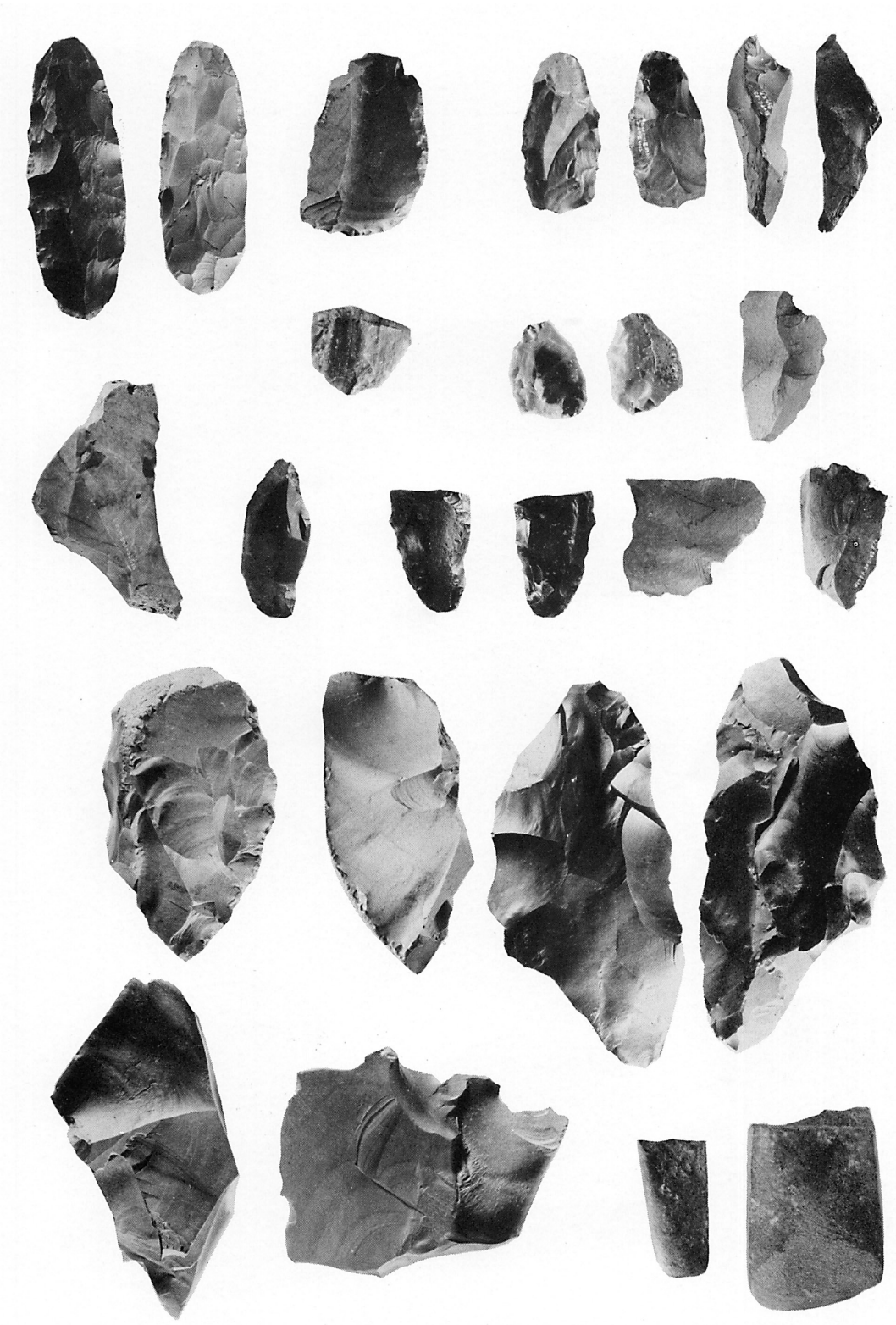
PL. 14 石器集積跡出土石器



PL. 15 石器集積跡出土石器、石錐の錐部拡大



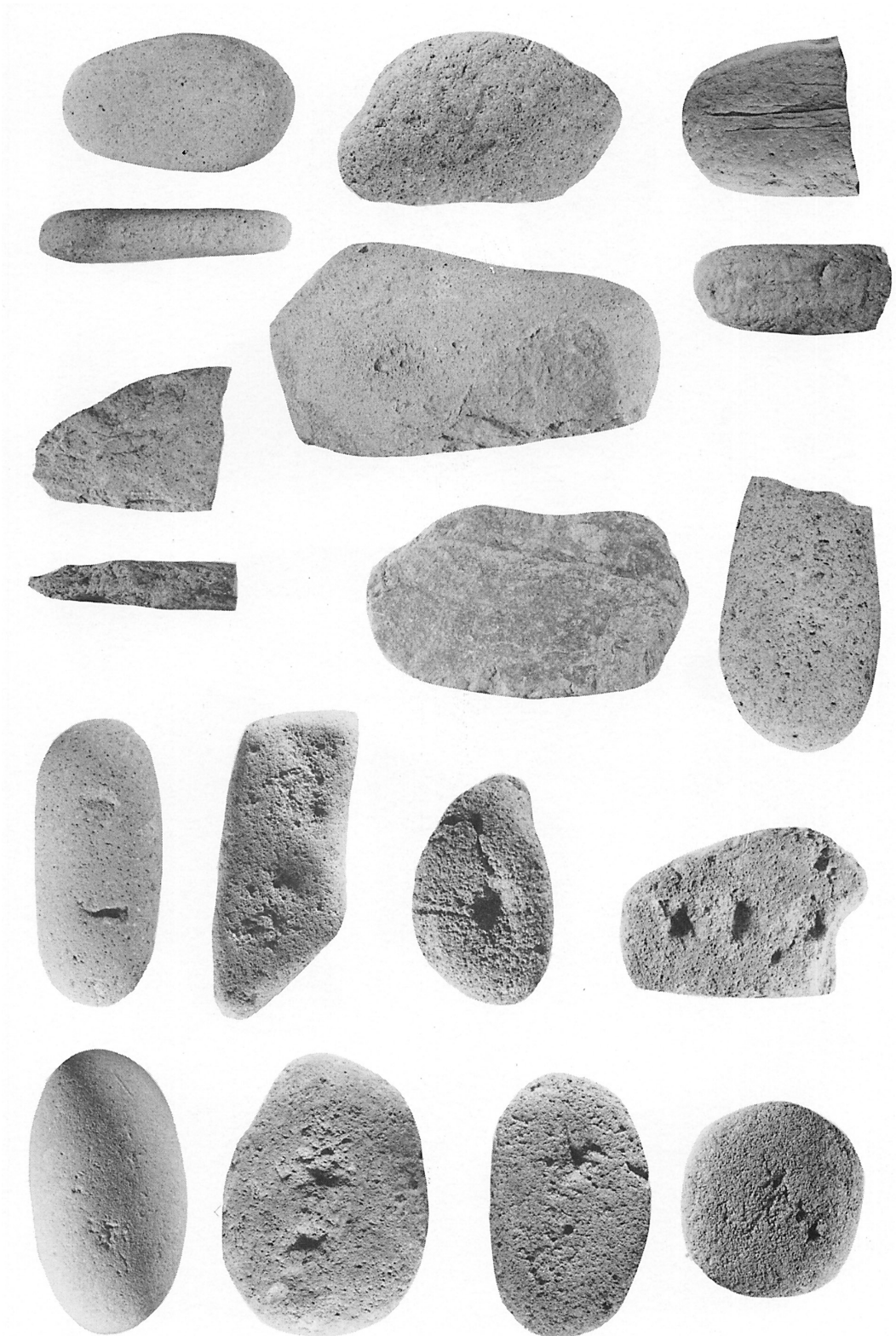
PL. 16 遺構外出土石器



PL . 17 遺構外出土石器



PL. 18 遺構外出土石器



PL. 19 遺構外出土石器



PL . 20 遺構外出土石器



PL. 21 文化遺物、古錢、自然遺物

〔引用・参考文献〕

- ア行 青森県教育委員会 (1974) 『中の平遺跡』第25集
 " (1975) 『泉山遺跡』第31集
 " (1975) 『黒石市牡丹平南遺跡・浅瀬石遺跡発掘調査報告書』第26集
 " (1975) 『五戸町中ノ沢西張遺跡・古街道長根遺跡』第29集
 " (1981) 『馬場瀬遺跡』第70集
 " (1982) 『山崎遺跡』第68集
 青森市教育委員会 (1971) 『野木和遺跡調査報告書』青森市の埋蔵文化財5
 磯崎 正彦他 (1971) 「十腰内遺跡」『岩木山』岩木山刊行会
 氏家 和典 (1957) 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史第14輯』
 " (1967) 「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって」 - 奈良・平安期土師器の諸問題 - 『柏倉亮吉教授還暦記念論文集』
 岡村 道雄 (1976) 「ピーエス・エスキューについて」『東北考古学の諸問題』
 カ行 葛西 励 (1980) 「尾上町李平 号遺跡発掘調査報告書」『燃糸文』第9号
 工藤 竹久 (1978) 『虚空蔵遺跡発掘調査報告書』名川町教育委員会
 桑原 滋郎 (1976) 「東北地方北部および北海道の所謂第1型式の土師器について」『考古学雑誌』第16巻4号
 小井川 和夫・高村 守克 (1977) 「宮城県対馬遺跡出土の土器」『宮城史学第五号』
 サ行 さあべい同人会 (1975) 「第2回・第3回考古学談話会報告」『さあべい』第2巻第2号
 桜井 清彦 (1958) 「東北地方北部の土師器と竪穴に関する諸問題」『館址』東京大学東洋文化研究所
 鈴木 克彦 (1976) 「東北地方北部に於ける大木系土器文化の編年的考察」『北奥古代文化』第8号
 タ行 高橋 潤 (1981) 「高木遺跡発掘調査報告書」尾上町調査報告第3集
 高橋 信雄 (1982) 『岩手の土器』岩手県立博物館
 ナ行 成田 滋彦 (1981) 「青森県の土器」『縄文土器』第4巻
 野辺地町教育委員会 (1980) 『馬門槻ノ木遺跡発掘調査報告書』

- マ行 村越 潔 (1974) 『円筒土器文化』
- ヤ行 八重樫 良宏・相原 康二 (1981) 『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書
- (石田遺跡)』岩手県教育委員会
- 八幡 一郎 (1935) 「奥羽地方発見の筒状石器」『人類学雑誌』第50巻・第5号

青森県埋蔵文化財調査報告書第77集

松原遺跡・陣馬川原遺跡・槻ノ木遺跡

県営芋久保・馬門地区

—— 一般農道整備予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

発行日 昭和58年3月31日

編集 青森県埋蔵文化財調査センター

発行 〒030 青森市大字新城字天田内152-15

印刷所 青森オフセット印刷株式会社

〒030 青森市本町2-11-16
